

筑波大学博士（国際日本研究）学位請求論文

改善要求発話の日中対照研究

—認知コミュニケーション論の観点から—

李 国玲

2015 年度

# 目次

<b>第1章 研究の背景と目的</b> .....	1
1.1 伝統的な語用論研究.....	1
1.1.1 発話行為論.....	2
1.1.2 協調の原理.....	3
1.1.3 関連性理論.....	4
1.1.4 ポライトネス理論.....	5
1.1.5 伝統的な語用論の研究関心.....	7
1.2 認知言語学における語用論研究.....	8
1.2.1 認知言語学の基本的な関心.....	8
1.2.2 認知コミュニケーション論.....	11
1.3 本論文の目的.....	13
1.4 本論文の構成.....	14
<b>第2章 先行研究</b> .....	16
2.1 「改善要求」とは.....	16
2.2 改善要求行為に関する先行研究.....	18
2.2.1 日本語母語話者を対象とした研究.....	19
2.2.2 日本語母語話者と日本語学習者との比較研究.....	21
2.2.3 対照研究.....	24
2.2.3.1 日・英対照研究.....	24
2.2.3.2 日・韓対照研究.....	24
2.2.3.3 日・中(台)対照研究.....	25
2.3 先行研究のまとめと本論文の位置づけ.....	26
<b>第3章 理論的枠組み</b> .....	28
3.1 因果連鎖(causal chain).....	28
3.1.1 ビリヤードボール・モデル.....	28

3.1.2	文レベルでの因果連鎖.....	29
3.1.3	本論文での因果連鎖——談話レベルでの因果連鎖.....	32
3.2	事態把握 (construal) .....	36
3.2.1	事態把握における空間認知.....	37
3.2.1.1	ステージ・モデル.....	37
3.2.1.2	主観的把握と客観的把握.....	40
3.2.1.3	IモードとDモード.....	43
3.2.1.4	当事者現場立脚型と傍観者俯瞰型.....	46
3.2.1.5	空間認知に関するまとめ.....	48
3.2.2	事態把握における前景化・背景化.....	49
3.2.2.1	前景化・背景化とは.....	49
3.2.2.2	談話レベルにおける背景化のプロセス.....	51
3.3	本論文で扱うデータ.....	52
<b>第4章</b>	<b>事象構造の観点から見た日中改善要求発話のパターン.....</b>	<b>55</b>
4.1	はじめに.....	55
4.2	改善要求行為の事象構造.....	56
4.2.1	改善要求行為における因果連鎖.....	56
4.2.2	因果連鎖の伸縮による事象構造の多様性.....	57
4.2.3	因果連鎖の切片化による事象構造の多様性.....	59
4.2.4	事象構造と発話意図の明示化の度合いとの関わり.....	61
4.3	事象構造の観点から見た日中改善要求発話の特徴.....	65
4.3.1	日本語母語話者の発話パターン.....	66
4.3.1.1	場面1における日本語母語話者の発話パターン.....	66
4.3.1.2	場面2における日本語母語話者の発話パターン.....	67
4.3.1.3	場面3における日本語母語話者の発話パターン.....	69
4.3.1.4	事象構造から見た日本語母語話者の改善要求発話の特徴.....	70
4.3.2	中国語母語話者の発話パターン.....	71
4.3.2.1	場面1における中国語母語話者の発話パターン.....	71
4.3.2.2	場面2における中国語母語話者の発話パターン.....	73

4.3.2.3	場面3における中国語母語話者の発話パターン.....	74
4.3.2.4	事象構造から見た中国語母語話者の改善要求発話の特徴.....	76
4.3.3	事象構造の観点から見た日中改善要求発話の相違.....	76
4.4	事象の述べられる順序から見た日中改善要求発話の特徴.....	79
4.4.1	改善要求行為における各事象の役割.....	80
4.4.2	事象の述べられる順序から見た日中改善要求発話の相違.....	82
4.5	理由提示表現から見た日中改善要求発話の特徴.....	84
4.6	本章のまとめ.....	88
<b>第5章</b>	<b>事態把握の観点から見た日中改善要求表現.....</b>	<b>90</b>
5.1	問題提起.....	90
5.2	先行研究とその問題点.....	91
5.3	日中改善要求発話の【主要行為部】に用いられる表現形式.....	94
5.4	「～てくれる?」と“你能～吗?”の比較対照.....	97
5.4.1	事態把握の観点から.....	97
5.4.2	配慮の示し方.....	99
5.4.2.1	「～てくれる?」の場合.....	100
5.4.2.2	“你能～吗?”の場合.....	101
5.4.2.3	日中間で配慮の示し方の相違.....	103
5.4.3	肯定形・否定形による逆転現象.....	105
5.4.3.1	「～てくれる?」に反映されている話者の判断の様相.....	105
5.4.3.2	“你能～吗?”に反映されている話者の判断の様相.....	108
5.4.3.3	逆転現象のメカニズム.....	110
5.4.4	授受関係の明示・非明示による逆転現象.....	111
5.4.4.1	「～てくれる」の機能.....	112
5.4.4.2	“给我”の機能.....	114
5.4.4.3	主観性と丁寧さとの関わり.....	119
5.4.4.4	逆転現象のメカニズム.....	124
5.5	「～てもらえる?」と“麻烦你能～吗?”の比較対照.....	126
5.5.1	事態把握の観点から.....	126

5.5.2	配慮の示し方.....	130
5.5.3	肯定形・否定形、授受関係の明示・非明示による逆転現象.....	131
5.6	それ以外の改善要求表現.....	132
5.7	本章のまとめ.....	135
<b>第6章</b>	<b>日中改善要求発話の【切り出し部】と【終了部】の表現形式.....</b>	<b>139</b>
6.1	はじめに.....	139
6.2	【切り出し部】について.....	140
6.2.1	日本語母語話者の【切り出し部】に用いられる表現形式.....	140
6.2.2	中国語母語話者の【切り出し部】に用いられる表現形式.....	141
6.2.3	日中改善要求発話の【切り出し部】に見られる傾向.....	146
6.2.4	日中改善要求発話の【切り出し部】における配慮の示し方.....	147
6.3	【終了部】について.....	149
6.3.1	【終了部】に用いられる表現形式.....	149
6.3.2	感謝と詫びの心理から見た「すみません」と“谢谢”.....	150
6.3.3	事態把握の観点から見た「すみません」と“谢谢”.....	155
6.4	本章のまとめ.....	158
<b>第7章</b>	<b>本論文のまとめと今後の展望.....</b>	<b>161</b>
7.1	本論文のまとめ.....	161
7.2	日本語教育への示唆.....	165
7.2.1	配慮したつもりなのに、よい印象を与えない現象.....	166
7.2.2	理由提示表現の過剰使用.....	169
7.3	今後の展望.....	170
付録 I	調査票.....	172
付録 I-1	日本語母語話者への調査票.....	172
付録 I-2	中国語母語話者への調査票.....	177
付録 I-3	中国人日本語学習者への調査票.....	181
付録 II	談話完成テスト資料.....	187

付録Ⅱ-1 日本語母語話者の談話完成テスト資料.....	187
付録Ⅱ-2 中国語母語話者の談話完成テスト資料.....	192
付録Ⅲ ロールプレイ資料.....	197
参考文献.....	198
既刊論文および学会発表との関連.....	198

# 第1章 研究の背景と目的

「言葉の世界の魅力の1つは、言葉それ自体の面白さ、奥ゆかしさを教えてくれるだけでなく、言葉を取りまく環境、歴史、文化的・社会的な文脈をはじめとする様々な要因を背景にして、知・情・意にかかわるひろい意味での人間の知のメカニズムの探求のための手がかりを与えてくれる点にある」(山梨 2000:2)。言葉はどのような仕組みによって作られたのか?なぜそのようなになっているのか?他の言い方が不適切なのはなぜか?…、これらの疑問は、母語を話している時はほとんど意識されないが、母語以外の言語を勉強する際に、よく問われる質問であろう。また、母語話者であっても、言語現象について「なぜ?」と聞かれた際には、うまく説明できないことがしばしばある。

言葉はわれわれのコミュニケーションにとって欠かすことのできないものであり、日常様々な場面で、様々な形で用いられている。古くから多くの学者が音韻論(phonology)、形態論(morphology)、統語論(syntax)、意味論(semantics)、語用論(pragmatics)など様々なアプローチから言葉そのものの構造や機能の解明を試みてきた。その中で、言葉の「用いられる場面に応じて文中に封じこめられた含意、すなわち、裏面的な言外の意味(推意)」(小泉 2001:2)に着目し、実際に使われる場面で言葉がどのような意図を伝えているか(すなわち、言葉の使われ方)を扱う分野は「語用論」である。

本論文は、語用論と認知言語学を融合させた「認知コミュニケーション論」の観点から日中改善要求発話のパターンと表現形式について論じるものである。本章では、これまでの語用論研究の代表的な成果を概観した上で、本研究の目的と論文の構成について述べる。

## 1.1 伝統的な語用論研究

20世紀60年代に始まった語用論は、「言語学の諸部門のなかで、発話の効力が発生するメカニズムを探求する部門」(山岡・牧原・小野 2010:11)で、言語表現それ自体だけではなく、言語表現の使用される発話場面や文脈などの要素も考慮に入れた、談話<sup>1</sup>の規則性についての研究が行われてきた。その中で、画期的な成果を遂げた研究として、以下のものが挙げられる。

---

<sup>1</sup> ここで言う「談話」とは、「相手に伝えたい内容を表す1つの言語単位で、文または発話より大きいまとまり。書かれたもの、話されたものの両者を含む」(近藤・小森 2012:145)。

### 1.1.1 発話行為論

Austin(1962)は、“How to Do Things with Words” (邦訳:『言語と行為』坂本(1978))を  
発表し、事実確認文(constative)と行為遂行文(performative)の特徴に関する綿密な考察を通  
して、真理値を持つか否かを基準とする事実確認文<sup>2</sup>と行為遂行文<sup>3</sup>の区別が意味を成さな  
いことを発見し、どのような文であっても、“to say something is to do something  
(Austin1962:12) (「何かを言うことは何かの行為をすることである(清水 2009:15)」)”と  
指摘している。発話をする(すなわち、「発話行為(speech act)」)は、①「発語行為  
(locutionary act)」(すなわち、音声連続を発声する行為)、②「発語内(的)行為(illocutionary  
act)」(すなわち、発話に伴う意図または効力を伝達する行為)、③「発語媒介(的)行為  
(perlocutionary act)」(すなわち、発話を通して聞き手に影響を及ぼす行為)の3レベルの行  
為を同時に行うことであると述べている。

Austin(1962)は形式言語(数学の基礎となるような論理の構造を、記号を用いて構築する)  
ではなく、自然言語(何かを言うことは何かの行為をすることである)に目を向け、言語哲  
学の流れを大きく変え、語用論研究に先鞭をつけたものである<sup>4</sup>。

Austin(1962)の「発話行為論」をさらに発展させたのは、言語哲学者の Searle である。  
Austin(1962)の「発話行為論」は「明示的遂行文(explicit performative sentence)」<sup>5</sup>が主たる  
考察対象となっていたが、Searle(1969, 1976)は遂行動詞を持たない一般的な文であっても、  
①発語行為、②発語内(的)行為、③発語媒介(的)行為といった三層構造を備えていること  
を主張し、すべての発話行為は構成規則によって記述可能であると指摘している。その規  
則を基にして発語内行為を①陳述表示型(representatives)、②行為指示型(directives)、③行  
為拘束型(commisives)、④態度表明型(expressives)、⑤宣告命名型(declaratives)の5つの  
カテゴリーに分類した。

Searle の語用論研究に対するもう1つの貢献は、「間接発話行為(indirect speech act)」と  
いう概念を提唱したことである(Searle1975, 1979)。「間接発話行為」とは、“cases in which  
one illocutionary act is performed indirectly by way of performing another” (Searle1979:31)、つ

<sup>2</sup> 事実と照合して真偽値を与えられる文。例えば、「今、雪が降っている。」(山岡・牧原・小野 2010:87)。

<sup>3</sup> 発話それ自体が行為の遂行であって、真偽値を持たない。例えば、「私は月末までに借金の返済を約束  
します。」(山岡・牧原・小野 2010:87)。

<sup>4</sup> Austin の「発話行為論」に関する論述は、Austin(1962)、坂本(1978)、Thomas(1995)、浅羽(1998)、清  
水(2009)、山岡・牧原・小野(2010)を参考にした。用語は坂本(1978)に従うものとする。

<sup>5</sup> 第一人称主語と現在時制の遂行動詞との組み合わせを備えている遂行節(performative clause)を形式上持  
っている文(例えば、“I order you to leave here.”)が、「明示的遂行文」である。表面上は遂行節を持た  
ないが、その発話の目的を遂行節として補うことができる文(例えば、“Leave here.”)が「暗示的遂行文  
(implicit performative sentence)」である(Searle1969)。



まり、「発話で用いられる文が表す字義通りの発話内行為と話し手がその発話で意図する発話内行為が一致しない行為、すなわち、他の発話行為を使って間接的に伝える発話行為のことである」(清水 2009:17)。間接発話行為への拡張を機に、Searle(1975, 1979)は、「発話内行為を遂行するには、単に遂行節が復元可能かどうかということではなく、命題内容や発話状況に関わる様々な条件が調っていることが必須条件である」(山岡・牧原・小野 2010:92)という見解を示し、語用論研究の新たな一歩を踏み出した<sup>6</sup>。

### 1.1.2 協調の原理

Searle(1975, 1979)が提唱した「間接発話行為」の定義にも示唆されているように、言葉には「字義通りの意味(literal meaning)」と「言外の意味(implied meaning)」<sup>7</sup>がある。この言外の意味が生じるメカニズムを初めて本格的に解明したのは、言語哲学者の Grice である。

Grice(1975, 1989)は、

“Our talk exchanges do not normally consist of a succession of disconnected remarks, and would not be rational if they did. They are characteristically, to some degree at least, cooperative efforts; and each participant recognizes in them, to some extent, a common purpose or set of purpose, or at least a mutually accepted direction.”(Grice1989:26)「言葉のやり取りというものは、通常はけっしてつながりのない発言からなるものではないし、もしもそうならば合理的ではないだろう。言葉のやり取りはふつう、少なくともある程度までは、協調的な企てである。そして、各々の会話者はある程度まで、その協調的な企ての中にある共通の目的(群)を(あるいは少なくとも会話者双方が受け入れている方向性)を見いだす」(邦訳は清塚 1998:36-37 より)。

という「協調の原理(Cooperative Principle)」を提唱し、普段私たちが円滑にコミュニケーションを進めることができるのは、多くの場合は無意識だが、「協調の原理」を前提として会話をしているからであると述べている。「協調の原理」には、①量の原則(maxim of quantity)、②質の原則(maxim of quality)、③関連性の原則(maxim of relation)、④様態の原則(maxim of manner)の4つの会話の原則(Maxims of Conversation)があるが、日常の会話で

<sup>6</sup> Searle の「発話行為論」に関する論述は、Searle(1969, 1975, 1976, 1979)、坂本他(1986)、山田(2006)、清水(2009)、山岡・牧原・小野(2010)を参考にした。用語は清水(2009)に従うものとする。

<sup>7</sup> 「言外の意味」とは、「その場の文脈から生じる慣習的な、あるいは一時的・臨時的な意味」のことである(清水 2009:19)。

は、われわれが意図的に原則に違反し、「原則の逆用(maxim exploitation)」によって聞き手への配慮を示すことがある。

会話の含意の効用(すなわち、「対人配慮」)を力説した Grice(1975, 1989)は、語用論研究に新しい道を切り開き、その後の語用論研究(関連性理論とポライトネスに関する研究)に大きな影響を与えたものである<sup>8</sup>。

### 1.1.3 関連性理論

Grice(1975, 1989)の「協調の原理」は、発話を生成する際に話し手が暗黙のうちに、あるいは無意識に従う原則であると同時に、聞き手にとっては話し手の意図を読み取る解釈原理でもあった。「協調の原理」の「関連性の原則(関連性のあることを述べよ)」を発展させ、「発話がいかに関係されるか」というコミュニケーション上の理解の方法を説明したのは、人類学者 Sperber と言語学者 Wilson との共著 Sperber & Wilson(1986, 1995)(以下 S & W(1986, 1995)とする)において提案された「関連性理論(Relevance Theory)」である。

S & W(1986, 1995)は、“Human cognitive processes, we argue, are geared to achieving the greatest possible cognitive effect for the smallest possible processing effort.(S & W1995:vii)「人間の認知過程は、可能な限り最小の労力で可能な限り最大の認知効果を達成するような仕組みになっている(邦訳は内田他 1999: iiiより)」”と主張し、仮に話し手の発話に曖昧な表現が含まれたり、省略や中途終了発話で情報が不完全であったとしても、聞き手が「推意」という認知的作業(つまり、「非明示的な相手の意図を文脈(場面や背景知識なども含む)に従って解釈し、それによって1つの発話を、会話の流れの中でより関連性の高いものにしてしようとする」(山岡・牧原・小野 2010:59)こと)を行い、話し手の本来の意図を読み取ることができる」と指摘している。

Grice(1975, 1989)の「協調の原理」の誕生が、「語用論は言語学の領域におけるひとつの部門として独立を宣言する地盤を確立するにいたった」(小泉 2001: iii)<sup>9</sup>と言われるのであれば、「発話がいかに関係されるか」というコミュニケーション上の理解の方法を説明した S & W(1986, 1995)の「関連性理論」は、語用論研究に新たな光を当て、Grice(1975, 1989)

<sup>8</sup> Grice の「協調の原理」に関する論述は、Grice(1975, 1989)、清塚(1998)、清水(2009)、山岡・牧原・小野(2010)を参考にした。用語は山岡・牧原・小野(2010)に従うものとする。

<sup>9</sup> 「それまでの語用論は、意味論で解決できない問題が投げ込まれる『くず籠』とも言われる従属的地位 甘んじてきた」(小泉 2001: iii)。

の先駆的な研究の価値をますます高めていったのである<sup>10</sup>。

#### 1.1.4 ポライトネス理論

Leech(1983)は、Grice(1975, 1989)の「協調の原理」と「聞き手への配慮」の衝突をいかに取り扱うかという問題意識に根ざし、「協調の原理」では満足に説明できない現象を説明するために、それを補って救う原則として、

“In its negative form, the PP might be formulated in a general way: ‘Minimize (other things being equal) the expression of impolite beliefs’, and there is a corresponding positive version (‘Maximize (other things being equal) the expression of polite beliefs’) which is somewhat less important.”(Leech1983:81) 「丁寧さの原理というものは、その消極的な面においては、次のような一般的な形で定式化することができよう：「(他の条件がすべて同じであるならば) 礼儀にかなうとは言えないような信念を表す表現を最小限に抑えること。」これに応じて、それを積極面において定式化したもの(「(他の条件がすべて同じであれば) 礼儀にかなうような信念を表す表現を最大限にすること)」もあるが、重要性はいくらか劣る」(邦訳は池上・河上 1987:113 より)。

という「ポライトネスの原理」(Politeness Principle)を提唱した。この原理には、①気配りの原則(Tact Maxim)、②寛大性の原則(Generosity Maxim)、③是認の原則(Approbation Maxim)、④謙遜の原則(Modesty Maxim)、⑤同意の原則(Agreement Maxim)、⑥共感の原則(Sympathy Maxim)という6つの下位原則がある。この6つの原則が行為準則であるかのように、話者の言語活動が丁寧か否かを判断する基準となり、それぞれの原則にはいくつかの語用論的尺度が関わっている<sup>11</sup>。

また、Brown&Levinson(1987) (以下 B&L(1987)とする)は、Goffman(1967)が提唱した「フェイス」(face)、つまり個々人の持つ「自尊心」(self-esteem)という概念を導入し、人間は、“the want of every ‘competent adult member’ that his actions be unimpeded by others「すべての能力ある成人構成員が持っている、自分の行動を他者から邪魔されたくないという欲求」としてのネガティブ・フェイス(negative face)と、“the want of every member that his wants be desirable to at least some others「すべての構成員が持っている、自分の欲求が少なくとも何人

<sup>10</sup> S&Wの「関連性理論」に関する論述は、S&W(1986, 1995)、内田他(1999)、小泉(2001)、山岡・牧原・小野(2010)を参考にした。用語は山岡・牧原・小野(2010)に従うものとする。

<sup>11</sup> Leechの「ポライトネスの原理」に関する論述は、Leech(1983)、池上・河上(1987)、小泉(2001)、清水(2009)、山岡・牧原・小野(2010)を参考にした。用語は山岡・牧原・小野(2010)に従うものとする。

かの他者にとって好ましいものであってほしいという欲求<sup>12)</sup>としてのポジティブ・フェイス(positive face)という2つのフェイスを持っていると述べている。

「お互いに自分と相手のフェイスを尊重しながら会話のやり取りを行うのが一番理想的であるが、実際のコミュニケーションにおいては、ほとんどすべての発話が潜在的に相手や自分のフェイスを侵害する可能性」(清水 2009:26)があるため、発話をする前に、発話者が当該行為のフェイス・リスクを見積もり、フェイス・リスクの大きさによって、発話のストラテジーを選択する。フェイス・リスクが低く、相手に配慮する必要性がない場合には、フェイス侵害の軽減をしない「直言」(bald on record)というストラテジーが選択される。フェイス・リスクがあまりにも高いと考えられた場合には、意図伝達行為自体を放棄する「行為回避」(don't do the face threatening act)というストラテジーが選択される。フェイス・リスクがこの両極の間にある場合には、相手のポジティブ・フェイスに配慮するストラテジー(positive politeness)と、相手のネガティブ・フェイスに配慮するストラテジー(negative politeness)、意図伝達を非明示的に行う「ほのめかし」(off record)などのストラテジーが用いられる。B&L(1987)の議論も主としてこの3つのストラテジーをめぐって展開されている。

この理論が発表されて以来、「ポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスを具体化するストラテジーが、文化や言語によって違う」(Matsumoto1988, 1989、Gu1990、Chen 1993、Mao1994 など)、「意志による自発的なストラテジーの選択が優先され、敬語などの使用を支えるわきまへの側面が軽視されている」(Ide1989)といった批判の声がありながらも、「枠組みとしての普遍性」という優越性が評価され、異文化間語用論(Cross-cultural Pragmatics)や中間言語語用論(Interlanguage Pragmatics)などの研究分野に頻繁に援用されている<sup>13)</sup>。

---

<sup>12)</sup> 邦訳は田中(2011:80)より。

<sup>13)</sup> B&Lの「ポライトネス理論」に関する論述は、B&L(1987)、小泉(2001)、滝浦(2008)、清水(2009)、山岡・牧原・小野(2010)、田中他(2011)を参考にした。用語は滝浦(2008)に従うものとする。

### 1.1.5 伝統的な語用論の研究関心

表 1-1 伝統的な語用論の研究関心

研究者	理論	研究の関心
Austin(1962)	発話行為論	意図伝達
Searle(1969, 1975, 1976, 1979)		
Grice(1975, 1989)	協調の原理	意図伝達
S&W(1986, 1995)	関連性理論	(対人配慮が芽生え)
Leech(1983)	ポライトネス理論	意図伝達と対人配慮
B&L(1987)		

表 1-1 にまとめたように、20 世紀 60 年代に始まった早期の語用論研究では、Austin (1962) と Searle (1969, 1975, 1976, 1979) を代表に、発話行為がどのような意図を伝えているかを探求することが基本的な関心で、発話行為の「意図伝達」の面が重視されている。

70 年代後半から始まった Grice (1975, 1989) と S&W (1986, 1995) の研究は、「発話意図がいかに伝達されるべきか」「発話がいかに理解されるか」というコミュニケーション上の伝達の原則と理解の方法を検討しており、「意図伝達」に関する研究が中心となっている。また、Grice (1975, 1989) では、日常の会話ではわれわれが意図的に「協調の原理」の下位原則に違反し、「原則の逆用」によって聞き手への配慮を示すことがあると指摘し、発話行為には「意図伝達」以外に、「対人配慮」という面があることが示唆されている。

Grice (1975) に啓発されて、Leech (1983) と B&L (1987) 以降の語用論研究では、発話行為の「対人配慮」の面が重視され、言語行動を行う話し手は、「目的を効果的に達成すること」と「相手との人間関係を良好に保つこと」という 2 つの指向性を常に併せ持っている指摘されている(熊谷 2000)。

90 年代以来、語用論研究で画期的な研究成果を遂げた「発話行為論」「協調の原理」「関連性理論」「ポライトネス理論」は、依頼、勧誘、断り、詫び、感謝、不満表明、改善要求などの多数の発話行為の分析に応用され、発話ストラテジーに関する研究がブームとなり、異文化間コミュニケーション、そして日本語をはじめとする様々な語学教育に大きな貢献を果たした。

## 1.2 認知言語学における語用論研究

1970年代から次第にその存在の重みを増している「認知言語学」(cognitive linguistics) (辻 2003: vii) では、革新的な語用論研究として、「認知語用論/認知コミュニケーション論」という分野がある。「認知語用論/認知コミュニケーション論」とはどのような研究分野であろうか、なぜ本論文ではそれを革新的な語用論研究として位置づけをするのか。以下、認知言語学の基本的な関心を紹介した上で、「認知語用論/認知コミュニケーション論」について述べる。

### 1.2.1 認知言語学の基本的な関心

伝統的な言語学と違い、認知言語学では、言語は恣意的なものではなく、「言語のあり方はそれをを用いる人間の認知の営みの傾向性との関連で動機づけられている」(辻 2003: viii) と提唱されている。つまり、「人間の認知的な営みには固有の傾向性が存在するという前提のもとで、ある状況が言語化されようとする場合、どのような表現の仕方が可能な選択肢としてありうるのか、そして、それら可能な選択肢の間の違いは、人間のいかなる認知的な営みにおける傾向性によって動機づけられているのか」(辻 2003: vii)、ということが認知言語学の基本的な関心である。

Croft & Cruse (2004) は、認知言語学の言語に対する研究姿勢が、大きく次の3点にまとめられると指摘している。

① Language is not an autonomous cognitive faculty.

② Grammar is conceptualization.

③ Knowledge of language emerges from language use.

Croft & Cruse (2004: 1)

説明を加えると、①は、「言語」というのは、特定の自立的な認知能力に基づいて獲得する生得的な知識ではなく、一般的な認知能力の発見として記述・説明できるもの。②は、文法や言語形式、言葉の意味は、構成性の原理によって還元主義的に捉えられるような静的なものではなく、事態把握や語用論的現象を含める動的な「概念化 (conceptualization)」によるもの。③は、言語知識 (competence) は、言語の定着化・慣習化などの用法を基盤とした言語運用 (performance) から記述・説明できるもの、といえる<sup>14</sup>。

<sup>14</sup> 原文は以下のように述べている。“The first hypothesis is that language is not an autonomous cognitive faculty. The basic corollaries of this hypothesis are that the representation of linguistic knowledge is essentially the same as the representation of other conceptual structures, and that the processes in that knowledge is used are not fundamentally different from cognitive abilities that human beings use outside the domain of language. (中略) The

認知言語学の「認知」とはどのような意味なのか？「認知的アプローチ」とはどのようなアプローチなのかについては、様々な回答があるが、山梨(1995: ii) は次のように述べている。

「言葉は、主体が外部世界を認識し、この世界との相互作用による経験的な基盤を動機付けとして発展してきた記号系の一つである。言葉の背後には、言語主体の外部世界にたいする認識のモード、外部世界のカテゴリー化、概念化のプロセスが、何らかの形で反映されている。(中略)、ここで「認知的アプローチ」という言葉を使う場合には、言語主体の認知的な側面、外部世界を認識する主体の経験的な基盤、主体の認識を介して言葉の形式や構造に反映される機能的な側面を考慮していく言語研究のアプローチを意味する。(中略)、生きた言葉は、その記号系を生み出し運用している言語主体を無視して考えることはできない。言語の背後には、具体的な生活文脈のなかで生きている認知主体として人間が存在する以上、言葉の世界にはメンタリストティックな側面、経験的な側面のいずれも反映されている。(中略)、認知的アプローチは、言語主体の先行経験としての認識能力を重要視すると同時に、外部世界を認識していく主体の経験的基盤に注目する。」(山梨 1995: ii)<sup>15</sup>

また、認知言語学は、形式主義の言語学や機能主義に基づく他の言語学とどのように区別されるかという問いに対して、Langacker(2008:7-8)は次のように述べている。

“Within functionalism, cognitive stands out by emphasizing the semiological function of language. It fully acknowledges the grounding of language in social interaction, but insists that even its interactive function is critically dependent on conceptualization. Compared with formal approaches, cognitive linguistics stands out by resisting the imposition of boundaries between language and other psychological phenomena. Insofar as possible, linguistic structure is seen as drawing on other, more basic systems and abilities (e.g. Perception, memory, categorization) from which it cannot be segregated. Rather than constituting a distinct, self-contained entity (a separate “module” or “mental faculty”), language is viewed as an integral facet of cognition.” 「機能主義という点では、認知言語学は言語の記号的な機能を強調する特徴を有する。認知言語学は社会的相互作用に言語の基盤を求めるが、その相互作用的な機能も概念化のプロセスに基づく」と主張す

---

second major hypothesis of the cognitive linguistic approach is embodied in Langacker’s slogan ‘grammar is conceptualization.’ This slogan refers to a more specific hypothesis about conceptual structure, namely that conceptual structure cannot be reduced to a simple truth-conditional correspondence with the world.(中略) The third major hypothesis of the cognitive linguistic approach is that knowledge of language emerges from language use. That is, categories and structures in semantics, syntax, morphology and phonology are built up from our cognition of specific utterances on specific occasions of use.” (Croft & Cruse 2004:2-4).

<sup>15</sup> 下線は筆者による。

る。形式主義のアプローチと比較すれば明らかであるように、認知言語学は言語と他の心的現象との間に境界を置かないという特徴を持つ。認知言語学では、言語構造は他の基本的な認知システムや認知能力(たとえば、知覚、記憶、カテゴリー化)に基づくものとして捉えられる。言語をこのような認知システムや認知能力とは独立した「モジュール」あるいは「心的機能」と呼ばれる独立した自己充足的な構成要素ではなく、認知を統合する一側面として捉えられる」(邦訳は山梨 2011:9 より)<sup>16</sup>。

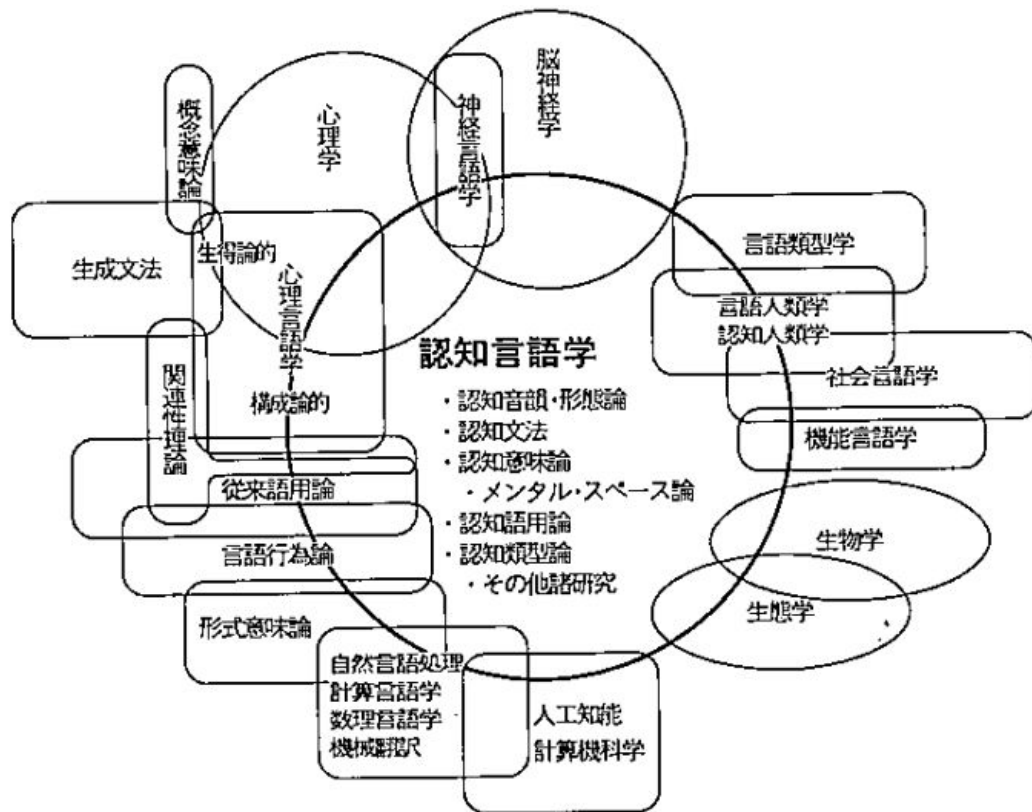


図 1-1 認知言語学の見取り図 (辻 2003:4 より)

図 1-1 に示したように、「人間の認知活動の枠組みの中で言語を捉える」(辻 2003:8)という方針(あるいは理論的中核)に沿って、認知言語学者は自らの目標遂行のための理論的前提と独自性を堅持しつつ、伝統的な言語学の枠組みを踏まえ、他の分野との協調と競合の関係を維持することで、より包括的な認知の解明を試みている。「認知言語学の大きな特徴は、認知と言語、言語と思考、言語と行動、言語と文化というように、人間の認知活動から言語を捉え直すというものである」(辻 2003:6)。現在、伝統的な言語学で取り上げてきた言語の形式や意味、構造、機能などに関する諸問題について、認知的アプローチか

<sup>16</sup> 下線は筆者による。



ら再検討し、「認知音韻論」、「認知形態論」、「認知意味論」、「認知文法論」、「認知語用論／認知コミュニケーション論」、「認知類型論」などの認知言語学の下位領域が有機的な連携を保ちながら幅広い研究が行われている<sup>17</sup>。

### 1.2.2 認知コミュニケーション論

前節で述べたように、「人間の認知活動から言語を捉え直す」(辻 2003:6) 認知言語学では、その下位領域に「認知語用論／認知コミュニケーション論」という分野がある。「認知語用論／認知コミュニケーション論」とはどのような研究分野であろうか、この質問について、大堀(2004)は次のように述べている。

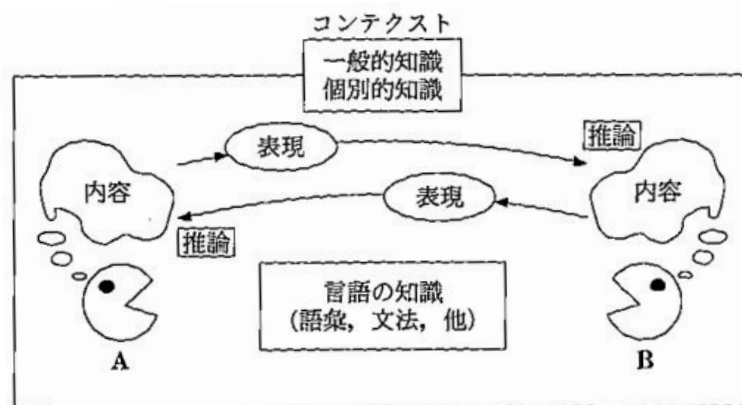


図 1-2 コミュニケーションのモデル (大堀 2004:8 より)

図 1-2 に示したように、われわれがコミュニケーションをする時、伝えたい「内容」を言葉で「表現」し、聞き手は受け取った言葉をもとに、既存の言語知識(語彙、文法など)とコンテキストから獲得した情報を参照しながら、相手の意図を理解する。コミュニケーションを円滑に進めるには、話し手はその場にふさわしい話し方で情報を提供することと、聞き手が観察される事実をもとにその場にふさわしいやり方で話し手の意図をはかることが、いずれも欠かすことのできないものである。適切な話し方、適切な推論の仕方を身に付けるために重要なのは、コミュニケーションを行う背景にはどんな仕組みがあるのかを理解することである(大堀 2004:3-7 から一部抜粋)。

私たちの言語使用は外界についての認知を反映したものであるため、コミュニケーションの仕組みを考える際には、こころの働き、すなわち認知(cognition)を考慮したアプローチをとることが必要である。認知の働きにはいろいろなものがあるが、その中で特に語用

<sup>17</sup> 山梨(2000)、辻(2003, 2013)、大堀(2004)を参考にした。

論と深く関わるのが、推論を行うための原則である。この他、認知の働きには、目的を果たすために計画を立てる能力や、同じものごとを違った角度から見直す能力なども含まれる(大堀 2004:8 から一部抜粋)。

そこで、概括して言えば、「認知語用論／認知コミュニケーション論」とは、「コミュニケーションの現場において、言葉がどのように人間のものの見方を反映しているか」(大堀 2004: iv)の分析を通して、認知的アプローチから言葉の使われ方を検討する分野である。小泉(2001:194)の言葉を借りて言えば、「認知語用論のアプローチは、ことばの背後に存在する主体の認知能力の観点から、ことばの使用と解釈の諸相をダイナミックに研究していく、新しい語用論のアプローチである」。

また、辻(2013)では、「認知語用論」は、「認知言語学と語用論を融合させた視点から、日常言語の運用におけることばの使用と解釈を扱う分野である」と述べ、コミュニケーションにおける言語運用面が注目され、認知言語学を基盤に据えた新しい語用論研究として、次のようなパラダイムに整理されると指摘している。

- 1) 言語の創造性を反映する現象としてメタファー、メトニミー、アイロニーなどの研究
- 2) 言語の推論機能を反映する現象として含意、言語行為、関連性理論、文脈と推論メカニズムなどの研究
- 3) 言語の情報構造を反映する現象として談話・テキストの情報機能、情報の流れ、結束性、一貫性などに関わる研究

(辻 2013:274)

この分野の名称について、大堀(2004)は、「認知語用論」をあえて使わず、「認知コミュニケーション論」を用いる理由を以下のように述べている。

「もともと、言語学の古典的な分野の区切り方は、「音韻論」、「形態論」、「統語論」、「意味論」、「語用論」というものであった。この区分に従うと、本書の内容は「語用論」—実際に使われる場面で、どんな意図をことばが伝えているかを扱う分野—にあたるが、この言い方は本書ではとらない。その理由は、1つは、認知言語学は古典的な分野の区切り方を必ずしも受け入れていないからである。(中略)、もう1つの理由は、語用論という分野はそれなりの伝統があり、扱われるテーマも確立しているということである。すぐれた入門書も出ている。そこで、本書ではすでに論じられていることをまた取り上げるより、これまでになかった角度からことばの使われ方について

考えることにした。」(大堀 2004: iv-v) <sup>18</sup>。

「認知語用論」と呼ぶにせよ、「認知コミュニケーション論」と呼ぶにせよ、当該分野の大きな特徴は、言葉の背後に存在する主体の認知能力の観点(すなわち、認知的アプローチ)から、言葉の使われ方を検討することである。本論文の研究対象が対人コミュニケーションの一種である改善要求行為であるため、以下、大堀(2004)に従い、「認知コミュニケーション論」という名称を用いる。

以上のように、認知的アプローチからコミュニケーションの諸問題を検討する「認知コミュニケーション論」は、これまでになかった角度から言葉の使われ方について考え、革新的な言語理論として、語用論研究の新たな方向性を示した。

### 1.3 本論文の目的

以上、概観してきたように、語用論研究は、【発話行為論】⇒【協調の原理】⇒【関連性理論】⇒【ポライトネス理論】⇒【認知コミュニケーション論】という道を歩んできた。研究の方向性は、“to say something is to do something「何かを言うことは何かの行為をすることである」(Austin1962、邦訳は清水 2009 より)”⇒「発話行為は<目的の效果的達成>と<対人関係の維持>という2つの指向性を併せ持っている(熊谷 2000)」⇒「言語のあり方はそれを用いる人間の認知の営みの傾向性との関連で動機づけられている(辻 2003)」と変化し、多様化してきた。

語用論研究の最先端に位置する「認知コミュニケーション論」研究は、伝統的な語用論研究で扱った課題「われわれがどのように言葉を用いてコミュニケーションをしているのか」を検討するだけでなく、認知的アプローチから、「コミュニケーションを行う背景にはどんな仕組みがあるのか」という問題を明らかにしようとする研究分野である。これまでになかった観点から言葉の使われ方を検討し、「文法論と意味論の研究領域を越える言語学の新たな研究の方向」(小泉 2001:179)を示した。

しかし、これまでの認知言語学の研究は、文法論と意味論に関わる言語現象の研究が中心となっている。認知能力を反映する主体の経験的な基盤との関連から、言葉の使われ方を検討する認知コミュニケーション論の研究は、十分に行われているとはいえない。

そこで、「改善要求発話の日中対照研究—認知コミュニケーション論の観点から—」と

---

<sup>18</sup> 下線は筆者による。

いう課題を取り上げる本論文は、認知コミュニケーション論の実践研究の1つとして、日本語話者と中国語話者がそれぞれどのような表現形式を用いて、改善要求行為を行っているかを考察する。その上で、改善要求発話に用いられる表現形式がどのような仕組みによって成り立っているのかを認知的アプローチから検討し、以下の2点を明らかにする。

- 日本語話者と中国語話者の改善要求発話のパターンには、どのような特徴が見られるのか。
- 日本語と中国語のポライトネス<sup>19</sup>および表現形式を丁寧化する方法の相違が、事態把握(言語化)の仕方とどのように関わっているのか。

以上の点を考察することによって得た結果を踏まえ、中国人日本語学習者の改善要求発話に現れる語用論的転移の実例を挙げつつ、本研究の(中国人学習者向けの)日本語教育への貢献について述べる。

#### 1.4 本論文の構成

本論文の構成は、以下のとおりである。

序論である第1章では、伝統的な語用論研究において画期的な研究成果を挙げた諸理論を概観する。その上で、認知言語学を基盤に据えた新しい語用論研究である「認知コミュニケーション論」を紹介し、本論文の目的を述べる。

第2章では、改善要求行為に関する先行研究を概観し、改善要求行為の定義と本論文の位置づけについて述べる。

第3章では、これまで認知文法で扱われてきた「因果連鎖(causal chain)」と「事態把握(construal)」の分析方法を談話分析に導入し、本論文の理論的枠組みを示す。

第4章からは、分析結果を示す。まず第4章では、第3章で提起した改善要求行為における談話レベルでの因果連鎖に基づき、「連鎖のどの部分を切り出して言語化するか」、「切り出した事象をどの順序で述べるか」、「連鎖に現れた事象以外に、どのようなものが言語化されるのか」を考察することによって、「日本語話者と中国語話者の改善要求発話のパターンには、どのような特徴が見られるのか」という問題を明らかにする。

第5章では、改善要求発話の【主要行為部】に用いられる表現形式に着目する。日本語

<sup>19</sup> ここで言うポライトネスとは、「会話において、話者と相手の双方の欲求や負担に配慮したり、なるべく良好な人間関係を築けるように配慮して円滑なコミュニケーションを図ろうとする際の社会的言語行動を説明するための概念である」(山岡・牧原・小野 2010:67)。

の「～てくれる?」「～てもらえる?」と中国語の“你能～吗?”“麻烦你能～吗?”を中心に、「事態把握」という認知的アプローチから改善要求表現の日中対照を行い、「日本語と中国語のポライトネスおよび表現形式を丁寧化する方法の相違が、事態把握(言語化)の仕方とどのように関わっているのか」という問題を明らかにする。

第6章では、日中改善要求発話の【切り出し部】と【終了部】にどのような表現形式が使われているかを考察した上で、【切り出し部】と【終了部】における日中両言語の配慮の示し方と事態把握の相違を検討する。

終章である第7章では、本論文の研究成果をまとめ、中国人日本語学習者の改善要求発話に現れる語用論的転移の実例を挙げつつ、本研究で得た研究成果の(中国人学習者向けの)日本語教育への貢献について述べる。また、今後の展望として「認知とポライトネスの接点」という観点から新たな研究の可能性を示す。

## 第2章 先行研究

本章では、改善要求行為に関する先行研究を概観し、本論文で扱う「改善要求」とは何かについて説明する。その上で、先行研究の成果と問題点をまとめ、本論文の位置づけについて述べる。

### 2.1 「改善要求」とは

「改善要求」とは、「現状に不満や不快感を感じている話者が、その状況を変えることができる立場の聞き手に意見を述べること」(山岡・牧原・小野 2010:221)である。「改善要求」は心情的な不満の意が含まれることが多く、その意味で「不満表明」(Complaint)とは非常に似通った印象を与えるため、従来、不満表明行為として捉えられることが多かった(Olshtain&Weinbach1987、初鹿野・熊取・藤森 1996、藤森 1997、平井 1998、朴 2000, 2001、安藤 2001、李 2004, 2006、鄭 2005、郭 2007、呉 2008、崔 2009 など)。

初鹿野・熊取・藤森 (1996) は、不満表明行為を「好ましくない状況への反応として、話し手が直接、あるいは間接的に行う心的態度の表出行為である」とし、不満表明行為には以下のような特徴があると指摘している。

- ①話し手は聞き手に対してある種の行動期待を持っている。
- ②話し手は行動期待に反する状態を好ましくないと認識している。
- ③話し手は現状を好ましくない状況であると認識しており、その原因は聞き手によって引き起こされたと思っている。
- ④話し手は好ましくない状況が聞き手によって引き起こされたことを、聞き手に何らかの手段によって伝えたいと思っている。

また、藤森(1997)、李 (2006) などでは、当該場面が修復可能な場面か否かで頻出するストラテジー<sup>1</sup>が異なることを指摘し、不満表明行為を「修復可能な場面」「修復不可能な場面」「交渉によって修復可能かどうか決定される場面」という3つの種類に分けている。修復可能な場面というのは、例えば、騒音を立てた隣人に「音が大きくて勉強できな

<sup>1</sup> ここで言う「ストラテジー」とは、「『談話』のやりとりの中で『目的(goal)を達成するために話者が用いる手段』(ザトラウスキー 1993:76)のことである。著者によって「意味公式(semantic formula)」という用語が使われることもある。「意味公式」とは、「特定の意味的基準やストラテジーを満たす単語、句、文からなる単位で、または複数を組み合わせて行為の遂行に用いられるもの」(清水 2009:56-57)を指す。例えば、「ごめんなさい。親戚の人と会うから、テニス行けないの。ごめんね。」の発話例では、「詫び+弁明+結論+詫び」というストラテジー(意味公式)の連鎖パターンが使われている(藤森 1995)。

い」と不満を表明することによって、騒音状況がなくなる可能性がある場面を指す。修復不可能な場面というのは、例えば、待ち合わせに遅れてきた相手に「遅い」と不満を訴えても遅れてきた事実は修復ができないというような場面を指す。交渉によって修復が可能かどうか決定される場面というのは、例えば、（大家さんから急に水道代を値上げするとの話を聞いて、）「それはちょっと納得いきませんが」と不満を訴えても、不満な状況がすぐ修復できるとは言えず、相手との交渉が必要な場面を指す。

ここでの「修復」という言葉は、筆者が言う「改善」とはほぼ同じ意味で使われていると思われる。不満表明行為を細かく分類し、タイプごとに頻出するストラテジーを考察するという研究方法は評価ができるが、修復可能（つまり、改善可能）かどうかという分類基準には曖昧なところが見られる。例えば、修復不可能（つまり、改善不可能）な場面として、「待ち合わせに遅れてきた」という場面を挙げているが、話者の発話意図によって、相手に「いらいらしたよ」とただ不満を訴える場合もあれば、「今度は遅れないようにね」と次回の改善を期待する場合もあるだろう。

この点について、牧原（2008:53）は、「相手に何らかの行為を求めることが目的である《改善要求》と、自身の感情を相手に伝えることが目的である《不満表明》とは質的に異なる」と述べ、「別のカテゴリーに範疇化されるべきものである」と指摘している。場面が修復可能かどうかによって不満表明行為を下位分類するのはそれなりの理屈があるかもしれないが、話者が何の意図で発話したかを基準にして、改善要求行為と不満表明行為を分けて考えたほうが、改善要求とはどのような性質のものかがより明確になるのではないと思われる。

また、これまでには、「改善要求」と「依頼」を一括して、「要求表現」（岡本 1984、鷹野 2005 など）、または「依頼表現」（相原 2008、浜田 1995、林 1982、馬場・盧 1992 など）として扱われていることもある。



図 2-1 要求行為における利益の情報構造的な流れ

①話者が聴者に何らかの行為を行うよう求める、②その行為が実現されれば話者に利益

がある、③当該行為の実行の決定権は聴者にある、という3つの点で改善要求行為と依頼行為は共通しているが、図2-1に示したように、発話時点において、「話者がすでに被害や不利益を受けた状況にある」改善要求行為は、「話者が特に聴者からの不利益を受けていない」依頼行為とは根本的な違いがあり、異なる利益の情報構造的な流れを持っていると思われる。

そこで、本論文では、

- ①話者が聴者に何らかの行為を行うよう求める
- ②その行為が実現されれば話者に利益がある
- ③当該行為の実行の決定権は聴者にある

という3つの語用論的条件<sup>2</sup>を揃えた行為を「広義の依頼行為」と認め、発話時点で話者が聴者から不利益を受けているかどうかによって、「広義の依頼行為」をさらに「狭義の依頼行為」（発話時点で不利益を受けていない）と「改善要求行為」（発話時点で不利益を受けている）の2種類に分ける。本論文の研究対象は後者の改善要求行為である。なお、記述の便宜上、特に断りがない限り、以下「狭義の依頼」を「依頼」と表記することにする。

以上のことを踏まえ、本論文では、「改善要求」を以下のように定義する。

**現状に不満や不快感を感じている話者が、その好ましくない状況を引き起こした当事者の聴者に何らかの改善を行うように依頼する行為である。**

前文で述べた①②③の3つの共通の語用論的条件以外に、改善要求行為には、

- ④発話時点で話者が聴者から不利益を受けている

という弁別的語用論的条件（改善要求行為と依頼行為を弁別する語用論的条件）が働くと考えられる。

## 2.2 改善要求行為に関する先行研究

2.1節で言及したように、従来、改善要求行為を不満表明行為や要求行為、依頼行為の一種として捉えることが多く、独立したカテゴリーとして扱った研究は、調べた限りでは、牧原(2008)、山岡・牧原・小野(2010)、天野(2013)しか挙げられない。初鹿野・熊取・藤森(1996)、藤森(1997)、平井(1998)、朴(2000, 2001)、李(2004, 2006)、鄭(2005)、郭

<sup>2</sup> 「語用論的条件」とは、命題内容や発話状況など、発話行為が成り立つための必須条件である。Searle(1969)が提唱した適切性条件(felicity conditions)の1つである準備条件(preparatory condition)に近い概念である。



(2007, 2008b, 2009)、呉(2008)、崔(2009)などの研究は、「不満表明行為」に関する研究であるが、取り上げているデータや用例の一部が、本論文が定義する「改善要求」と認められるため、それらも関連する先行研究として扱う。以下、「日本語母語話者を対象とした研究」、「日本語母語話者と日本語学習者との比較研究」、「日・英、日・韓、日・中対照研究」の3つのグループに分けて、先行研究を整理する。

### 2.2.1 日本語母語話者を対象とした研究

日本語母語話者の改善要求行為を中心に考察を行った研究は、牧原(2008)、山岡・牧原・小野(2010)、天野(2013)が挙げられる。

牧原(2008)、山岡・牧原・小野(2010)は、改善要求ストラテジーを「基本表現」と「配慮表現」の2つのグループに分け、改善要求の基本表現(意図伝達ためのストラテジー)として、以下の5つのストラテジーを挙げている。

- ①自分の不利益を告知する。(例:(うるさくて、)聞こえないんだけど。)
- ②不利益をもたらした相手の行為を指摘する。(例:うるさいよ。)
- ③期待される望ましい事態を反実仮想として告知する。(例:もう少し静かにしてくれるとうれしいんだけど。)
- ④不利益によって引き起こされた不満の感情を表明する。(例:あー、イライラする。)
- ⑤行為の改善を要求する。(例:静かにしてくれる?)

(牧原 2008:56)

改善要求の配慮表現(人間関係を損なう危険性を緩和するためのストラテジー)として、以下の6つのストラテジーを挙げている。

- ①疑問文にして問いかける。(例:うるさくない?)
- ②自らの不利益を婉曲的に告知する。(例:すみません。話がよく聞こえないんですけど。)
- ③不利益をもたらした相手の行為を婉曲的に指摘する。(例:あのう、ちょっと話し声が…)
- ④程度を下げる副詞を添えたりなどする。(例:ちょっとうるさいんですけど。)
- ⑤状況提示による間接的な行為要求を行う。(例:図書館内は、基本的に私語は禁止だと思うんですが…)
- ⑥副詞節を用いるなど、改善要求の実行を躊躇していることを示す。(例:ちょっと言い

にくいんだけど、もう少し静かにしてくれる?)

(牧原 2008:56)

改善要求行為は人間関係を損なう危険性の高い行為であるため、できれば避けたいものである。何らかの原因でそれを敢えて行う際には、なるべく人間関係を良好に維持するために、相手との親疎関係や、社会的上下関係、義務・権利関係、一時・持続的關係、性別、年齢、相手の様子・印象・態度、不満を感じた行為の不適切さなどの要因を総合的に判断し、適度の緩和ストラテジー、あるいは配慮ストラテジーを用いるのが望ましい。

意図伝達のみならず、人間関係を良好に維持する面にも触れた牧原(2008)、山岡・牧原・小野(2010)の研究は、日本語母語話者の改善要求発話に頻出するストラテジーを究明しただけでなく、「学習者が正確な日本語で改善要求を話せるよう」という学習者のコミュニケーション能力の養成にも有意義な貢献をしたと思われる。

しかし、「言語行動を行う話し手は、2つの指向性を常に併せもっていると考えられる。ひとつは、当該の言語行動の目的(依頼、詫び、説明、など)を効果的に達成すること、もうひとつは、相手との人間関係を良好に保つことである」(熊谷 2000:109)。目的達成を推し進めることは、話し手の意向を聞き手に押し付けることにもなり、そうなれば対人関係に問題が起きてくる。対人関係を良好に維持することは、意図伝達(目的達成)の効率性を犠牲にすることがある<sup>3</sup>。そのため、基本的に目的達成に関わる働きかけであっても、それを実現する表現形式に対人配慮の機能を持たせるなど、表現・伝達の異なるレベルの相互作用によって、両者間で選択が行われたり、兼ね合いが図られたりするのである(熊谷 1995, 2000)。

この意味では、言語行動の「目的達成」と「対人配慮」という2つの指向性は完全に分離できるものではなく、お互いに影響しつつ共存する関係にあると思われる。牧原(2008)が分類した目的達成の面を重視した改善要求の基本表現にも対人配慮の機能を持たせる要素が含まれると思われる。例えば、基本表現の⑤「行為の改善を要求する」に、「静かにしてくれる?」という例が挙げられているが、「静かにしろ」という命令表現に比べ、「静かにしてくれる?」には、疑問形式により相手に選択の余地を与えた点、授受補助動詞「〜てくれる」を用いて恩恵の授与を明示した点、などの対人配慮を機能を担う要素が見られる。他方、われわれは何らかの目的を達成するために、言葉を用いて相手に働きかけるも

<sup>3</sup> この点については、第1章で紹介した Grice(1975, 1989)の「協調の原理」にも述べられている。

のであるため、対人関係の面を重視した改善要求の配慮表現には、当然目的達成の要素も含まれていると思われる(そうでないと、発話行為は本来の意味が失われ、われわれが発話行為を行う必要がないであろう)。

そこで、本論文では、熊谷(1995, 2000)が提唱している「言語行動を行う話し手は『目的達成』と『対人配慮』という2つの指向性を常に併せ持っている」という主張を踏まえて、改善要求ストラテジーを「基本表現」と「配慮表現」に分けるのではなく、「目的達成」と「対人配慮」という2つの面から、改善要求ストラテジーを分析する。

また、天野(2013)では、改善要求行為を「話し手(S)が聞き手(H)から現在不利益を受けており、Hがその行為を中止/改善できるというSの見込みがある場合にSがHの行為を中止、あるいは改善させようとする行為」(同論文:142)であると定義し、騒音場面で日本語母語話者が異なる親疎関係の相手に対し、どのように改善要求を行っているかについて、家族、親友、クラスメート、初対面という4つの場面を設定し、ロールプレイ調査を行った。改善要求における親疎による表現の異なりを考察した結果、「相手に具体的な改善行動を指示するなどの形式を用いる《改善要求》によって改善要求をする際、相手との関係が遠くなるにつれ、決定権を自分から相手へと譲渡していく、あるいは相手に積極的な返答を求めないような形式を選択していくといった傾向がみられた。具体的には、〈命令〉(例:音ちっちゃくして)、〈依頼:クレル系〉(例:ちっちゃくしてくれる?)、〈助言〉(例:音ちっちゃくしたほうがいい)、〈依頼:モラウ系〉(例:小さくしてもらってもいい?)、〈願望表出〉(例:音下げてほしい)という順で、関係性が近い相手から遠い相手へと形式を選択していく」(同論文:151)と指摘している。

## 2.2.2 日本語母語話者と日本語学習者との比較研究

日本語母語話者と日本語学習者の改善要求行為を対象とした比較研究は、初鹿野・熊取・藤森(1996)、平井(1998)、朴(2000, 2001)、李(2004)、郭(2007, 2008b, 2009)が挙げられる(これらの研究では、「改善要求」ではなく、「不満表明」という用語が使われている。以下、原作に忠実に「不満表明」を用いる)。

初鹿野・熊取・藤森(1996)は、不満表明ストラテジー<sup>4</sup>の一般的な使用傾向を探るために、日本語母語話者と日本語学習者(多国籍)を対象に、計8つの場面を設定し、自由記述型談

<sup>4</sup> 「“好ましくない状況がH(聞き手)によって引き起こされたことをHに伝えよう”とする言語表現ストラテジーを『不満表明ストラテジー』と呼ぶ」(初鹿野・熊取・藤森 1996:130)。

話完成テスト(以下 DCT 調査とする)によりデータを収集し、話し手が聞き手に対してどのような言語表現上のストラテジーを用いて不満表明を行っているかを考察した。

①改善要求—a 直接改善要求。

b 改善された結果について言及。

c 社会的な規範に言及するなど、間接的に好ましくない状況の改善に結びつく行為を要求する。

②命題内容の表出—

a 相手によって引き起こされた好ましくない行為、状況を同定する。

b 相手が行ったもしくは行っている好ましくない行為または状況により引き起こされた結果を同定する。

c 直接的に命題内容について述べるのではなく、他の状況、行為に言及することで好ましくない影響を与えている状況、行為を暗示する。

③好ましくない状況が生じた原因・理由、またはその状況が生じた過程を問う。

④好ましくない状況が生じたことの確認。

⑤条件提示(警告、脅し、非難など)。

⑥代償要求(好ましくない状況を引き起こした相手に代償を要求する)。

⑦不満感情表出。

(初鹿野・熊取・藤森 1996:130-131)

上記のように、初鹿野・熊取・藤森(1996)は不満表明ストラテジーを11の種類(①と②にはそれぞれ3つの下位分類がある)に分けている。

日本語母語話者と日本語学習者の使用傾向を分析した結果、好ましくない状況の改善に繋がる行為を要求したり、好ましくない状況、行為の内容を表出するといったストラテジーの具現化において、学習者が母語話者に比べ、より間接的なストラテジーを多用する傾向があると述べている。また、不満表明行為をいくつかのストラテジー連鎖によって行われる行為と捉え、どのような連鎖型が使用されたかを分析した結果、学習者に使われた連鎖型の方がバリエーションが多く、母語話者に場面によって使用されるストラテジーの連鎖型は典型化されていることを指摘している。

平井(1998)は、日本語母語話者と日本語学習者(中国、台湾、韓国出身)を対象に DCT 調査によりデータを収集し、公的、私的場面の違い、相手や状況の違いに注目し、不満表明

ストラテジーの場面別に見られる使用傾向を考察した。分析の結果、日本語母語話者はどんな場合でも周りの状況や相手との関係を重視する傾向にあり、相手と自分との人間関係上の距離について非常に敏感である。一方、日本語学習者は状況や相手との関係がどうかということより、目前の事実に対して自分がどうしたいか、またはどうあるべきかということによって行動している、と指摘している。

朴(2000, 2001)は、日本語母語話者・韓国人日本語学習者・韓国語母語話者を対象として、社会的要因(性別、力関係、親疎関係、上下関係)による不満表明ストラテジーの使用傾向、ストラテジー連鎖型とバラエティー度を考察した。日本語母語話者に比べ、学習者は「言語核」<sup>5</sup>を多用する傾向があり、言語行動の指向性は、対人関係維持より目的達成指向が強いと指摘している。また、日本語母語話者と韓国語母語話者のストラテジー連鎖のパターンには豊富なバラエティーが見られるが、学習者のストラテジー連鎖のパターンは限られている傾向がある。その原因はパターン練習などの暗記学習から影響を受けたからであると述べている。

李(2004)は日本語母語話者と韓国人日本語学習者の不満表明ストラテジーの使用傾向を分析し、母語話者に比べ、学習者の方が母語干渉の影響で、より相手のフェイスを脅かす度合いの高いストラテジーを多用する傾向があると指摘している。また、韓国で外国語として日本語を勉強する学習者(JFL)と日本で第2言語として日本語を勉強する学習者(JSL)のストラテジーの使用傾向を比べた結果、JFLの方がより相手のフェイスを脅かす度合いの高いストラテジーを選択する傾向があり、学習環境が不満表明ストラテジーの選択に影響を与えることが報告されている。

郭(2007, 2008b, 2009)は、日本語母語話者と台湾人日本語学習者を対象に、不満表明(「改善要求」という用語も使われている)ストラテジーの使用傾向、ストラテジーの連鎖パターン、ストラテジーの選択に影響を及ぼす要因などを考察した。学習者のストラテジーの連鎖パターンにおいて、出現頻度が最も高いのは、「前置き—事実説明—欲求・願望」というパターンであると述べており、不満表明ストラテジーの選択に影響を及ぼす要因について、外的要因として①「社会的上下関係」、②「親疎関係」、③「義務・権利関係」、④「一時的・持続的関係」、⑤「性別」、⑥「年齢」、⑦「容姿・印象・態度」、そして内的要因として①「不満を感じた行為のひどさ」、②「被害の可能性」、③「改善の見込み」、④「お互い様意識」が挙げられる、と指摘している。

<sup>5</sup> 「言語核」とは「言語行動において目的達成に最も直接的に迫る部分」(熊谷 2000:107)である。

## 2.2.3 対照研究

### 2.2.3.1 日・英対照研究

改善要求行為に関する日・英対照を行った研究は、藤森(1997)、東(2001)が挙げられる。

藤森(1997)では、日本語母語話者と英語母語話者を対象に、DCT 調査により収集したデータに基づき、「特定場面において好ましくない状況が引き起こされた相手に対して不満を感じるか感じないか」、「不満を感じた場合、それを言語的に表明するかしないか」、「言語表明する場合、どのような発話行為を行うか」という3つの課題を検討した。日本語話者と英語話者は当該場面を不満に感じるかどうかについては概ね大差はないが、英語話者に比べ、日本語話者の方が言語で表明しないというストラテジーを多用する傾向があると述べており、不満表明ストラテジーの使用については、両者とも全体的には行為指示の発話内行為「命令」「依頼」「質問」を多用する傾向があると指摘している。

東(2001)は、協力者にあらかじめ設定された状況に基づいて、ロールプレイをしてもらうという調査方法を用いて、日本語と英語のケース(男性上司と女性部下の会話)にそれぞれ三組のデータを収集し、日米間の不満表明ストラテジーの類似点、相違点を分析した上、ポライトネス・ストラテジーの観点から日米の言語行動の規範となる概念に関する考察を行った。分析の結果、日本語では、上司が部下に理由を話させるチャンスを与えようとし、部下の方が詫びの言葉を多用している傾向があると述べ、日本のコミュニケーション・スタイルは話者同士がお互いに「あまえ」という概念で結び付き、他者を意識した相互依存型である。それに対して、英語での不満表明は概して On record (はっきり言葉に出して伝えること)で、お互いを尊重しあう独立型であると指摘している。

藤森(1997)と東(2001)の研究は、場面設定や調査方法が異なるが、「日本語話者が英語話者に比べ、不満を感じてもそれを言語で表明しない、あるいははっきりと直接的に表明しない傾向がある」という共通した見解が見られる。

### 2.2.3.2 日・韓対照研究

改善要求行為に関する日・韓対照を行った研究は、鄭(2005)、李(2006)が挙げられる。

鄭(2005)は、ロールプレイ調査により収集したデータに基づき、日本語話者と韓国語話者の不満表明ストラテジーの使用傾向と連鎖のパターンを考察し、日本語話者は「もめごと」に否定的なイメージを持っており、なるべく関わらないほうがいいという意識が強いが、韓国語話者はもめることによって、話し合いが始まり、お互い納得できる解決案が見

出せるという肯定的な意識が強いと指摘している。

李(2006)は、DCT 調査により収集したデータに基づき、日本語話者と韓国語話者の場面別の戦略使用傾向と戦略内の言語表現を考察し、日本語話者は間接的な不満表明にとどまる傾向があるのに対して、韓国語話者は不満な状況が相手によって引き起こされたことを相手にはっきりと伝えたり、不満な状況の改善や代償を要求したりする傾向が強いと述べており、具体的な表現形式の使用においても差が見られ、同じ「不満表明」場面であっても、文化によって使用される戦略やその言語表現が異なっていると指摘している。

### 2.2.3.3 日・中(台)対照研究

改善要求行為に関する日・中(台)対照を行った研究は、呉(2008)、崔(2009)が挙げられる。

呉(2008)は、日本人大学生と台湾人大学生を対象に、DCT 調査によりデータを収集し、「親疎関係」「年齢による上下関係」「力による上下関係」「不満の回数」などの組み合わせを考慮に入れ、不満表明戦略の使用傾向を考察した。全体の傾向として日台ともに「改善要求」や「不満を表明しない」という戦略を多用しているが、日本人大学生は不満を表明するかしないかを決定する際に相手との関係に依存する度合いが高く、「不満に感じて、それを言語で表明しない」という戦略を台湾人大学生よりも多用する傾向がある。そして、日本人大学生は相手が親しくない時、相手の年齢と不満の頻度に関係なく、「不満を表明しない」という戦略を多用するのに対して、台湾人大学生は「改善要求」を多用する。また、台湾人大学生は不満表明において、力関係にあまり影響されていないのに対して、日本人大学生は相手との力関係に影響されている、と指摘している。

崔(2009)はこれまでの改善要求行為に関する先行研究と異なり、ロールプレイ調査により収集したデータに基づき、不満表明とそれに対する応答が行われる際、中国語と日本語にそれぞれどのような特徴があり、どのように談話が展開していくのかを検討した。中国語では、不満を言う側と言われる側、どちらから談話が開始されても不満を言う側は一貫してまず直接的な不満表明から始まるが、日本語では、不満をと言われる側から談話が開始されると、不満を言う側は必ずしも不満表明ではなく、理由・説明要求などで談話を展開するパターンもあると報告している。

### 2.3 先行研究のまとめと本論文の位置づけ

以上、概観してきたように、これまでの改善要求行為に関する先行研究は表 2-1 のようにまとめられる。

表 2-1 改善要求行為に関する先行研究のまとめ

分類	先行研究	研究内容
日本語母語話者を対象とした研究	牧原(2008)、山岡・牧原・小野(2010)、天野(2013)	①どのようなストラテジーや表現形式が使われているのか
日本語母語話者と学習者との比較研究	初鹿野・熊取・藤森(1996)、平井(1998)、朴(2000, 2001)、李(2004)、郭(2007, 2008b, 2009)	②場面別にどのようなストラテジーが多用されるのか ③場面別にどのようなストラテジーの連鎖パターン(つまり、出現順序)が多用されるのか
日英対照研究	藤森(1997)、東(2001)	④ストラテジーの選択に影響を及ぼす要因にはどのようなものがあるのか
日韓対照研究	鄭(2005)、李(2006)	
日中対照研究	呉(2008)、崔(2009)	

表 2-1 に示したように、改善要求行為に関して、これまで初鹿野・熊取・藤森(1996)をはじめとして、日本語母語話者を対象とした研究(牧原 2008、山岡・牧原・小野 2010、天野 2013)、日本語母語話者と日本語学習者との比較研究(初鹿野・熊取・藤森 1996、平井 1998、朴 2000, 2001、李 2004、郭 2007, 2008b, 2009)、日英対照(藤森 1997、東 2001)、日韓対照(鄭 2005、李 2006)、日中(台)対照(呉 2008、崔 2009)など、多数の研究が行われてきた。

これらの研究は、いずれも社会言語学や談話研究の視点から、発話ストラテジーの研究が中心になっており、「改善要求行為にはどのようなストラテジーや表現形式が使われているのか」、「各言語において、ストラテジーの使用傾向が場面状況によってどのように変わるのか」、「ストラテジーの連鎖パターン(出現順序)にはどのような特徴があるのか」

「ストラテジーの選択に影響を及ぼす要因にはどのようなものがあるのか」などの課題を検討することが主眼となっている。場面状況に応じて各言語話者(日本語、中国語、英語、韓国語など)がどのようなストラテジーと表現形式を多用しているかについて幅広く分析が行われ、改善要求行為の実態を明らかにした点では高く評価できるものと思われる。

しかし、これらの研究では、改善要求行為の実態(つまり、ストラテジーや表現形式の使用傾向、ストラテジーの連鎖パターンなど)について細かく分析されてはいるが、ストラテジーの使用傾向や連鎖パターンの背後にどのようなメカニズムが働いているのかについては、ほとんど言及されていない。言い換えれば、これまでの改善要求行為に関する研究は、



改善要求発話がどのようになっているのかを考察することが主眼となっており、どのような要因によって動機付けられてそのようになっているのかについての考察は少ない。

言語がなぜそのようになっているのかを解釈することは、言語の複雑で多様なメカニズムを示しているだけではなく、学習者の外国語習得にも役に立つものである。故に、対照研究の観点から言語研究を行う際には、それぞれの言語がどうなっているのかを説明するだけでなく、人間の知のメカニズム、人間のさまざまな認識の側面を考慮に入れて、言語のメカニズム、言語と認知の関係を明らかにする必要があると思われる。

また、これまでの改善要求行為に関する研究では、学習者のストラテジーと表現形式の使用において、母語干渉の影響で、日本語母語話者と異なる傾向が見られることが指摘されているが、負の転移を防ぐための方策については触れられておらず、学習者の改善要求行為における語用論的転移の問題について、根本的な解決策が明らかにされているとは言いがたい。

そこで、本論文はこれまでの先行研究とは異なり、改善要求行為に用いるストラテジーと表現形式はどのような仕組みによって言語化されたのかという問題意識に基づき、認知言語学のアプローチから改善要求発話の構成要素を分析する。改善要求行為の言語化における日中両言語の共通点と相違点を明らかにすることにより、中国人日本語学習者の改善要求行為における語用論的転移の問題の解決策を探ろうとするものである。

## 第3章 理論的枠組み

本章では、これまで認知文法で扱われてきた「因果連鎖」と「事態把握」の分析方法を談話分析に導入し、本論文独自の談話分析の研究方法を示す。また、本論文で扱うデータについて説明する。

### 3.1 因果連鎖(causal chain)

#### 3.1.1 ビリヤードボール・モデル

「われわれが認知するのは、単なるモノの世界だけではなく、物体が移動したり状態が変化したりするような、コトの世界も対象となる。こうした認知の世界での出来事を事象構造(event structure)という。それは特に文の形で世界の一面を捉えるプロセスに深く関わっている」(大堀 2002:97)。1つの文によって表される意味には、「誰が何をしたか」(いわゆる動的な行為)、あるいは「あるものがどのような状態にあるか」(いわゆる静的な状態)といった、事象の客観的な成り立ちだけではなく、それを話し手がどのように理解し言語化したかも反映されている(大堀 2002)。

こうした事象概念の内、特にエネルギー伝達が行われる動的な事象を表示するのが、Langacker(1990a, 1991, 2008)により提唱されている「ビリヤードボール・モデル」である。「ビリヤードボール・モデル」とは、どのようなものかについて、Langacker(1990a)は次のように述べている。

“We tend to conceive of our world as being populated by discrete objects, each of which (at a given moment) occupies a distinct location. Some of these objects are capable of moving about and interacting with others, particularly through direct physical contact. Motion is driven by energy, which some objects are capable of supplying internally and others must receive from outside sources. When physical contact is initiated with any degree of force, energy is transmitted from the mover to the impacted object; this may cause the latter to move also, and possibly to interact with additional objects. Let us call this archetypal conception the “**billiard-ball model**”.” (Langacker1990a:209)

邦訳：「一般に、個別的な物体が世界に存在すると考えられる。これらの物体は空間を動き回り、互いに接触することができる。移動はエネルギーによりもたらされる。エネルギーを内部から引き出す物体もあれば、外側から受け取る物体もある。強力な物理的な接触があると、エネルギーは移動物

から衝突された物体へ伝わる。その結果、衝突された物体は運動をはじめ、さらなる相互作用に関与していくかもしれない」（山梨 2011:132）。「このような物体の移動の様子をビリヤードボールの動きに喩えたモデルがビリヤードボール・モデルである」（辻 2013:307、図 3-1 を参照されたい）。

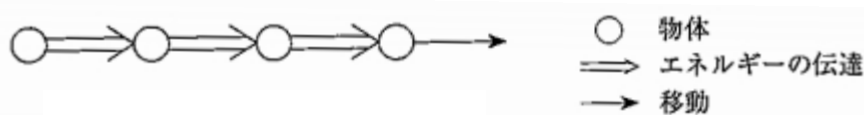


図 3-1 ビリヤードボール・モデル(辻 2013:307 より)

「ビリヤードボール・モデルの表す知覚行為は、人間の持つ基本的な認知能力の現れであり、われわれの日常生活における知覚活動にとどまらず、様々な学問の分野におけるモデルの構築にも多大な影響を与えている。(中略)、ビリヤードボール・モデルには、外界から切り取られた物体が存在しているが、認知文法においては、これは名詞というカテゴリーのプロトタイプであると考えられる。そしてこの物体の移動や関わり合いは、動詞のプロトタイプである」（辻 2013:307）。

### 3.1.2 文レベルでの因果連鎖

エネルギーの伝達から事象生起の特徴を捉えようとするビリヤードボール・モデルと近似し、因果の概念と動詞の概念特徴を強調する点が特筆されるのが「因果連鎖」(causal chain) という理論である。

大堀(2002:97-124)によると、事象を構成する重要な要素の1つは参加者の間の相互作用のことである。それは参加者がどのように影響を及ぼし合い、どのように変化をするのかということと関わる。図 3-2 に示したように、現実世界での因果関係はきわめて入り組んでおり、1つの出来事にはいくつもの原因があり、因果関係が多方面に及んでいる。

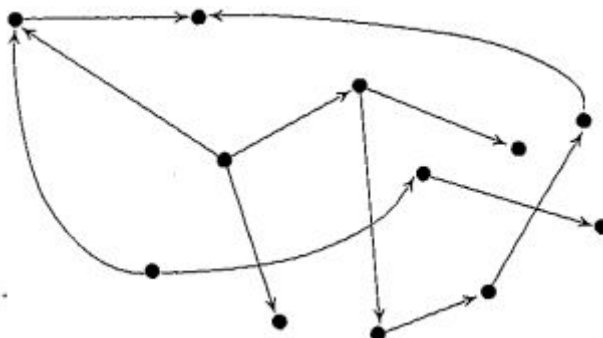


図 3-2 現実世界での因果関係(大堀 2002:98 より)

しかしながら、人の認知プロセスでは、無数に張りめぐらされた因果関係の網の中から一筋の連鎖を取り出し、図 3-3 のように線状的な関係へと還元することで出来事が理解されている(大堀 2002)。



図 3-3 線状化された因果関係(大堀 2002:99 より)

言い換えれば、「われわれが経験する出来事は、ある一つの対象から発した『エネルギー』が別の対象に伝わり、それが順々に伝達されることで一連の出来事が生じるというモデルによる捉え方がされると考えられる」(大堀 2002:99)。これは日常的な事象の捉え方についての理想認知モデルとも言われ、こうした一連の因果関係の連なりは「因果連鎖(causal chain)」(または「行為連鎖(action chain)」)と言う(大堀 2002)。

因果連鎖は、モノからモノへの力(つまり、エネルギー)の移動と、その結果としての状態変化を捉える型でもある。例えば、他動詞文の“John broke the window into pieces.”(ジョンは窓を粉々に叩き割った。)<sup>1</sup>を例として説明すると、ジョンが窓に一定の<行為>を行った結果、ジョンから窓に力が移動し、その結果、窓の形状が<変化>し、窓が砕けた<状態>になったことを表す。これは、ジョンの加えた力が「因」となって、窓の破碎という「果」をもたらしたことと同じことである。このようにある事象を因果連鎖と見なし、<行為>→<変化>→<状態>といった認知の型において捉えた時、それは経験を抽象化・構造化しているので、事象をイベント・スキーマ(event schema)として捉えていることになる(山梨 1995:251-257、辻 2013:8)。

因果連鎖に重要な概念の1つが連鎖の「切片化の選択」(segmentation)というものである。いわゆる、「出来事を言語化する際には、一連の連鎖の中から限られた部分をプロファイルすること」(大堀 2002:99)である。例えば、(1)に示した3つの文は、同一事象の中から異なる部分が切り出され、言語化されたものである。

- (1) a. John broke the window with the hammer. (ジョンはハンマーで窓を壊した。)
- b. The hammer broke the window. (ハンマーが窓を壊した。)
- c. The window broke. (窓が壊れた。)

(谷口 2004:53-54)

<sup>1</sup> 辻(2013:8)によるものである。

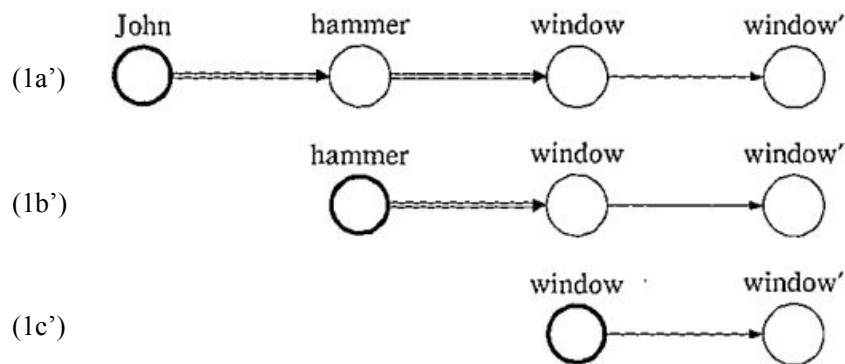


図 3-4 因果連鎖の切片化の選択の分析例 (谷口 2004:54 より)

二重矢印はエネルギーの伝達を、一重矢印は位置または状態の変化を表す。右端の丸は、エネルギーを受けた参加者の変化の結果である位置や状態を表す。

(1a)は、Johnから道具の the hammer へとまずエネルギーが伝達され、そこから the window へとエネルギーがさらに伝達され、その結果エネルギーを受けた the window が状態の変化を起こす、という事象を表している。それに対して、(1b)は「Johnから道具の the hammer へとエネルギーが伝達される」部分が捨象され、道具の the hammer から始まる部分が選択され、言語化されたものである。(1c)は「Johnから道具の the hammer へとまずエネルギーが伝達され、そこから the window へとエネルギーがさらに伝達される」部分が捨象され、「the window が状態の変化を起こす」部分が選択され、言語化されたものである(谷口 2004)。

因果連鎖の分析に、もう1つ関わってくるのが、どのぐらい事象を細かく見るかという「細密度」(granularity)のとり方のことである(大堀 2002:99)。例えば、(2)に示した2つの文が同一事象を異なる細密度で描写したものである。

- (2) a. 彼女は “You never give me your money” のイントロパートを弾いた。
- b. 彼女の指は鍵盤の上を軽やかに舞って “You never give me your money” のイントロパートの調べを奏でた。

(大堀 2002:17 より)

図 3-5 に示したように、「事象を言語化するということは、多方面に広がった因果関係の中から線状の連鎖を抽出した上で、連鎖の一部をある細密度のもとに切片化する作業である。(中略)、こうして得られた内容は、出来事を描く述語—多くの場合は動詞—を中心として文の形へと構成される」(大堀 2002:99-100)。

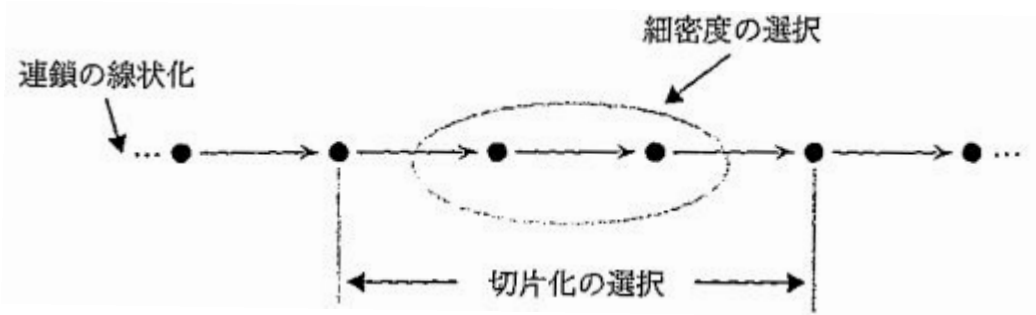


図 3-5 事象の認知プロセス(大堀 2002:100 より)

### 3.1.3 本論文での因果連鎖——談話レベルでの因果連鎖

3.1.1 と 3.1.2 節で概観してきたように、これまでの先行研究 (Langacker1990a, 1991、山梨 1995、大堀 2002、谷口 2004、辻 2013 など) では、事象というものを因果連鎖とみなし、認知主体がある細密度のもとに、連鎖の一部をプロファイルすることによって出来事を描くという、述語(多くの場合は動詞)を中心とした文レベルでの言語表現と認知プロセスとの関わりが中心的な議論となっている。

こうした一連の認知プロセスは、実は文レベルだけでなく、いくつかの文をひとまとまりとして考える談話レベルでの言語化にも見られる。例えば、大声で話している隣人に静かにしてほしいと思った場面での改善要求行為を例として考えてみると、図 3-6 に示したような因果関係を表す状況の段階が存在すると考えられる。

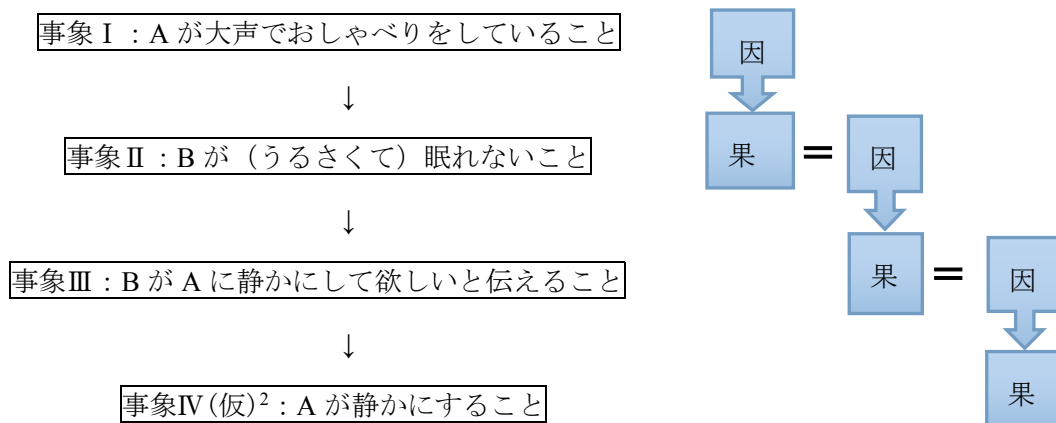


図 3-6 騒音場面の改善要求行為における因果連鎖

この図を文で説明すると、「A が大声でおしゃべりをしている。そのせいで、隣に住ん

<sup>2</sup> A が B の願望要求に応じない時もある。ここでは、仮に改善要求発話の目的が達成された状況を設定した。

でいる B が(うるさくて)眠れない。B が A の行為(騒音)によって不利益 (よく眠れない)を受けたため、A に静かにして欲しいという改善要求を表出する。そこで B の改善要求に応じて、A が静かにする」となる。

換言すれば、大声で話している隣人に静かにして欲しいと思った場面での改善要求行為には、「A が大声でおしゃべりをする行為を行った結果、隣に住んでいる B が(うるさくて)眠れないという変化が発生し、その結果、B が A に静かにして欲しいという改善要求を表出する」という一連の因果関係の持つ事象連鎖が考えられる(この B は改善要求発話を表出する話者で、A は改善要求発話を聞く聴者である<sup>3)</sup>)。例として、(3)を参照されたい。

(3) 実はそちらの話し声が壁伝えで聞こえていまして、そのせいで最近夜眠れないのです。申し訳ないのですが、夜遅くまで話すのはひかえてもらっても良いですか。

(JNS12-場面 1)<sup>4</sup>

(3)では、聴者が大声でおしゃべりをする行為を行った結果、「話声が壁伝えで(話者が)聞こえていまして」(事象 I)、その影響を受け、「(話者が)最近夜眠れない」という変化が発生し(事象 II)、その結果、話者が聴者に「夜遅くまで話すのはひかえてもらっても良いですか」という改善要求を表出する(事象 III)、という一連の事象が描かれている。

この一連の事象連鎖を一般化すると、「聴者がある行為を行った結果、話者にとって好ましくない状況が発生し(事象 I)、その影響を受け、話者の利益が損なわれ(事象 II)、話者が自分の利益を守るために聴者に好ましくない状況を引き起こす行為を改善して欲しいと伝える(事象 III)。話者から改善して欲しいという要求が出されたため、その要求に応じて、聴者が改善行為をする(事象 IV)」となる。前文の図 3-1 に示したビリヤードボール・モデルに倣い、改善要求行為における事象の因果連鎖を示すと、図 3-7 のようになる。連鎖の節点「●」の上に参加者を、下に出来事(事態)を示している。リンク「→」はエネルギーの伝達(因果関係)を表している。

<sup>3</sup> 本論文では、場面を提示した言語行動意識調査の一種である「自由記述型談話完成テスト(DCT)」により収集したデータを分析対象とするため、ここで言う「話者」とは、言語行動意識調査において改善要求発話を表出する側のことである。「聴者」とは、改善要求発話を表出する際に、「話者」の頭の中で想定された聞く側、すなわち、騒音を立てた隣人のことを指す。

<sup>4</sup> 筆者が行った自由記述型談話完成テスト(DCT)により収集したデータである。「JNS」は“Japanese Native Speakers”の略であり、日本語母語話者を意味する。「JNS」の後ろの数字は調査対象者の番号を示したものである。例えば、「JNS12-場面 1」は「12 番の日本語母語話者の場面 1 でのデータである」ことを示している。以下同様。

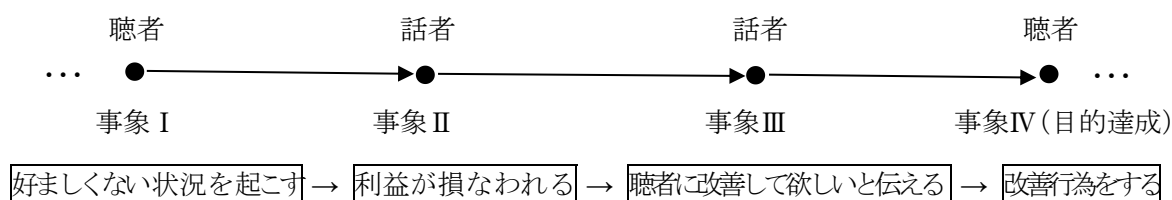


図 3-7 改善要求行為における事象の因果連鎖

文レベルでの因果連鎖と同様に、談話レベルでの因果連鎖の分析にも連鎖の「切片化の選択」と「細密度のとり方」が関わってくる。例えば、下記の(4)～(8)は、図 3-7 に示した因果連鎖の異なる部分が切り出されて言語化された発話例である。

(4) ちょっと悪いんだけど、夜もう少し静かにしてくれないかな。 (JNS1-場面 2)  
【事象 III】

(5) 最近何かあるの？わいわいしてるみたいだけど。 (JNS17-場面 2)  
【事象 I】

(6) すみません。夜うるさくて、眠れないのですが… (JNS15-場面 1)  
【事象 I】 【事象 II】

(7) 夜声すごい聞こえてくるから、声量おとしてもらっていい？ (JNS3-場面 2)  
【事象 I】 【事象 III】

(8) 眠れなくて困ってるんで、もう少しトーンをおとして話してもらえると助かります。 (JNS14-場面 1)  
【事象 II】 【事象 III】

(4)では、事象 III の「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」の部分が選択され、言語化されている。そして、(5)では、事象 I の「聴者が好ましくない状況を起こすこと」の部分が選択され、言語化されている。また、(6)では、事象 I の「聴者が好ましくない状況を起こすこと」と事象 II の「話者の利益が損なわれること」の部分が選択され、言語化されている。(6)と同様に、2つ以上の部分が選択され言語化される発話例は、他には(7)【事象 I+事象 III】と(8)【事象 II+事象 III】、そして前文の(3)【事象 I+事象 II+事象 III】などのパターンがある。

そして、「細密度のとり方」に関して、改善要求発話をひとまとまりのある談話として



考える時、取り上げる事象の数が多ければ多いほど、細密度が高いと考えられる。この意味では、1つの事象だけを取り上げた(4)(5)に比べ、2つの事象を取り上げた(6)(7)(8)の方が細密度が高いと言える。また、1つの事象に対して細かく述べれば述べるほど、細密度が高いと考えられる。例えば、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」を言語化する際に、(9)のように、用件だけを述べる場合もあれば、(10)のように用件の改善要求だけではなく、改善要求を表出する理由を説明する場合もある。用件だけを述べた(9)に比べ、理由付けまで述べた(10)の方が細密度が高いと言える。

(9) ちょっと静かにしてもらえますか。 (JNS9-場面3)

(10) さすがにもう遅い時間だから、もう少し静かにしてもらってもいいかな。

(JNS10-場面2)

以上述べてきたように、談話レベルでの言語化においても、文レベルでの言語化と同様に、話者(=認知主体)が「多方面に広がった因果関係の中から線状の連鎖を抽出した上で、連鎖の一部をある細密度のもとに切片化する作業」(大堀 2002:99-100)を行っていると考えられる。前文で紹介した述語を中心とした文レベルでの言語化における事象の認知プロセス(図3-5)に倣い、改善要求行為における談話レベルでの事象の認知プロセスを図式化すると、図3-8のようになる。

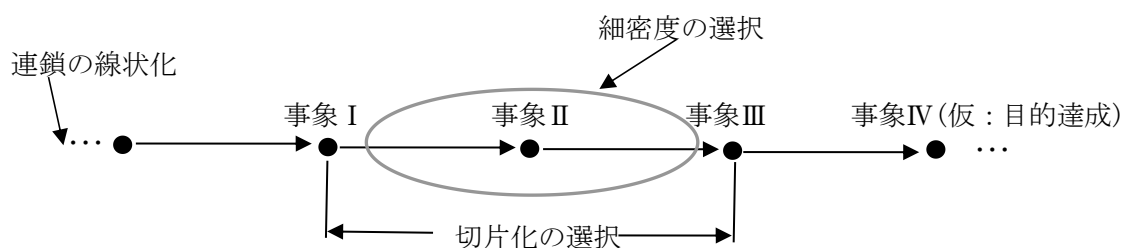


図3-8 改善要求行為における事象の認知プロセス

「因果連鎖に基づいた分析は、言語の類型論的特性を考える上で、有効な視点を提供する」と大堀(2002:109)は指摘している。日本語話者と中国語話者の改善要求発話のパターンには、どのような類型論的特性が見られるだろうか。この課題については、第4章で詳しく述べる。

### 3.2 事態把握 (construal)

「事態把握」<sup>5</sup> (construal) とは、言語化しようとする<事態>に対して、どこに視座を据えて把握しようとするのか、どの部分を前景化し、どの部分を背景化するのか、どの程度の抽象度のレベルで把握するのか、<コト>を<コト>として把握するのか、<モノ>として把握するのか、直示的に言及するのか、参照点を介して間接的に言及するのか、などの認知レベルでの営みのことである(池上 2011a:50 から一部抜粋)。

(11)a 「ココカラ上り坂ダ」と「ココカラ下り坂ダ」⇒視座の据え方

b 「親ガ子ヲ抱ク」と「子ガ親ニ抱カレル」⇒前景化、背景化

c 「アソコニ犬ガイル」と「アソコニシェパードガイル」⇒抽象度

d 「太郎ガ死ヌ」と「太郎ノ死」⇒<コト><モノ>

e 「コチラニイルノガ花子」と「私ノ隣ニイルノガ花子」⇒直示的、間接的<sup>6</sup>

例えば、(11a)に示したように、話者の居場所(坂の下か? 上か?)によって、表出する表現形式が異なる。話者が坂の下にいる場合には、「ココカラ上り坂ダ」と表出するが、坂の上にいる場合には「ココカラ下り坂ダ」と言うだろう。また、(11b)に示したように、「親」を前景化し、「子」を背景化する場合には、「親ガ子ヲ抱ク」と表出する。それとは反対に、「子」を前景化し、「親」を背景化する場合には、「子ガ親ニ抱カレル」と表出するだろう。(11c)に示した例は、前節で論述した「細密度」(どのくらい事象を細かく見るか)の問題と関わっている。「犬種」まで捉える場合には、「アソコニシェパードガイル」と表出するが、「犬種」を言わず、「アソコニ犬ガイル」と言う場合もある。(11d)は「<コト>を<コト>として把握するのか、<モノ>として把握するのか」を示した例である。(11e)は「直示的に言及するのか、参照点を介して間接的に言及するのか」を示した例である。直示的に言及する場合には、「コチラニイルノガ花子」と表出するが、自分を参照点として花子の居場所を捉える場合には、「私ノ隣ニイルノガ花子」と表出する(池上 2011a)。

上述したように、「事態把握」というのは、言語化しようとする<事態>に対して、どのように把握し言語化を行うかという認知レベルでの営みのことである。事態を把握するには、「視座の据え方」、「前景化・背景化」、「抽象度(細密度)」、「コト・モノ」、「直

<sup>5</sup> “construal” という用語について、「事態認知」(山梨 1995, 山梨 2009)、「事態認識」(山梨 1995)、「事態解釈」(山梨 2011)、「事態の解釈/捉え方」(辻 2003, 辻 2013)などの訳し方もあるが、本論文では、池上(2004, 2005a, 2005b, 2006, 2008, 2011a, 2011b)、黒滝(2013)、徐(2013)、中野(2013)などに従い、「事態把握」という訳語を用いることにする。

<sup>6</sup> 例文は池上(2011a:50)から引用したものである。

示的・間接的」など、多数のことが関わっているが、本論文では、「視座の据え方」と「前景化・背景化」という2つの観点から、日中改善要求発話の構成要素の言語化の仕方を検討する。以下、この2つのアプローチを紹介する。

### 3.2.1 事態把握における空間認知

「文とは本来事実そのものを語るものではなく、事実に対する話し手の捉え方を語るもの」(木村 2014:4)である。言語化しようとする<事態>(出来事)に対して、言語主体がどこに視座を据えて把握しようとするのか、つまり、認知主体(=話者)と認知対象(=出来事、事態)との空間的な位置づけ(以下、「空間認知」<sup>7</sup>とする)は、すべての言語化に関わることである。

「空間認知」に関して、Langacker (1985, 1990a, 1990b, 1991, 2008)では、「ステージ・モデル」が提唱されている。そして、池上(2004, 2005a, 2005b, 2006, 2011a)では、<主観的把握>と<客観的把握>という類型的図式が提唱されており、中村(2004)では、「Iモード」と「Dモード」という認知モデルが提唱されている。また、木村(1996, 2014)では、「当事者現場立脚型」と「傍観者俯瞰型」という2つの視点が提唱されている。

以下、これらの理論を紹介した上で、本論文で扱う「空間認知」の類型について述べる。

#### 3.2.1.1 ステージ・モデル

認知主体(=話者)と認知対象(=出来事、事態)との空間的な位置づけに関して、Langacker(1985, 1990a, 1990b, 1991, 2008)では、「ステージ・モデル」(stage model)が提唱されている。

(12) a Vanessa is sitting across the table from Veronica.

b Vanessa is sitting across the table from me.

c Vanessa is sitting across the table .

(Langacker 1990b:17-20)

(12)に示したように、“Vanessa”の居場所を語る際に、3つの捉え方が可能である。(12a)では、“Veronica”を参照点にして“Vanessa”の居場所を描いている。そして、(12b)では、

<sup>7</sup> 「空間認知は心理学、人工知能、認知神経科学等の様々な学問分野で研究が行われ、それぞれ独自の問題設定がなされている。認知言語学においても、様々な角度から、空間認知の言語構造への影響についての研究が行われている」(辻 2013:78)。本論文で扱う「空間認知」は、「認知主体(=話者)と認知対象(=出来事、事態)との空間的な位置づけ」のことを指し、狭い意味の空間認知である。

話者自身“me”を参照点にして“Vanessa”の居場所を描いている。(12c)では、話者自身を参照点にして“Vanessa”の居場所を描いているが、話者のことが言語化されていない。この3つの捉え方について、Langacker(1990b)は図3-9に示した構図を用いて、説明している。

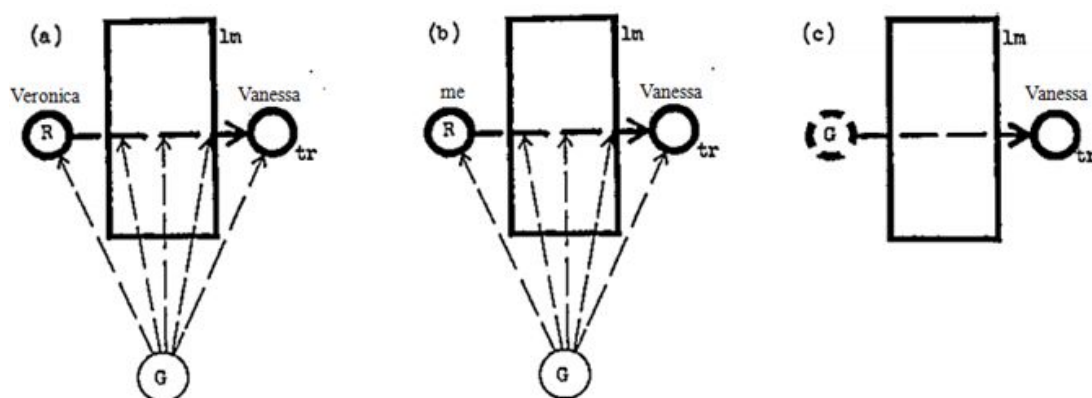


図3-9 ステージ・モデルの分析例(Langacker1990b:18より、一部変更<sup>8</sup>)

“G”は“ground”の略語で、ここでは「言語主体」のことを指す。“R”は“reference point”の略語で、「参照点」の意味である。“tr”は“trajector”の略語で、「トラジェクター」と邦訳されている。“lm”は“landmark”の略語で、「ランドマーク」と邦訳されている。「トラジェクター」と「ランドマーク」とはどのようなものかについて辻(2013)は次のように述べている。「ある特定の認知領域内の構造は、その際立ちの違いによって、背景的要素として機能するベースと、焦点化され、際立ちの大きいプロフィールと呼ばれる部分に分かれる。このプロフィールが、ある事物と他の事物の間に成立する関係を表している場合、双方ともプロフィールされていても、その間にはさらなる際立ちの違いがある。このような、関係を表すプロフィールにおいて、際立ちの最も大きい部分構造を『トラジェクター』と呼び、それ以外の際立ちの大きい部分構造を『ランドマーク』と呼ぶ」(辻2013:255)。

<sup>8</sup> Langacker(1990b:18)に示されている“Figure7”の(b)と(c)を援用し、原図の上に、“R”と“tr”がそれぞれ誰のことを指しているのかを付け加えた。原図は以下の通りである。

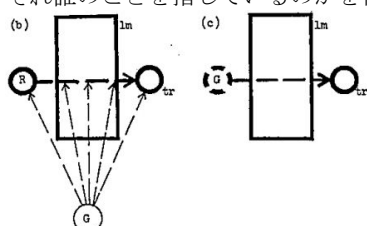


図 3-9 の(a)は例文(12a)のイメージを示したものである。“Vanessa”と“Veronica”がそれぞれテーブルの両側に座っていて、テーブルから離れている言語主体(“G”で示されている)が“Veronica”を参照点にして“Vanessa”の居場所を描いている。

図 3-9 の(b)は例文(12b)のイメージを示したものである。“Vanessa”と“me”がそれぞれテーブルの両側に座っていて、テーブルから離れている言語主体(“G”で示されている)が“me”を参照点にして“Vanessa”の居場所を描いている。

(13) a Look! My picture's in the paper! And Vanessa is sitting across the table from me!

b ? Look! My picture's in the paper! And Vanessa is sitting across the table !

(Langacker1990b:20)

(13a)に示したように、話者があたかも「自分と Vanessa がテーブルの両側に座っている情景が写っている」写真を見ているかのように、自分のことを他者(Veronica)並みに扱い、一人称代名詞の目的格“me”で明示化し、参照点として Vanessa の居場所を説明している。

図 3-9(c)は例文(12c)のイメージを示したものである。言語主体(“G”で示されている)が“Vanessa”とテーブルの両側に座っていて、自ら参照点になり、テーブルの向こう側に座っている“Vanessa”の居場所を描いている。

このように、Langacker は「事態把握」という認知レベルでの営みを、「見る」という知覚レベルでの営みとの類比をしながら説明している。具体的には、舞台の上で演じられる事態と舞台の外でそれを眺める観客を対比させるという図式である。

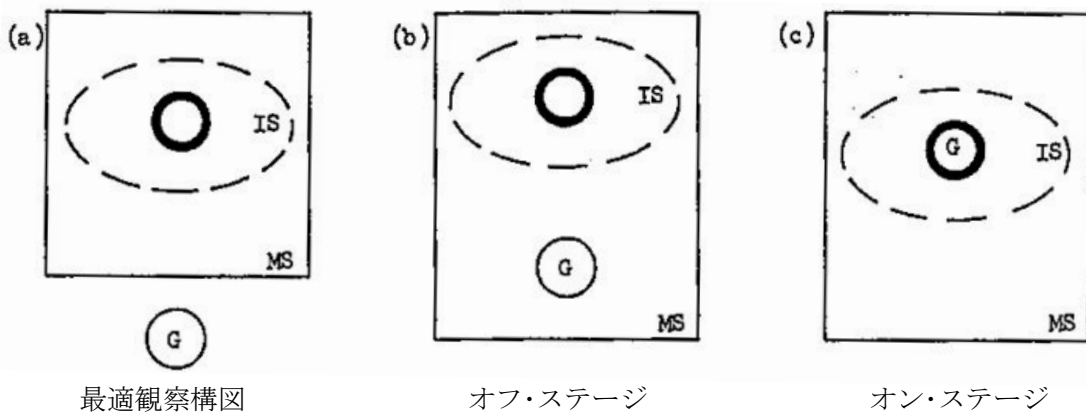


図 3-10 ステージ・モデルの構図(Langacker1990b:10 より<sup>9)</sup>)

<sup>9</sup> 図の下の名称は筆者により付け加えたものである。“MS”は“maximal scope”の略語、“IS”は“immediate scope”の略語である。舞台の上での「オフ・ステージ」領域と「オン・ステージ」領域に相当するも

最も典型的な場合（つまり、「optimal viewing arrangement」「最適観察構図」）は、事態は舞台上、観客は舞台の外に立ち、事態と観客が完全に分離していて、それぞれが独立した存在で、後者が前者を見るという構図で関係し合う（図 3-10(a)を参照されたい）。

「言語主体」（発話のために事態把握をする「認知主体」でもある）と把握の対象となる事態とが完全に分離し、「相互に自立した存在という構図で事態把握の行われる場合は、最も客観的<な>事態把握の場合である」（池上 2005b:548）。

次に、観客が舞台上に上がり、言語化する事態の中に入り込んで振舞うという状況がある。観客が舞台上上がるといっても、さらに2つの場合が区別される。1つは、舞台上上がった観客がまだ注目の対象にならない舞台の袖あたり（つまり、オフ・ステージ（off-stage）領域<sup>10</sup>）にとどまっている場合である（図 3-10(b)を参照されたい）。観客が自ら参照点となり、事態把握に関わるが、舞台の袖あたり（オフ・ステージ領域）に位置しているため、言語化はされない。

もう1つは、舞台上上がった観客が（例えば、特に照明で明るく照らされているなどして）注目の対象になる舞台の中心部（つまり、オン・ステージ（on-stage）領域<sup>11</sup>）に位置している場合である（図 3-10(c)を参照されたい）。観客が言語化の対象（客体）の1つとして扱われ、一人称代名詞などで明示的に言語化されることになる<sup>12</sup>。

### 3.2.1.2 主観的把握と客観的把握

Langacker(1985, 1990a, 1990b, 1991, 2008)が提唱している「ステージ・モデル」を踏まえ、池上(2004, 2005a, 2005b, 2006, 2008, 2011a, 2011b)は、話者による「事態把握」という認知的な営みにおいて、認知主体としての「話者」と認知対象である「事態」との関わり合いには、「主観的把握(subjective construal)」と「客観的把握(objective construal)」という2つの基本類型があると指摘している。

この2つの基本類型を説明する前に、まずここで言う「主観的」「客観的」とは何かについて少し説明を加える。

---

のがそれぞれ「最大スコープ(MS)」と「直接スコープ(IS)」に読み替えられる。つまり、「ラネカーの枠組みでは、<舞台上>に相当する部分がさらに<舞台上の照明されている部分>(onstage)と<舞台上の照明されていない部分>(＜舞台の袖＞offstage)とに分けて視覚化されるという構図になっている」（池上 2011a:54）。「直接スコープ」（つまり「オン・ステージ」領域、図 3-10 では、破線の楕円で示している領域）に入る事態の部分は明示的に言語化されることになる。

<sup>10</sup> 「オフ・ステージ」については、注9を参照されたい。

<sup>11</sup> 「オン・ステージ」については、注9を参照されたい。

<sup>12</sup> Langacker のステージ・モデルの構図に関する論述は池上(2005b, 2011a)、山梨(2011)を参考にした。用語は池上(2005b, 2011a)に従うものとする。

「言語学で扱う『意味』とは、言語化の対象となる客観的な状況に内在するというようなものではなく、<話す主体>(speaking subject) としての人間がその認知能力に基づいて事をどう把握し、どう<意味づけ>(construal)するかによって生み出されるものである」(池上 2004:18)。こういう基本的な認識に立つことによって、すべての言語形式には発話者の「主観性」が含まれることになり、われわれが普段使う言葉や言語形式すべて「主観的」なものであると思われる。木村(2014)の言葉を借りて言えば、「文とは本来事実そのものを語るものではなく、事実に対する話し手の捉え方を語るもの」(同論文:99)、「文が語るのは、話し手が客観的現実に対するカテゴリー化を通して心のなかで組み立った主観的現実であって、客観的現実そのものではない」(同論文:102)。

しかし、池上(2004, 2005a, 2005b, 2006, 2008, 2011a, 2011b) が提唱している「主観的把握」の「主観的」という用語は、上述したレベルでの「主観的」ではない。この点について、池上(2004)は次のように述べている。

「<主観性>の概念を有意義に論じるためには、事態把握を含めた発話のこれとは別の側面に注目してみる必要がある。つまり、事態把握という営みそのものは言語主体の認知的な営みであるという意味ではすべて<主観的>な性格のものであろうが、生成され、選択の対象となる個々の事態把握は問題の事態をどのような仕方把握するかに関して相互に異なっているわけで、そのレベルでの異同に<主観的>、<客観的>という特徴づけを与えることが出来ないか、<主観的>な事態把握の仕方というものをそうでない事態把握の仕方と対比して規定することが出来ないか、ということである。」

(池上 2004:18)<sup>13</sup>

上述のように、池上(2004, 2005a, 2005b, 2006, 2008, 2011a, 2011b) が提唱している<主観的>、<客観的>は、客観的現実をどのような形で主観的現実として組み立てるか、つまり言語主体が言語化する際に、言語化の対象である客体(事態)とどのように関わっているかによって規定された概念である。この2つの類型の特徴について、池上(2011a)は次のように述べている。

「<主観的把握>：話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする。

---

<sup>13</sup> 下線は筆者による。

<客観的把握>：話者は問題の事態の外にあって、傍聴者ないし観察者として客観的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は(自分の分身をその事態の中に残したまま)自らはその事態から抜け出し、事態の外から、傍聴者ないし観察者として客観的に(自己の分身を含む)事態を把握する。」

(池上 2011a:52)<sup>14</sup>

認知主体(言語主体でもある)としての「話者」が客体としての「事態」と直接関わり合うとは、話者が事態を体験的に、あるいは、自らの身体を介して感覚レベルで関わり合うことと理解する。この場合、認知主体が自らの身体性をもって直接認知対象である事態と関わり合うという意味で、客体/客観よりも主体/主観の存在が焦点化される関わり方であるから、「主観的」という特徴づけは決して不当ではないであろう(池上 2011a:52-53)。

一方、認知主体である話者が認知対象である事態(客体)とは隔離された形で(つまり、話者が事態の外にある)の関わり合いでは、焦点化されるのは主体によって関係づけられる客体そのものの方であり、(自然科学において典型的に求められる構図であることも想起しつつ)「客観的」と特徴づけることができよう(池上 2011a:53)。

例えば、次の『雪国』の冒頭文の例を参照されたい。

(14)a 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。(川端康成『雪国』)

b The train came out of the long tunnel into the snow country. (E.Seidensticker 訳)

日本語の原文では、語り手は汽車に乗って移動している主人公に視点を合わせ、汽車の移動に伴って、汽車の中から見える外の景色がどのように変化していくかを体験的に語っている。換言すれば、語り手はあたかも汽車に乗り、汽車の移動に伴い、自分が見えた外の景色がどのように変化したかを語っているようである(図 3-11 日を参照されたい)。

一方、E.Seidensticker 氏による英語訳では、“came” という語が暗示しているように、

<sup>14</sup> 池上(2004, 2005a, 2005b, 2006, 2008, 2011a, 2011b) が提唱している<主観的把握>・<客観的把握>と類似し、水谷(1985)は、「事実志向型」と「立場志向型」という概念を提唱している。例えば、「なんびとかが財布をぬすんだという事実を、そのまま事実として Someone took my wallet. と表現する文は、いわば事実志向の傾向を示すものである。(中略)、これに対して、『財布をとられた』という文は、『わたしは』が表面には出ていないが、話者の立場から被害を捉えている点で、立場志向型の文である」(水谷 1985:23-24)。また、澤田(1993)は「内的描写」と「外的描写」という概念を提唱している。「『描写の方向性』は『内的描写』(Internal Description)と『外的描写』(External Description)に大別される。『内的描写』とは、あるできごと(あるいは状態)を経験あるいは知覚する人物の側から、『内部的に』描写することであり、『外的描写』とは、あるできごと(あるいは状態)を観察者の側に立って、『外部的に』描写することである」(澤田 1993:285)と述べている。研究者によって、使われている用語が異なるが、「立場志向型」、「内的描写」は「主観的把握」と同類で、「事実志向型」、「外的描写」は「客観的把握」と同類であると思われる。



語り手が汽車に乗っているのではなく、鉄道の近くに立っているかのように、トンネルから出てきた汽車に視点を合わせ、汽車がどのように移動しているかを語っている。(図 3-11 英を参照されたい)。

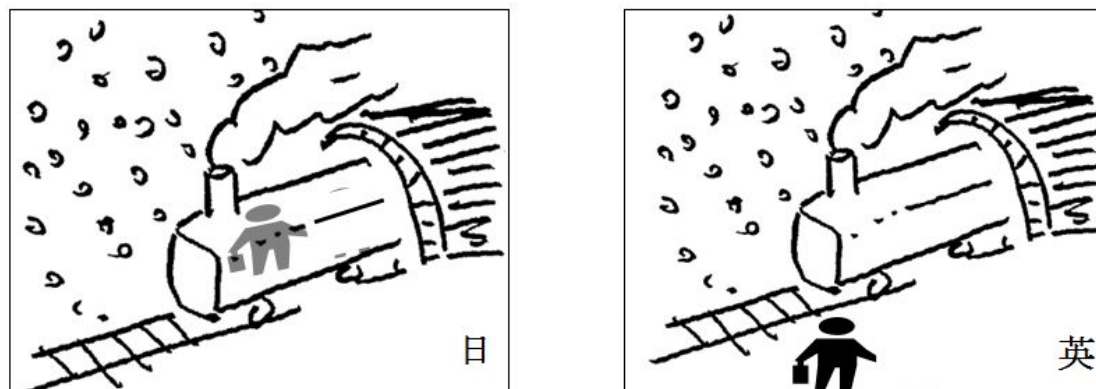


図 3-11 『雪国』の冒頭文のイメージ(吉田 2014:54 を参考にした)

上記のように、同じ事態であっても、<主観的把握>により言語化された日本語の原文と<客観的把握>により言語化された英語訳が異なる雰囲気醸し出している。三人称小説の『雪国』では、本来英語訳のように、作者が作品世界の外に身を置いて、外から汽車が国境の長いトンネルを抜けて、雪国に入ったという過程を客観的に語るべきであるが、川端氏は自分の身を作品世界の中に置き、「『雪国』の景色や出来事、人物の外見や内面—そのすべてを自分の感覚の中でとらえ、それらを感覚的にコーティングしながら語ろうしている」(李 2005:54)。「叙事的な意味での物語性は、イメージの流れの中に融け込んでおり、時間的連続性と客観的因果関係は、知覚する登場人物の「抒情的視点」という内的統一にとって代わられる」(アントニー・V・リーマン 1985:43-44)<sup>15</sup>。

### 3.2.1.3 IモードとDモード

中村(2004)は、言語が深く主観性に根ざす存在であると指摘し、主観性には①私たちの身体を使って対象と直接インタラクトしながら、②私たちのもっている一般的な認知能力や認知プロセスを通して、③様々な認知像を形成し経験している、という3つの主要な側面があり、この3つの側面が統合して1つの十全な認知モデルを形成すると述べている。例えば「太陽は東から昇る」というような現象は、他の現象と同様に、客観的な事態と錯覚しがちだが、実のところは上の主観性の3側面から成る認知モデルを通して得られる認

<sup>15</sup> 傍点は筆者による。

知像に他ならない。つまり、不動の太陽と自転する地球上の私たちとの間の相対的な位置変化(対象とのインタラクション)がまずあって、私たちの視覚や視線の上昇などの認知能力・認知プロセスを通して、「太陽が昇っている」という認知像が得られるわけである(中村2004:3-4、一部抜粋)。このような3つの主観性の側面からなる認知モデルを、中村(2004)は図3-12のように図示している。

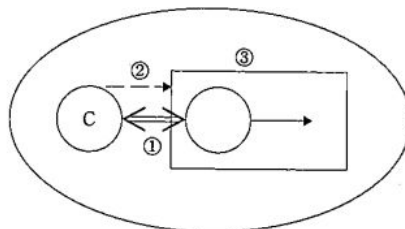


図3-12 主観性に根ざす認知モデル(中村2004:4より)

この構図について、中村(2004)は次のように説明している。

「この図で、まず外側の楕円は認知の生じる場、すなわち認知の場である。Cを含む円(Cは **Concepuarizer** : 認知主体) と右の円の間にある両向きの二重線矢印①は私たち認知主体と対象(例えば太陽)との直接的なインタラクションを表している。自転する地球上で移動する認知主体と不動の太陽との相対的な位置的インタラクションもこの両向きの矢印で示される。Cの円から右の四角に向かう破線矢印②は、対象を捉えようとする認知主体の視覚や視線上昇のような認知能力・認知プロセスである。そしてその認知プロセスの先にある四角形③が、インタラクションや認知能力・認知プロセスを通して得られる認知像である。認知像はこのように、対象とのインタラクションによって得られるのだが、対象の方からすると、認知像は対象が私たちに見せてくれるもの、対象が私たちに与えてくれる像や性質(アフォーダンス)ということにもなる。私たちは、私たちの経験する外界の事物を客観的存在と見なしがちであるけれども、実のところは、見え(認知像)でしかないということである。」

中村(2004:4)

上記のように、中村(2004)によると、私たちの認識が本来、状況密着型であり、対象との直接的なインタラクションを通して得られるのである。この状況密着型の認知形態は、認知のインタラクション・モード(**Interactional mode of cognition** : Iモード)と呼ばれている。

ところで、われわれにはこのように自分と対象とのインタラクションを前提として対象を捉えていることを忘れ、その主観的な認知像や印象をあたかも客観であるかのように思い込む傾向がある。こうした認知主体が脱主体化(**desubjectification**)によって、インタラクティブな認知の場の外に出て、あたかも外から客観的に眺めるような視点で、認知像を築

くという認知モデルは、外置の認知モード(Displaced mode of cognition : Dモード)と呼ばれている(図 3-13 を参照されたい)。認知主体 C が脱主体化によって認知の場の外に出るため、①の認知主体と対象の直接的なインタラクションは存在しないかのようである。また、②の認知プロセスもあたかも客観的な観察の目のようである。③の見え(認知像)としての事態は、認知主体から独立して存在する客観のように見えることになる。Dモードはいわば幻想の認知モードである。したがって、私たちが客観と思っている事物は、この認知モードで捉えられるのだから、その存在も厳密に言えば幻想ということである(中村 2004:36-38、一部抜粋)。

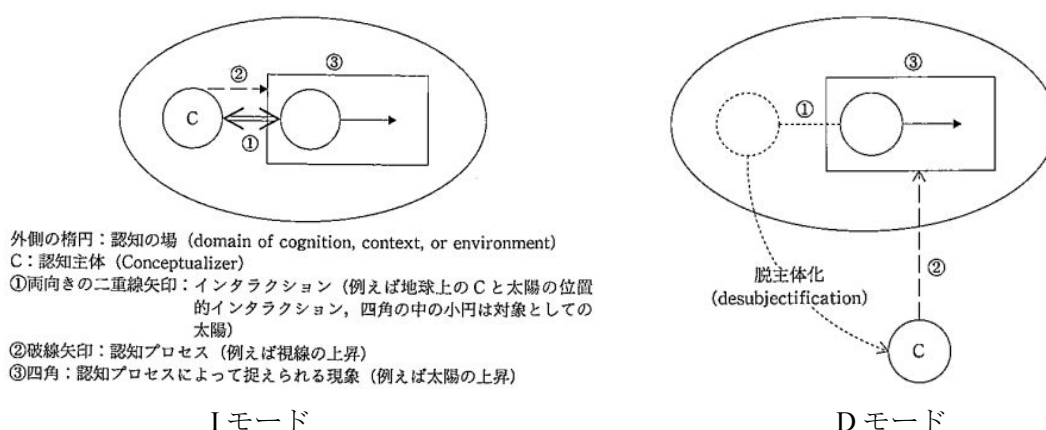


図 3-13 IモードとDモードの構図モデル(中村 2004:36-37 より)

表 3-1 に示すように、IモードとDモードは様々な言語現象に反映しており、「日本語に特徴的な言語現象にはIモードが反映している場合が多く、英語に特徴的な言語現象にはDモードが反映している場合が多い」(中村 2004:41)。

	Iモード	Dモード
a. 1人称代名詞	多様	一定
b. 主観述語	あり	なし
c. 擬声語・擬態語	多い	少ない
d. 直接, 間接話法	ほぼ直接話法のみ	間接話法も発達
e. 主体移動表現	通行可能経路のみ	通行不可能経路も可
f. 過去時物語中の現在時制	多い (e.g. 「る」形)	まれ
g. 間接受身	あり	なし
h. 与格か間接目的語か	与格 (利害の与格)	間接目的語 (受け手)
i. 題目か主語か	題目優先	主語優先
j. R/T か tr/lm か	R/T	tr/lm
k. 非人称構文	あり	なし
l. 代名詞省略	多い	まれ
m. 終り志向性	なし	あり
n. アスペクト (進行形・「ている」)	始まり志向	終り志向
o. 動詞 vs. 衛星枠付け	動詞枠付け	衛星枠付け
p. (英語の) 中間構文	直接経験表現	特性記述表現

表 3-1 IモードとDモードの言語現象での現れ(中村 2004:41 より)

### 3.2.1.4 当事者現場立脚型と傍観者俯瞰型

「空間認知」に関して、木村(1996, 2014)は、視点をめぐる認知的現象は様々な形で言語化という行為に関わると指摘し、空間位置を示す際に、視点の取り方が異なれば、言語化した表現形式も異なることが少なからず見られると述べている。例えば、日本語では「左・右・前・後」と言うか、「東・南・西・北」と言うかの違いがその1つの例である(木村 2014:102-108)。

(15) 駐車場は市民広場の東側にあります。(木村 2014:103)

(16) トイレは非常口の右側にあります。(木村 2014:103)

「東・南・西・北」は絶対方位を表す空間詞である。(15)では、話者が絶対方位を表す「東」を用いて、「市民広場」を参照点にして、「駐車場」の位置を述べている。話者があたかも傍観者が眼下の風景を俯瞰するかのような視点で、『東・南・西・北』という絶対座標に照らし、参照点(=市民広場)と目標(=駐車場)のみの位置関係を捉えている。このような視点の取り方は「傍観者俯瞰型の視点」と呼ばれる(木村 2014:103)。

一方、「左・右・前・後」は相対方位を表す空間詞である。図3-14に示したように、「トイレは非常口の右側にあります」と言う場合、〈トイレ〉は、〈非常口〉を参照点として、〈私〉から見てその右にあるということを意味する。この場合、話者は自らが観察者兼基準点として現場に立脚し、あるいは、その場にいるかのように、参照点(非常口)と目標(トイレ)と観察者(話者自身)の三者の関係から決まる話者基準の相対的な方位概念をもって「トイレ」の位置を捉えている。こうした話者が言語化する対象となる現場に立脚し、当事者としての自らの視点を通して、現場に存在する事物の関係づけを行うという視点のとり方は「当事者現場立脚型の視点」と呼ばれる(木村 2014:103)。

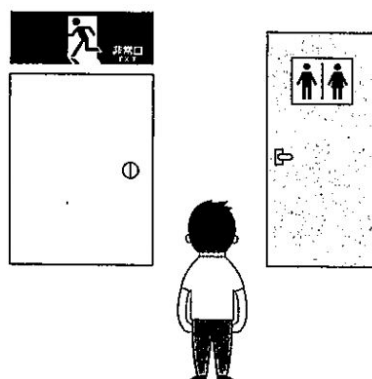


図3-14 当事者現場立脚型の視点(木村 2014:103 より)

同じ空間位置であっても、言語によって、その言語を使用する話者の慣習的な視点の取り方が異なることがある。



図 3-15 周先生は A?B? (木村 1996:230 より)

例えば、木村(1996)では、毛沢東の石像を挟んで、二人の男性が立っている写真(図 3-15 を参照されたい)を見て、「石像の右に立っているのが周先生です。(站在塑像右边的是周老师)」と聞いた場合、日本語話者は「当事者現場立脚型」で、自ら参照点となり、自分にとっての右は A の人物であるため、A が周先生だと理解する人が多いが、中国語話者は「傍観者俯瞰型」で、石像を参照点とし、石像(にとって)の右は B の人物であるため、B が周先生だと理解する人が多いことが指摘されている。

また、自らが実際にその場に居合わせる空間だけではなく、談話の中で言及された空間位置についても、言語によって視点の取り方には興味深い差異が見られる。

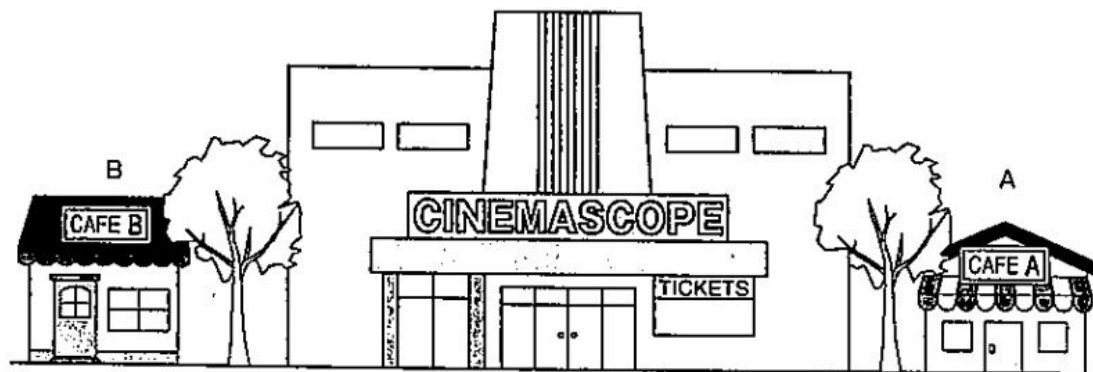


図 3-16 映画館の左隣の喫茶店は? (木村 2014:107 より)

例えば、友人同士の二人が翌日の待ち合わせ場所について話す場面で、「明日映画館の左隣にある喫茶店で会いましょう」と聞くと、日本語話者は待ち合わせる店の位置を図 3-16 の B の位置(つまり、自分が映画館の前に立っている情景を想定し、自らが参照点に

なり、自分にとっての左は B である)と理解する人が多い。一方、中国語話者は A の位置(つまり、映画館を参照点として、映画館(にとって)の左は A である)と理解する人が多い(方 1993、木村 2014)<sup>16</sup>。

このように、日本語話者の多くは、自らが実際にその場に居合わせる場合だけでなく、談話の中で言及された空間を想定し、あるいは、頭の中で思い描いた空間についても、あたかもその場にいるかのように当事者現場立脚型の視点を取り、話者基準で対象物の位置を語る傾向が強い。一方、中国語話者の多くは、実際にその場に居合わせる場合であっても、傍観俯瞰者のように、ある対象物を参照点にして、参照点基準で目標の対象物の位置を述べる傾向が強い(木村 2014)。

### 3.2.1.5 空間認知に関するまとめ

表 3-2 「空間認知」に関するまとめ

研究者	類型	I	II
		認知主体が事態の中に視座を据え、事態把握を行う	認知主体が事態の外に視座を据え、事態把握を行う
Langacker (1985, 1990a, 1990b, 1991, 2008)		オフ・ステージ	最適観察構図 オン・ステージ
水谷(1985)		立場志向型	事実志向型
澤田(1993)		内的描写	外的描写
木村(1996, 2014)		当事者現場立脚型	傍観者俯瞰型
池上 (2004, 2005a, 2005b, 2006, 2011a)		主観的把握	客観的把握
中村(2004)		I モード	D モード

表 3-2 にまとめたように、「空間認知」に関するこれまでの代表的な研究成果を概観した結果、研究者によって強調する側面が異なり、用いられる用語が異なるが、「空間認知」には、以下の 2 つの基本類型があると考えられる。

〈I〉: 認知主体である話者が言語化の対象となる事態・現場の中に視座を据え、経験者として事態を把握するタイプ。

<sup>16</sup> 方(1993)の調査によると、日本語話者の調査対象者 94 名の内 73 名(77.7%)が B と答えている。また、木村(2014)の調査によると、中国語話者の調査対象者 146 名の内 129 名(77.0%)が A と答えている。ちなみに、方(1987)の調査によると、フランス人は日本人と同様で、85.7%の調査対象者が自分を参照点として左・右を判断しているようである。

先行研究の言葉を借りて言えば、認知主体が舞台の裾(=「オフ・ステージ」領域)に視座を据え(つまり、「当事者現場立脚型」、「立場志向型」)、舞台の上で演じられている事態を、「Iモード」という認知モデルの下で、「主観的把握」を行い、「内的描写」する。

<II>:認知主体である話者が言語化の対象となる事態・現場の外に視座を据え、傍観者の視点から事態を把握するタイプ。

先行研究の言葉を借りて言えば、認知主体が舞台の外に視座を据え(つまり、「傍観者俯瞰型」、「事実志向型」)、舞台の上で演じられている事態を、「Dモード」という認知モデルの下で、「客観的把握」を行い、「外的描写」する。

改善要求を表出する際に、日本語話者と中国語話者はそれぞれどこに視座を据え、事態を把握しているのだろうか。そして、日本語と中国語のポライトネスおよび表現形式を丁寧化する方法の相違が、事態把握の仕方とどのように関わっているのだろうか。これらの課題に関しては、第5章で詳しく述べる。

### 3.2.2 事態把握における前景化・背景化

事態把握において、言語主体がどこに視座を据えて事態を把握しようとするのかという認知主体(=言語主体、話者)と認知対象(=出来事、事態)との空間的な位置づけ以外に、もう1つ重要なことは、言語主体が事態のどの部分に焦点を当て言語化を行うのかという「図」(つまり、焦点化される部分)と「地」(つまり、焦点化されず背景となる部分)の分化である。

#### 3.2.2.1 前景化・背景化とは

「外部世界はわれわれの前に、客観的な存在として直接的に立ち現れてくるわけではない。われわれが外部世界を知覚する場合、外部世界のある部分は背景化し、他の部分は前景化されて立ち現れる。換言するならば、外部世界は、何らかの形で、前景(foreground)と背景(background)に分かれてわれわれの前に出現する」(山梨 2009:15)。

知覚心理学では、外部世界を知覚する際の前景化された部分が図(figure)、背景化された部分が地(ground)と呼ばれる。この図と地の関係は、図3-17に示した「ルビンの壺」という絵によって理解される。

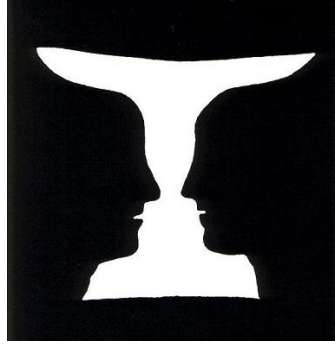


図 3-17 図・地の分化／反転の例<sup>17</sup>

この絵は、どの部分を背景化し(=背景となる)、どの部分を前景化する(=際立たせる、焦点化する)かによって、二通りの解釈が可能である。

1つは、黒い部分が背景となっており、白い部分が図(すなわち、前景化要素)として知覚される場合、この図は壺に見える。もう1つは、白い部分が背景となっており、黒い部分が図(すなわち、前景化要素)として知覚される場合、この図は向き合った二人の横顔に見える。

「ルビンの壺」の例と同様で、われわれが外部世界を知覚し言語表現で表出する際に、どの部分を背景化し、どの部分を前景化するかによって、言語化した表現形式が異なる。例として、(17)を参照されたい。

(17)a 太郎にボールが当たった。

b 太郎がボールに当たった。(辻 2013:192)

「変化を被るものは、そうでないものに比して、図として捉えやすい」(辻 2013:192)ため、普通(17a)のように、静止している「太郎」に向かって「ボール」が飛んできた場合、変化を被る「ボール」が前景的要素として位置づけられ、主格で表示される。しかし、ドッジボールをしている時のように、「ボール」との接触により、プレーヤーである「太郎」が変化を被るような解釈が強くなり、(17b)のように、「太郎」が前景的要素として位置づけられ、主格で表示される(辻 2013)。

前景化・背景化(図・地)という知覚心理の特性が言語現象として現れた場合、「トラジェ

<sup>17</sup> 絵は「google 画像」による。

[https://www.google.co.jp/search?q=%E3%83%AB%E3%83%93%E3%83%B3%E3%81%AE%E5%A3%BA&es\\_sm=93&tbm=isch&tbo=u&source=univ&sa=X&ei=atDNVNG6H6WzwmwXNwICABA&ved=0CCcQsAQ&biw=1438&bih=799#imgdii=\\_&imgsrc=kTYsdlw5mFuoIM%253A%3BOeYcZQZxpxCF4M%3Bhttp%253A%252F%252Fkoideyoko.com%252Fwp-content%252Fuploads%252F2015%252F01%252Frubin.jpg%3Bhttp%253A%252F%252Fkoideyoko.com%252Farchives%252F3728%3B389%3B420](https://www.google.co.jp/search?q=%E3%83%AB%E3%83%93%E3%83%B3%E3%81%AE%E5%A3%BA&es_sm=93&tbm=isch&tbo=u&source=univ&sa=X&ei=atDNVNG6H6WzwmwXNwICABA&ved=0CCcQsAQ&biw=1438&bih=799#imgdii=_&imgsrc=kTYsdlw5mFuoIM%253A%3BOeYcZQZxpxCF4M%3Bhttp%253A%252F%252Fkoideyoko.com%252Fwp-content%252Fuploads%252F2015%252F01%252Frubin.jpg%3Bhttp%253A%252F%252Fkoideyoko.com%252Farchives%252F3728%3B389%3B420) (2015年2月1日閲覧)



クター」と「ランドマーク」との相対的關係として言及されることがある。3.2.1.1節で Langacker のステージ・モデルを説明する際にすでに言及したように、「ある特定の認知領域内の構造は、その際立ちの違いによって、背景的要素として機能するベースと、焦点化され、際立ちの大きいプロファイルと呼ばれる部分に分かれる。このプロファイルが、ある事物と他の事物の間に成立する関係を表している場合、双方ともプロファイルされていても、その間にはさらなる際立ちの違いがある。このような、関係を表すプロファイルにおいて、際立ちの最も大きい部分構造を『トラジェクター』と呼び、それ以外の際立ちの大きい部分構造を『ランドマーク』と呼ぶ」(辻 2013:255)。

つまり、われわれが外部世界を知覚し表出した言語表現には、焦点化された前景的要素(つまり、「図」)として機能する部分と背景化された背景的要素(つまり、「地」)として機能する部分がある。場合によって、背景化要素として機能する部分が言語化されず、表現形式に現れないこともある。

### 3.2.2.2 談話レベルにおける背景化のプロセス

(18)a だったら…。

b (そうしたいん/そうであるの)だったら…。

(19)a すれば！

b すれば、(いい)！

(山梨 2000:81)

山梨(2000)は、「背景化のプロセスは、いわゆる文法化のプロセスを誘発する要因としても重要な役割をになう」と指摘している。一見したところ、(18a)の「だったら」は、自律的な接続詞としての機能を担う談話標識として用法が確立しているように見えるが、(18b)の例から分かるように、この種の表現の背後には、「そうしたいん/そうであるの」に対応する条件節の命題が背景化されている。また、「すれば！」は発話行為の観点からみた場合、この表現は、示唆、忠告、指示などの発話の力を伴う自律的な慣用表現と見なすことができるが、(19b)に示したように、このタイプの表現も、条件文の後件の命題(「いい」/「よい」など)が背景化のプロセスにもとづく文法化を経て確立した用法である、と述べている。

上記の例と同様に、改善要求発話の【終了部】に用いる「すみません」と“谢谢(ありが

とう)”などの表現は、一見したところ、謝意を表す慣用表現と見なすことができるが、話者がなんの理由もなく謝意を伝えることはあるはずがないため、「すみません」と“谢谢(ありがとう)”などの謝意を表す表現の背後には、何らかの認知メカニズムが背景化されていると思われる。

日中改善要求発話の【切り出し部】と【終了部】に用いる表現形式の背後には、どのような認知メカニズムが背景化されているだろうか。その認知メカニズムが日中両言語の配慮の示し方とどのように関わっているだろうか。これらの課題に関しては、第6章で詳しく述べる。

### 3.3 本論文で扱うデータ

本研究では、調査対象者を20代の大学生と大学院生に限定し、現状に不満や不快感を感じている話者が、その好ましくない状況を引き起こした当事者の聴者に改善を望む場合に、どのように伝えるかについて、自由記述型談話完成テスト (Discourse Completion Test: 以後 DCT と呼ぶ) を用いて調査を行った。

DCT 調査は、場면을提示した言語行動意識調査の1つである。相手とのやり取りの中で言語行動を遂行する自然談話の資料と異なり、話したい内容をひとまとまりの発話にして継続的に盛り込んでいる。もちろん実際の自然談話では、相手の反応に応じて、話者は必ずしもこのように話すという保証はないが、こうした言語行動は、実際の相互作用の場で相手の反応に応じて変更や修正を加えられる前の、話者の頭の中にある当該言語行動を遂行するにはこれこれのことを言うのが適切かつ必要だとか、こう展開しかるべきなど、言わば当該の言語行動の「遂行イメージ」を示すものである(熊谷 2000:97)。

本調査を実施する前に、親疎関係、上下関係、義務・権利関係、公的・私的場面によって、計15の場면을設定し、予備調査を行った。その際、調査対象者から「設問の数が多く、負担を感じる」「同じ場面状況で、親疎関係、上下関係の組み合わせによって4つの設問があり、実際の発話場面では、それぞれ違うかもしれないが、記入する時頭が混乱していて、ついに同じ答えを書いてしまった」などの意見があった。

本論文の目的は改善要求発話の言語表現の背後に働いている話者の認知レベルでの営みを究明することであるため、場面設定が複雑すぎると、調査対象者の本当の心的態度が見られない恐れがあると考え、予備調査の調査対象者の意見を受け入れ、本調査を行う際に、

敢えてシンプルな場面設定に調整した。本調査では、上下関係、義務・権利関係、性別、年齢、改善の見込みなどの要因を排除し、以下の3つの場面を設定した。

**<場面1> 隣に住んでいる親しくない同級生が騒音状況を起こした場面**

同じ大学に通っている同級生（日本人、同性、同じぐらいの年齢）が隣に住んでいます。最近、彼（彼女）はよく夜遅くまで友達とおしゃべりをしています。このような状況はもう一週間くらい続いていて、あなたはこの一週間あまりよく眠れませんでした。隣の人は会ったら挨拶するくらいで、それほど親しいわけではありません。今夜はもう12時を過ぎましたが、またおしゃべりの音が聞こえました。

**<場面2> 隣に住んでいる親しい友達が騒音状況を起こした場面**

同じ大学に通っている親しい友達（日本人、同性、同じぐらいの年齢）があなたの隣に住んでいます。最近、彼（彼女）はよく夜遅くまで友達とおしゃべりをしています。このような状況はもう一週間くらい続いていて、あなたはこの一週間、あまりよく眠れませんでした。今夜はもう12時を過ぎましたが、またおしゃべりの音が聞こえました。

**<場面3> 映画館で見知らぬ人が騒音状況を起こした場面**

あなたは映画館で映画を見えています。隣に座っている二人の見知らぬ若者（あなたと同性）がずっとおしゃべりをしています。しかも、時々大声を出したり、大笑いしたりしています。この映画はあなたの大好きな映画で、チケットを手に入れるのも難しいものでした。

調査は2012年の9月から12月にかけて、日本の茨城県にあるA大学と中国の河北省にあるB大学で行った。調査協力者は日本語母語話者(Japanese native speakers、以下JNS)20名(女性13名、男性7名)と中国語母語話者(Chinese native speakers、以下CNS)20名(女性10名、男性10名)である。JNSは日本語で書かれたDCT用紙に日本語で回答してもらった。CNSは中国語で書かれたDCT用紙(日本語版と同じ内容)に中国語で回答してもらった。

ある特定の場面に不満や不快感を感じた場合、「改善して欲しい」という意思を言葉で表明する場合もあれば、表情や目線、咳払い、ため息、ジェスチャーなどの非言語サイン

によって相手に伝える場合もあるだろう。また、表明しない、あるいは第三者を通して相手に伝えることも考えられる。

本調査では、該当場面においてどのような行為をとるかについて、①「何も言わずに我慢する」、②「言わないが、何らかのサインを出す」、③「言葉で伝える」、④「その他」、の4つの選択肢を設定し、調査対象者にその中から1つ選ぶように指示した。そして、選択肢③「言葉で伝える」を選んだ人だけに、具体的にどのように言うかについて、自由記述という形で記入してもらった(調査の詳細な内容は付録Ⅰ-1と付録Ⅰ-2を参照されたい)。

本論文の主たる目的は改善要求発話の表現形式を考察するため、収集したデータ(付録Ⅱを参照されたい)から言葉で伝える人のデータだけを抽出し、研究対象とする。有効データ数は以下のとおりである。

表 3-3 改善要求を言葉で表す人の実数と比率<sup>18</sup>

調査対象者	場面 1		場面 2		場面 3	
	実数	比率	実数	比率	実数	比率
JNS	12 人	60%	14 人	70%	9 人	45%
CNS	19 人	95%	16 人	80%	17 人	85%

<sup>18</sup> ここでの「比率」とは、選択肢③「言葉で伝える」を選んだ人の実数を調査対象者の総数(20人)で割ったものを%で示したものである。

## 第4章 事象構造の観点から見た日中改善要求発話のパターン

### 4.1 はじめに

第2章で述べたように、これまでの改善要求行為に関する研究は、社会言語学や談話研究の視点から発話ストラテジーの研究が中心となっており、「改善要求行為にはどのようなストラテジーや表現形式が使われているのか」、「各言語において、ストラテジーの使用傾向が場面状況によってどのように変わるのか」、「ストラテジーの連鎖パターン(出現順序)にはどのような特徴があるのか」「ストラテジーの選択に影響を及ぼす要因はどのようなものがあるのか」などの課題を検討することが主眼となっている。場面状況に応じて(日本語、中国語、英語、韓国語)話者がどのようなストラテジーや表現形式を多用しているかについて幅広く分析が行われており、改善要求行為の実態を明らかにした点では高く評価できる。しかし、言語の背後に存在する言語主体の認知能力に着眼し、改善要求発話がなぜそのようになっているかを明らかにした研究は、管見の限りでは見られない。

- (1) ちょっと悪いんだけど、夜もう少し静かにしてくれないかな<sup>1</sup>。 (JNS1-場面2)
- (2) 最近何かあるの？わいわいしてるみたいだけ。 (JNS17-場面2)
- (3) すみません。夜うるさくて、眠れないのですが… (JNS15-場面1)
- (4) 眠れなくて困ってるんで、もう少しトーンをおとして話してもらえると助かります。 (JNS14-場面1)

上記の例に示したように、「改善して欲しい」という意図を伝える際に、様々な発話の仕方が可能であり、(1)では改善行為をするよう直接要求、(2)では好ましくない状況を引き起こした相手の行為を指摘、(3)では相手の行為によって自分が不利益を受けたことを述べ、(4)では自分の利益が損なわれたことを述べた上で、改善要求を伝えている。

一見、規則性のないように見えるこれらの発話の仕方が、なぜ「改善して欲しい」という意図を聴者に伝えることができるのであろうか。改善要求発話の背後にはどのような伝達のメカニズムが働いているのであろうか。

本章では、これまで認知文法論で扱われてきた「因果連鎖(causal chain)」の分析方法を談話分析に導入し、改善要求行為を一種の因果連鎖とみなす。「連鎖のどの部分を切り出

<sup>1</sup> 特に断りのない場合、例文の下線は筆者による。以下同様。

して言語化するか」、「切り出した事象をどの順序で述べるか」、「連鎖に現れた事象以外に、どのようなものが言語化されるのか」を考察することによって、本論文の第一の目的である「日本語話者と中国語話者の改善要求発話のパターンには、どのような特徴が見られるのか」という課題を明らかにする。

## 4.2 改善要求行為の事象構造

### 4.2.1 改善要求行為における因果連鎖

改善要求行為とは、現状に不満や不快感を感じている話者が、その好ましくない状況を引き起こした当事者の聴者に何らかの改善を行うように依頼する行為である。

第3章で言及したように、現実世界での因果関係はきわめて入り組んでおり、1つの出来事にはいくつもの原因があり、因果関係が多方面に及んでいるが、人の認知プロセスでは、無数に張りめぐらされた因果関係の網の中から一筋の連鎖を取り出し、線状的な関係へと還元することで出来事が理解されている。つまり、われわれが経験する出来事は、ある一つの対象から発した『エネルギー』が別の対象に伝わり、それが順々に伝達されることで一連の出来事が生じるというモデルによる捉え方がされると考えられる。これは日常的な事象の捉え方についての理想認知モデルとも言われ、こうした一連の因果関係の連なりは「因果連鎖(causal chain)」（または「行為連鎖(action chain)」）と言う(大堀 2002:98-100 から一部抜粋)。

本論文で設定した騒音場面での改善要求行為には、図 4-1 に示したような一連の因果関係のある事象連鎖が考えられる。

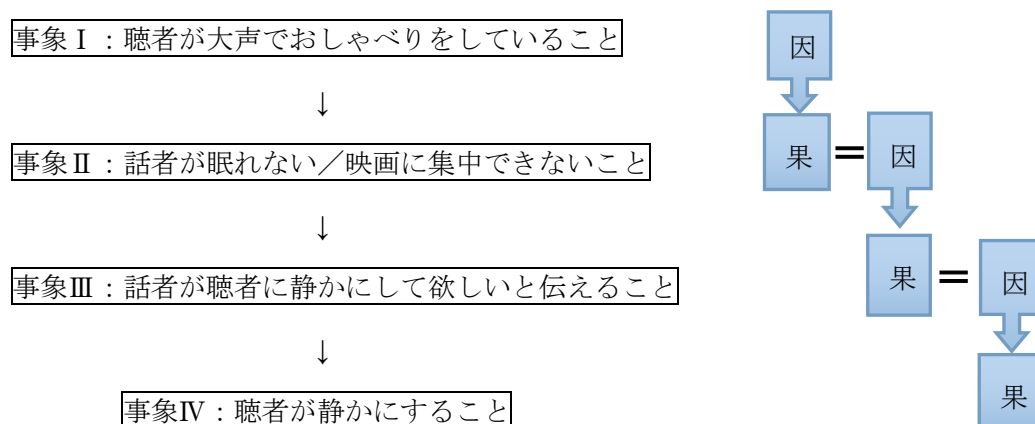


図 4-1 騒音場面における改善要求行為の因果連鎖

ここで言う「話者」とは、改善要求発話を表出する側のことを指し、「聴者」とは、改善要求発話を聞く側、すなわち、騒音を立てた隣人のことを指す。

聴者が大声でおしゃべりをする行為を行った結果、話者にとって好ましくない状況(=騒音状況、事象Ⅰ)が発生し、その影響を受け、話者の利益が損なわれ(=眠れない／映画に集中できないこと、事象Ⅱ)、話者が自分の利益を守るために、聴者に好ましくない状況を引き起こす行為を改善して欲しいと伝える(事象Ⅲ)。話者から改善して欲しいという要求が出されたため、その要求に応じて、聴者が改善行為をする(事象Ⅳ)<sup>2</sup>、という一連の事象連鎖である。

この一連の事象連鎖を Langacker(1990a, 1991, 2008)により提唱されているビリヤードボール・モデルに倣い示すと、図 4-2 のようになる。連鎖の節点「●」の上に参加者を、下に出来事(事態)を示している。リンク「→」はエネルギーの伝達(因果関係)を表している。

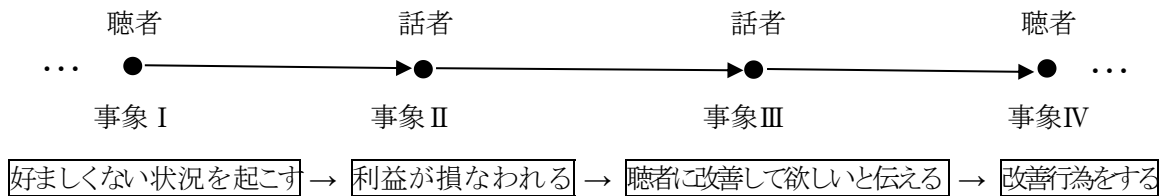


図 4-2 改善要求行為における事象の因果連鎖(図 3-7 の再掲)

事象Ⅳの「聴者が改善行為をすること」が改善要求発話の達成する目的である。言い換えれば、話者が改善要求行為を行う目的は、聴者にある特定の改善行為を行わせようとする事、すなわち、事象Ⅳを誘発させることである。

#### 4.2.2 因果連鎖の伸縮による事象構造の多様性

「われわれが認知するのは、単なるモノの世界だけではなく、物体が移動したり状態が変化したりするような、コトの世界も対象となる。こうした認知の世界での出来事」(大堀 2002:97)が、「事象構造」(event structure)と呼ばれる。

前節の図 4-2 に示したように、改善要求行為の因果連鎖において、ゴールの事象Ⅳに直接影響を及ぼすのが、事象Ⅲの「話者が聴者に静かにして欲しいと伝えること」である。そのため、(5)に示したように、改善要求行為を行う際に、事象Ⅲに言及しさえすれば、エ

<sup>2</sup> ここでは、仮に改善要求行為の目的が達成された状況を設定した。もちろん、聴者が話者の要求に応じず、事象Ⅳが発生しない場合もある。

エネルギーの伝達(因果関係)で、事象Ⅳが発生する可能性があり、改善要求発話の目的が達成できる。

- (5) ちょっと悪いんだけど、夜もう少し静かにしてくれないかな。 (JNS1-場面 2)

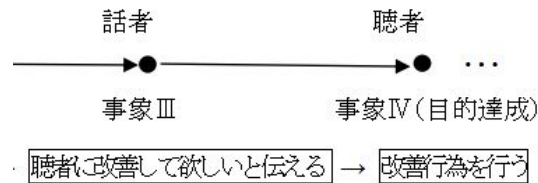


図 4-3 改善要求行為の事象構造 (I)<sup>3</sup>

また、(6)と(7)に示したように、ゴールの事象Ⅳに直接影響を及ぼす事象Ⅲだけではなく、その背景である事象Ⅱと事象Ⅰも合わせて言語化されることもある。

- (6) 眠れなくて困ってるんで、もう少しトーンをおとして話してもらえると助かります。 (JNS14-場面 1)

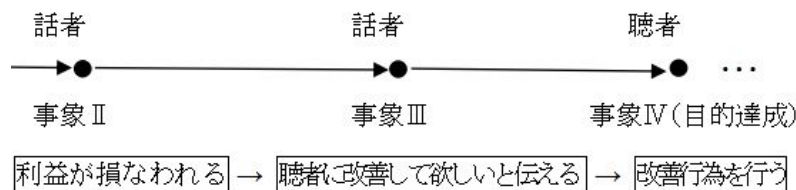


図 4-4 改善要求行為の事象構造 (II)

(6) では、話者の利益が損なわれたこと(「眠れなくて困ってるんで」と、話者が改善要求を表出すること(「もう少しトーンをおとして話してもらえると助かります」)が述べられている。図 4-4 に示したように、(5)に比べ、(6)の改善要求発話に反映されている事象構造では、因果関係を示すリンクが一個増えて、連鎖の始点にあるのが、事象Ⅱの話者の利益が損なわれたことである。

- (7) 実はそちらの話し声が壁伝えで聞こえていまして、そのせいで最近夜眠れないのです。申し訳ないのですが、夜遅く話すのはひかえてもらっても良いですか。

(JNS12-場面 1)

<sup>3</sup> この事象Ⅳは話者が改善要求行為を行う際に想定している目標である。つまり、話者が改善要求行為を行う目的は、聴者にある特定の改善行為を行わせようとする事、すなわち、事象Ⅳを誘発させることである(もちろん、実際の場面では、聴者が話者の要求に応じず、事象Ⅳが発生しない、つまり、改善要求発話の目的が達成できない場合もある)。改善要求発話には、事象Ⅳの部分が反映されない。





図 4-5 改善要求行為の事象構造(III)

(7)では、聴者の行為によって好ましくない状況が発生したこと(「そちらの話声が壁伝えで聞こえていまして」と、話者の利益が損なわれたこと(「最近夜眠れないのです」)、話者が改善要求を表出すること(「夜遅くまで話すのはひかえてもらっても良いですか」)が述べられている。図 4-5 に示したように、(7)の改善要求発話に反映されている事象構造では、因果関係を示すリンクがさらに一個増えて、連鎖の始点にあるのが、事象 I の聴者の行為によって好ましくない状況が発生したことである。

#### 4.2.3 因果連鎖の切片化による事象構造の多様性

「連鎖の切片化」(segmentation)とは、出来事を言語化する際に、可能な因果連鎖の中から一部を切り出して、プロフィール(すなわち、言語化)することである(大堀 2002:99)。この意味で、前節で考察した「因果連鎖の伸縮」も「連鎖の切片化」の一種としてみなされる。

改善要求行為を言語化する際に、可能な因果連鎖の中からどの部分を切り出して言語化するかという「切片化の選択」において、「連鎖の伸縮」以外に、以下のような選択の仕方が見られる。

(8) 夜声すごい聞こえてくるから、音量おとしてもらっていい? (JNS3-場面 2)

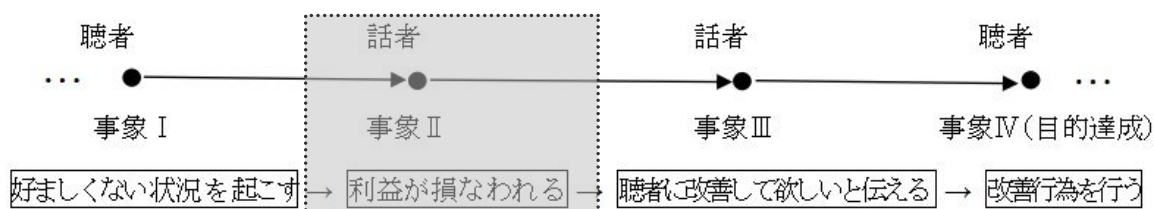


図 4-6 改善要求行為の事象構造(IV)

(8)では、聴者の行為によって好ましくない状況が発生したこと(「夜声すごい聞こえてくる」と、話者が改善要求を表出すること(「音量おとしてもらっていい」)が述べられて

いる。事象Ⅱの話者の利益が損なわれたことが捨象され、言語化されていない。図4-6は(8)の改善要求発話に反映されている事象構造を示したものである。捨象され、言語化されていない部分をグレーで示している。

(9) すみません。夜うるさくて、眠れないのですが… (JNS15-場面1)

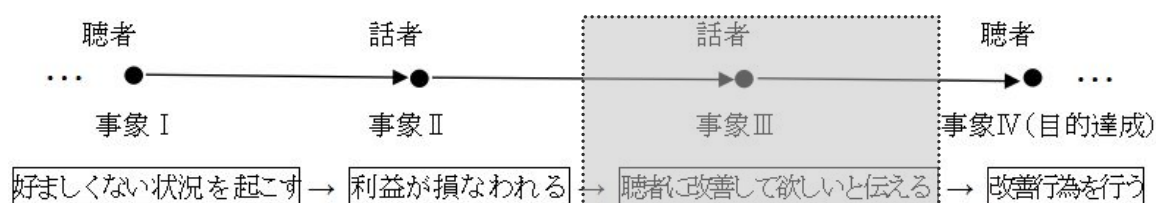


図4-7 改善要求行為の事象構造(V)

(9)では、聴者の行為によって好ましくない状況が発生したこと(「夜うるさくて」)と、話者の利益が損なわれたこと(「眠れないのですが…」)が述べられている。事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えることが捨象され、言語化されていない。図4-7は(9)の改善要求発話に反映されている事象構造を示したものである。捨象され、言語化されていない部分をグレーで示している。

(10) うるさいんですけど。 (JNS11-場面3)

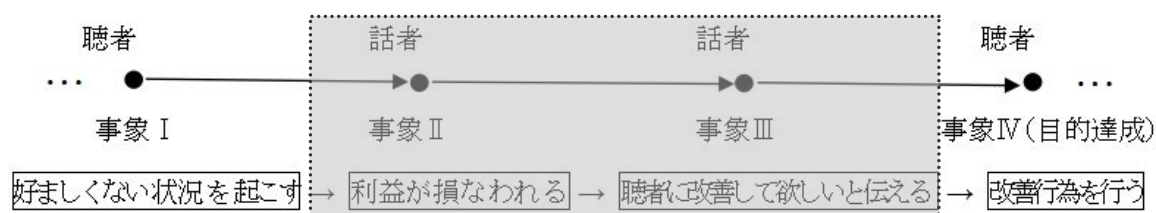


図4-8 改善要求行為の事象構造(VI)

(10)では、聴者の行為によって好ましくない状況が発生したこと(「うるさいんですけど」)が述べられている。事象Ⅱの話者の利益が損なわれたことと、事象Ⅲの話者が聴者に改善して欲しいと伝えることが捨象され、言語化されていない。図4-8は(10)の改善要求発話に反映されている事象構造を示したものである。捨象され、言語化されていない部分をグレーで示している。

以上のことから、改善要求行為には一見規則性のないように見える様々な発話の仕方が

見られるが、その背後には、以下のような共通のメカニズムが働いていることが明らかとなった。

改善要求行為は、**事象Ⅰ：聴者が好ましくない状況を起こしたこと** → **事象Ⅱ：話者の利益が損なわれたこと** → **事象Ⅲ：話者が聴者に改善して欲しいと伝えること** → **事象Ⅳ：聴者が改善行為をすること**、という一連の因果関係のある事象連鎖とみなされる。言語主体が改善要求発話を表出する際に、この一連の事象連鎖の中から限られた部分をプロファイルし、言語化を行う。連鎖の伸縮や連鎖の中の一部を捨象するなど、因果連鎖の切片化の仕方によって、改善要求行為の事象構造(すなわち、認知の世界での出来事)が多様化しているため、事象構造に基づいて言語化した改善要求発話にも多様化が見られ、様々な発話の仕方がされているのである<sup>4</sup>。

#### 4.2.4 事象構造と発話意図の明示化の度合いとの関わり

4.2.2節と4.2.3節で論述したように、連鎖の伸縮や連鎖の中の一部を捨象するなど、因果連鎖の切片化の仕方によって、改善要求行為の事象構造には様々な興味深い仕組みが備わっている。本節では、S&W(1986, 1995)の関連性理論を援用し、改善要求行為の事象構造と発話意図の明示化の度合いとの関わりについて検討する。

S&W(1986, 1995)の関連性理論では、「人間の認知過程は、可能な限り最小の労力で可能な限り最大の認知効果を達成するような仕組みになっている。これを達成するために各個人は入手可能な最も関連性のあると思われる情報に注意を集中する(内田他 1999: v から一部抜粋)」と指摘し、関連性の程度を査定する際の考慮要因の1つが文脈効果(つまり、文脈含意ないし発話意図)を得るのに必要な処理労力<sup>5</sup>で、処理労力と関連性は反比例の関係であり、他の条件が同じであれば処理労力が大きいほど関連性が低くなると述べている。

発話意図ないし文脈含意を読み取るための処理労力をどのように算定するかについて、はっきりした計算式を挙げることはできないが、言語行動の背後に働いている因果連鎖の長さ(すなわち、因果関係を示すリンクの数)が処理労力を算定する際の考慮要因の1つではないかと思われる。

<sup>4</sup> なお、同一事象構造であっても、事象の述べ方と述べられる順序によって、発話の仕方が異なるように見えることがある。事象の述べ方に関しては、第5章で事象Ⅲを代表に詳しく検討する。事象の述べられる順序に関しては、4.4節で触れる。

<sup>5</sup> 処理労力(processing effort)：すべての生物的過程(biological process)と同様、ある物事から別の物事を連想する(つまり、関連付ける)には、ある一定の労力、即ち、ある一定のエネルギー消費が伴うことである(内田他(1999)を参考にした)。

例えば、日本語には「風が吹けば桶屋が儲かる」ということわざがある。「風が吹くこと」と「桶屋が儲かること」が、一見すると全く関係がないと思われる物事であるが、その裏には、「風が吹くと、ほこりが舞い上がって目にはいり、目がつぶれる人が大勢出る。その人たちが三味線を弾いて門付けをするので、三味線がたくさん必要になる。そこで三味線の胴に張るために猫の皮が大量に必要となる。そのため猫を取りつくしてしまって鼠がはびこる。鼠が我がもの顔に振る舞って食物をいれてある桶をかじる。だから桶屋が繁盛して儲かることになる<sup>6</sup>」という一連の因果関係の連なり(すなわち、因果連鎖)が隠れている。この一連の因果関係を示すと、次のようになる。

大風で土ぼこりが立つ → 土ぼこりが目に入って、盲人が増える → 盲人は三味線を買う → 三味線に使う猫皮が必要になり、ネコが殺される → ネコが減ればネズミが増える → ネズミは桶をかじる → 桶の需要が増える → 桶屋が儲かる

「桶の需要が増えること」から発したエネルギーが直接「桶屋が儲かること」に伝わるのが可能であるに対して、「大風で土ぼこりが立つこと」から発したエネルギーが、「桶屋が儲かること」に伝わるまでには、土ぼこりが目に入って、盲人が増える → 盲人は三味線を買う → 三味線に使う猫皮が必要になり、ネコが殺される → ネコが減ればネズミが増える → ネズミは桶をかじる → 桶の需要が増える という一連の事象連鎖を経る必要がある。そのため、「桶の需要が増えること」に比べ、「大風で土ぼこりが立つこと」から「桶屋が儲かること」を連想するのにかかる処理労力が大きいと考えられる。

「風が吹けば桶屋が儲かる」の例と同様に、因果連鎖の長さと同様に文脈効果(つまり、文脈含意ないし発話意図)を得るのに必要な処理労力の大きさとの関わりは、改善要求行為にも見られる。

前文で述べたように、改善要求行為は、事象Ⅰ:聴者が好ましくない状況を起こしたこと → 事象Ⅱ:話者の利益が損なわれたこと → 事象Ⅲ:話者が聴者に改善して欲しいと伝えること → 事象Ⅳ:聴者が改善行為をすること、という一連の因果関係のある事象連鎖(すなわち、因果連鎖)とみなされる。話者が改善要求行為を行う目的は、聴者にある特定の改善行為を行わせようとする、すなわち、事象Ⅳを誘発させることである。

この一連の事象連鎖の中で、ゴールの事象Ⅳに直接影響を及ぼすのが、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」である。そのため、事象Ⅲから事象Ⅳを連想する

<sup>6</sup> 『故事ことわざ・慣用句辞典 第二版』より、三省堂, 2010。

のにかかる処理労力(即ち、関連性付けの処理労力)が最も小さいと考えられる。

(11) ちょっと悪いんだけど、夜もう少し静かにしてくれないかな。【事象Ⅲ】 (=5)

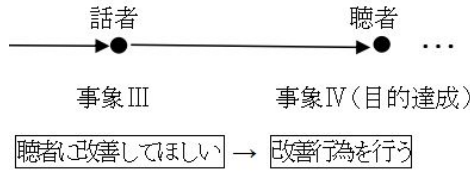


図 4-3 の再掲

(11)のように事象Ⅲを言語化した場合、話者の発話意図が明示化されているため、聴者がそれを理解するには推測する必要がなく、かかる処理労力が小さい。事象Ⅲを言語化した発話例は、他には以下のような発話パターンがある。

(12) 眠れなくて困ってるんで、もう少しトーンをおとして話してもらえると助かります。【事象Ⅲ】 (=6)

(13) 実はそちらの話し声が壁伝えで聞こえていまして、そのせいで最近夜眠れないのです。申し訳ないのですが、夜遅く話すのはひかえてもらっても良いですか。【事象Ⅲ】 (=7)

(14) 夜声すごい聞こえてくるから、音量おとしてもらっていい。【事象Ⅲ】 (=8)

これらの例に反映されている改善要求行為の事象構造がそれぞれ異なるが(図 4-3～図 4-6 を参照されたい)、ゴールの事象Ⅳに直接影響を及ぼす事象Ⅲが言語化されており、話者の発話意図が明示化されている点では共通している。

(15) すみません。夜うるさくて、眠れないのですが… 【事象Ⅰ + 事象Ⅱ】 (=9)



図 4-7 の再掲

(15)のように事象Ⅰと事象Ⅱを言語化した場合、因果関係の伝達の中で、事象Ⅱは事象

Ⅲを経由して、ゴールの事象Ⅳに影響を及ぼすため、話者の発話意図を読み取るには、聴者が言語化されていない事象Ⅲの部分を推測する必要がある。言い換えれば、聴者が「夜うるさくて、眠れないのですが…」という情報を受け取った際に、話者の発話意図を読み取るには、事象Ⅲの「話者が静かにしてほしいと思っていること」を推測する必要がある。そのため、(11) (12) (13) (14)に比べ、(15)は発話意図を読み取るための処理労力が大きくなり、発話意図の明示化される程度が低いと考えられる。

(16) 最近何かあるの？わいわいしてるみたいけど。【事象Ⅰ】 (=10)

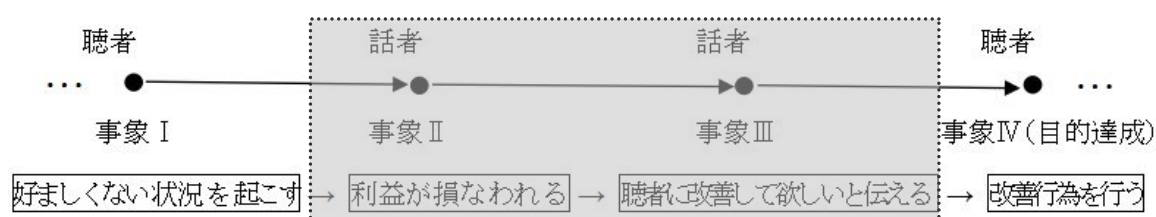


図 4-8 の再掲

(16)のように事象Ⅰだけを言語化した場合、因果関係の伝達の中で、事象Ⅰは事象Ⅱと事象Ⅲを経由して、事象Ⅳに影響を及ぼすため、「改善行為を行って欲しい」という話者の発話意図を読み取るには、聴者が言語化されていない事象Ⅱと事象Ⅲの部分を推測する必要がある。(15)に比べ、(16)では推測する部分(図 4-8 に示した陰影部分)がさらに増えたため、発話意図の読み取りにかかる処理労力が大きくなると考えられる。

以上のことから、事象構造によって、改善要求発話の発話意図の読み取りに必要な処理労力の量が異なり、発話意図の明示化の度合いが異なることが分かる。ここで、仮にゴール(すなわち、目的達成)の事象Ⅳに直接影響を及ぼす事象Ⅲが言語化されるかどうかで、改善要求発話の意図明示化の度合いを「高」と「低」の2組に分け、「発話意図の明示化の度合い」、「言語化される事象」、「事象構造」の三者の関係をまとめると、次の表 4-1 のようになる。

表 4-1 改善要求行為における事象構造と発話意図の明示化の度合いとの関わり

発話意図の明示化の度合い	言語化される事象	事象構造
高	事象Ⅲ	図 4-3 を参照されたい
	事象Ⅱ+事象Ⅲ	図 4-4 を参照されたい
	事象Ⅰ+事象Ⅱ+事象Ⅲ	図 4-5 を参照されたい
	事象Ⅰ+事象Ⅲ	図 4-6 を参照されたい
低	事象Ⅰ+事象Ⅱ	図 4-7 を参照されたい
	事象Ⅰ	図 4-8 を参照されたい

話者が改善要求行為を行う目的は、聴者にある特定の改善行為を行わせようとする事、すなわち、事象Ⅳを誘発させることである。改善要求行為と考えられる一連の事象連鎖の中で、ゴールの事象Ⅳに直接影響を及ぼすのが、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しい」と伝えることである。

事象Ⅲ、または事象Ⅲが他の事象と合わせて言語化された場合、話者の発話意図が改善要求発話の表現形式に明示化される(発話意図の明示化の度合いが高い)。一方、事象Ⅲが言語化されず、事象Ⅰと事象Ⅱ、または事象Ⅰだけが言語化された場合、話者の発話意図が改善要求発話の表現形式に明示化されていないため、話者の発話意図を読み取るために、聴者が言語化されていない事象Ⅲの部分(つまり、話者が聴者に改善して欲しいと思うこと)を推測する必要がある(発話意図の明示化の度合いが低い)。

### 4.3 事象構造の観点から見た日中改善要求発話の特徴

4.2 節の考察から、改善要求行為は、事象Ⅰ:聴者が好ましくない状況を起こしたこと → 事象Ⅱ:話者の利益が損なわれたこと → 事象Ⅲ:話者が聴者に改善して欲しいと伝えること → 事象Ⅳ:聴者が改善行為をすること、という一連の因果関係のある事象連鎖とみなされる。言語主体が改善要求を表出する際に、この一連の事象連鎖の中から限られた部分をプロフィールし、言語化を行う。連鎖の伸縮や連鎖の中の一部を捨象するなど、因果連鎖の切片化の仕方によって、改善要求行為の事象構造が多様化しているため、事象構造に基づいて言語化した改善要求発話も多様化しており、様々な発話の仕方が見られるという結果を得た。改善要求発話に様々な発話の仕方が見られるが、日本語話者と中国語話者はそれぞれどの発話パターンを好んで多用しているのだろうか。本節では、DCT 調査によ

り収集した日中改善要求発話の事象構造を分析し、連鎖の切片化の分析から日中改善要求発話の特徴を考察する。

なお、本論文で言う「発話パターン」とは、言語主体が改善要求発話を表出する際に、改善要求行為と考えられる一連の(因果関係のある)事象連鎖のどの部分を切り出して、言語化するか、という「連鎖の切片化のパターン」(すなわち、事象構造)のことである。

### 4.3.1 日本語母語話者の発話パターン

#### 4.3.1.1 場面1における日本語母語話者の発話パターン

事象構造(I) : 【事象Ⅲ】 5例

例 : すみません、 <u>ちょっと静かにしてもらってもいいですか。</u>	(JNS2)
事象Ⅲ	

事象構造(II) : 【事象Ⅱ+事象Ⅲ】 1例

例 : <u>眠れなくて困ってるんで、</u> <u>もう少しトーンをおとして話してもらえると助かります。</u>	(JNS14)
事象Ⅱ	事象Ⅲ

事象構造(III) : 【事象Ⅰ+事象Ⅱ+事象Ⅲ】 3例

例 : <u>実はそちらの話し声が壁伝えで聞こえていまして、</u> <u>そのせいで最近夜眠れないのです。</u>	
事象Ⅰ	事象Ⅱ
申し訳ないのですが、 <u>夜遅くまで話すのは控えてもらっても良いですか。</u>	(JNS12)
事象Ⅲ	

事象構造(IV) : 【事象Ⅰ+事象Ⅲ】 1例

例 : <u>近所迷惑なんですけど。。。</u> <u>少し静かにしてもらえませんか。</u>	(JNS4)
事象Ⅰ	事象Ⅲ

事象構造(V) : 【事象Ⅰ+事象Ⅱ】 2例

例 : すみません、 <u>夜うるさくて、</u> <u>眠れないんですが…</u>	(JNS20)
事象Ⅰ	事象Ⅱ

上記のデータに基づき、場面1(親しい隣人が騒音を立てた場面)における日本語母語話者の発話パターンをまとめると、次の表4-2のようになる。



表 4-2 場面 1 における日本語母語話者の発話パターン

発話意図の明示化の度合い	言語化される事象	事象構造	実数	比率
高	【事象Ⅲ】	(Ⅰ)	5	41.7%
	【事象Ⅱ+事象Ⅲ】	(Ⅱ)	1	8.3%
	【事象Ⅰ+事象Ⅱ+事象Ⅲ】	(Ⅲ)	3	25.0%
	【事象Ⅰ+事象Ⅲ】	(Ⅳ)	1	8.3%
	合計		10	83.3%
低	【事象Ⅰ+事象Ⅱ】	(Ⅴ)	2	16.7%
	【事象Ⅰ】	(Ⅵ)	0	0.0%
	合計		2	16.7%

表 4-2 に示したように、親しくない隣人が騒音を立てた場面において、最も多く使われている発話パターンは、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」だけが言語化された事象構造(Ⅰ)である。その次は事象Ⅰ、Ⅱ、Ⅲがともに言語化された事象構造(Ⅲ)である。

発話意図の明示化の度合いから見ると、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」が言語化された(他の事象と合わせて言語化された場合も含む)、発話意図の明示化の度合いの高い発話パターンが多く使用されていることが分かる。

#### 4.3.1.2 場面 2 における日本語母語話者の発話パターン

事象構造(Ⅰ)：【事象Ⅲ】 3 例

例：ちょっと悪いんだけど、夜もう少し静かにしてくれないかな？	(JNS1)

事象構造(Ⅱ)：【事象Ⅱ+事象Ⅲ】<sup>7</sup> 1 例

例：もうちょっと静かにしてよー寝れないってー!	(JNS14)

<sup>7</sup> 改善要求行為と考えられる一連の事象連鎖のどの部分が切り出されて言語化されているのかを考察することが、本節の主たる目的であるため、事象の出現順序の面は捨象される。

事象構造(Ⅲ)：【事象Ⅰ+事象Ⅱ+事象Ⅲ】3例

例：あの、実は結構〇〇ちゃんの声が私の部屋まで聞こえてて、昼間は良いんだけど、	(JNS12)
<div style="display: flex; justify-content: center; align-items: center; gap: 20px;"> <div style="text-align: center;"> <p>事象Ⅰ</p> <p>夜遅いとちょっと迷惑だから、ひかえてもらっても良い?</p> <p>事象Ⅱ</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>事象Ⅲ</p> </div> </div>	

事象構造(Ⅳ)：【事象Ⅰ+事象Ⅲ】4例

例：夜声すごい聞こえてくるから、声量おとしてもらっていい?	(JNS3)
<div style="display: flex; justify-content: center; align-items: center; gap: 20px;"> <div style="text-align: center;"> <p>事象Ⅰ</p> </div> <div style="text-align: center;"> <p>事象Ⅲ</p> </div> </div>	

事象構造(Ⅵ)：【事象Ⅰ】3例

例：いつも友達来ているんですか?笑い声きこえましたよ。	(JNS6)
<p>事象Ⅰ</p>	

上記のデータに基づき、場面2(親しい友達が騒音を立てた場面)における日本語母語話者の発話パターンをまとめると、次の表4-3のようになる。

表4-3 場面2における日本語母語話者の発話パターン

発話意図の明示化の度合い	言語化される事象	事象構造	実数	比率
高	【事象Ⅲ】	(Ⅰ)	3	21.4%
	【事象Ⅱ+事象Ⅲ】	(Ⅱ)	1	7.1%
	【事象Ⅰ+事象Ⅱ+事象Ⅲ】	(Ⅲ)	3	21.4%
	【事象Ⅰ+事象Ⅲ】	(Ⅳ)	4	28.6%
	合計		11	78.6%
低	【事象Ⅰ+事象Ⅱ】	(Ⅴ)	0	0.0%
	【事象Ⅰ】	(Ⅵ)	3	21.4%
	合計		3	21.4%

表4-3に示したように、親しい友達が騒音を立てた場面において、日本語母語話者の多用する発話パターンは、割と均等に分布している傾向が見られる。最も多く使われている

発話パターンは、事象Ⅰの「聴者が好ましくない状況を起こしたこと」と事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」が言語化された事象構造(Ⅳ)であるが、事象構造(Ⅳ)の比率と、事象構造(Ⅰ)(Ⅲ)(Ⅵ)の比率との差はそれほど大きくない。

発話意図の明示化の度合いから見ると、場面1と同様に、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」が言語化された(他の事象と合わせて言語化された場合も含む)、発話意図の明示化の度合いの高い発話パターンが多く使用されていることが分かる。

#### 4.3.1.3 場面3における日本語母語話者の発話パターン

事象構造(Ⅰ)：【事象Ⅲ】5例

例：すみません、 <u>ちょっと静かに見てもらってもいいですか。</u>	(JNS2)
事象Ⅲ	

事象構造(Ⅱ)：【事象Ⅱ+事象Ⅲ】2例

例：すみません。 <u>映画に集中できないので</u> 、 <u>外で話をしてもらえませんか。</u>	(JNS1)
事象Ⅱ	事象Ⅲ

事象構造(Ⅳ)：【事象Ⅰ+事象Ⅲ】1例

例： <u>うるさいので</u> 、 <u>しゃべるなら出ててもらえませんか。</u>	(JNS3)
事象Ⅰ	事象Ⅲ

事象構造(Ⅵ)：【事象Ⅰ】1例

例： <u>うるさいんですけど。</u>	(JNS11)
事象Ⅰ	

上記のデータに基づき、場面3(見知らぬ人が映画館で騒音を立てた場面)における日本語母語話者の発話パターンをまとめると、次の表4-4のようになる。

表 4-4 場面 3 における日本語母語話者の発話パターン

発話意図の明示化の度合い	言語化される事象	事象構造	実数	比率
高	【事象Ⅲ】	(Ⅰ)	5	55.6%
	【事象Ⅱ+事象Ⅲ】	(Ⅱ)	2	22.2%
	【事象Ⅰ+事象Ⅱ+事象Ⅲ】	(Ⅲ)	0	0.0%
	【事象Ⅰ+事象Ⅲ】	(Ⅳ)	1	11.1%
	合計		8	88.9%
低	【事象Ⅰ+事象Ⅱ】	(Ⅴ)	0	0.0%
	【事象Ⅰ】	(Ⅵ)	1	11.1%
	合計		1	11.1%

表 4-4 に示したように、見知らぬ人が映画館で騒音を立てた場面において、日本語話者の最も多く使用する発話パターンは、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」だけが言語化された事象構造(Ⅰ)である。その次は事象ⅡとⅢが言語化された事象構造(Ⅱ)である。

発話意図の明示化の度合いから見ると、場面 1、2 と同様に、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」が言語化された(他の事象と合わせて言語化された場合も含む)、発話意図の明示化の度合いの高い発話パターンが多く使用されていることが分かる。

#### 4.3.1.4 事象構造から見た日本語母語話者の改善要求発話の特徴

4.3.1.1 節と 4.3.1.2 節、4.3.1.3 節の考察結果をまとめると、騒音場面における日本語母語話者の改善要求発話の特徴として、以下の点が挙げられる。

- 1) 事象構造の観点から見ると、親しくない隣人や、映画館で見知らぬ人が騒音を立てた場合には、事象Ⅲだけが言語化された発話パターン(すなわち、事象構造(Ⅰ))が多用され、他の発話パターンの使用率が低い。一方、親しい友達が騒音を立てた場合には、発話パターンが割と均等に分布しており、【事象Ⅲ】、【事象Ⅰ+事象Ⅱ+事象Ⅲ】、【事象Ⅰ+事象Ⅲ】、【事象Ⅰ】が言語化された発話パターンが多く使われている。このことから、日本語母語話者が改善要求発話を表出する際に、親しくない人より親しい人に対して、より自由に自分の考え方を表出していることが示唆された。また、場

面1と2に比べ、場面3の映画館で見知らぬ人が騒音を立てた場面において、事象Ⅲだけが言語化された事象構造(I)の使用率が高いことが見られる。

2) 発話意図の明示化の度合いから見ると、親しくない人より親しい人に対する場面では、発話意図の明示化の度合いの低い発話パターンの使用率がやや高くなっているが、いずれの場面においても、発話意図の明示化の度合いの高い発話パターンが多用されていることが分かる。

### 4.3.2 中国語母語話者の発話パターン

#### 4.3.2.1 場面1における中国語母語話者の発話パターン

事象構造(I)：【事象Ⅲ】9例

<p>例：跟你商量个事，<u>晚上能不能早点打电话或者声音小一点儿。</u> (CNS1)<sup>8</sup></p> <p style="text-align: center;">事象Ⅲ</p> <p>筆者訳：ちょっとお話したいことがあるんですが、夜電話するなら、少し早めにしてもらえませんか。あるいは、声を少し小さくしてもらえませんか。</p>
--

事象構造(Ⅱ)：【事象Ⅱ+事象Ⅲ】2例

<p>例：亲，<u>拜托你能小点声吗？</u><u>影响他人休息了，</u>都这么晚了。 (CNS7)</p> <p style="text-align: center;">事象Ⅲ                      事象Ⅱ</p> <p>筆者訳：あのう、声を少し小さくしてもらえませんか。他の人の睡眠を邪魔していますよ。もうこんなに遅いし。</p>
--

事象構造(Ⅲ)：【事象Ⅰ+事象Ⅱ+事象Ⅲ】7例

<p>例：你好，○○○，<u>你的晚上聊天影响到了我的休息，</u><u>请您晚上说话时注意照顾一下我的感受，</u></p> <p style="text-align: center;">事象Ⅰ              事象Ⅱ                      事象Ⅲ</p> <p>谢谢。 (CNS19)</p> <p>筆者訳：こんばんは、○○○さん、夜おしゃべりのせいでよく眠れないんです。夜おしゃべりする時は少し気をつけてもらえませんか。ありがとうございます。</p>
---

<sup>8</sup> 「CNS」は“Chinese Native Speakers”の略であり、中国語母語話者を意味する。「CNS」の後ろの数字は調査対象者の番号を示したものである。

事象構造(V)：【事象Ⅰ+事象Ⅱ】1例

<p>例：晚上聊得 high 啊! ? 把隔壁的人都能调动起来听你们的卧谈会。 (CNS20)</p> <p style="text-align: center;"> <span style="margin-right: 100px;">事象Ⅰ</span> <span>事象Ⅱ</span> </p> <p>筆者訳：夜おしゃべりが楽しそうですね。隣の人まであなた達のおしゃべりに参加でき                  そうですね。</p>
--

上記のデータに基づき、場面1(親しくない隣人が騒音を立てた場面)における中国語母語話者の発話パターンをまとめると、次の表4-5のようになる。

表4-5 場面1における中国語母語話者の発話パターン

発話意図の明示化の度合い	言語化される事象	事象構造	実数	比率
高	【事象Ⅲ】	(Ⅰ)	9	47.4%
	【事象Ⅱ+事象Ⅲ】	(Ⅱ)	2	10.5%
	【事象Ⅰ+事象Ⅱ+事象Ⅲ】	(Ⅲ)	7	36.8%
	【事象Ⅰ+事象Ⅲ】	(Ⅳ)	0	0.0%
	合計		18	94.7%
低	【事象Ⅰ+事象Ⅱ】	(Ⅴ)	1	5.3%
	【事象Ⅰ】	(Ⅵ)	0	0.0%
	合計		1	5.3%

親しくない隣人が騒音を立てた場面において、中国語母語話者の多用する発話パターンが事象構造(Ⅰ)と(Ⅲ)に集中している傾向が見られる。事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」だけが言語化された事象構造(Ⅰ)の比率が一番高く、47.4%に達している。その次は事象Ⅰ、Ⅱ、Ⅲがともに言語化された事象構造(Ⅲ)である。

発話意図の明示化の度合いから見ると、場面1と同様に、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」が言語化された(他の事象と合わせて言語化された場合も含む)、発話意図の明示化の度合いの高い発話パターンが多く使用されていることが分かる。事象構造(Ⅰ)(Ⅱ)(Ⅲ)(Ⅳ)を合わせると、94.7%に達している。

#### 4.3.2.2 場面2における中国語母語話者の発話パターン

事象構造(I) : 【事象Ⅲ】 7例

<p>例 : 只有好好休息, 明天学习才会有精神, 所以以后聊天不要那么晚, 好不?, 拜托啦! (CNS3)</p> <p style="text-align: center;">事象Ⅲ</p> <p>筆者訳: よく寝ないと、次の日勉強する時元気が出ないよ。だから、これからは遅くまでおしゃべりしないで。いい? お願いね。</p>
--

事象構造(II) : 【事象Ⅱ+事象Ⅲ】 5例

<p>例 : 亲, 晚上能不能别聊了, 我都一周没睡好了, 就算我求你了。 (CNS15)</p> <p style="text-align: center;">事象Ⅲ                      事象Ⅱ</p> <p>筆者訳: あのさ、夜おしゃべりするのをやめてもらえない? 僕はもう一週間よく眠れないんだよ。頼むから。</p>
--

事象構造(III) : 【事象Ⅰ+事象Ⅱ+事象Ⅲ】 3例

<p>例 : 亲, 你能不能明天白天再聊, 你的声音有点大, 我没办法睡着。 (CNS8)</p> <p style="text-align: center;">事象Ⅲ                      事象Ⅰ                      事象Ⅱ</p> <p>筆者訳: ねえ、おしゃべりなら明日の昼間にしてもらえない? あなたの声がちょっと大きくて、眠れないの。</p>
---

事象構造(IV) : 【事象Ⅰ+事象Ⅲ】 1例

<p>例 : 你是不是每天晚上聊天聊得很晚啊, 这样对你的睡眠影响不太好。还可能影响身体健</p> <p style="text-align: center;">事象Ⅰ</p> <p>康, 以后别老这样。 (CNS12)</p> <p style="text-align: center;">事象Ⅲ</p> <p>筆者訳: いつも夜遅くまでおしゃべりをしているね。睡眠に良くないよ。健康にも良くないし、これからやめた方がいいよ。</p>
--

上記のデータに基づき、場面2(親しい友達が騒音を立てた場面)における中国語母語話者の発話パターンをまとめると、次の表4-6のようになる。

表 4-6 場面 2 における中国語母語話者の発話パターン

発話意図の明示化の度合い	言語化される事象	事象構造	実数	比率
高	【事象Ⅲ】	(Ⅰ)	7	43.7%
	【事象Ⅱ+事象Ⅲ】	(Ⅱ)	5	31.3%
	【事象Ⅰ+事象Ⅱ+事象Ⅲ】	(Ⅲ)	3	18.6%
	【事象Ⅰ+事象Ⅲ】	(Ⅳ)	1	6.3%
	合計		16	100%
低	【事象Ⅰ+事象Ⅱ】	(Ⅴ)	0	0.0%
	【事象Ⅰ】	(Ⅵ)	0	0.0%
	合計		0	0.0%

表 4-6 に示したように、親しい友達が騒音を立てた場面において、中国語母語話者の多用する発話パターンが事象構造(Ⅰ)と(Ⅱ)に集中している傾向が見られる。事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」だけが言語化された事象構造(Ⅰ)の比率が一番高く、43.7%に達している。その次は事象ⅡとⅢが言語化された事象構造(Ⅱ)である。

発話意図の明示化の度合いから見ると、親しい友達が騒音を立てた場面において、すべての発話例に事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」が言語化されており、発話意図の明示化の度合いの高い発話パターンの使用率が 100%に達している。

#### 4.3.2.3 場面 3 における中国語母語話者の発話パターン

事象構造(Ⅰ)：【事象Ⅲ】 12 例

<p>例：打搅一下，能小声一点吗？</p> <p style="text-align: center;">└──────────┘</p> <p style="text-align: center;">事象Ⅲ</p> <p>筆者訳：すみません、声を小さくしてもらえませんか。</p>	(CNS2)
---	--------



事象構造(Ⅱ)：【事象Ⅱ+事象Ⅲ】3例

例：大姐，很抱歉，你能小一点声音吗？我实在听不清。 (CNS1)

事象Ⅲ                      事象Ⅱ

筆者訳：(親しみを込めた呼称)、申し訳ありませんが、声を少し小さくしてもらえませんか。(映画のセリフが)よく聞こえないんです。

事象構造(Ⅲ)：【事象Ⅰ+事象Ⅱ+事象Ⅲ】1例

例：先生，你能文明说话吗，这么大声说话会影响他人看电影的。 (CNS16)

事象Ⅲ              事象Ⅰ                      事象Ⅱ

筆者訳：すみません、話し声に気をつけてもらえますか。そんなに大きな声でしゃべると、他の人が映画を見るのに邪魔になりますよ。

事象構造(Ⅵ)：【事象Ⅰ】1例

例：你这样大说大笑的，太没有素质了吧! (CNS3)

事象Ⅰ

筆者訳：そんなに大声で話したり笑ったりするのは、品がないわよ。

上記のデータに基づき、場面3(見知らぬ人が映画館で騒音を立てた場面)における中国語母語話者の発話意図の明示化の度合いをまとめると、次の表4-7のようになる。

表4-7 場面3における中国語母語話者の発話パターン

発話意図の明示化の度合い	言語化される事象	事象構造	実数	比率
高	【事象Ⅲ】	(Ⅰ)	12	70.6%
	【事象Ⅱ+事象Ⅲ】	(Ⅱ)	3	17.6%
	【事象Ⅰ+事象Ⅱ+事象Ⅲ】	(Ⅲ)	1	5.9%
	【事象Ⅰ+事象Ⅲ】	(Ⅳ)	0	0.0%
	合計		16	94.1%
低	【事象Ⅰ+事象Ⅱ】	(Ⅴ)	0	0.0%
	【事象Ⅰ】	(Ⅵ)	1	5.9%
	合計		1	5.9%

表 4-7 に示したように、映画館で見知らぬ人が騒音を立てた場面において、中国語母語話者の多用する発話パターンが事象構造(I)に集中している傾向が見られる。事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」だけが言語化された事象構造(I)の比率が70.6%に達している。その次は事象ⅡとⅢが言語化された事象構造(Ⅱ)である。

発話意図の明示化の度合いから見ると、場面1、2と同様に、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」が言語化された(他の事象と合わせて言語化された場合も含む)、発話意図の明示化の度合いの高い発話パターンが多く使用されていることが分かる。事象構造(I)(Ⅱ)(Ⅲ)(Ⅳ)を合わせると、94.1%に達している。

#### 4.3.2.4 事象構造から見た中国語母語話者の改善要求発話の特徴

4.3.2.1節と4.3.2.2節、4.3.2.3節の考察結果をまとめると、騒音場面における中国語母語話者の改善要求発話の特徴として、以下の点が挙げられる。

1) 事象構造の観点から見ると、隣に住んでいる人に対する場面(場面1と2)においては、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」だけが言語化された事象構造(I)以外に、事象Ⅱと事象Ⅲが言語化された事象構造(Ⅱ)や事象Ⅰ、Ⅱ、Ⅲがともに言語化された事象構造(Ⅲ)も多く使用されているが、映画館で見知らぬ人に対する場面(場面3)においては、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」だけが言語化された事象構造(I)が多く使用され、70.6%に達している。

2) 発話意図の明示化の度合いから見ると、親しい友達より親しくない人に対する場面では、発話意図の明示化の度合いの低い発話パターンの使用率がやや高くなっているが、いずれの場面においても、発話意図の明示化の度合いの高い発話パターンが多用されていることが分かる。

#### 4.3.3 事象構造の観点から見た日中改善要求発話の相違

4.3.1節と4.3.2節の考察結果から、騒音場面における日中改善要求発話は以下のような共通点と相違点を持つことが明らかとなった。

まず、改善要求発話の事象構造から、日中両言語の共通点と相違点として、以下のことが挙げられる。

## 【共通点】

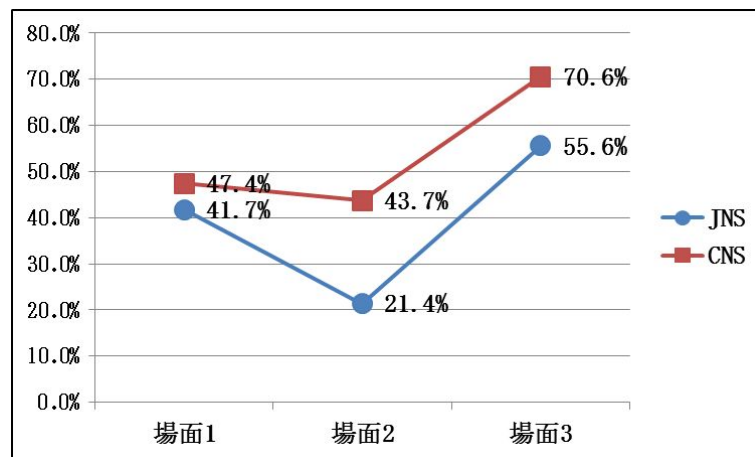


図 4-9 各場面における事象構造(I)の比率

- 図 4-9 にまとめたように、日中両言語とも事象構造(I) (つまり、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」だけが言語化された発話パターン) が多用されていることが分かる。日本語話者の場面 2 (親しい友達が騒音を立てた場面) における事象構造(I) の比率が 21.4% で、やや低くなっているが、他の場面では中国語と同様で、いずれも 4 割を超えている。
- 隣に住んでいる人が騒音を立てた場面 (= 場面 1 と 2) に比べ、映画館で見知らぬ人が騒音を立てた場面 (= 場面 3) においては、日中両言語とも事象構造(I) の使用率が高くなる傾向が見られる。

## 【相違点】

- 事象構造の分布状況から見ると、日本語では、場面 2 (= 親しい友達が騒音を立てた場面) が他の 2 つの場面と大きく異なり、【事象Ⅲ】、【事象 I + 事象 II + 事象Ⅲ】、【事象 I + 事象Ⅲ】、【事象 I】が言語化された発話パターンがほぼ同じ頻度で使われており、事象構造が割と均等に分布している傾向が見られた。一方、中国語では、場面 3 (= 映画館で見知らぬ人が騒音を立てた場面) が他の 2 つの場面と大きく異なり、事象構造(I) の比率が圧倒的に高く、70% 以上に達している。

そして、発話意図の明示化の度合いから、日中両言語の共通点と相違点として、以下のことが挙げられる。

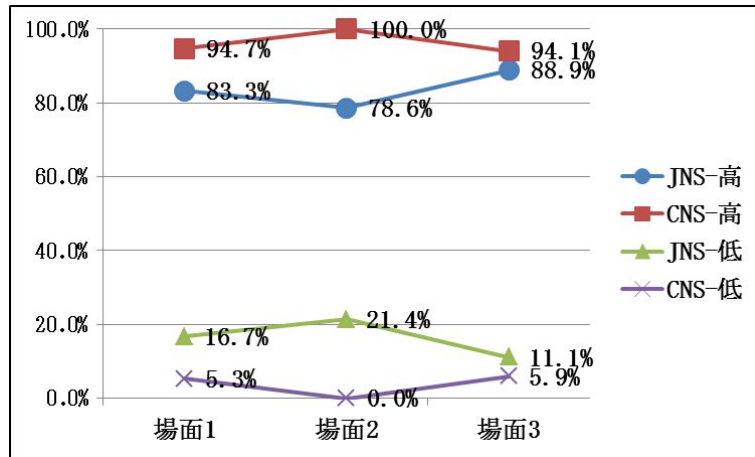


図 4-10 明示化の度合いの高い発話例と低い発話例の比率

【共通点】

- 図 4-10 にまとめたように、日中両言語とも、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」が言語化され、話者の発話意図が表現形式に明示化されている、いわゆる発話意図の明示化の度合いの高い発話パターンが多用されているのが見られる。

【相違点】

- いずれの場面においても、日本語より中国語の方が、発話意図の明示化の度合いの高い発話パターンの使用率がやや高い。
- 日本語では、親しくない人より親しい人に対して、発話意図の明示化の度合いの低い発話パターンの使用率がやや高くなる傾向が見られるが、それとは反対に、中国語では、親しい友達より親しくない人に対して、発話意図の明示化の度合いの低い発話パターンの使用率がやや高くなる傾向が見られる。

以上のことから、因果連鎖の伸縮、切片化の仕方によって、改善要求行為の事象構造(すなわち、認知の世界での出来事)が多様化し、事象構造に基づいて言語化した改善要求発話には様々な発話の仕方が存在するが、話したい内容をひとまとまりの発話にして継続的に盛り込む場合、日中両言語とも、目的達成に直接作用する事象Ⅲ(話者が聴者に改善して欲しいと伝えること)が言語化される、話者の発話意図が表現形式に明示化されている発話パターンが多用されることが分かった。

なお、第 3 章で説明したように、本論文で扱うデータは DCT という言語行動意識調査を通して収集したものである。DCT により得たデータは、「話し手の頭の中にあるモデルと

して、実際の相互作用の場で相手の反応に応じて変更や修正を加えられる前の、基本的にこういう出方をしたい、こう展開してしかるべき、と話し手が考えているような行動のイメージ」(熊谷 2000:97)を示すもので、話者が話したい内容をひとまとまりの発話にして継続的に盛り込むという特徴があり、談話的なやり取りは現れない。実際の自然談話において、話者は聴者の反応に応じて、変更や修正を加えたりすることがある。例えば、親しくない隣人が騒音を引き起こした場面で、「すみません、夜うるさくて、眠れないんですが…」という日本語母語話者による発話例があった。この場合、相手が「あ、そうですか？すみません、もっと静かにします。」と返事をする、改善要求発話の目的が達成されるため、話者は「静かにしてほしい」と伝える必要はない。しかし、もし、相手が「ええ…」と反応した場合、話者はさらに「申し訳ないんですけど、もう少し小さな声で話していただけませんか。」と言うなどして、自分の発話意図を明示化する場合があると考えられる。日中改善要求発話の展開パターンに関しては、今後自然談話のデータを増やし、さらに検討していきたいと思う。

#### 4.4 事象の述べられる順序から見た日中改善要求発話の特徴

改善要求発話を表出する際に、4.2節と4.3節で考察した連鎖の切片化の仕方(つまり、改善要求行為と考えられる一連の事象連鎖のどの部分(あるいは、どの事象)を切り出して言語化するかということ)を考える以外に、切り出した事象(複数ある場合)のどちらを先に述べるかについても考える必要がある。同一事象構造<sup>9</sup>(つまり、連鎖の切片化の仕方が同様であること)であっても、事象の述べられる順序によって、発話の仕方が異なるように見える。

(17)a うるさいから、静かにしてね。 (JNS4-場面2)

b 静かにしてね、うるさいから。 (作例)

例えば、(17a)は、場面2(親しい友達が騒音を立てた場面)における日本語母語話者からの発話例である。事象Ⅰの「聴者が好ましくない状況を起こしたこと」が述べられてから、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」が述べられている。一方、(17b)では、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」が先に述べられて、その後、

<sup>9</sup> 本論文で言う「事象構造」とは、言語主体が改善要求発話を表出する際に、改善要求行為と考えられる一連の(因果関係のある)事象連鎖のどの部分(あるいは、どの事象)を切り出して言語化を行うのか、すなわち、改善要求発話に言語化された事象の組み合わせのことである。

事象Ⅰの「聴者が好ましくない状況を起こしたこと」が述べられている。

事象構造の観点から見ると、(17a)と(17b)とも、事象Ⅰと事象Ⅲが切り出されて言語化されたため、同一事象構造を持っていると思われるが、事象Ⅰと事象Ⅲの述べられる順序によって、両発話の仕方が異なるように見える。

改善要求行為における事象の述べられる順序に関して、日中両言語にはどのような特徴が見られるのだろうか。以下、改善要求行為における各事象の役割を述べてから、事象の述べられる順序から、日中改善要求発話の特徴を考察する。

#### 4.4.1 改善要求行為における各事象の役割

前文で述べたように、改善要求行為には、**事象Ⅰ：聴者が好ましくない状況を起こしたこと** → **事象Ⅱ：話者の利益が損なわれたこと** → **事象Ⅲ：話者が聴者に改善して欲しいと伝えること** → **事象Ⅳ：聴者が改善行為をすること**、という一連の因果関係のある事象連鎖が考えられる。

この一連の事象連鎖の中で、事象Ⅳの「聴者が改善行為をすること」が話者が改善要求行為を行う目的である。事象Ⅳを発生させる(すなわち、改善要求行為の目的を達成する)ために最も効果的な方法は、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」である。言い換えれば、改善要求発話において、目的達成に直接作用する部分、すなわち、実際に改善要求行為の発語内効力<sup>10</sup>を伝達する部分は、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」を述べる部分である。

そこで、本論文では、事象Ⅲ「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」を述べる部分を改善要求発話の【主要行為部】(すなわち、言語行動の「核」と呼べる部分)とする。

(18) 夜声すごい聞こえてくるから、声量おとしてもらっていい? (JNS3-場面2)

【主要行為部】

(19) 眠れなくて困ってるんで、もう少しトーンをおとして話してもらえると助かります。

【主要行為部】

(JNS14-場面1)

例えば、(18)と(19)では、実際に改善要求行為の発話語内効力を伝達するのが、下線で示した「声量おとしてもらっていい?」と「もう少しトーンをおとして話してもらえると助

<sup>10</sup> 「発語内効力」(illocutionary force)はAustinの「発話行為論」の用語である。「発語内的力」、「発話の力」とも呼ばれ、「発話の文脈において、命題がどのような用いられ方をしているかを決定する」(小泉2001:82)ものである。

かります。」の部分である。

事象Ⅰの「聴者が好ましくない状況を起こしたこと」と事象Ⅱの「話者の利益が損なわれたこと」を言語化した、「夜声すごい聞こえてくるから」と「眠れなくて困ってるんで」の部分は、改善要求の目的達成に直接作用はしていないが、相手を促して改善を行ってもらう役割を果たすため、本論文では、事象Ⅰと事象Ⅱを述べる部分を改善要求発話の【補助部】とする。

(20) さすがにもう遅い時間だから、もう少し静かにしてもらってもいいかな。

【主要行為部】 (JNS10-場面2)

(20)に示したように、【補助部】には、事象Ⅰと事象Ⅱを述べる要素以外に、「さすがにもう遅い時間だから」のような理由を提示する表現が使われる。理由提示表現に関しては、4.5節で詳しく分析する。

(21) いきなりすみません。最近越してきた者ですが、よる遅くお宅から聞こえる声が少し気になりまして。。。もう少し小さな声で話していただけませんか？

(JNS1-場面1)

【切り出し部】： いきなりすみません。最近越してきた者ですが、	} 【用件内容部】
【補助部】： よる遅くお宅から聞こえる声が少し気になりまして。。。	
【主要行為部】： もう少し小さな声で話していただけませんか？	

(22) ごめん、ちよつともうこんな時間だし、おしゃべりなら小さい声でしてくれないかな～ごめんね。

(JNS2-場面2)

【切り出し部】： ごめん、	} 【用件内容部】
【補助部】： ちよつともうこんな時間だし、	
【主要行為部】： おしゃべりなら小さい声でしてくれないかな～	
【終了部】： ごめんね。	

また、(21)と(22)に示したように、改善要求発話において、【主要行為部】と【補助部】以外に、用件内容(つまり、改善要求に関する内容)を述べる前の【切り出し部】要素と、用件内容を述べた後の【終了部】要素が見られる(ただし、これらの要素は必ず全て揃って

いるわけではない)。**【切り出し部】**と**【終了部】**の構成要素に関しては、第6章で詳しく分析する。

#### 4.4.2 事象の述べられる順序から見た日中改善要求発話の相違

4.4.1節の分析から、改善要求発話の**【用件内容部】**は**【主要行為部】**と**【補助部】**の2つの部分に大別でき、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」を述べる部分は、改善要求行為の目的達成に直接作用するため、改善要求発話の**【主要行為部】**(すなわち、言語行動の「核」と呼べる部分)という役割を果たし、事象Ⅰの「聴者が好ましくない状況を起こしたこと」と事象Ⅱの「話者の利益が損なわれたこと」を述べる部分は、改善要求発話の**【補助部】**という役割を担うことが分かった。

日中改善要求発話において、**【主要行為部】**と**【補助部】**、どちらが先に述べられるかについて考察した結果、以下のことが明らかとなった。

日本語では、前節の(18)～(22)の例にも示されているように、**【補助部】**を述べてから、**【主要行為部】**を述べる傾向が強く見られる。収集した計35例の改善要求発話の内、逆のタイプ(つまり、**【主要行為部】**を述べてから、**【補助部】**を述べるタイプ)は、次に示すわずか1例であった。

(23) もうちょっと静かにしてよー寝れないってー！ (JNS14-場面2)

**【主要行為部】**： もうちょっと静かにしてよー

**【補助部】**： 寝れないってー！

一方、中国語では、**【補助部】**を述べてから、**【主要行為部】**を述べるパターンが使われていることがあるが(例えば、(24))、多くの発話者は(25)(26)(27)<sup>11</sup>に示したように、**【主要行為部】**を先に述べてから、**【補助部】**を述べるパターンを使用している。収集した計52例の改善要求発話の内、**【主要行為部】**が発話の後半部に位置するのが15例(28.8%)で、**【主要行為部】**が発話の前半部に位置するのが25例(48.1%)である。また、**【補助部】**が用いられていなく、**【主要行為部】**のみの発話は10例(19.2%)である。

<sup>11</sup> 場面1,2,3、1例ずつ示す。



(24) 同学，我是一个声音很敏感的人，听见声音总会睡不着觉，请你可不可以别通电话到那么晚。 (CNS6-場面1)

筆者訳：あのう、私、音にとっても敏感なので、音が聞こえると眠れないんです。遅くまで電話をするのをやめていただけませんか。

【切り出し部】： 同学，

【補助部】： 我是一个声音很敏感的人，听见声音总会睡不着觉，

【主要行為部】： 请你可不可以别通电话到那么晚。

(25) 兄弟，你晚上说话能小点声吗？你每次聊天都影响我的休息。 (CNS16-場面1)

筆者訳：あのう、夜おしゃべりする声を小さくしてもらえませんか。おしゃべりの声のせいで、よく休めないんです。

【切り出し部】： 兄弟，

【主要行為部】： 你晚上说话能小点声吗？

【補助部】： 你每次聊天都影响我的休息。

(26) 亲，你能不能明天白天再聊，你的声音有点大，我没办法睡着。 (CNS8-場面2)

筆者訳：ねえ、おしゃべりなら明日の昼間にしてもらえない？あなたの声がちょっと大きくて、眠れないの。

【切り出し部】： 亲，

【主要行為部】： 你能不能明天白天再聊，

【補助部】： 你的声音有点大，我没办法睡着。

(27) Hi，这位姐姐，你的声音能低点么，我都听不见了。 (CNS1-場面3)

筆者訳：あのう、声を小さくしてもらえませんか。(映画のセリフが)聞こえないんです。

【切り出し部】： Hi, 这位姐姐,

【主要行為部】： 你的声音能低点么,

【補助部】： 我都听不见了。

以上のことから、改善要求行為を行う際に、日本語話者は、事象Ⅰの「聴者が好ましくない状況を起こしたこと」や事象Ⅱの「話者の利益が損なわれたこと」を述べてから、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」を述べる傾向が強く、目的達成に直接作用する【主要行為部】(=言語行動の「核」)が発話の後半部に位置することが多い。それに対して、中国語話者は、事象Ⅲを先に述べてから、事象Ⅰや事象Ⅱを述べる傾向が強く、目的達成に直接作用する【主要行為部】(=言語行動の「核」)が発話の前半部に位置することが多い。

「日本人は重要なことを最後に言う」(熊谷 1998, 2000 など)という一般的な指摘もあるように、本節での分析結果は、こうした日本人のコミュニケーション・スタイルの1つの現われとすることができよう。また、本節の分析結果から、(少なくとも騒音場面での改善要求行為において)、「中国人は重要なことを先に言う」傾向があることが言えよう。

#### 4.5 理由提示表現から見た日中改善要求発話の特徴

4.4節で触れたように、改善要求発話の【補助部】では、事象Ⅰの「聴者が好ましくない状況を起こしたこと」と事象Ⅱの「話者の利益が損なわれたこと」を述べる要素以外に、「さすがにもう遅い時間だから」のような理由提示表現が使われる。

(28) さすがにもう遅い時間だから、もう少し静かにしてもらってもいいかな。

【理由提示】

【主要行為部】

(JNS10-場面 2)

(28)では、改善要求を表出する前に、話者が「さすがにもう遅い時間だから」という改善要求を表出する理由(となる事柄)を述べている。「遅い時間に大声でおしゃべりすると、近所迷惑になる」という一般常識を述べることによって、相手に行為の改善を促している。

(29) 夜声すごい聞こえてくるから、声量おとしてもらっていい? (JNS3-場面 2)

【理由提示】

【主要行為部】

(30) 眠れなくて困ってるんで、もう少しトーンをおとして話してもらえると助かります。

【理由提示】

【主要行為部】

(JNS14-場面1)

(29)と(30)では、相手に行為を改善してもらうために、改善要求発話の【補助部】で、話者が「聴者の行為によって話者にとって好ましくない状況が発生したこと」(例えば、「夜声すごい聞こえてくるから」と「話者の利益が損なわれたこと」(例えば、「眠れなくて困ってるんで」)を述べることによって、改善要求を表出する理由となる事情を説明している。

改善要求の理由を提示する際に、日本語話者と中国語話者は、それぞれどのようなことを述べる人が多いだろうか。収集した改善要求発話の【補助部】の構成要素を考察した結果、以下のことが明らかとなった。

日本語話者は、事象Ⅰや事象Ⅱを述べ、聴者側から受けた被害や不満を述べることによって、相手を促して改善を行ってもら発話パターンを多用する。客観的な理由を提示することによって相手を説得し改善を行ってもら発話パターンの使用率は低かった(収集した計35例の改善要求発話の内、わずか3例であった。前文で示した(28)はその1例である。他の2例は、以下に示す(31)と(32)である。理由提示表現を波線で示す。)

(31) 何時だと思ってるんですか、いい加減にしてください。 (JNS16-場面1)

(32) ごめん、ちょっともうこんな時間だし、おしゃべりなら小さい声でしてくれないかな～ごめんね。 (JNS2-場面2)

一方、中国語話者は、聴者側から受けた被害や不満を述べることで改善要求の理由を提示することもあるが、客観的な理由をすることによって相手を説得し改善を行ってもら発話パターンを多用する傾向がある。例えば、以下の例を参照されたい。

(33) 同学，太晚睡觉对皮肤不好哦，下回别聊天太晚了，早些睡吧！ (CNS2-場面1)

筆者訳：ねえ、寝るのが遅いとお肌に良くないよ。これからは遅くまでおしゃべりしないで、早く寝たら？

(34) 时间不早了赶紧睡吧，明天还要学习呢！要不就没有精力了。 (CNS2-場面2)

筆者訳：時間も遅いし、早く寝たら？明日また勉強しなきゃいけないし、早く寝ないと元気出なくなっちゃうよ。

(35) 朋友，大家都在认真地看，请你小点声，不要打扰到别人。 (CNS15-場面3)

筆者訳：すみません、みんな映画に集中しているので、声を小さくして、他の人の邪魔にならないようにしてください。

(33) (34) (35)はそれぞれ場面1(親しくない隣人が騒音を立てた場面)、場面2(親しい友達が騒音を立てた場面)、場面3(映画館で見知らぬ人が騒音を立てた場面)で収集した発話例である。

(33)の“下回別聊天太晚了，早些睡吧！（これからは遅くまでおしゃべりしないで、早く寝たら？）”は改善要求を表出する部分であり、改善要求発話の【主要行為部】である。相手を促して改善を行ってもらうために、話者が改善要求を表出する前に、“太晚睡觉对皮肤不好哦（寝るのが遅いとお肌によくないよ）”という一般常識を提示し、改善行為を行うように説得している。

(34)の“赶紧睡吧(早く寝たら)”は改善要求を表出する部分であり、改善要求発話の【主要行為部】である。改善要求を表出する前に、話者が“时间不早了(時間も遅いし)”という客観的な理由を提示し、改善要求を表出した後に、“明天还要学习呢！要不就没有精力了。(明日また勉強しなきゃいけないし、早く寝ないと元気出なくなっちゃうよ)”と述べ、早く寝るように説得している。

(35)の“请你小点声，不要打扰到别人。(声を小さくして、他の人の邪魔にならないようにしてください。)”は改善要求を表出する部分であり、改善要求発話の【主要行為部】である。改善要求を表出する前に、話者が“大家都在认真地看(みんな映画に集中している)”という客観的な事情を述べ、個人対個人の対立を回避し、婉曲的に「みんな映画に集中しているので、あなたが大声でおしゃべりすると、周りの皆さんに迷惑をかけるよ」というメッセージを聴者に伝えている。

また、(36)のように、中国語話者の発話例には、客観的な理由の提示と、(聴者側から受けた)被害や不満の提示が併用されている例も見られる。

(36) 嘿，哥们，说话的时候能不能小点声，咱这楼隔音效果不太好，晚上我都睡不着觉。

谢谢了哈！ (CNS11-場面1)

筆者訳：あのう、おしゃべりする時、声を小さくしてもらえませんか。この建物は防音効果があまりよくないので、夜、よく眠れないんです。ありがとうございます。

(36)は場面1(親しくない隣人が騒音を立てた場面)で収集した発話例である。話者が“说话的时候能不能小点声(おしゃべりする時、声を小さくしてもらえませんか)”という改善要求を表出した後に、“咱这楼隔音效果不太好(この建物は防音効果がよくないので)”という客観的な事情を説明し、聴者側から受けた不利益“晚上我都睡不着觉(夜、ぼく良く眠れないのです)”を言明することによって、聴者に改善行為をするように働きかけている。

客観的な理由を提示することによって相手を説得し改善を行ってもらう発話パターンは、一見自分の意見を強く主張、相手を責めているように思われるが、実際は客観的な理由を述べることによって、個人対個人の対立を回避し、人間関係を良好に維持しようとする配慮の一種として使われる。例として、(37)を参照されたい。

(37)a 同学，太晚睡觉对皮肤不好哦，下回别聊天太晚了，早些睡吧！ ((33)の再掲)

筆者訳：あのさ、寝るのが遅いとお肌によくはないよ。これからは遅くまでおしゃべりしないで、早く寝たら？

b 同学，你聊天影响到我睡眠了，下回别聊天太晚了，早些睡吧！(作例)

筆者訳：あのう、お宅のおしゃべりの声のせいで、よく眠れないんです。これからは遅くまでおしゃべりしないで、早く寝たら？

(37a)は、親しくない隣人の騒音に困っている場面での発話例である。話者が聴者側から受けた不利益や不満を述べずに、“太晚睡觉对皮肤不好哦(寝るのが遅いとお肌によくはないよ)”という客観的な事情を理由提示表現として挙げている。話者があたかも相手のことを心配しているかのように、自分の改善要求を表出している。

(37b)は筆者の作例である。聴者側から受けた不利益や不満を述べてから、改善要求を表出するパターンである。(37a)の“太晚睡觉对皮肤不好哦(寝るのが遅いとお肌によくはないよ)”という表現に比べ、“你聊天影响到我睡眠了(お宅のおしゃべりの声のせいで、よく眠れないんです)”という表現は、騒音を引き起こした聴者を責めるという含意が読み取れるため、聴者のフェイスを脅かす度合いが高いと思われる。

以上で見たように、改善要求の理由を提示する際に、日本語話者は、基本的に自分の事情、つまり聴者側から受けた被害や不満を述べることによって、改善行為を行うよう促す。それに対して、中国語話者は、個人対個人の対立を回避し、一般常識や客観的な事情を説

明することによって、相手を説得し改善を行ってもらうパターンを多用することが分かった。

言語によって、配慮の示し方が異なることがある。「寝るのが遅いとお肌に良くないよ」、「時間も遅いし、明日また勉強しなきゃいけないし、早く寝ないと元気出なくなっちゃうよ」、「みんな映画に集中しているので」といった理由提示表現は、日本語話者から見ると、客観的な事情を示すことによって自分の意見が正当であることを過剰にアピールし、相手を責めているように感じられるかもしれない。しかし、中国語話者にとっては、それはむしろ聴者に対する一種の配慮なのである。

両言語におけるこのような相違が、負の転移を誘発し、中国人日本語学習者の改善要求発話に理由提示表現が多用されることとなる。この点については、第7章で詳しく述べる。

#### 4.6 本章のまとめ

本章では、これまでの改善要求行為に関する先行研究とは異なり、認知文法論で扱われてきた「因果連鎖(causal chain)」の分析方法を談話分析に導入した。「連鎖のどの部分を切り出して言語化するか」、「切り出した事象をどの順序で述べるか」、「連鎖に現れた事象以外に、どのようなものが言語化されるのか」という3つの観点から日中改善要求発話の特徴を分析し、以下のことを明らかにした。

- 1) 改善要求行為は、**事象Ⅰ:聴者が好ましくない状況を起こしたこと** → **事象Ⅱ:話者の利益が損なわれたこと** → **事象Ⅲ:話者が聴者に改善して欲しいと伝えること** → **事象Ⅳ(目的達成):聴者が改善行為をすること**、という一連の事象連鎖とみなされる。

因果連鎖の伸縮、切片化(因果連鎖の中から一部を切り出して、言語化すること)の仕方によって、改善要求行為の事象構造(すなわち、認知の世界での出来事)が多様化し、事象構造に基づいて言語化した改善要求発話には様々な発話の仕方が見られる。しかし、話したい内容をひとまとまりの発話にして継続的に盛り込む場合、日中両言語とも、目的達成に直接作用する事象Ⅲが言語化される、話者の発話意図が表現形式に明示化されている発話パターンが多用される傾向がある。

- 2) 事象が述べられる順序から見ると、日本語話者は、事象Ⅰの「聴者が好ましくない状況を起こしたこと」や事象Ⅱの「話者の利益が損なわれたこと」を述べてから、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」を述べる傾向が強く、目的達成に

直接作用する【主要行為部】(＝言語行動の「核」)が発話の後半部に位置することが多い。それに対して、中国語話者は、事象Ⅲを先に述べてから、事象Ⅰや事象Ⅱを述べる傾向が強く、目的達成に直接作用する【主要行為部】(＝言語行動の「核」)が発話の前半部に位置することが多い。

- 3) 改善要求の理由となる事情を説明する際に、日本語話者は、基本的に連鎖に現れた事象ⅠとⅡを言語化し、聴者側から受けた被害や不満を述べることによって、改善行為を行うよう促すが、中国語話者は、連鎖に現れた事象以外に、一般常識や客観的な事情を説明することによって、個人対個人の対立を回避し、改善を行ってもらうパターンを多用する。

以上のことから、談話レベルでの言語化においても、文レベルの言語化と同様に、話者(＝言語主体、認知主体)が、多方面に広がった因果関係の中から線状の事象連鎖を抽出した上で、連鎖の一部を切り出して、ある特定の順序で言語化を行うことが分かる。言語が異なれば、慣習的に使われている「連鎖の切片化の仕方」や「事象の述べられる順序」「事象と関わる他の要因を言語化するかしらないか」といった認知の営みも異なる。本章で示した認知的アプローチから談話分析を行う手法は、改善要求行為以外の発話行為にも応用できると考えられ、日中対照研究に新たな方法論を示したと考えている。

なお、前文でも述べたように、改善要求発話の背後に反映されている人間のものの見方を考察するために、本論文ではDCTという言語行動意識調査を通してデータを収集した。DCT調査により得たデータは「話し手の頭の中にあるモデルとして、実際の相互作用の場で相手の反応に応じて変更や修正を加えられる前の、基本的にこういう出方をしたい、こう展開してしかるべき、と話し手が考えているような行動のイメージ」(熊谷 2000:97)を反映するものである。話し手が話したい内容をひとまとまりの発話にして継続的に盛り込むという特徴があり、談話的なやり取りは現れない。本研究では、「相手の反応に応じて、改善要求発話がどのように変化していくのか」、「実際の自然談話では、改善要求発話がどうなっているのか」などの課題はまだ残されている。今後、自然談話のデータを増やし、検討したいと考えている。

## 第5章 事態把握の観点から見た日中改善要求表現

本章では、事態把握の観点から、改善要求発話の【主要行為部】の表現形式(つまり、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」を言語化した表現、以下「改善要求表現」とする)を分析し、「日本語と中国語のポライトネスおよび表現形式を丁寧化する方法の相違が、事態把握(言語化)の仕方とどのように関わっているのか」という問題を明らかにする。

### 5.1 問題提起

(1)a 静かにしてくれる?<sup>1</sup>

b 静かにしてくれない?

(2)a 你能安静一点吗?

筆者訳<sup>2</sup>: (あなたは)少し静かにできますか。

b 你不能安静一点吗?

筆者訳: (あなたは)ちょっと静かにできないの?

上記の例に示したように、相手にある行為を行うよう要求する際に、日本語では、肯定疑問文より否定疑問文の方が、聞き手の否定応答を前提にしており、押し付けがましくない配慮を表現できるため、より丁寧であると指摘されている(岡本 2007、山岡・牧原・小野 2010、荻野 2012 など)。

一方、中国語では、否定疑問文が聞き手の同意が見込める文脈でしか用いられないという特性を持つ<sup>3</sup>ため、否定疑問文を用いた要求表現は、相手に対する不満、批判、苛立ちなどの否定的感情を含意しながら、肯定的な返答を迫ることがあり、肯定疑問文より丁寧度

<sup>1</sup> 本論文では、特に断りのない限り、出典が明示されていない例文はすべて筆者による作例である。

<sup>2</sup> 本章では、改善要求表現の文型を中心に考察するため、例文の訳し方は第4章と異なり、原文に忠実に訳す。

<sup>3</sup> 井上・黄(1996:97-98)では、「否定辞付きの‘吗’疑問文が誘導型真偽疑問文として機能するのは、聞き手はpの可能性を意識していない、あるいは自分からpと言わないだけで、pの可能性を対立仮説としてわりこませれば、自然にその線で話がまとまるはずだと想定される場合に限られる」と指摘している。そして、聞き手の負担になる事柄の実現の有無を問う(例えば、对不起，你不能借给我一点儿钱吗?)といった状況で、「不p吗?」が使いにくいのは、「『可能性をわりこませれば自然にその線で話がまとまる』と想定することが不適切だからである」と述べている。



が低いとされる(浜田 1995、楊 2013 など)<sup>4</sup>。

(3) a 静かにしないか。(仁田 1987:198、原文は「静カニシナイカ。」)

b 静かにしてくれない?

(4) a 你能安静一点吗?

筆者訳:(あなたは)少し静かにできますか。

b 你能给我安静一点吗?

筆者訳:(あなたは私のために)少し静かにできないのか。

また、(3)と(4)に示したように、疑問文による改善要求表現において、日本語では、授受関係を明示した(3b)の方が、授受関係を明示していない(3a)より丁寧である<sup>5</sup>。それとは反対に、中国語では、授受関係を明示していない(4a)の方が、“给我”を用いて授受関係を明示した(4b)より丁寧である。

日中間で肯定形・否定形、授受関係の明示・非明示によって、改善要求表現の丁寧度が逆転するのはなぜであろうか。これらの逆転現象の背後にはどのようなメカニズムが働いているのだろうか。

## 5.2 先行研究とその問題点

語用論的観点から依頼表現<sup>6</sup>の丁寧度に関する研究が数多く行われている(Celce-Murcia & Larsen-Freeman(1999)、宮本・都築(2002)、Swan(2005)、岡本(2007)、山岡・牧原・小野(2010)、荻野(2012) 浜田(1995)、楊(2013)など)。その中で、肯定疑問文を用いた依頼表

<sup>4</sup> 「否定疑問文を用いた要求表現は、相手に対する不満、批判、苛立ちなどの否定的感情を含意しながら、肯定的な返答を迫ることが丁寧ではなく、通常、依頼表現としては使用されない」ことは英語にも報告されている。Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1999:146)では、“When the negative is contracted with the modal, it serves to amplify or strengthen the request that something should be done.”と指摘している。また、Swan (2005:346)では、“But in other cases we do not usually use negative questions to ask people to do things. ... Negative questions may be understood as complains or criticisms.”と指摘している。

<sup>5</sup> 「聴者との授受関係を明示しない場合、イントネーションが下降調で強調を伴いつつ、<命令>といった意味が派生する(仁田 1987:198)」ため、授受関係を明示した改善要求表現と比べ、丁寧度が低いのである。

<sup>6</sup> ここでの「依頼表現」は本論文で言う「広義の依頼」を指す。本論文では、①話者が聴者に何らかの行為を行うよう求める、②その行為が実現されれば話者に利益がある、③当該行為の実行の決定権は聴者にある、という3つの語用論的条件を揃えた行為を「広義の依頼行為」と認め、発話時点で話者が聴者から不利益を受けているかどうかによって、「広義の依頼行為」をさらに「狭義の依頼行為」(発話時点で不利益を受けていない)と「改善要求行為」(発話時点で不利益を受けている)の2種類に分けることにしている(詳細は本論文の第2章の2.1節を参照されたい)。日中間で肯定形・否定形によって表現形式の丁寧度が逆転する現象は、本論文で検討した限りでは、狭義の依頼表現と改善要求表現が共通している。表現形式の丁寧度を上げた先行研究のうち、改善要求表現に絞った研究が見当たらないため、ここでは、広義の依頼表現の丁寧度に関する先行研究を挙げる。

現と否定疑問文を用いた依頼表現の丁寧度が言語によって逆転する現象の原因、メカニズムを探った研究として、荻野(2012)が挙げられる。

荻野(2012)は、日英間でP依頼とN依頼（つまり、肯定疑問文を用いた依頼表現と否定疑問文を用いた依頼表現）の丁寧さを逆転させるメカニズムは「否定疑問文に対する返答の視点差異」と「<依頼>の基幹にある視点差異」によるものであると指摘している。

(5) a 「電話に出てくれない／もらえない？」 「(うん、) ちょっと無理かな。」

(荻野 2012:22)

b 「電話に出てくれる／もらえる？」 「(いえ、) ちょっと無理かな。」 (作例)

(5)で示した例のように、日本語では、N依頼の場合、断り手が「依頼を断る」と判断した場合、依頼者が提示してきた「電話に出ない」という事象に当てはまるため、依頼者に対して同意の立場の下で<断り>を発話すること（つまり、【YES+否定文】）になる。一方、P依頼の場合、断り手が「依頼を断る」と判断した場合、依頼者が提示してきた「電話に出る」という事象に当てはまらず、依頼者に対して反対の立場の下で<断り>を発話すること（つまり、【NO+否定文】）になる(荻野 2012)。

荻野 (2012:23)によれば、「依頼者に反対の立場で断りを行うことは、その断りを『断り手単独の見解』として表すため、『断り手が依頼者の face を脅かす』という構図が鮮明となる。それと比べると、依頼者に同意の立場で断りを行うことは、あたかも、その断りが『依頼者と断り手双方の見解』であるかのように表すため、『断り手が依頼者の face を脅かす』という構図が不鮮明化され、(中略)、同じ<断り>でも、依頼者に反対の立場の下で行う<断り>よりも発話しやすい」。つまり、P依頼よりN依頼の方がより丁寧であるということである。

この方法論は、日本語では問題がないように見えるが、中国語で検証してみると明らかに矛盾が生じる。

(6) a 你不能接一下电话吗? 是的, 我不能。 (N依頼: 【YES+否定文】)

筆者訳: ちょっと電話に出られませんか。はい、出られません。

b 你能接一下电话吗? 丕, 我不能。 (P依頼: 【NO+否定文】)

筆者訳: ちょっと電話に出られますか。いいえ、出られません。

(6)に示したように、日本語と同様に、中国語では、N依頼の場合は【YES+否定文】の

パターンで、P 依頼の場合は【NO+否定文】のパターンで<断り>を発話する。荻野(2012)の分析に従えば、N 依頼の(6a)は依頼者に同意の立場で断りを行うことができるため、相手に断り易さを提供し、P 依頼の(6b)より丁寧であることになる。しかし、事実はその推論結果と正に反対で、中国語ではP 依頼の(6b)がN 依頼の(6a)より丁寧である。

また、英語では(7)で示したように、P 依頼、N 依頼を問わず、【NO+否定文】のパターンで<断り>を発話する。

(7) a “Can’t you answer the phone?” “(No,) I can’t.” (荻野 2012:22)

b “Can you answer the phone?” “(No,) I can’t.” (作例)

以上のことから、中国語と英語においては、P 依頼、N 依頼の丁寧度が、「依頼者に同意の立場で断りを行うことができる」かどうかに関わらず<sup>7</sup>、言語間でP 依頼とN 依頼の丁寧さを逆転させるメカニズムは「否定疑問文に対する返答の視点差異」には関わっていないのではないかとと思われる。

依頼者に同意の立場で断りを行うことができるため、N 依頼がP 依頼より丁寧であるという論説が解釈可能となるのはむしろ日本語の特色であり、もし荻野氏の論説が正しいのであれば、それは日本語の依頼構文が中国語、英語の依頼構文と性質的に異なるものであることが示唆されるのではないかと考えられる。そのため、P 依頼、N 依頼の丁寧度が逆転するメカニズムを明らかにするためには、まず依頼構文がどのように構成されているのか、言い換えれば、依頼表現の構文的特徴を明らかにする必要がある。

依頼構文の特徴について、荻野(2012)の研究では、「英語では、can/could や will/would の法助動詞を用い、聞き手の能力もしくは意思という客観的物事の有無を問うことで依頼を行う。一方、日本語では、授受補助動詞「くれる」「もらう」などを用いて表現され、依頼者が、自分が欲する当該の物や行為の有無のみならず、それに付随する恩恵という精神的物事の有無を問うことで依頼を行う<sup>8</sup>」と述べている。日英間のP 依頼、N 依頼の丁寧度の逆転現象が上記した<依頼>の基幹にある視点差異に深く関わっていると指摘している。

本論文は荻野(2012)の「<依頼>の基幹にある視点差異」から言語間のP 依頼、N 依頼

<sup>7</sup> この点に関しては、荻野(2012:23-24)の以下の論述からも理由付けられる。「英語においては、(中略)、肯定/否定疑問文で返答方法に差異がなく、依頼を断る場合は相手に反対の立場の下で断りを行うしかない。日本語でみた【YES+否定文】という断りは文法的に存在しないため、N 依頼による断りの容易化(相手の negative face 擁護)というストラテジーは存在しないのである。」(下線は筆者による)

<sup>8</sup> 荻野(2012:24)から一部抜粋。

の丁寧度が逆転するメカニズムを探求する点に対して、賛成の立場を取るが、その研究をさらにもう一步深め、視点差異の背後に存在する言語主体の認知レベルでの営みを明らかにすれば、言語間のP依頼、N依頼の丁寧度が逆転する現象だけではなく、授受関係の明示・非明示によって表現形式の丁寧度が変わる現象、恩恵・利益の受け手である話者のことを言語化する必要があるかどうかと言語によって変わるなどの現象のメカニズムも明らかになるのではないと思われる。

そこで、本章では、改善要求発話の【主要行為部】に用いる表現形式に注目し、「事態把握」という認知的アプローチから改善要求表現の日中対照を行い、①日中両言語の配慮の示し方の相違、②肯定形・否定形によって表現形式の丁寧さが逆転する現象のメカニズム、③授受関係の明示と表現形式の丁寧さとの関わり、という3つの課題を検討する。

第3章で言及したように、「事態把握」というのは、発話者による言語化に先行すると想定される、言語化しようとする<事態>に対して、どのように把握し言語化を行うかという認知レベルでの営みのことである。「事態把握」には、「どこに視座を据えて把握しようとするのか」、「どの部分を前景化し、どの部分を背景化するのか」、「どの程度の抽象度のレベルで把握するのか」、「<コト>を<コト>として把握するのか、<モノ>として把握するのか」、「直接的に言及するのか、参照点を介して間接的に言及するのか」など、様々な課題がある<sup>9</sup>が、本章では、「言語主体(=認知主体)がどこに視座を据えて事態を把握しようとするのか(以下、「空間認知」とする<sup>10</sup>)」という角度から、改善要求表現を分析する。

### 5.3 日中改善要求発話の【主要行為部】に用いられる表現形式

改善要求表現にはどのような人間のものの見方が反映されているのかを分析する前に、まず、日中改善要求発話の【主要行為部】(つまり、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」を言語化した部分)にどのような表現形式が使われているかを示す<sup>11</sup>。

<sup>9</sup> 「事態把握」に関する論述は池上(2011a)を参考にした。

<sup>10</sup> 本論文で言う「空間認知」とは、認知主体(=話者)と認知対象(=出来事、事態)との空間的な位置づけのことである。「空間認知」に関しては、第3章の3.2.1節を参照されたい。

<sup>11</sup> 「主要行為部」の認定基準に関する詳細内容は、第4章の4.4.1節を参照されたい。なお、「すみません、夜うるさくて、眠れないのですが…」のような、事象Ⅲの「話者が聴者に改善して欲しいと伝えること」が言語化されず、改善要求発話の主要行為部が省略された発話例があるため、表5-1と表5-2に示す改善要求表現の総数は、第3章の表3-3に示した有効データ数とずれているところがある。

表 5-1 日本語話者の改善要求表現の文型と実数

場面 1		場面 2		場面 3	
文型	実数	文型	実数	文型	実数
～てもらってもいいですか。	2	～てくれない。	3	～てもらえませんか	3
～てもらえませんか。	1	～てくれないかな。	2	～てもらえますか	3
～てもらえますか。	1	～てもらっていい。	2	～てもらってもいいですか	1
～いただけませんか。	1	～てもらってもいいかな。	1	～て欲しい	1
～てもらいたいんですが…	1	～てね。	1	合計	8
～てもらえると助かります。	1	～てよー	1	/	
～てもらえると助かるんですが、いいですか。	1	～て。	1		
～てください。	1	合計	11		
～てお願いしてもいいですかね。	1				
合計	10				

表 5-2 中国語話者の改善要求表現の文型と実数

場面 1		場面 2		場面 3	
文型	実数	文型	実数	文型	実数
能不能～?	3	(你) 能不能～?	2	(你) 能～吗/么?	5
你/咱能～吗?	3	你可以～吗?	1	可以请你～吗?	1
能否～? 请你体谅一下、尽量不要～	1	能～吗?	1	能否～?	1
可以～吗?	1	咱能～不?	1	请(你)～	3
你可不可以～、希望你们不要～	1	～吧	2	小声点	2
能不能麻烦你们～	1	别～(了)	2	麻烦～	1
请你可不可以别～	1	请你～/请～吧	2	拜托～行吗?	1
别～了、～吧!	2	拜托你们～吧	1	～行么	1
请你别～好吗?	1	～好不好?	1	别～了	1
请你们～好吗?	1	不要～、好不? 拜托啦!	1	合計	16
别～了	1	早点睡觉	1	/	
不要～了	1	打电话可以早一点	1		
合計	17	合計	16		

※ 場面 1：隣に住んでいる親しくない同級生が騒音を立てた。

場面 2：隣に住んでいる親しい友達が騒音を立てた。

場面 3：映画館で見知らぬ人が騒音を立てた。

(場面設定の詳細内容は、第 3 章の 3.3 節を参照されたい。)

表 5-1 は DCT 調査により収集した日本語話者の改善要求表現の文型と実数である。場面 1 と場面 3 において、授受補助動詞「～てもらう」の活用形「～てもらえる」「～てもらってもいい」「～てもらいたい」などを用いた文型を多用している。一方、場面 2 においては、「～てもらう」より「～てくれる」の活用形を用いた文型が多用されていることが分かる<sup>12</sup>。また、授受補助動詞を用いた文型以外に、直接指示を出す「～てね」「～てよー」「～て」などの文型も使用されている。

表 5-2 は DCT 調査により収集した中国語話者の改善要求表現の文型と実数である。複数の文型が使われており、豊富なバリエーションが見られるが、“能不能～（～できませんか）” “可不可以～（～できませんか）” “能否～（～できませんか）” “能～吗（～できますか）” “可以～吗（～できますか）” など、能願動詞<sup>13</sup> “能” “可以” を用いた文型が多用されているのが見られる。

本章では、疑問形式による改善要求表現の中から、日本語の「～てくれる?」「～てもらえる?」<sup>14</sup>と中国語の“你能～吗?” “麻烦你能～吗?”<sup>15</sup>に絞って、分析を進める。「話者」と「聴者」どちらが主格の位置に立つかによって、上記の表現は以下の 2 つのグループに分けられる。

I : 聴者が主格(動作主) 「～てくれる?」と“你能～吗?”

II : 話者が主格(使役主体) 「～てもらえる?」「麻烦你能～吗?”

以下、グループごとに分析を進める。

<sup>12</sup> この傾向は、天野(2013)にも指摘されている。「相手に具体的な改善行動を指示するなどの形式を用いる《改善要求》によって改善要求をする際、相手との関係性が遠くなるにつれ、決定権を自分から相手へと譲渡していく、また相手に積極的な返答を求めないような形式を選択していく傾向がみられる。具体的には、<命令><依頼:くれる系><助言><依頼:モラウ系><願望表出>という順で、関係性が近い相手から遠い相手へと形式を選択していく。」(天野 2013:151)

<sup>13</sup> 「能願動詞」は「認定助動詞」とも言う。「主に動詞の前に立って、願望、意欲、当為、許可、可能性など認定を表す言葉をさす」(藤堂・相原 1985:119)。

<sup>14</sup> 「～てくれる/くれない?」、「～てくれますか/くれませんか?」、「～てくださいますか/くださいませんか?」、「～てもらえる/もらえない?」、「～てもらえますか/もらえませんか?」、「～ていただけますか/いただけませんか?」など、授受補助動詞を用いた、疑問形式による改善要求表現のことを指す。「普通体・丁寧体・敬体」や「肯定形・否定形」などの形式的レベルの変化が事態把握の類型に影響を与えないため、記述の便宜上、それらを一括して肯定形・普通体の「～てくれる?」「～てもらえる?」で代表させる。

<sup>15</sup> “能”の他には“可以”という能願動詞も使用可能である。例えば“你可以安静一点吗?(あなたはちょっと静かにできますか。)”。“可以”より“能”の方が使用範囲が広いという指摘があるが、本章の主たる目的は、能願動詞を用いた中国語構文と求心的な授受補助動詞を用いた日本語構文との認知レベルの仕組みの相違を検討することであるため、記述の便宜上、“可以”と“能”を一括して、“能”で代表させる。また語用論的条件によって否定形の“不能”“不可以”および正反疑問形式の“能不能”“可不可以”も使用可能である。肯定形・否定形・正反疑問形などの形式的レベルの変化が事態把握の類型に影響を与えないため、記述の便宜上、それらを一括して肯定形の“你能～吗?” “麻烦你能～吗?”で代表させる。

## 5.4 「～てくれる?」と“你能～吗?”の比較対照

### 5.4.1 事態把握の観点から

第3章で述べたように、事態把握には、「認知主体である話者が言語化の対象となる事態・現場の中に視座を据え、経験者として事態を把握するタイプ」と「認知主体である話者が言語化の対象となる事態・現場の外に視座を据え、傍観者の視点から事態を把握するタイプ」という2つの基本類型がある。研究者によって強調する側面が異なり、様々な用語が用いられているが、本章では、「認知モデル」と「事態把握の仕方」の面から、改善要求表現を考察するため、中村(2004)の「Iモード・Dモード」という用語と池上(2004, 2005a, 2005b, 2006, 2011a)の「主観的把握・客観的把握」という用語を用いる。

日本語の「～てくれる?」を用いた改善要求表現と中国語の“你能～吗?”を用いた改善要求表現には、言語主体がどのような事態把握の仕方を用いているのだろうか。以下、「認知モデル」と「事態把握の仕方」の面から分析を進める。

#### (8) 静かにしてくれる?

(8)に示したように、日本語では、授受補助動詞「～てくれる」を用いて、話者の改善要求に対して聴者が協力する意志があるかを問う形で、改善を行うよう働きかけることがある。

(8)では、主格名詞と与格名詞が省略されているが、復元してみると「(あなたが私に)静かにしてくれる/くれない?」となる。主格名詞が二人称の「あなた」であることから、言語主体の着眼点が聴者の改善行為に置かれている(つまり、言語化する事態は「聴者が改善行為をすること」である)ことが示唆される。求心的な授受補助動詞「てくれる」を用いることによって、話者が恩恵・利益の受け手として聴者の改善行為に関与し、言い換えれば、話者が恩恵・利益の受け手として言語化する事態に身を置いている。しかし、恩恵・利益の受け手である話者が<ゼロ>化され、言語化はされていない。これは、「事態の内に身を移した話者がそのまま認知の主体として振舞う。その際、認知の主体として特徴的に自己中心的に事態把握をする話者にとっては、自身は自らの<見え>に入らない(従って、<ゼロ>として言語化される)」(池上 2011a:53)からである。

上記のように、事態把握の観点から見ると、「～てくれる?」を用いた改善要求表現には、話者が言語化する事態の中に自らの身を置き、事態(=聴者が改善行為をすること)が自分とはどのような関係にあるのかを考慮しながら言語化を行うことが窺われる。すなわち、

認知主体が認知の場の中に視座を据え、主観性に根ざす認知モデルである I モードにより、  
 <主観的把握>で事態を捉えている。「～してくれる？」を用いた改善要求表現のイメージ  
 を示すと、図 5-1 のようになる。

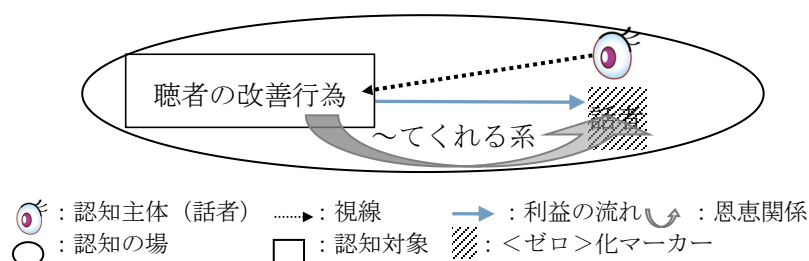


図 5-1 事態把握の観点から見た「～してくれる？」のイメージ

この図で、外側の楕円は認知の生じる場、すなわち認知の場である。**聴者の改善行為**は  
 言語化する事態、すなわち認知対象である。認知主体としての話者と認知対象である事態  
 との間に生じる恩恵・利益の授与関係を→と↪で示している。

次は、“你能～吗？”を用いた改善要求表現について分析する。(9)に示したように、中  
 国語では、能願動詞（願望、可能性を表す助動詞）“能”を用いて、聴者が改善行為をす  
 ることが可能かどうかを問う形で、改善を行うよう働きかけることがある。

(9) 你能安静一点吗？

筆者訳：(あなたは)少し静かにできますか。

(9)では、文の主格名詞が二人称の“你”であることから、言語主体の着眼点が聴者の  
 改善行為に置かれている（つまり、言語化する事態は聴者が行う改善行為である）ことが  
 示唆されている。“你能～吗？(あなたは～できますか)”は、聴者が改善行為をすること  
 ができるかどうかを尋ねるもので、話者が言語化する事態(=聴者が改善行為をすること)  
 とどのような関係にあるのかについては言及されていない。話者は舞台の外に立っている  
 観客のような存在で、言語化する事態(=聴者が改善行為をすること)とが完全に分離し、  
 相互に自立した存在である。

上記のように、事態把握の観点から見ると、“你能～吗？(あなたは～できますか)”を  
 用いた改善要求表現では、言語主体である話者が言語化する事態の外にあって、あたかも  
 傍観者であるかのように、事態(=聴者が改善行為をすること)が自分とはどのような関係  
 にあるのかを考慮せず、言語化を行っている。すなわち、認知主体が脱主体化によって認



知の場の外に出るDモードにより、＜客観的把握＞で事態を捉えている。“你能～吗?”を用いた改善要求表現のイメージを示すと、図5-2のようになる。

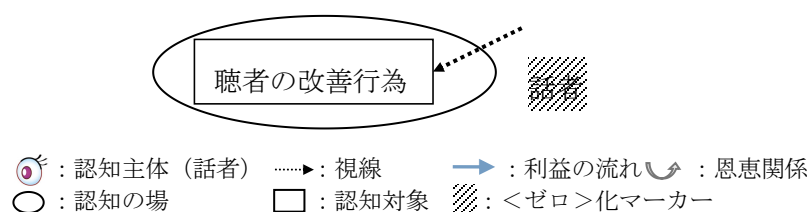


図5-2 事態把握の観点から見た“你能～吗?”のイメージ

改善要求行為においては、本来第2章で述べた改善要求行為の語用論的条件<sup>16</sup>(①話者が聴者に何らかの行為を行うよう求める、②その行為が実現されれば話者に利益がある)が示すとおり、聴者が改善行為をすることに伴い、話者と聴者の間に利益の授受関係が生じるが、“你能～吗”を用いた改善要求表現では、この利益の授受関係が捨象され、言語化されていない。

#### 5.4.2 配慮の示し方

前節の分析から、日本語の「～てくれる?」を用いた改善要求表現では、話者(認知主体でもある)が恩恵・利益の受け手として、言語化する事態(=聴者が改善行為をすること)に関与し、主観性に根ざす認知モデルであるIモードにより、＜主観的把握＞で事態を捉え、言語化している。一方、中国語の“你能～吗?”を用いた改善要求表現では、話者が言語化する事態(=聴者が改善行為をすること)に関与せず、認知主体が脱主体化によって認知の場の外に出て、あたかも外から客観的に眺めるような視点を取るDモードにより、＜客観的把握＞で事態を捉え、言語化していることが分かった。こうした事態把握の仕方における相違が、「～てくれる?」と“你能～吗?”を用いた改善要求表現の配慮の示し方にどのような影響を及ぼしているのだろうか。

以下、「～てくれる?」と“你能～吗?”を用いた改善要求表現の配慮の示し方を考察した上で、事態把握の仕方と配慮の示し方との関わりを検討する。

<sup>16</sup> 「語用論的条件」とは、命題内容や発話状況など、発話行為が成り立つための必須条件のことである。改善要求行為の語用論的条件に関しては、第2章の2.1節を参照されたい。

#### 5.4.2.1 「～てくれる?」の場合

久野(1978)では、授与動詞の視点制約について、「『クレル』は、話し手の視点が、主語(与える人)よりも与格目的語(受け取る人)寄りの時にのみ用いられる」と述べ、補助動詞としての「クレル」の視点制約は、独立動詞としての「クレル」と極めて類似している(すなわち、話し手の視点が、主語よりも与格目的語寄りである)という見解を示している。また、澤田(2014)は、「『くれる』が動作主を含む行為動詞でありながらも、『動作主の授益』ではなく『話し手の授益』に焦点を当てた授与動詞」と述べている。そこで、授受補助動詞「～てくれる」を用いた改善要求表現では、話者が問いかげの焦点を「聴者の改善行為」ではなく、「話者の授益」に当てていると思われる。

(10) a ? 静かにする?しない?

b 静かにしてくれる?くれない?

例えば、(10a)に示したように、授受補助動詞「～てくれる」を使用していない場合、問いかげの焦点が「改善行為をするか否か」に当てられ、聴者が改善行為をする意志があるかを直接聞くことになる。

一方、(10b)は、授受補助動詞「～てくれる」を用いることで、問いかげの焦点が「話者の授益の有無」に当てられ、話者があたかも自分の話題(恩恵・利益の有無)について問いかけているかのように、「聴者が改善行為をする意志があるかを問う」という意味を希薄化させており、(10a)に比べると、聴者が持つ「他者に邪魔されたくない」という行動の自由を脅かす度合いが低い。

また、「～てくれる」は求心的な授受補助動詞で、恩恵性を伴う授益標識でもある。話者が「～てくれる」を用いることによって、聴者の改善行為が自分にとってはありがたい行為であることを示している。言い換えれば、「～てくれる?」を用いた改善要求表現では、話者が聴者に改善行為をするよう働きかけると同時に、聴者の改善行為が自分にとっては恩恵・利益をもたらす行為で、聴者の改善行為への肯定的評価や謝意を表している。肯定的評価や謝意を表すことが、聴者の「他者によく思われたい、好かれたい」というポジティブ・フェイスを尊重する姿勢を示すことができる。

以上のことから、「～てくれる?」を用いた改善要求表現では、求心的な授受補助動詞「～てくれる」を用いることによって、話者が以下の2つの面から表現形式の丁寧度を上げようとしていることが明らかとなった。

- 1) 問いかけの焦点を自分の話題に当てることによって、聴者が持つ「他者に邪魔されたくない」という行動の自由(あるいは、ネガティブ・フェイス)を脅かす度合いを軽減する。
- 2) 聴者の改善行為への肯定的評価や謝意を表すことによって、聴者が持つ「他者によく思われたい、好かれたい」というポジティブ・フェイスを尊重する姿勢を示す。

#### 5.4.2.2 “你能～吗?” の場合

“你能～吗?” を日本語に直訳すると、「あなたは～できますか。」となる。能願動詞(可能、願望などを表す助動詞)“能”を用いて、聴者が改善行為を実現することが可能かどうかを問う表現である。

奥田(1986:190)は、「ある動作・状態の実現の可能性が能力ととりまく条件との相互作用のうえになりたつ」と指摘している。改善行為を実現することが可能かどうかを問う“你能～吗?”は、聴者が改善行為を実行する主体的な条件(意志と能力)が揃っているかどうか(いわゆる「能力可能」<sup>17)</sup>)を問うと同時に、意志と関係のない客観的な条件により可能かどうか(いわゆる「条件可能」<sup>18)</sup>)を問うのである。

この「客観的な条件により可能かどうか」という含意が、聴者に理由説明、弁解する余地を与える。言い換えれば、例えば、何らかの事情があり、やむを得ず騒音を立てた場合、改善して欲しいと言われた時、聴者が事情を説明するなど、自分が故意に騒音を立てたのではなく、やむを得ず、あるいは知らないうちに、騒音を立てたことを弁明することができる。

例として、次の中国語母語話者の騒音場面での改善要求会話(ロールプレイ調査により収集した資料<sup>19)</sup>)の断片を参照されたい。AとBは大学に入ったばかりの新生同士(男性、ともに19歳)である。場面設定は、Bは最近よく夜遅くまで友達とおしゃべりをしている。隣に住んでいるAはうるさくてこの一週間あまりよく眠れていないという状況である。

(前略)

A: 哎, 你好, 那个, 我是在你隔壁住的。同学, 你是不这周经常聊天聊得很晚啊。

<sup>17</sup> 「能力可能」とは、「主体のもつ能力によってある動作を実現することが可能である」(渋谷 1993:5)ということである。

<sup>18</sup> 「条件可能」とは、「主体の外の状況に主体が動作を行うことを妨げるような条件がないためにその動作を実現することが可能である」(渋谷 1993:5)ということである。

<sup>19</sup> 付録Ⅲを参照されたい。

(あのう、こんにちは、隣に住んでいる者です。今週、よく遅くまでおしゃべりをなさってますよね。)

B: 哦。(はい。)

A: 声音还挺大的。(お声がちょっと大きいんですが。)

B: 哦，哦，吵到你了？(ああ、うるさかったですか?)

A: 对对对，我这周都没睡好。你以后能不能小点声？(はい、今週よく眠れなかったんです。これから、声を少し小さくすることは可能ですか) ⇒ **話者 A が騒音状況を改善**

**して欲しいと伝える**

B: 哦，对不起，真是对不起。那个，那个(ああ、すみません、本当にすみません。あの、あの)

A: 呃(うん)

B: 那个，刚来这个学校，和同学联系得比较多。(あの、この学校に来たばかりで、同級生とたくさん連絡を取っていたもので。) ⇒ **話者 B が騒音を立てた事情を弁明**

A: 哦，那个，没事，以后多注意点。(ええ、あの、大丈夫です。これから気を付けていただければ)

B: 哦，注意注意，我注意。(はい。気をつけます、気をつけます。)

(後略)

話者 A の“你以后能不能小点声？(これから、声を少し小さくすることは可能ですか。21)”という改善要求に対して、話者 B はまず“对不起，真是对不起(すみません、本当にすみません)”と謝ってから、“刚来这个学校，和同学联系得比较多。(この学校に来たばかりで、同級生とたくさん連絡を取っていたもので)”という事情を説明し、自分が故意に騒音を立てたのではなく、学校に来たばかりで、同級生とたくさん連絡を取っていたので、知らないうちに近所の人に迷惑をかけてしまったことを弁明している。

以上のことから、“你能～吗?”を用いた改善要求表現では、能願動詞“能”を用いることによって、話者が以下の2つの面から表現形式の丁寧度を上げようとしていることが明らかとなった。

<sup>21</sup> 「これから、声を少し小さくしてもらえませんか」とか「これから、声を少し小さくしていただくことは可能でしょうか」の方は、より日本語らしい訳し方であるが、中国語の“你能～吗?/你能不能～?”では、話者が言語化する事態(=聴者が改善行為をすること)に関与してないため、ここでは、敢えて日本語訳に「～てもらえませんか」や「～ていただく」などの授受補助動詞を使用していない。

- 1) 「するかしないか」を問うのではなく、「できるかできないか」を問うことによって、聴者が改善行為をする意志があるかを直接問うのを避け、聴者が持つ「他者に邪魔されたくない」というネガティブ・フェイスを脅かす度合いを軽減する。
- 2) 「行為が実現できるかどうか」には、「動作主の主體的な条件(意志や能力)により可能かどうか」と「客観的(つまり、外在的)な条件により可能かどうか」という2つの意味が含まれているため、改善行為を実現することが可能かどうかを問う“你能～吗?”は、聴者に「客観的な事情によって行為が実現不可能」という理由説明や弁解する余地を与え、要求行為の押し付けがましさを緩和する。

#### 5.4.2.3 日中間で配慮の示し方の相違

前節の分析から、中国語では、能願動詞“能”を用いた可能表現は、「改善行為をする意志があるかを直接聞くのを避ける」と「相手に理由説明や弁解の余地を与える」という2つの面から相手への配慮を示し、丁寧な改善要求表現として用いられることが分かった。

実は、可能表現が行為指示のための一種の丁寧表現として、日本の一部の地域(山形県山形市、愛媛県新居浜市など)で、許可・禁止表現として慣用的に用いられていることも報告されている(渋谷 1993)。

渋谷(1993:54)によると、「話し手がある行為を行うことを聞き手に要求するということは、聞き手に行為を押し付けることになって聞き手のメンツを潰すことになる。そこで話し手自身が実質的には行為を指示することにコミットしながらもあくまでコミットしていないかのように振舞うことのできる表現があれば望ましい。それを用いることによって相手のメンツを潰す押し付けがましさを取り除くことができるからである。そのような目的にかなう都合のいい表現が、権力者が話し手に限られる必要のない可能表現」である。

- (11) 君は仕事を終えたのだから家に帰ることができるよ(帰ってもいいよ)。⇒許可
- (12) 君は仕事を残しているのだからまだ家に帰ることはできないよ(帰ってはいけないよ)。⇒不許可
- (13) 芝生には入れません(入ってはいけません)。⇒禁止

(渋谷 1993:49-50)

しかし、日本語において可能表現が行為指示のための一種の丁寧表現として用いられるのは、(11)(12)(13)に示したような、許可、不許可、禁止などの行為に限られるのである(し

かも、慣用的に用いられるのは一部の地域だけである)。改善要求や依頼のような要求行為においては、可能表現の持つ「行為指示の押し付けがましさを取り除く」という機能的な側面が慣用化されていない。例えば、「ちょっと、静かにできない?」「もうちょっと静かにできないの?」「お前はもうちょっと静かにできないのか!?»のような改善要求表現は、苛立ちなどの否定的感情を強く感じるため、限られた場面でしか用いることができない。

また、中国語の“你能~吗?”は可能形式で表しているが、なぜ日本語の「~てくれる?」構文には可能形式「くられる」が用いられないのか、という疑問を持つ学習者が多いようである。授受補助動詞「てくれる」が可能の形式を取らない理由については、山田(2004)は以下のように述べている。求心的な方向を持ち、主語に非一人称を取るという人称制限を持つ「てくれる」は、主体性の低いものと考えられる。このような主体性の低さが寺村(1982)に指摘されている「可能形を取ることのできる動詞は、意志的な動作でなければならない」という可能との共起制限に違反するものと捉えられていると考えられる。それ故、授受補助動詞「てくれる」には、可能の形式を取った「くられる」という活用形がないのである(山田 2004:261-263 から一部抜粋)。

上記のように、授受補助動詞「てくれる」は、恩恵・利益の授受を表す要素で、本動詞の動作主の意志を捨象する機能を持っていない。「~てくれる?」を用いた改善要求表現では、話者があたかも自分の話題(恩恵の有無)に焦点を当て、聴者に改善行為をするよう働きかけているが、その文自体は聴者が改善行為をする意志があるかを問うものである。

一方、中国語の能願動詞(願望、可能性を表す助動詞)“能”は、“能”の後ろに来る動詞の動作主の意志を捨象することができる。“你能~吗?(あなたは~できますか。)”を用いた改善要求表現では、聴者が改善行為をする意志があるかを問うのではなく、その行為を実現することができるかどうかを問うことによって、聴者に改善行為をするよう働きかけているのである。

以上のことから、「~てくれる?」と“你能~吗?”を用いた改善要求表現には、以下のような配慮の示し方の相違が見られる。

主観性に根ざす認知モデル(Iモード、<主観的把握>)により言語化された日本語の疑問形式による改善要求表現では、求心的な授受補助動詞「~てくれる」を用いて、話者が問いかけの焦点を自分の話題に当てることによって、聴者が持つ「他者に邪魔されたくない」という行動の自由(ネガティブ・フェイス)を脅かす度合いを軽減するとともに、聴者の改善行為への肯定的評価や謝意を表すことによって、聴者が持つ「他者によく思われたい、

好かれない」というポジティブ・フェイスへの配慮を示している。

一方、外置の認知モード(Dモード、＜客観的把握＞)により言語化された中国語の疑問形式による改善要求表現では、話者が動作主の意志性を捨象できる能願動詞“能/可以”を用いて、「するかしないか」を問うのではなく、「できるかできないか」を問うことによって、聴者が改善行為をする意志があるかを問うのを避けるとともに、聴者に「客観的な事情によって行為が実現不可能」という理由説明や弁解する余地を与え、改善要求行為の押し付けがましさを緩和させることによって、聴者が持つ「他者に邪魔されたくない」という行動の自由(ネガティブ・フェイス)への配慮を示している。

#### 5.4.3 肯定形・否定形による逆転現象

本章の冒頭でも触れたように、疑問形式による改善要求表現において、日本語では、肯定疑問文より否定疑問文の方がより丁寧である。それとは反対に、中国語では、否定疑問文より肯定疑問文の方がより丁寧である。日中間でなぜこのような逆転現象が発生するのだろうか。この逆転現象が5.4.1節で考察した「～てくれる?」と“你能～吗?”における事態把握の仕方とどのように関わっているのだろうか。

本節では、5.4.1節と5.4.2節の分析結果を踏まえ、「～てくれる?」と“你能～吗?”に反映されている話者の判断の様相を分析し、肯定形・否定形によって日中改善要求表現の丁寧さが逆転する現象のメカニズムを検討する。

##### 5.4.3.1 「～てくれる?」に反映されている話者の判断の様相

安達(1999:4)では、「話し手は疑問文を使って相手から何らかの情報を引き出そうとするのであるが、その場合に、無条件に情報を引き出しているわけではない。話し手は一種の「解答案」を提示して、それに対する反応というかたちで情報を得るという手続きを踏む」と指摘している。言い換えれば、疑問文は聴者から情報を引き出すことを目的としている文ではあるが、疑問文には、話者の判断の様相(例えば、「話者は聴者の知識についてどのような仮定をしているか」、「解答案としての情報がどのようにして得られたのか」、「話者自身はその情報をどのように評価しているのか」など)も反映されている。

- (14) ○奥さんといっしょにご飯食べててもね、値動きが気になって、話半分ということ  
はないですか。

- あります、あります。どうしてもふっと考えてしまうんです。よく怒られますよね。いま私が喋ったことをもう一回リピートしてみろとかね。答えられなくて…  
…。(猪瀬直樹『日本凡人伝 今をつかむ仕事』<sup>22</sup>)

例えば、(14)では、話者はそれまでの相手の話から「食事中仕事のことが気になって奥さんとの会話に集中できない(だろう)」ということ推論しており(すなわち、一種の「解答案」を提示して)、そのような事態の有無を聴者に問い掛けていると考えられる(安達1999)。

前文で述べたように、主観性に根ざす認知モデル(Iモード、<主観的把握>)により言語化された「～てくれる？」を用いた改善要求表現では、問いかけの焦点が「話者の受益の有無」に当てられ、話者があたかも自分の話題(恩恵・利益の有無)について問いかけているかのように、聴者に改善行為をするよう働きかけている。肯定形の「～てくれる？」を用いた改善要求表現と否定形の「～てくれない？」を用いた改善要求表現において、話者がそれぞれどのような推論をして(すなわち、どのような「解答案」を提示して)、恩恵・利益の有無を聴者に問い掛けているのだろうか。以下、この課題について検討してみたい。

寺村(1979)によると、「～てくれる」構文の否定辞は「外の否定」と「内の否定」に分けられる。「利益の授受行為自体についての否定は補助動詞の外側の否定となり、授受の内容である行為の作為・不作為は内側の、つまり前の動詞の否定形となる」ことが指摘されている。

(15)a トメテクレルナ、オッカサン。

b トメナイデクレ、オッカサン。(寺村 1979:212)

例えば、(15a)の否定辞「ない」は、補助動詞「～てくれる」を否定した「外の否定」であり、(15b)の否定辞「ない」は、本動詞「とめる」を否定した「内の否定」である。

以上のように、統語論的に「～てくれない」の「ない」は、授受補助動詞「～てくれる」を否定する要素で、「～ないでくれる」の「ない」は、本動詞が表すコト(あるいは「事象」)を否定する要素であると考えられる。

寺村(1979)の主張に沿い、本章の冒頭で取り上げた(1)の例文の統語構造を分析してみると、次のようになる。

<sup>22</sup> 安達(1999:52)より引用、下線は原文のままである。



(16) a 静かにしてくれる。  
(命題) (ムード)

b 静かにしてくれない。(否定辞の「ない」はムードの否定)  
(命題) (ムード)

(16)に示したように、否定形を用いた「静かにしてくれない」では、否定辞の「ない」は「外の否定」、つまり、「ムードの否定」を表している。「～てくれる?」を用いた改善要求表現の統語構造を一般化すると、(17)のようになる。

(17) a 肯定疑問文： 聴者の改善行為 + てくれる  
(命題) (ムード)

b 否定疑問文： 聴者の改善行為 + てくれない  
(命題) (ムード)

しかし、「～てくれない」の否定辞「ない」は、統語論的には、利益の授受行為自体についての否定であり、補助動詞「～てくれる」だけを否定した「外の否定」(＝ムードの否定)であるが、意味論的には、本動詞が表しているコト(事象)にも浸透すると澤田(2005)は指摘している。

澤田(2005:29)は「『～てくれない』の『ない』が表す否定性が、『～てくれる』に留まることなく、『～てくれる』が包み込む事象の内部にも浸透する」と指摘し、例えば、「花子は明日まで出発してくれないそうだ」において、もし事象(＝花子が明日までに出発する)が否定されていないと分析するならば、「～まで」が事象内部に生起している理由が説明できないため、事象(＝花子が明日までに出発する)も否定されていると分析しなければならないと述べている。

以上のことから、否定疑問文を用いた改善要求表現の場合、統語論的には、否定辞の「ない」は「外の否定」であり、「ムード」だけを否定する要素であるが、意味論的には、「～てくれる」が包み込む事象の内部にも浸透し、命題の「聴者が改善行為をすること」も否定されていると考えられる。

よって、否定疑問文を用いた改善要求表現の場合、話者が「聴者が改善行為をするという事態が発生しない(つまり、聴者が話者の改善要求を断る)」ことを一種の「解答案」として提示し、それに対する聴者の反応を求めるという形で改善行為をするよう働きかけ

ている。一方、肯定疑問文を用いた改善要求表現の場合、話者が「聴者が改善行為をするという事態が発生する(つまり、聴者が話者の改善要求を受諾する)」ことを一種の「解答案」として提示し、それに対する聴者の反応を求めるとい形で改善行為をするよう働きかけている。

このように、否定疑問文を用いた改善要求表現は、話者が改善してほしいと依頼しながらも、「行為の不生起」、すなわち、「聴者が依頼を断る」可能性を視野に入れていることを示唆している。一方、肯定疑問文を用いた改善要求表現は、話者が「行為の生起を可能なこととし」、すなわち、「聴者が依頼を受諾する」ことを前提として改善の依頼を行っている。

「聴者が依頼を受諾する」ことを「解答案」として提示した肯定疑問文に比べ、「聴者が依頼を断る」ことを「解答案」として提示した否定疑問文の方が、断りやすさを提供し、聴者が持つ「他者に邪魔されたくない」という行動の自由を尊重する配慮を示しているため、より丁寧であると思われる。

#### 5.4.3.2 “你能～吗?” に反映されている話者の判断の様相

“你能～吗?”は“是非問句(諾否疑問文)”の一種であり、「平叙文の末尾に“吗”をつければこの疑問文を作ることができる」(相原 1991:669)。例として、(18)を参照されたい。

(18)a “你能安静一点” (あなたは静かにできる) + “吗?” (疑問を表す語気助詞)

b “你不能安静一点” (あなたは静かにできない) + “吗?” (疑問を表す語気助詞)

(18)では、“你安静一点(あなたは静かにする)”の部分は「命題」で、“能(できる)”と“不能(できない)”は話者の「命題」に対する主観的判断を表す要素、すなわち「ムード」である。下記の(19)に示したように、中国語の“你能～吗?”を用いた改善要求表現では、「ムード」の“能(できる)”“不能(できない)”は「命題」の内に含まれている。

(19)a 肯定疑問文： 你<sup>能</sup>安静一点 吗? ⇒ムード：能  
(命題)

b 否定疑問文： 你<sup>不能</sup>安静一点 吗? ⇒ムード：不能  
(命題)

(19a)では、“你安静一点(あなたは静かにする)”という命題に対して、話者は“能(できる)”という肯定的態度を取っている。言い換えれば、肯定疑問文を用いた(19a)では、「聴者が静かにする」という事態に対して、話者は「あなたができる」という肯定的評価を持っている。すなわち、“你能安静一点(あなたは静かにできる)”ことを一種の「解答案」として提示し、それに対する聴者の反応を求めるといって形で改善行為をするよう働きかけている。

一方、(19b)は、一見話者が“你不能安静一点(あなたは静かにできない)”を一種の「解答案」として提示し、それに対する聴者の反応を求めるといって形で改善行為をするよう働きかけているように見えるが、実際はそうではない。

中国語では、否定形の“你不能～吗?(あなたは～できないの?)”は、諾否疑問文の形式を持っているが、実は疑問文の機能を失った反語文<sup>23</sup>である。「反語文の働きは、ある明らかな道理や事実に対して反語の語気を使ってそれを肯定または否定することによって語調を強めることにある。反語文の特徴は、否定の形をとった文は肯定的意味を強め、肯定の形をとった文は否定的意味を強めることである」(相原 1991:677-678)。よって、否定形をとった“你不能～吗?(あなたは～できないの?)”は肯定的意味を強めることになる。つまり、“你能～(あなたは～できる)”ことを強調している。

(19b)では、話者が意図的に否定形を用いることによって、肯定形の“你能安静一点(あなたは静かにできる)”ことを強調し、「静かにできるのに、なぜ静かにしないの?」という言外の意味を伝えている。(19b)は意味上、「静かにしろ」に等しい命令表現である。

以上のことから、中国語の“你不能～吗?(あなたは～できないの?)”は、疑問形式を持っているが、実際は「～しろ」に等しい命令表現である。聴者が持つ「依頼を受諾するか拒否するか」という行動の自由が奪われ、丁寧さに欠けた改善要求表現であるため、苛立ちや怒りなどの否定的感情を表出する場面でしか用いられないのである。

また、中国語では、肯定疑問文と否定疑問文以外に、(20)に示したように、述語の肯定形と否定形を重ねて作る正反疑問文という形で、聴者に改善行為をするよう働きかけることがある。

(20) 你能不能安静一点。(あなたは)静かにできますか。)

<sup>23</sup> 「反語は強調を表す1つの方法である。平叙文も各種の疑問文も、そこに反語の語気を加えることによって反語文“反语句”をつくることができる」(相原 1991:677)。

「この種の疑問文は主に述語の肯定形と否定形を並べてつくるもので、答える人はそのうちの一方を返答として選ぶ。質問者は答えに対して前もって何らの予想もしていない」と相原(1991:674)が指摘しているように、(20)では、「你安静一点(あなたが静かにする)」という命題に対して、「能不能(できる?できない?)」に示したように、話者がはっきりした判断の様相を示していなく、肯定でもない否定でもないという中立的な態度で問いかけている。

#### 5.4.3.3 逆転現象のメカニズム

5.4.3節のまとめでもあるが、「～てくれる?」と“你能～吗?”に反映されている話者の判断の様相を分析した結果、肯定形・否定形によって日中改善要求表現の丁寧さが逆転する現象の背後には、以下のメカニズムが働いていることが明らかとなった。

1)主観性に根ざす認知モデル(Iモード、<主観的把握>)により言語化された「～てくれる?」を用いた改善要求表現では、話者が求心的な授受補助動詞「～てくれる」を用いて、聴者の改善行為に対する主観的判断(すなわち、「ムード」)の様相を示している。肯定形の「～てくれる」を用いた場合、話者が恩恵を受けることを仮定し、すなわち「聴者が改善行為をする/聴者が改善の依頼を受諾する」ことを一種の「解答案」として提示し、それに対する聴者の反応を求めるという形で改善行為をするよう働きかけている。否定形の「～てくれない」を用いた場合、話者が恩恵を受けることができないことを仮定し、すなわち「聴者が改善行為を行わない/聴者が改善の依頼を断る」ことを一種の「解答案」として提示し、それに対する聴者の反応を求めるという形で改善行為をするよう働きかけている。よって、日本語では、肯定疑問文に比べ、否定疑問文は聴者に「断りやすさ」を提供する(逆を言えば、行為要求の押し付けがましさを軽減する)ことができ、聴者が持つ他者に邪魔されたくないという行動の自由への配慮が示され、より丁寧である。

2)外置の認知モード(Dモード、<客観的把握>)により言語化された“你能～吗?(あなたは～できますか?)”を用いた改善要求表現では、話者が能願動詞(願望や可能性を表す助動詞)“能”を用いて、聴者の改善行為に対する主観的判断(すなわち、「ムード」)の様相を示している。肯定形の“能(できる)”を用いた場合、話者が聴者の改善行為に対して肯定的な態度を持ち、“你能～(あなたは～できる)”を一種の「解答案」と

して提示し、それに対する聴者の反応を求めるという形で、聴者に改善行為をするよう働きかけている。否定形の“不能(できない)”を用いた場合、話者が故意に否定の形をとることによって、肯定形の“你能～(あなたは～できる)”ことを強調し、「～できるのに、なぜ～しないの?」という言外の意味を聴者に伝えている。否定形の“你不能～吗?(あなたは～できないの?)”は、疑問文の形を取っているが、意味上は「～しろ」に等しい命令表現であるため、聴者が持つ「依頼を受諾するか拒否するか」という行動の自由が奪われ、丁寧に欠けた改善要求表現になるのである。よって、中国語では、否定疑問文に比べ、肯定疑問文は聴者が持つ他者に邪魔されたくないという行動の自由への配慮が示されているため、より丁寧である。

以上のことから、疑問形式による改善要求表現の丁寧さに影響を及ぼす重要な要素の1つは、疑問文における話者の判断の様相(つまり、「話者は聴者の知識についてどのような仮定をしているか」、「話者自身は事態をどのように評価しているのか」など)であることが分かった。＜主観的把握＞により言語化した「～てくれる?」と、＜客観的把握＞により言語化した“你能～吗?(あなたは～できますか?)”において、話者の主観的判断(すなわち、「ムード」)の示し方が異なるため、肯定疑問文と否定疑問文における話者の判断の様相が日中両言語で異なり、肯定形・否定形によって日中改善要求表現の丁寧さが逆転するという現象が生じたのである。

#### 5.4.4 授受関係の明示・非明示による逆転現象

前文でも触れたように、疑問形式による改善要求表現において、日本語では、話者は言語化する事態の中に自らの身を置き、事態(=聴者が改善行為をすること)が自分とはどのような関係にあるのかを考慮しながら言語化する傾向があり、聴者との授受関係を授受補助動詞で明示化することが多い。一方、中国語では、話者は言語化する事態の外にあって、あたかも傍観者であるかのように、事態(=聴者が改善行為をすること)が自分とはどのような関係にあるのかを考慮せず言語化する傾向があり、聴者との授受関係が捨象され、言語化されないことが多い。

実は、(21)に示したように、疑問形式による改善要求表現において、日本語では、話者が言語化する事態(=聴者が改善行為をすること)に関与せず、聴者との授受関係を明示しない言い方もある。

(21)a 静かにしないか。(仁田 1987:198、原文は「静カニシナイカ。」)

b ちょっと、静かにできない?

聴者との授受関係が明示されていない(21a)は、「イントネーションが下降調で強調を伴いつつ、<命令>といった意味が派生する」(仁田 1987:198) ため、授受関係が明示された「静かにしてくれない?」に比べると、丁寧さが低い。

聴者との授受関係が明示されず、可能表現が行為要求表現として用いられた(21b)は、5.4.2.3 節で述べたように、苛立ちや怒りなどの否定的な感情を強く感じるため、丁寧さに欠けた表現で、限られた場面でしか用いられないのである。

また、(22)に示したように、疑問形式による改善要求表現において、中国語では、話者が言語化する事態(=聴者が改善行為をすること)に関与し、聴者との授受関係を明示する言い方もある。

(22) 你能<sup>给我</sup>安静一点吗?

筆者訳：(あなたは私のために)少し静かにできないのか。

“给我(私のために)”を用いて、聴者との授受関係を明示した(22)は、騒音を立てた聴者を責めるニュアンスを強く感じるため、苛立ちや怒りなどの否定的な感情を伝えたい時にしか用いられない、丁寧さを伴わない改善要求表現である。

上記のように、疑問形式による改善要求表現において、日本語では授受関係を明示した方がより丁寧であるが、それとは反対に、中国語では授受関係を明示しない方がより丁寧である。授受関係の明示・非明示によって日中改善要求表現の丁寧さが逆転するのはなぜだろうか。

本節では、事態把握のアプローチから、改善要求表現に用いる「～てくれる」と“给我”の機能を分析し、授受関係の明示・非明示によって日中改善要求表現の丁寧さが逆転する現象のメカニズムを検討する。

#### 5.4.4.1 「～てくれる」の機能

5.4.1 節で述べたように、「～てくれる?」を用いた改善要求表現は、図 5-3 に示したように、話者(=認知主体)が認知の場の中に視座を据え、事態(=聴者が改善行為をすること)が自分とはどのような関係にあるのかを考慮しながら言語化を行うものであることが窺わ

れる。すなわち、話者が主観性に根ざす認知モデルである I モードにより、＜主観的把握＞で事態(=聴者が改善行為をすること)を捉えている。

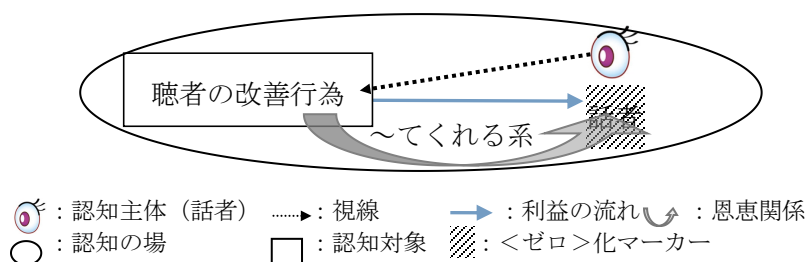


図 5-3 事態把握の観点から見た「～てくれる？」のイメージ(図 5-1 の再掲)

上記のように、「～てくれる？」を用いた改善要求表現には、事態(=聴者が改善行為をすること)だけが言語化されているわけではなく、話者と事態との関わり方も反映されている。聴者が行う改善行為が話者にとって有益な行為であるため、話者が求心的な授受補助動詞「～てくれる」を用いて、そのありがたさを表現している。

それ故、改善要求表現に用いる「～てくれる」は、動作主(=改善行為をする聴者)とその動作の向かう対象(=改善要求を表出する話者)との間に利益の授受関係が生じるという客観的な存在を表しているだけでなく、話者が「聴者が改善行為をすること」をありがたく思っている(すなわち、聴者が行う改善行為は話者にとって一種の恩恵授与である)という話者の主観的な意識も表現している。恩恵の授与を明示することは、相手との人間関係を良好に維持するための一種のストラテジーであるため、改善要求表現の丁寧度を上げる効果があると考えられる。

「～てくれる」を用いることで、表現形式の丁寧度が上がる現象は、実は疑問形式による改善要求表現だけでなく、命令形式による改善要求表現にも見られる。

- (23) a 出て行け。  
 b 出て行ってくれ。 (佐々木 2013:328)

- (24) a 死ね。  
 b 死んでくれ。 (佐々木 2013:328)

(23)と(24)に示したように、現状に不満や不快感を感じている話者が、命令形式によって行為指示を出す際に、日本語では、授受補助動詞「～てくれる」の命令形「～てくれ」

を用いて、出来事と話者との関係を明示することがある。

「～てくれ」を用いた表現の丁寧さについて、佐々木(2013:329)は以下のように述べている。「『出て行ってくれ』という日本語は、『出て行け』に比べればむしろ穏やかな表現である。『死ね』と言われる方が『死んでくれ』と言われるよりもきつい。『クレル』を伴うことによって、依頼表現の形式を取る日本語の命令文には、中国語のような上から目線の強いムードはとくに感じられない」。

このように、日本語の改善要求表現において、授受補助動詞を用いて聴者との授受関係を明示した場合が、聴者との授受関係を明示しない場合より、表現形式の丁寧度が高いことが分かる。

#### 5.4.4.2 “给我”の機能

(25) a 你能安静一点吗? (9)の再掲

筆者訳：(あなたは)少し静かにできますか。

b 你能<sup>给我</sup>安静一点吗? (22)の再掲

筆者訳：(あなたは私のために)少し静かにできないのか。

(25)に示したように、“你能<sup>给我</sup>安静一点吗?”は、5.4.1節で考察した“你能安静一点吗?”に、聴者との授受関係を明示する“给我”を付け加えたものである。話者が利益の受け手として聴者の改善行為に関与する点では、日本語の「～てくれる?」構文と共通しているが、利益の受け手である話者のことを一人称代名詞“我(わたし)”で明示している点では、日本語と異なる。

“你能给我～吗?”では、話者は利益の受け手として言語化する事態(=聴者が改善行為をすること)に関与するが、自分のことを一人称代名詞“我(わたし)”で明示していることから、話者は「自己分裂(self-split)」という認知的操作を経て、自分の分身を事態の中に残したまま、自らはその事態から抜け出し、事態の外から、あたかも傍観者であるかのように、客観的に(自分の分身“我”を含む)事態を捉えていることが窺われる。“你能给我～吗?”のイメージを示すと、図5-4のようになる。



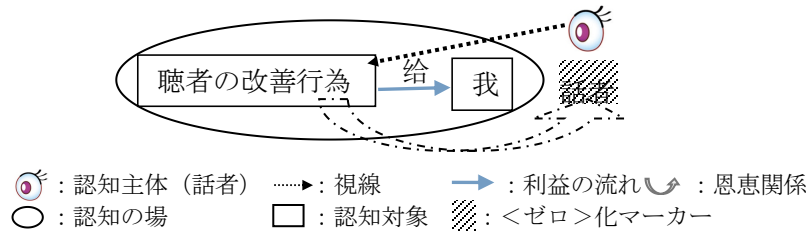


図 5-4 事態把握の観点から見た“你能给我~吗?”のイメージ

認知主体が脱主体化によって認知の場の外に出る D モードにより、<客観的把握>で事態を捉えている。図 5-4 では、話者と聴者との間に生じる利益の授受関係を→で示している。“給”は受益者マーカーとして、聴者の改善行為と受益者“我”を結んでいる。

“你能给我~吗?”には恩恵の授受関係が反映されているかどうかについて、結論を先に述べると、反映されていない(図 5-4 では、恩恵の授受関係を破線の矢印で示している)。

なぜかと言うと、「恩恵」というのは、「事態とそれに関わる状況全体から、その直接的あるいは間接的な受影者の内面に生じた 1 つの感情のありかた」(伊藤 2010:149)であるという性格を持つからである。伊藤(2010)のこの指摘から読み取れる重要なポイントは 2 点で、1 つは、恩恵は発話主体(すなわち、認知主体)の内面に生じる 1 つの感情のありかたで、客観的な存在ではなく、発話主体が持つ主観的な意識である。もう 1 つは、恩恵は「行為者の行為やあり方そのもの」によるものではなく、「事態とそれに関わる状況全体」から得るものである。

そのため、仮に“你能给我~吗?”に恩恵授受が含意されているとしても、その受け手は認知の場の中にいる認知対象として扱われる“我”(客体化された話者の分身)ではなく、認知の場の外にいるゼロ化されている認知主体としての話者である<sup>24</sup>。“给我”は話者(より厳密に言えば、認知対象として扱われる客体化された話者の分身“我”)と聴者の間に生じる利益の授受関係を示すだけである。

この点に関しては、楊(1994, 2009)の以下の論述からも根拠づけられる。「中国語の受益構文に用いる“给”は主に格標識として動詞と名詞の意味関係を明示する役割を持つ」(楊 2009:4)。「“给”は文法のカテゴリーに属し、そもそも動作の向かう対象(与格目的語)を表す前置詞であるため、常に受益を表さなければならないとは限らない。たとえ、動作主とその動作の向かう対象との間に利益を与える側と与えられる側の関係が生じても、文

<sup>24</sup> 言語における「主体化」と「客体化」の認知的メカニズムに関しては、他に森(1998)、池上(2004, 2005a)、中村(2006)、中野(2013)などを参照されたい。

の論理的意味に関わる客観的な出来事として捉え、日本語の補助動詞に見られるような恩恵の有無といった談話機能上の働きはない<sup>25</sup>」(楊 1994:106)。

上記のように、改善要求表現に用いる“给我”は、動作主(=改善行為をする聴者)とその動作の向かう対象(=改善要求を表出する話者、より厳密に言えば、認知対象として扱われる話者の分身)との間に利益の授受関係が生じるという客観的な存在を表すものである。認知主体が脱主体化によって認知の場の外に出るDモードにより、<客観的把握>で事態(=聴者が改善行為をすること)を捉え言語化した“你能给我~吗?”では、話者が「聴者が改善行為をすること」をどう思っているかという恩恵の有無は言語化されていない。

話者が利益の受け手として事態(=聴者が改善行為をすること)に関与しているのに、なぜここでは<主観的把握>ではなく、<客観的把握>で事態が捉えられているのかという疑問が生じることがある。この疑問を解くために、まず中国語の授与目標マーカ<sup>26</sup>として使われている“给~”の用法について整理する。

<Ⅰ>: 他者から自己への物の授与、利益の授与

- (26) a 他<sup>给</sup>我<sup>给</sup>一本书。(彼は私に本をくれた。)  
b 他<sup>给</sup>我<sup>给</sup>买了一本书。(彼は私に本を買ってくれた。)  
c 他<sup>给</sup>我<sup>给</sup>介绍了一份工作。(彼は私に仕事を紹介してくれた。)  
d 他在家<sup>给</sup>我<sup>给</sup>看孩子。(彼は家で子どもの面倒を見てくれている。)

(26a)では、“给”は授与動詞として使われており、物の授与を表している。(26b)、(26c)、(26d)では、“给”は動作の向かう対象を表す前置詞で、授与目標マーカとして使われており、利益の授与を表している。

<Ⅱ>: 他者から自己への不利益の授与

<sup>25</sup> 傍点と下線は筆者による。

<sup>26</sup> 木村(2014)の用語である。“小红给小王送来了一封信(シヤオホンは王くん到手紙を一通を届けにきた)”に示したように、“送来(届けにくる)”が主要動詞であり、“给”は「届ける」相手をマークする前置詞として機能している。“给”は、「授与」「供与」「投与」「付与」「伝達」「送信」など、ものや情報の受け取り手を必須の関与者として成立する種々の行為を意味する一連の動詞(句)と共起して、それらの行為が目指す相手、すなわち<モノ>の受け取り手を導く機能を担う。この種の“给”は、動詞の“给”が直後の名詞(句)に対してもつ「<被授与者>役割の付与」という機能を、若干の拡張を伴いつつ受け継いでいる。この種の“给”を「授与目標マーカ」と呼ぶ。文法化を遂げた“给”は他に「授受補助動詞」(例えば、“他寄给我一封信(彼は私に手紙を送ってくれた)”)、「状況誘発者マーカ」(例えば、“小王给她咳嗽醒了(王くんは彼女(のため)に咳で起こされた)”)、「被使役者マーカ」(例えば、“夕阳给他的脸映红了(夕日が彼の顔を赤く染めた)”)などの用法がある(木村 2014:214-238 から一部抜粋。“给”の用法に関しては、他に佐々木(1994)、楊(1994)を参照されたい)。

授与目標マーカ―として使われている“給”は、必ずしも常に利益の授与を表すとは限らない。動作の向かう対象は被害者であることもある。例えば、楊(1994)は(27a)の例を挙げている。

(27)a 他[给我]算错了。(彼が計算を間違えた。) (楊 1994:110)

b 他[给我]弄坏了。(彼が壊してしまった/彼に壊された。)

“他算错了(彼が計算を間違えた)”ということは、動作の向かう対象である“我”にとっては不利益である。従って、ここの“我”は受益者ではなく、被害者と見なすべきであると楊(1994)は指摘している。(27b)は筆者の作例であるが、(27a)と同様で、“他弄坏了(彼が～を壊した)”ことは、動作の向かう対象である“我”にとっては不利益であるため、ここの“我”は被害者である。

<III>: 自己から他者への物の授与、利益の授与

(28)a 我[给你]照张相吧。(写真を取りましょうか。) (楊 1994:113)

b 我[给您]拿一杯水吧?(水をお持ちしましょうか。) (楊 1994:112)

日本語では「写真をとってあげましょうか」とか、「水を持ってきてあげましょうか」など、実際に自分の行為が相手のためになされるものであっても、待遇表現として敬意を払うべき人に対しては、それを明示的な形(てあげる)で表現するのは慎まなければならないのであるが、中国語では、(28)に示したように、内・外、親・疎、上・下などの人間関係に関わらず、「事実として自分の行為が相手のためになされるもの」であれば、相手に利益を与えることを表す“给你”、“给您”を用いることができる(楊 1994)。

<IV>: 自己から他者への不利益の授与

相手に不利益や迷惑を与える場合でも、“給～”を用いることが可能である。例えば、楊(1994)では、以下の例文を挙げている。

(29)a 我把手表[给你]弄坏了。(私は(あなたの)時計を壊してしまった。)

b [给你]添麻烦了。(ご迷惑をおかけしました。)

c 对不起, 这本书[给你]弄脏了。(ごめんなさい、君のこの本よごしてしまったんだ。)

(楊 1994:111-110)

「時計を壊した」「ご迷惑をお掛けした」「本を汚した」ことは、動作の向かう対象である相手にとって不利益であるため、ここでの“給～”は不利益の授与を表している。

上記のように、中国語の“給～”は利益の授受を表すこともできれば、不利益の授受を表すこともできる。実際に動作主と動作の向かう対象の間に利益・不利益の授受関係が生じるのであれば、人称制限、対人関係に関わらず“給～”が用いられる。また、授受の方向性が「他者から自己へ」という方向でもいいし、「自己から他者へ」という方向でも大丈夫である。人称制限、待遇条件に拘る日本語の「～くれる/～てあげる」に比べ、中国語の“給～”は構文上かなりの自由度を持っていると思われる。この自由度を支えているのは、＜客観的把握＞という事態把握の仕方である。

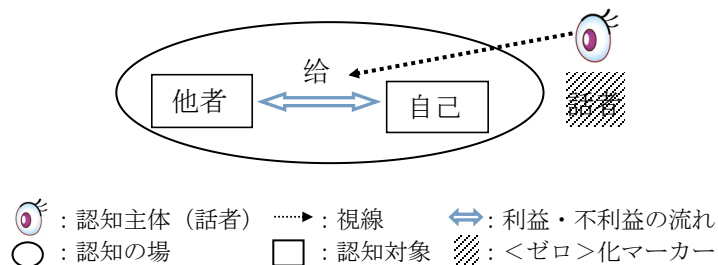


図 5-5 事態把握の観点から見た“給～”を用いた表現のイメージ

図 5-5 に示したように、話者は「自己分裂(self-split)」という認知的操作を経て、自分の分身を事態の中に残したまま、自らはその事態から抜け出し、事態の外から、あたかも傍観者であるかのように、認知の場の中に残した自己の分身(通常、一人称代名詞“我/我们”で表示する)と他者との関係を客観的に把握し、言語化する。

それ故、“我给你/您～(私があなたに～)” “我给他～(私が彼に～)” “你/您给我～(あなたが私に～)” “他给我～(彼が私に～)” などの表現形式に言語化された“我(私)”は、認知の場の外にいる認知主体としての話者ではなく、認知の場の中にいる認知対象として扱われている話者の分身である。

“我给你/您～(私があなたに～)” “我给他～(私が彼に～)” の場合、動作主は一人称の“我”で、動作の向かう対象は二人称の“你/您”、三人称の“他”である。この場合、図 5-6 に示したように、動作行為がもたらす利益・不利益の流れの方向は「自己から他者へ」である。

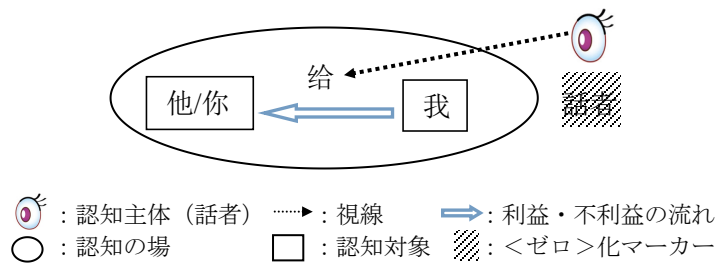


図 5-6 事態把握の観点から見た“我给他/你～”のイメージ

“你/您给我～(あなたが私に～)” “他给我～(彼が私に～)” の場合、動作主は二人称の“你/您”と三人称の“他”で、動作の向かう対象は一人称の“我”である。この場合、図 5-7 に示したように、動作行為がもたらす利益・不利益の流れの方向は「他者から自己へ」である。

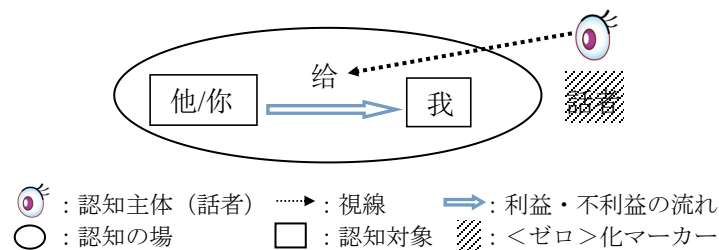


図 5-7 事態把握の観点から見た“他/你给我～”のイメージ

ここでの“给”は、楊(1994:106)が指摘しているように、「文法のカテゴリーに属し、そもそも動作の向かう対象(与格目的語)を表す前置詞である」。授与動詞“给”から拡張した、前置詞として使われる“给”は、完全に授与性を失ったわけではなく、動作主と動作の向かう対象との間に何らかの授与関係があることを示唆する。動作主と動作の向かう相手との間に生じる授与関係が、利益の授与であることも可能であれば、不利益の授与であることも可能である。利益の授与であるか、それとも不利益の授与であるかについては、事態(あるいは、動作行為)全体から判断する必要があるが、前置詞“给”からは読み取れないのである。

#### 5.4.4.3 主観性と丁寧さとの関わり

中国語では、“你能安静一点吗?(あなたは静かにできますか。)”のように、“你能～吗?”で改善要求を表出することが十分できるが、なぜ話者が“给我”を用いて聴者との利益授受関係を明示することがあるのだろうか。本節では、言語表現の主観性に注目し、

“给我”を用いた表現と用いていない表現の丁寧さを考察した上で、改善要求表現の主観性と丁寧さとの関わりを検討する。

上原(2001)は、「言語表現の主観性<sup>27</sup>には段階(程度、度合い)があり、A表現も主観的であるがB表現はより主観的である、ということもある」と指摘し、「言語表現の主観性を比較するには2つの指標がある。1つは、言語表現の表す出来事の中に話者が関係する場合は、話者が関係しない場合よりも主観性度が高い。もう1つは、言語表現の表す出来事の中に話者が関係し主観的である場合、話者が明示(言語化)されていない表現の方が、話者が明示された表現よりも主観性度が高い」と述べている<sup>28</sup>。

上原(2001)の「言語表現の表す出来事の中に話者が関係する場合は、話者が関係しない場合よりも主観性度が高い」という指摘から、“给我”を用いて聴者との授受関係を明示した“你能给我~吗?”は、聴者との授受関係を明示していない“你能~吗?”より主観性の度合いが高いことが分かった。

言い換えれば、“你能~吗?”と“你能给我~吗?”は、認知主体が脱主体化によって認知の場の外に出るDモードにより、<客観的把握>で言語化された表現であるが、話者(より厳密に言えば、話者の分身)が利益の受け手として出来事(=聴者が改善行為をすること)に関与する“你能给我~吗?”は、話者が出来事に関与しない“你能~吗?”より、主観性の度合いが高い。

木村(2014:102)が指摘しているように、「文が語るのは、話し手が客観的現実に対するカテゴリー化を通して心のなかで組み立った主観的現実であって、客観的現実そのものではない」。言い換えれば、すべての言語形式には発話主体の「主観性」が含まれていると思われる。事態把握の仕方によって、言語形式の主観性の度合いが異なることがあり、他の条件が同じであれば、<主観的把握>により言語化した表現の方が、<客観的把握>により言語化した表現より主観性度が高い。<客観的把握>により言語化した表現の中で、話者が出来事に関与する場合は、話者が関与しない場合よりも主観性度が高いのである。

次は、“给我”を用いた改善要求表現と“给我”を用いていない改善要求表現の丁寧さを比較してみる。

前文でも触れたように、本論文で設定した騒音場面での改善要求表現において、“给我(私のために)”を用いて、聴者との授受関係を明示した(30a)は、騒音を立てた聴者を責める

<sup>27</sup> 「主観性」とは、「見る人と見られるものの立場がはっきりと分かれている視点状況における、見る人の立つ立場/役割に関する」(上原 2001:1)ものである。

<sup>28</sup> 上原(2001:1-2)から一部抜粋。下線は筆者による。

ニュアンスを強く感じるため、苛立ちや怒りなどの否定的な感情を伝えたい時にしか用いられない、丁寧さを伴わない改善要求表現である。

(30)a 你能[给我]安静一点吗? ((あなたは私のために)少し静かにできないのか。)

b 你能安静一点吗? ((あなたは)少し静かにできますか。)

現状に不満や不快感を感じる話者が聴者に何らかの行為指示を出す際に、“给我～”を用いるのは、他に以下のような例が想定できる。

(31)a 你[给我]闭嘴! (黙ってくれ!)

b 你闭嘴! (黙って!)

(32)a 你[给我]出去! (出ていけ!)

b 你出去! (出なさい。)

(33)a 你[给我]理发去! (床屋へ行ってこい!) (佐々木 1994:322)

b 你理发去! (床屋へ行ってきなさい。)

(34)a 你[给我]放老实一点儿。(おとなしくしろ。)(王 2005:119)

b 你放老实一点儿。(おとなしくしなさい。)

(31)の“你给我闭嘴! (黙ってくれ。)”は、どのような場面状況で用いられるかという、以下のような状況が想定できる。AとBが喧嘩をしていて、Aが漫然と話している途中、BがもうAの話にうんざりして、“不想再听你说了, 你给我闭嘴! (きみの話はもう聞きたくないから、黙ってくれ。)”と言って、Aの話を中断することがある。“你闭嘴! (黙って)”より“你给我闭嘴! (黙ってくれ。)”の方が、相手に強引に要求する感じが強い。

(32)の“你给我出去! (出て行け!)”に関しては、授業中教室で騒ぎを起こした男子学生に対して、先生が“你给我出去! (出て行け!)”と言って、男子学生を教室から追い出す場面が想定できる。“你出去! (出なさい。)”に比べ、“你给我出去! (出て行け!)”の方が、行為指示の押し付けがましさがより強く感じられる。

(33)の“你给我理发去! (床屋へ行ってこい!)”に関しては、髪が伸びて、だらしないように見える息子に対して、母親が“你看你那头发都长成什么样了, 赶紧给我理发去! (髪の毛ずいぶん長くなったんじゃない? さっさと床屋へ行ってきなさい。)”と言って、息子に髪を短く切るように要求する場面が想定できる。

(34)の“你给我放老实一点儿。(おとなしくしろ。)”に関しては、刑務所で騒ぎを起こ

した受刑者に対して、警察が“你给我放老实一点儿。(おとなしくしろ。)”と警告する場面が想定できる。

上記のように、これらの表現形式には以下のような共通点が見られる。

- ①話者が現状に不愉快や不満を感じ、苛立ちや怒りなどの否定的な感情を聴者に伝えようとしている。
- ②聴者との授受関係を明示する“给我”を用いることで、行為指示の押し付けがましさが強められ、表現形式の丁寧さが下がる<sup>29</sup>。
- ③“安静(静かにする)”“闭嘴(黙る)”“出去(出て行く)”“理发去(床屋に行く)”“放老实(おとなしくする)”は、澤田(2014)の言葉を借りて言えば、「物の授与行為と同時関係や継起関係をなす」動詞<sup>30</sup>ではなく、物の授与・移動の場面の想定につながりにくい動詞である。

ここで注意して欲しいのは、“给我～”を用いた行為指示表現は、必ず「相手に強引に要求する意味があり、生意気な感じがする」(王 2005:20)という語用論的效果を生じるわけではない。例えば、料理を手伝ってくれる夫に対して、妻が“给我拿一下盐。(塩を取ってちょうだい)”を言うのが、全然生意気な感じはしない。むしろ、(35b)の“拿一下盐。(塩を取って。)”に比べ、“给我”を用いた(35a)の方は、感謝の気持ちを込めた言い方である。

(35) a 给我拿一下盐。(塩を取ってちょうだい。)

b 拿一下盐。(塩を取って。)

(36) a 给我们照个相。(写真を撮ってください。)

b 给我们拍一张照片, 好吗? (写真を撮ってもらってもいいですか。)

c 能拜托您给我们拍张照片吗? (写真を撮っていただけませんか。)

(相原 2008:5-13<sup>31</sup>)

<sup>29</sup> “给我”を用いると、行為指示の押し付けがましさが強められるため、(31)～(34)に示したように、“给我”は命令文に用いることが多いが、“你能给我闭嘴吗?(黙ってもらえる?)”“你能给我出去吗?(出てってもらえる?)”などに示すように、“给我”は疑問文にも用いられる。

<sup>30</sup> 例えば、「私は太郎に荷物を送ってやった」に示したように、「送る」のような「物の授与・移動」を表す動詞は、後項の授与動詞が表す授与行為と同時的な関係をなす。「太郎は花子にケーキを焼いてやった」「太郎は花子に花を摘んでやった」に示したように、「焼く」「摘む」のような「物を作成したり手に入れたりする」動詞(すなわち、作成動詞、獲得動詞)は、後項の授与動詞が表す授与行為と継起関係をなす(詳しい内容は澤田 2014 を参照されたい)。

<sup>31</sup> 日本語訳は筆者による。相原(2008)では、例文の出典を明記していないが、付録にある場面設定「卒業



また、(36)に示した例のように、命令形式だけではなく、疑問形式による依頼表現にも、“给我”を用いることがよくある。

(36)' a 照个相。(写真を撮って。)

b 拍一张照片，好吗？(写真を撮って(ください)、いいですか。)

c 能拜托您拍张照片吗？(写真を撮ることをお願いできますでしょうか。)

(36)' は(36)から、聴者との授受関係を明示する“给我们(私たちに)”を取り去った作例である。聴者との授受関係を明示した(36)に比べ、聴者との授受関係を明示していない(36)'の方が、依頼行為の押し付けがましさがより強く感じられる。言い換えれば、受益標識“给我们”から、「相手から恩恵の授受を受ける」という推意を読み取ることができるため、依頼行為の押し付けがましさが緩和されたのである。

上記のように、この類の表現には以下のような共通点が見られる。

- ①話者が聴者に何らかの行為をして欲しい(あるいは、助けて欲しい)と思っており、聴者を責める、苛立ち、怒りなどの否定的な感情を持っていない。
- ②聴者との授受関係を明示する“给我”を用いることで、行為指示の押し付けがましさが緩和され、表現形式の丁寧さが上がる。
- ③“拿一下盐(塩を取る)”“照相(写真を撮る)”は、物の授与・移動の場面の想定につながりやすい「物の授与行為と同時関係や継起関係をなす」動詞である。

以上のことから、＜客観的把握＞で事態を捉え言語化する中国語では、話者が聴者にある行為を行って欲しいと伝える際に、聴者との授受関係を明示する“给我”を用いるかどうかは、以下の二つの場合に分けられる。

1つは、事態(すなわち、聴者に行って欲しい行為)を描写する際に用いる動詞が物の授与・移動の場面の想定につながりにくい動詞である場合である。言語化する事態が物の授与・移動の場面の想定につながりにくいいため、特に理由がない場合は、話者と聴者との利益授受関係が捨象され、言語化されない。言い換えれば、授与関係を表す“给我”は用いられないのである。

---

式の日、大学の門の前で、誰かに頼んで数人で記念撮影をしたいという時に、親しくない教授／親しくない先輩／親しくない同学年の学生／親しい教授／親しい先輩／親しい友達がこちらにやってくるのが見えました。その人に写真をとってもらおうよう頼むなら、どのように言いますか。」から、(36c)は(尊敬語の“您”を用いているため)教授に対する場面での発話で、(36a)と(36b)は友達や同学年の学生、先輩に対する場面での発話であると推測する。

しかし、話者が現状に不愉快や不満を感じ、苛立ちや怒りなどの否定的な感情を聴者に伝えようとする際(つまり、特別な理由があり、通常と異なる場合)には、話者は意図的に“给我”を用いて、聴者との利益授受関係を明示することがある。話者が故意に「私のために～しろ/しなさい」と言明することによって、聴者に行為要求の押し付けがましさを感じさせ、苛立ちや怒りなどの否定的感情を伝える。

もう1つは、事態(すなわち、聴者に行って欲しい行為)を描写する際に用いる動詞が、物の授与・移動の場面の想定につながりやすい「物の授与行為と同時関係や継起関係をなす」動詞である場合である。言語化する事態が物の授与・移動の場面の想定につながりやすいため、特に理由がない場合は、通常“给我”を用いて聴者との利益授受関係を明示する。利益授受関係を明示することで、「聴者から恩恵の授与を受ける」という推意を読み取ることができ、人間関係を良好に保つことができる。“给我”を用いない場合、行為要求の押し付けがましさが強く感じられるため、表現形式の丁寧さが下がる。

このように、＜客観的把握＞で事態を捉え言語化する中国語の改善要求表現において、“给我”は、動作主(=聴者)とその動作の向かう対象(=話者)との間に利益の授受関係が生じるという客観的な存在を表すものであるが、話者が利益の受け手として言語化する事態(=聴者に行って欲しい行為)に関与する点で、“给我”には話者の主観性が含まれていると思われる。“给我”の使用・不使用(すなわち、聴者との利益授受関係を明示するかどうか)によって、話者が要求行為の押し付けがましさの度合い(逆を言えば、要求表現の丁寧さの度合い)を調整することができ、苛立ちや怒りなどの否定的な感情を表出したり、恩恵の授与を受けたことを示唆したりすることができる。

#### 5.4.4.4 逆転現象のメカニズム

5.4.4節のまとめでもあるが、日中間で授受関係の明示・非明示によって改善要求表現の丁寧さが逆転する現象の背後には、以下のメカニズムが働いていると思われる。

＜主観的把握＞により言語化する傾向の強い日本語では、話者が事態(出来事)を言語化する際に、その事態が自分とはどのような関係にあるのかも常に考えていて、自分の心的態度を言葉で具現化する。要求表現(依頼表現、改善要求表現)に用いる「～てくれる」は、「動作行為の向かう対象(与格目的語)が話者である」という文法上の機能を果たすこと以外に、「その行為が話者にとっては恩恵・利益の授与である」という話者の心的態度を表している。恩恵の授与を明示することは、相手との人間関係を良好に維持するための一種の

ストラテジーであるため、改善要求表現の丁寧度を上げる効果がある。それ故、日本語では、「～てくれる」などの授受補助動詞を用いて聴者との授受関係を明示した表現の方が、聴者との授受関係を明示していない表現より、丁寧度が高いのである。

一方、＜客観的把握＞により言語化する傾向の強い中国語では、事態(出来事)を言語化する際に、話者が事態に関与する場合であっても、「自己分裂」という認知操作を経て、自分の分身をその事態の中に残したまま、自らはその事態から抜け出し、事態の外からあたかも傍観者であるかのように、出来事と自分の分身(つまり、客体化された“我”)との関係を客観的に語る。改善要求表現に用いる“给我”は、単なる動作主(=改善行為をする聴者)とその動作の向かう対象(=改善要求を表出する話者、より厳密に言えば、認知対象として扱われる話者の分身)との間に、(物の授与や移動に伴い)利益の授受関係が生じるといふ客観的な存在を表すもので、日本語の授受補助動詞に見られるような恩恵の授与は表していない。

物の授与・移動を想定しにくい行為(例えば、“安静(静かにする)”“闭嘴(黙る)”“出去(出て行く)”“理发去(床屋に行く)”“放老实(おとなしくする)”など)を聴者に行って欲しいと伝える際に、特に理由がない場合は、通常聴者との利益授受関係が捨象され、言語化されない。しかし、話者が現状に不愉快や不満を感じ、苛立ちや怒りなどの否定的な感情を聴者に伝えようとする際(つまり、特別な理由があり、通常でない場合)には、話者は意図的に“给我”を用いて、聴者との利益授受関係を明示することがある。話者が故意に「私のために～しろ/しなさい」と言明することによって、聴者に行為要求の押し付けがましさを感じさせ、苛立ちや怒りなどの否定的感情を伝える。それ故、中国語では、聴者に改善して欲しい行為は物の授与・移動を想定しにくい行為である場合、聴者との授受関係を明示する“给我”を用いると、改善要求表現の丁寧さが下がる。

つまり、「日本語では或る人の行為を利益・恩恵とみなして表現する習慣が一般的なのに対し、中国語ではそれを客観的中立的に表現するのが一般なのであろう」と奥津・徐(1982:103)が指摘しているように、日本語では、話者が「相手が動作主である行為」を恩恵の授与と感じれば、「～てくれる」「～てもらう」などの授受補助動詞を用いて、聴者との授受関係を明示する。一方、客観的中立的に表現するのが一般的である中国語では、通常(あるいは、プロトタイプは)、物の授与・移動の場面の想定につながりやすい行為の場合(すなわち、授与行為が客観的に見られる場合は、“给我”を用いて、聴者との授受関係を明示するが、物の授与・移動を想定しにくい行為の場合(すなわち、授与行為が客観的

に見られない場合は、聴者との授受関係を明示しないのである。

## 5.5 「～てもらえる？」と“麻烦你能～吗?”の比較対照

### 5.5.1 事態把握の観点から

(37) 静かにしてもらえる？

(37)に示したように、日本語では、授受補助動詞「～てもらう」の可能形「～てもらえる」を用いて、聴者に改善行為をするよう働きかけることができる。

(37)では、文の主格名詞と与格名詞が省略されているが、復元してみると「(私があなたに) 静かにしてもらえる？」となる。主格名詞が一人称の「私」であることから、「～てもらえる？」構文では、言語主体が聴者の改善行為のみならず、話者自身の依頼行為にも注目していることが示唆される。言い換えれば、舞台の上では聴者の改善行為だけではなく、話者の依頼行為も演じられている。ただし、話者の依頼行為に関する部分は補助動詞で言語化されていることから、舞台の主役は聴者であり、話者は脇役として機能していることが分かる。話者がどのような脇役を務めているかという点、「～てもらう」は恩恵・利益の授与を表す以外に、使役性も持つため、話者が恩恵・利益の受け手かつ使役の主体として聴者が行う改善行為に関与する。話者は舞台の上に上がっているが、「～てもらえる？」構文では、話者が<ゼロ>化されていて、明示されていない。

その原因は前文の(8)と同様で、「事態の内に身を移した話者がそのまま認知の主体として振舞う。その際、認知の主体として特徴的に自己中心的に事態把握をする話者にとっては、自身は自らの<見え>に入らない(従って、<ゼロ>として言語化される)」(池上2011a:53)からである。

また、統語論の観点から見ると、「～てもらえる？」構文には、以下の2つの特徴が見られる。

- 1) 「～てもらえる」は補助動詞であるため、他の授受補助動詞の表現形式(「～てくれる」、「てもらってもいい」など)と同様に独立した文としては成り立たない。
- 2) 授受補助動詞を取り除いた残りの部分(例えば、「静かにしてもらえますか？」→「\*静かにしますか？」)は、改善要求表現として成り立たない。

上記のことから、図5-8に示したように、「～てもらえる？」構文は<入れ子>のよう

な層状構造を持っていると思われる。

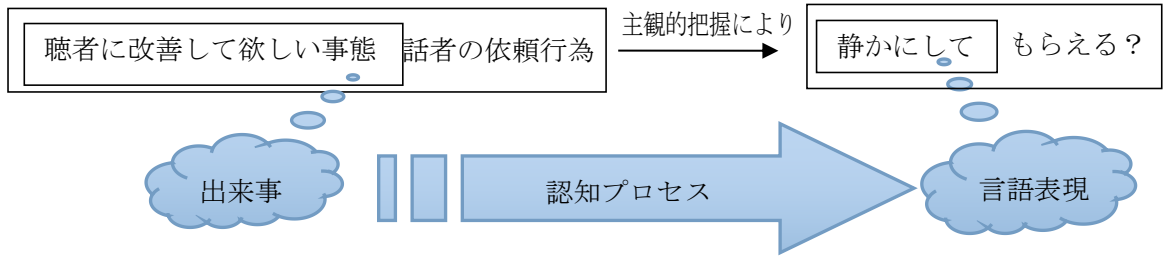


図 5-8 日本語における授受補助動詞を用いた改善要求表現のモデル

「～てもらえる？」構文では、聴者に改善して欲しい事態を表す要素と話者の依頼行為を表す要素が互いに分離できない状態にあるため、「～てもらえる？」構文は1つの認知プロセスを経て言語化されたのではないと思われる。見る主体（話者）が使役の主体かつ恩恵・利益の受け手として、見られる客体（聴者が行う改善行為）の中に入り込んで振舞っているが、言語化されていないことから、「～てもらえる？」構文は<主観的把握>により言語化されたことが分かる。「～てもらえる？」を用いた改善要求表現のイメージを示すと、図 5-9 のようになる。

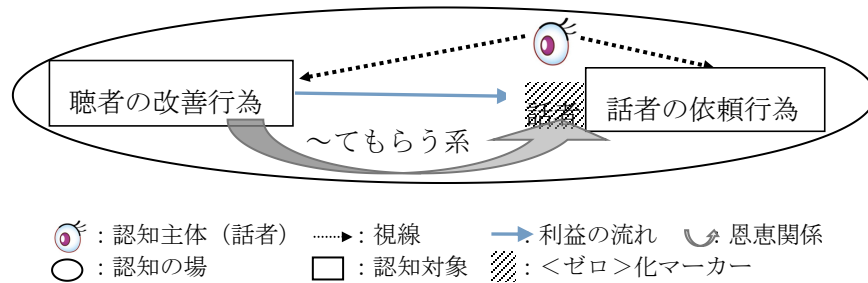


図 5-9 事態把握の観点から見た「～てもらえる？」のイメージ

次は、中国語の“麻烦你能～吗?”を用いた改善要求表現について分析する。

(38) 麻烦你能安静一点吗?

筆者訳：悪いけど、(あなたは)少し静かにできますか。

(38)に示したように、中国語では、5.4 節で考察した“你能～吗?”の文頭に“麻烦、拜托(お願いする、頼む)”などの依頼の意を表す動詞を付け加え、聴者に改善行為をするよう働きかけることができる。

(38)は、兼語文<sup>32</sup>（一種の使役構文）という複文構造を持ち、話者が使役の主体として聴者の改善行為に関与する点では、日本語の「～てもらえる？」構文と共通しているが、「恩恵・利益の授受関係を明示していないこと」と「複文を構成した2つの節が独立した文として成り立つこと」という2つの点で日本語と異なっている。

まず1点目について、日本語の「～てもらえる」は、使役性を表す以外に、利益・恩恵の授与という意味も帯びている。一方、中国語の“麻烦你～？（あなたに～をお願いする）”は、相手にある行為を行うよう依頼する、つまり、聴者に改善行為をさせるという「使役」の役割しか果たしていない。

そして2点目について、(39)に示したように、“麻烦你能～吗？”では、“你”（あなた）が兼語の役割を果たし、“麻烦”（お願いする）という動詞の目的語であると同時に、“你能～吗？”節の主格名詞でもある。

(39) 麻烦你 (あなた) お願いする。  
你能安静一点吗？ (あなたは少し静かにできますか？)

このように、“麻烦你能～吗？”は、完全に“麻烦你”（あなたにお願いする）と“你能～吗？”（あなたは～できますか）という2つの節に分けることができる。しかも、分離したこの2つの節は独立した文として成り立つ。後者の“你能～吗？”は、5.4節で考察した“你能～吗？(あなたは～できますか)”のそのまま、聴者が改善行為を実現することができるかどうかを問いかけるものである。前者の“麻烦你(あなたにお願いする)”は、主格名詞“我”（私）が省略されているが、話者が聴者にお願いすることを表している。

上述したように、“麻烦你能～吗？”では、話者が使役の主体として、聴者が行う改善行為に関与しているが、聴者が行う改善行為を言及する要素と話者が行う依頼行為を言及する要素が、構文上完全に分離することから、兼語文を用いた改善要求表現は、図5-10に示したように、「話者の依頼行為」を表す要素と「聴者に改善して欲しい事態」を表す要素が互いに分離できる「階段」のような層状構造を有しているのではないかと考えられる。

<sup>32</sup> 「兼語文」とは、「1つの動目フレーズと1つの主述フレーズが一部重なり合った形で述語ができてい  
るものである。即ち兼語文の述語において、前の動目フレーズの目的語は後の主述フレーズの主語を兼ね  
ている」（相原 1991:602）。以下、 で兼語を示す。

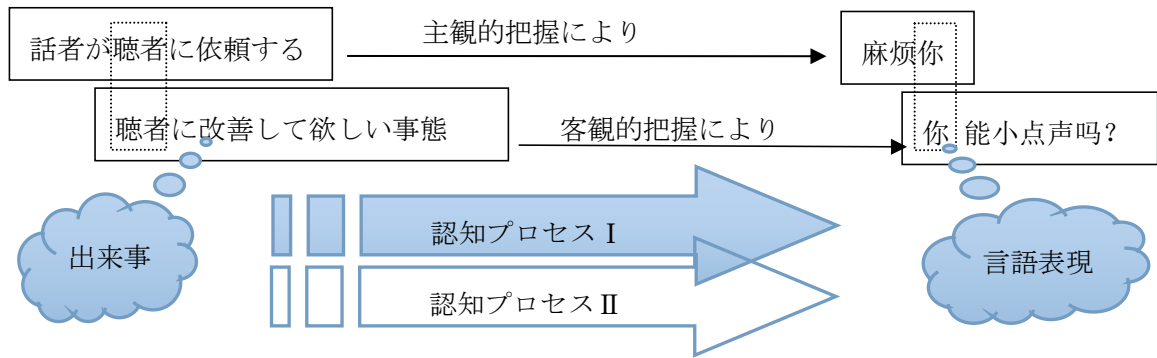


図 5-10 中国語における兼語文を用いた改善要求表現のモデル

この分離できる層状構造を支えているのは、「話者の依頼行為」と「聴者に改善して欲しい事態」に関して、互いに独立した2つの認知プロセスを経て行う言語化である。つまり、話者の依頼行為を言語化するには1つの認知プロセスで、聴者に改善して欲しい事態を言語化するにはまた別の認知プロセスが働いている。2つのプロセスを繋ぐのが兼語として機能している“你”である。

話者の依頼行為を言語化する際に、一人称代名詞“我”がゼロ化されていることから、言語主体が＜主観的把握＞により言語化を行うことが窺われる。聴者の改善行為を言語化する際に、5.4節で考察した“你能～吗?”構文と同様で、話者が言語化する事態に関与せず、あたかも舞台の外に立つ観客が、舞台の上で演じている聴者の改善行為を語るかのように、＜客観的把握＞により事態を捉えている。“麻烦你能～吗?”を用いた改善要求表現のイメージを示すと、図 5-11 のようになる。

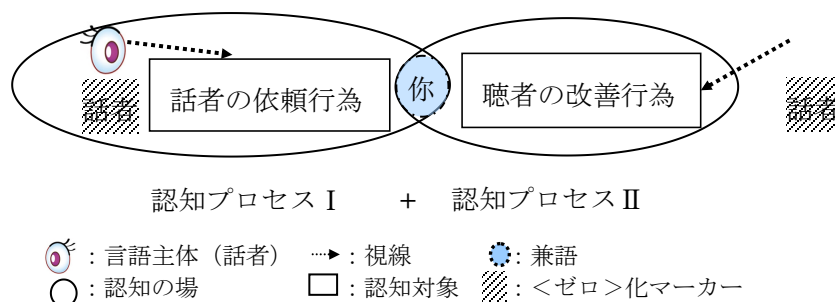


図 5-11 事態把握の観点から見た“麻烦你能～吗?”のイメージ

また、(40)に示したように、中国語では、“能麻烦你～吗? (～お願いできますか)” “不能麻烦你～(～お願いできませんか)”などの文型を用いて、聴者に改善行為をするよう働きかけることがある。

(40) 能麻烦你小点声吗? / 能不能麻烦你小点声?

筆者訳：声を小さくすることをお願いできますか。 / 声を小さくすることを  
いできませんか。

話者が使役の主体として聴者が行う改善行為に関与する点で、日本語の「～てもらえる?」と共通しているが、“麻烦你能～吗?”と同様で、「恩恵・利益の授受関係を明示していないこと」と「複文を構成した2つの節が独立した文として成り立つこと」という2つの点では「～てもらえる?」と異なっている。日本語訳に示したように、このパターンの表現は、日本語の「～てもらえる?」より「～お願いできる?」の構文構造に近いと思われる。

### 5.5.2 配慮の示し方

「～てもらえる?」は、5.4節で考察した「～てくれる?」と同様で、話者が求心的な授受補助動詞「～てもらう」を用いて、聴者が行う改善行為をありがたく思うという話者の感謝の気持ちを聴者に伝え、肯定的評価および謝意を表すことによって、聴者が持つ「他者によく思われたい、好かれたい」というポジティブ・フェイスへの配慮を示している。また、授受補助動詞「～てもらう」の動作主が話者自身で、話者があたかも自分のこと（恩恵・利益を受けることが可能かどうか）について聴者に意見を求めているかの形で、できるだけ押しつけがましさを感じさせないように、改善行為をするよう働きかけている。

「～てもらう」は求心的な授受補助動詞で、「聴者が行う改善行為は話者にとって一種の恩恵の授与である<sup>33</sup>」という語用論的機能を果たすことができ、場面や相手との人間関係に応じて、普通体、丁寧体、敬体の転換によって、改善要求表現の丁寧さを調整することができる。

一方、中国語の“麻烦你能～吗?”は、前節で論述したように、「“麻烦你”+“你能～吗?”」という構造を持っている。後者の“你能～吗?”は5.4節で考察した“你能～吗?”と全く同様で、改善行為を実現することができるかどうかを尋ねることによって、

<sup>33</sup> 「～てもらう」構文は、話者が主体に身を置き、主体の視点で相手(二格)が動作主である事象の授受行為を恩恵と感じる時に使う表現で、相手の行為を「恩恵」と取るかどうかは、話者の主観による判断と考える(松浦2003)。「うわーはずかしい。先生に踊りをほめていただくなんて」(奥津・徐1982:98、下線は筆者による)に示したように、日本語ではある人の行為を利益・恩恵と見なして表現する習慣が一般的であるが、中国語では、客観的中立的に表現するのが一般的であるため、謙譲的使役でない、単なる利益的行為の取得という意味を表す「～てもらう」に対応する表現は中国語にはないらしい、と奥津・徐(1982)、奥津(1983)は指摘している。



聴者が改善行為をする意志があるかを問うことを避けるとともに、聴者に「客観的な事情によって行為が実現不可能」という理由説明や弁解する余地を与え、改善要求行為の押し付けがましさを緩和させ、聴者が持つ「他者に邪魔されたくない」というネガティブ・フェイスへの配慮を示している。そして、前者の“麻烦你(あなたにお願いする)”は、丁寧にお願いするという意味を表わし、聴者が持つ「他者から尊重されたい」というポジティブ・フェイスへの配慮を示している。

### 5.5.3 肯定形・否定形、授受関係の明示・非明示による逆転現象

(41)a 静かにしてもらえますか。

b 静かにしてもらえませんか。

(42)a 麻烦你能安静一点吗?

筆者訳：悪いけど、(あなたは)少し静かにできますか。

b 麻烦你不能安静一点吗?

筆者訳：悪いけど、(あなたは)少し静かにできないのか。

c 麻烦你能给我安静一点吗?

筆者訳：悪いけど、(あなたは私のために)少し静かにできないのか。

5.4節で考察した「～てくれる?」と“你能～吗?”と同様で、肯定形・否定形、授受関係の明示・非明示によって、日中改善要求表現の丁寧度が逆転する現象は、「～てもらえる?」と“麻烦你能～吗?”にも見られる。

(41)に示したように、日本語では、否定の形を取った「～てもらえない?」は、肯定の形を取った「～てもらえる?」より丁寧度が高い。その原因は、「～てくれる?」構文と同様で、話者が求心的な授受補助動詞を用いて、聴者が行う改善行為に対する自分の判断の様相を示すことに起因すると思われる。

肯定形の「～てもらえる」を用いた場合、話者が聴者から恩恵を受けることを仮定し、即ち「聴者が改善行為をする／聴者が改善の依頼を受諾する」ことを一種の「解答案」として提示し、それに対する聴者の反応を求めるという形で改善行為をするよう働きかけている。一方、否定形の「～てもらえない」を用いた場合、話者が聴者から恩恵を受けられないことを仮定し、即ち「聴者が改善行為を行わない／聴者が改善の依頼を断る」ことを一種の「解答案」として提示し、それに対する聴者の反応を求めるという形で改善行為を

するよう働きかけている。よって、日本語では、肯定疑問文に比べ、否定疑問文の方は「断りやすさ」を聴者に積極的に提供し、聴者が持つ「他者に邪魔されたくない」という行動の自由(あるいは、ネガティブ・フェイス)への配慮を積極的に示しているため、より丁寧である。

一方、中国語では、(42)に示したように、肯定疑問文かつ授受関係を明示していない(42a)は丁寧な改善要求表現として用いられるが、否定疑問文を用いた(42b)と授受関係を明示した(42c)は、苛立ちや怒りなどの否定的な感情を聴者に伝えようとする場面でしか用いられない、丁寧さに欠けた表現である。

その原因は、5.4節で考察した“你能～吗?”と同様で、否定形の“麻烦你不能～吗?”は、諾否疑問文の形式を持っているが、実は疑問文の機能を失った反語文である話者が故意に否定形を取ることによって、肯定形の「あなたが静かにできる」ことを強調し、「できるのに、なぜ静かにしないの?」という言外の意味を聴者に伝えている。疑問文の形を取っているが、意味上は「～しろ」に等しい命令表現であるため、聴者が持つ「依頼を受諾するか拒否するか」という行動の自由が奪われ、丁寧さに欠けた改善要求表現になるのである。

そして、“安静”などの動詞は物の授与・移動の場面の想定につながりにくい動詞であるため、通常の場合は、聴者との利益授受関係が捨象され、言語化されない。“麻烦你能给我～吗?”では、話者が意図的に“给我”を用いて、聴者との利益授受関係を明示することによって、故意に「私のために～しろ/しなさい」と言明し、聴者に行為要求の押し付けがましさを感じさせ、苛立ちや怒りなどの否定的感情を伝えている。

## 5.6 それ以外の改善要求表現

前文の表 5-1 と表 5-2 にも示されているように、改善要求表現は「～てくれる?」「～てもらえる?」とそれに対応する中国語の“你能～吗?”“麻烦你能～吗?”以外に、他にもたくさんの文型が使われている。本節では、「～てくれる?」「～てもらえる?」以外の改善要求表現とそれに対応する中国語の表現形式を網羅的に示す。

### 【許可求め】

(43) すみません、ちょっと静かにしてもらってもいいですか。(JNS2-場面1)

(44) すみません、申し訳ないんですけど、声が結構響いて眠れないので…もう少しおさ

えめでお願いしてもいいですかね。

(JNS13-場面1)

(43)と(44)に示したように、日本語では、授受補助動詞を用いた「～てもらってもいいですか」、依頼動詞を用いた「～お願いしてもいいですか」など、「許可求め」の形で改善行為をするよう働きかけることがある。

この表現が若者に多用される理由については、砂川(2005:88-89)は以下のように述べている。「若い人たちは『～してもらおう』を使うことで相手の行為によって話者が恩恵を被ることを表し、ありがたいと思う気持ちを伝えているのだと思います。それに加えて許可を求める表現を使うことで、相手にお伺いを立て、依頼の押しつけがましさを軽減しようとしているつもりなのでしょう。堅苦しい敬語抜きで親しみを込めた丁寧さを表したいという気持ちから発せられた言葉なのだと思います」<sup>34</sup>。

それに対応するものとしては、中国語では“麻烦你～，好吗？”（例えば，“麻烦你安静一点，好吗？（静かにすることをお願いしてもいいですか）”）という表現がある。聴者に改善行為をするよう依頼した後、“好吗？（いいですか）”という表現を用い、諾否の権限を聴者に委ね、改善要求行為の押しつけがましさを軽減しようとする点では、日本語の「～てもらってもいいですか」と共通している。ただし、“麻烦你能…吗？”と同様で、“麻烦你…，好吗？”には、恩恵の授与が含意されていない。それ故、中国語の“麻烦你…，好吗？”は、日本語の「～てもらってもいいですか」より「～お願いしてもいいですか」に近いと思われる。

#### 【願望表出】

(45) すみません、もう少し静かにしてもらいたいんですが… (JNS6-場面1)

(46) 映画に集中できないから、静かにして欲しい。 (JNS18-場面3)

「『～て欲しい、～てもらいたい、～願いたい』のような<願望表出>文において聴者の動作への願望が示されれば、実際には聴者への《依頼》として機能する」と山岡・牧原・小野(2010:156)が指摘しているように、改善要求表現にも【願望表出系】の表現形式がある。

それに対応するものとしては、中国語では“希望～”（例えば，“希望你们不要聊太晚（遅

<sup>34</sup> だが、砂川自身はこの表現の使用に賛同しないとして、「相手に許可を求める場面ではなく、お願いをする依頼の場面では、『～してください』『～していただけますか』『～していただけませんか』『～お願いします』などと言うのが適当です」（砂川 2005:89）と述べている。

くまでおしゃべりしないようにして欲しい” ) という表現がある。

#### 【情意表出】

(47) 眠れなくて困っているんで、もう少しトーンをおとして話してもらえると助かります。  
す。 (JNS14-場面 1)

「依頼の命題内容を、条件節を用いて婉曲的・仮定的に表現し、主節は自己利益を表す述語を用いた<情意表出>文であるような依頼表現がある」と山岡・牧原・小野(2010:157)が指摘しているように、改善要求表現にも、「～てもらえると助かります」「～てもらえるとうれしいです」などの表現形式がある。

(48) 咱能小点声吗? 谢谢。 (CNS12-場面 1)

筆者訳: 声を小さくしてもらえませんか。ありがとうございます。

(49) 不好意思, 我觉轻, 你们可以说话小声点吗? 哈哈, 谢谢了啊。 (CNS13-場面 1)

筆者訳: すみません、私、眠りが浅いので、おしゃべりする時、声を小さくしてもらえませんか。ありがとうございます。

中国語では、(48)と(49)に示したように、改善要求を表出した後に、“谢谢”をという表現を用いて、感謝の気持ちを伝える文が多用されているが、日本語のような条件節を用いた<情意表出>文があまり見当たらない。“如果你能小点声, 我将十分感激(声を小さくしてもらえると、ありがたいです)”のような条件節を用いた改善要求表現は、文法上は成り立つが、語用論的にはかなり違和感を感じるため、通常用いられないのである。

#### 【命令】

(50) 夜うるさいから、静かにして。 (JNS15-場面 2)

DCT 調査により収集したデータには、「～て」という文型しか現れていないが、場面・状況に応じて「～てくれ」「～てください」「～てちょうだい」「～なさい」「～しろ」などの命令表現が改善要求表現として用いられると考えられる。

それに対応するものとしては、中国語では“请你～(～てください)”(例えば、“请你小点声(声を小さくしてください)”)や動詞命令形を述語にする(例えば、“小点声(声を小さくして)”)などの表現が挙げられる。

## 【依頼動詞】

(宿舎の共用キッチンに放置した鍋に貼ってある紙)

(51) 私物は部屋に持ち帰るようお願いします。

日本語では、「～ようお願いします」「～をお願いします」「～を頼みます」などの依頼の意を表す遂行動詞を用いて、改善行為をするよう働きかけることがある。

それに対応するものとしては、中国語では、“拜托你～(～を頼みます/お願いします)” “麻烦你～(～を頼みます/お願いします)” などの表現が挙げられる。例えば、“拜托你小点声(声を小さくすることをお願いします)” “麻烦你安静一点(静かにすることを頼みます)” など。

上述した【許可求め】【願望表出】【情意表出】【命令】【依頼動詞】の以外に、語用論的状況が揃えば、可能形式の「～できる？」や否定形の「～しないか」、勧誘の「～ましよう」なども改善要求表現として用いることがある。

## 5.7 本章のまとめ

本章では、改善要求発話の【主要行為部】に用いられる表現形式に着目し、日本語の「～てくれる?」「～てもらえる?」と中国語の“你能～吗?” “麻烦你能～吗?” を中心に、「事態把握」という認知的アプローチから改善要求表現の日中対照を行い、1) 日中間の配慮の示し方はどのように異なるか、2) 肯定形・否定形によって改善要求表現の丁寧さが逆転する現象のメカニズムの解明、3) 授受関係の明示と表現形式の丁寧さにはどのような関わりがあるのか、という3つの課題を検討した。その結果、以下のことが明らかとなった。

### 1) 疑問形式による改善要求表現に見られる日中の事態把握の仕方

日本語の改善要求表現では、言語主体(話者)が事態を語る際に、事態が話者自身とどのような関係にあるかを考慮しながら言語化する傾向が強い。疑問文の形で改善要求を表出する際に、求心的な授受補助動詞「～てくれる」「～てもらおう」を用いて、事態(=聴者が改善行為をすること)と話者自身との関係を明示することが多い。言い換えれば、事態把握の観点から見ると、言語主体(話者)が、恩恵・利益の受け手として、言語化する事態(=聴者が改善行為をすること)に関与し、<主観的把握>に基づいて事態を捉え、言語化する。

一方、中国語の改善要求表現では、言語主体(話者)が事態を語る際に、傍観者の

視点から客観的に事態を捉え言語化する傾向が強い。疑問文の形で改善要求を表出する際に、話者自身が事態(=聴者が改善行為をすること)に関与する場合であっても、「自己分裂」という認知操作を経て、自分の分身(つまり、客体化される“我”)を事態の中に残したまま、自らはその事態から抜け出し、事態の外から、あたかも傍観者であるかのように、自分の分身を含めた事態を客観的に捉え言語化する傾向がある。つまり、認知主体が脱主体化によって認知の場の外に出て、あたかも外から客観的に眺めるような視点を取り、<客観的把握>に基づいて事態を捉え、言語化する。

## 2) 日中間の配慮の示し方の相違

日本語の疑問形式による改善要求表現では、話者が求心的な授受補助動詞「～てくれる」「～てもらう」を用いて、問いかけの焦点を自分の話題(恩恵の有無)に当てることによって、聴者が持つ「他者に邪魔されたくない」というネガティブ・フェイスを脅かす度合いを軽減する。また、恩恵の授与を明示化することによって、聴者が持つ「他者によく思われたい、好かれたい」というポジティブ・フェイスへの配慮を示している。

一方、中国語の疑問形式による改善要求表現では、話者が動作主の意志性を捨象できる能願動詞“能/可以”を用いることで、(「するかしないか」ではなく、)「できるかできないか」を問うことによって、改善行為をする意志があるか否かを直接問うのを避ける。聴者に「客観的な事情によって行為が実現不可能」という理由説明や弁解する余地を与えることで、改善要求行為の押し付けがましさを軽減し、聴者が持つ「他者に邪魔されたくない」というネガティブ・フェイスへの配慮を示している。

## 3) 肯定形・否定形によって日中改善要求表現の丁寧さが逆転する現象のメカニズム

疑問形式による改善要求表現の丁寧さに影響を及ぼす重要な要素の1つは、疑問文における話者の判断の様相である。日本語では、話者が求心的な授受補助動詞「～てくれる」「～てもらう」を用いて、聴者の改善行為に対する主観的判断(すなわち、「ムード」)の様相を示している。否定形の「～てくれない」「～てもらえない」を用いた場合、話者が恩恵を受けることができないことを仮定し、それに対する聴者の反応を求めるという形で改善行為をするよう働きかけている。すなわち「聴者が改善行為を行わない/聴者が改善の依頼を断る」ことを一種の「解答案」として提示している。よって、日本語では、肯定疑問文に比べ、否定疑問文は「断りやすさ」を提供する(逆

を言えば、行為要求の押し付けがましさを軽減する)ことができ、聴者が持つ他者に邪魔されたくないという行動の自由への配慮が示されるため、より丁寧であると言える。

一方、中国語では、話者が能願動詞(願望や可能性を表す助動詞)“能/可以”を用いて、聴者の改善行為に対する主観的判断(すなわち、「ムード」)の様相を示している。否定形の“不能/不可以(できない)”を用いた場合、話者が故意に否定の形をとることによって、肯定形の“你能/可以～(あなたは～できる)”ことを強調し、「～できるのに、なぜ～しないの」という言外の意味を聴者に伝えている。否定形の“你不能/不可以～吗?(あなたは～できないの?)”は、形式上は疑問文の形を取っているが、意味上は「～しろ」に等しい命令表現である。聴者が持つ「依頼を受諾するか拒否するか」という行動の自由が奪われるため、丁寧さに欠けた改善要求表現になる。よって、中国語では、否定疑問文より肯定疑問文を用いた改善要求表現の方がより丁寧であると結論づけた。

#### 4) 授受関係の明示と表現形式の丁寧さとの関わり

日本語では、授受関係を明示する「～てくれる」「～てもらう」は、「改善行為という動作の向かう対象が話者である」という文法上の機能を果たす以外に、相手の行為によって話者が恩恵を被ることを表し、ありがたいと思う気持ちを伝えている。恩恵の授与を明示することは、相手との人間関係を良好に維持するための一種のストラテジーであるため、改善要求表現の丁寧度を上げる効果がある。それ故、日本語では、聴者との授受関係を明示した表現の方が、聴者との授受関係を明示していない表現より、丁寧度が高いのである。

一方、中国語では、授受関係を明示する“给我”は、単なる動作主(=改善行為をする聴者)とその動作の向かう対象(=改善要求を表出する話者、より厳密に言えば、認知対象として扱われる話者の分身“我”)との間に、(物の授与や移動に伴い)利益の授受関係が生じるという客観的存在を表すものである。日本語の授受補助動詞に見られるような恩恵の有無は表わしていない。物の授与・移動を想定しにくい行為を聴者に行って欲しいと伝える際に、通常聴者との授受関係が捨象され、言語化されない(つまり、“给我”は用いられない)。しかし、話者が現状に不満を感じ、苛立ちや怒りなどの否定的な感情を聴者に伝えようとする際(つまり、特別な理由があり、通常でない場合)には、話者が意図的に“给我”を用いて、聴者との授受関係を明示することによって、

故意に「私のために～をください」と言明し、聴者に行為要求の押し付けがましさを感じさせ、苛立ちや怒りなどの否定的感情を伝える。

以上のことから、日中間の配慮の示し方の相違や肯定形・否定形、授受関係の明示・非明示によって改善要求表現の丁寧さが変わる現象は、いずれも「事態把握の仕方」という認知レベルでの営みと深く関わっていることが分かった。疑問形式による改善要求表現では、事態把握の仕方の相違によって、「疑問文における話者の判断の様相の示し方」、「授受関係を明示する要素「～てくれる」と“给我”の機能」が異なるため、肯定形・否定形、授受関係の明示・非明示によって改善要求表現の丁寧さが日中間で逆転するという現象が生じたのである。

池上(2008:5)は、「人間言語の話者として可能な事態把握のやり方のうちのどのやり方が選ばれるかという点については用いられる言語によって差がありうるという認識に立って、異なる言語の話者の振舞い方の差というレベルでの比較対照を進めることが今後の対照言語学の課題となるべきである」と述べている。事態把握の相違に注意を払いながら、言語間の丁寧化の方法の相違を捉えるという本章で試みた対照研究の方法は、改善要求表現以外の構文現象を記述する上でも有効であると思われる。

また、本章は、日本語の「～てくれる?」「～てもらえる?」と中国語の“你能～吗?”“麻烦你能～吗?”を中心に、事態把握の観点から日中対照を行ったが、この方法は他の構文形式を持つ改善要求表現(例えば、5.6節で取り上げた【許可求め】【願望表出】【情意表出】【命令】など)にも適用可能であると思われる。今後は、このような点についても考察していきたい。



## 第6章 日中改善要求発話の【切り出し部】と【終了部】の表現形式

### 6.1 はじめに

- (1) いきなりすみません。最近越してきた者ですが、よる遅くお宅から聞こえる声が少し気になりまして。。。もう少し小さな声で話していただけませんか？(JNS1-場面1)

【切り出し部】： いきなりすみません。最近越してきた者ですが、	} 【用件内容部】
【補助部】： よる遅くお宅から聞こえる声が少し気になりまして。。。	
【主要行為部】： もう少し小さな声で話していただけませんか？	

- (2) 嘿，哥们<sup>1</sup>，说话的时候能不能小点声，咱这楼隔音效果不太好，晚上我都睡不着觉。  
谢谢了哈！ (CNS11-場面1)

筆者訳：あのう、おしゃべりする時、声を小さくしてもらえませんか。この建物は防音効果があまりよくないので、夜、よく眠れないんです。ありがとうございます。

【切り出し部】： 嘿，哥们，	} 【用件内容部】
【主要行為部】： 说话的时候能不能小点声，	
【補助部】： 咱这楼隔音效果不太好，晚上我都睡不着觉。	
【終了部】： 谢谢了哈！	

上記の例に示したように、改善要求行為を行う際に、話者がいきなり用件内容(改善要求に関わる内容)を話すのではなく、何らかの方法で会話を切り出してから、用件内容を述べることがある。また、改善要求行為は相手を動かして特定の行動をさせる行為であるため、相手の「権利や自由を侵害されたくない」という行動の自由を脅かす度合いが高い。そのため、用件内容を述べた後に、相手との人間関係を修復するために、何らかの言葉を用いて謝意(詫び、感謝の意)を表すことがある。第4章でも触れたように、本論文では、用件内容を述べる前の部分を改善要求発話の【切り出し部】とし、用件内容を述べた後の部分を改善要求発話の【終了部】とする。

<sup>1</sup> “哥们”は男性用語で、「友人同士の親しみを込めた呼びかた、兄弟分」(『クラウン中日辞典』三省堂出版, 2001)という意味である。本来は友人同士の間で用いる呼称であるが、親しくない人や見知らぬ人に対して、相手との距離を縮めたい時には、呼びかけ語として用いられる。

本章では、筆者が行った DCT 調査により収集したデータを基にして、日中改善要求発話の【切り出し部】と【終了部】にどのような表現形式が使われているかを考察した上で、【切り出し部】と【終了部】における日本語話者と中国語話者の配慮の示し方と事態把握の相違を検討する。

## 6.2 【切り出し部】について

### 6.2.1 日本語母語話者の【切り出し部】に用いられる表現形式

表 6-1 日本語母語話者の【切り出し部】に用いられた表現形式

場面 1		場面 2		場面 3	
表現形式	実数	表現形式	実数	表現形式	実数
すみません、	4	悪いけど、/ちょっと悪いんだけど、	2	すみません、	4
すみません、申し訳ないんですけど、	1	あの、/あのさー、	2	合計	4
いきなりすみません。最近越してきたものですが、	1	ごめん、	1	/	
合計	6	合計	5		

※ 場面 1：隣に住んでいる親しくない同級生が騒音を立てた。

場面 2：隣に住んでいる親しい友達が騒音を立てた。

場面 3：映画館で見知らぬ人が騒音を立てた。

(場面設定の詳細内容は、第 3 章の 3.3 節を参照されたい。)

表 6-1 に示したように、改善要求発話の【切り出し部】において、日本語話者の用いる表現は概ね以下の 2 種類に分けられる。

I：改善要求の前置き表現として、詫びや恐縮の意を表明しながら注意喚起をする表現

例：「すみません」「すみません、申し訳ないんですけど」「いきなりすみません」「悪いけど」「ちょっと悪いんだけど」「ごめん」など

- (3) すみません、申し訳ないんですけど、声が結構響いて眠れないので…もう少しおさえめでお願いしてもいいですかね。(JNS13-場面 1)
- (4) ちょっと悪いんだけど、夜もう少し静かにしてくれないかな？(JNS1-場面 2)
- (5) すみません、ちょっと静かにしてもらってもいいですか。(JNS2-場面 3)

使用傾向から見ると、親しくない人より親しい人に対して、親近感を感じさせる表現形式が用いられる傾向が見られる（「すみません」「申し訳ありません」に比べ、「悪いけど」「ごめん」などの表現は、詫び表明表現でありながら、相手に親近感を与えることができる）。

## II：人に呼びかけたり、注意を引こうとする注意喚起表現

例：「あの」「あのさ」など

- (6) あの、実は結構〇〇ちゃんの声が私の部屋まで聞こえてて、昼間は良いんだけど、夜遅いとちょっと迷惑だから、ひかえてもらっても良い？ (JNS12-場面2)

この類の表現は、場面2の「隣に住んでいる親しい友達が騒音を立てた」場面での改善要求発話に現れたものである。

### 6.2.2 中国語母語話者の【切り出し部】に用いられる表現形式

表 6-2 中国語母語話者の【切り出し部】に用いられた表現形式

場面1		場面2		場面3	
表現形式	実数	表現形式	実数	表現形式	実数
同学,	3	〇〇〇 <sup>2</sup>	2	不好意思	2
你好, (〇〇〇)	3	亲	2	(Hi), 这位姐姐	2
嘿, 哥们, /兄弟	2	朋友	1	大姐, 很抱歉	1
〇〇〇同学你好,	1	哥	1	兄弟帮个忙	1
亲	1	哥们	1	您好, 这位兄弟	1
实在不好意思, 哥们!	1	骚年	1	嘿! 哥么,	1
不好意思,	1	嗨	1	朋友	1
麻烦你一下,	1	合計	9	先生	1
跟你商量个事,	1	/		拜托	1
合計	14			打搅一下	1
				哎	1
				合計	13

※ 場面1：隣に住んでいる親しくない同級生が騒音を立てた。

場面2：隣に住んでいる親しい友達が騒音を立てた。

場面3：映画館で見知らぬ人が騒音を立てた。

(場面設定の詳細内容は、第3章の3.3節を参照されたい。)

<sup>2</sup> 「〇〇〇」は聴者の「名前」や「ニックネーム」のことを指す。

表 6-2 に示したように、改善要求発話の【切り出し部】において、中国語話者の用いる表現は概ね以下の 5 種類に分けられる。

I : 改善要求の前置き表現として、詫びや恐縮、依頼の意を表明しながら注意喚起をする表現

例：不好意思（すみません）、实在不好意思（申し訳ありませんが）、很抱歉（申し訳ありません）、打搅一下（ちょっとすみません）、麻烦你一下（ちょっとすみません）、拜托（お願いですが）、跟你商量个事（ちょっとお話したいことがあるんですが）など

(7) 不好意思，我觉得轻，你们可以说话小声点吗？哈哈，谢谢了啊。（CNS13-場面 1）

筆者訳：すみません、私、眠りが浅いので、おしゃべりする時、声を小さくしてもらえませんか。ありがとうございます。

(8) 麻烦你一下，我们现在都在睡觉呢。你能说小声点，或者去别的地方打吗？(CNS4-場面 1)

筆者訳：ちょっとすみません、今みんな寝ているので、声を少し小さくしてもらえませんか。あるいは、他のところで話してもらえませんか。

(9) 跟你商量个事，晚上能不能早点打电话或者声音小一点儿。（CNS1-場面 1）

筆者訳：ちょっとお話したいことがあるんですが、夜電話するなら、少し早めにしてもらえませんか。あるいは、声を少し小さくしてもらえませんか。

(10) 拜托，声音小点行吗？（CNS10-場面 3）

筆者訳：お願いですが、声を小さくしてもらえますか。

上記の例に示したように、この類の表現はさらに、聴者に詫びることによって対人関係に対する配慮を示す【対人配慮型前置き表現】<sup>3</sup>と、伝達話題を予め明確に提示することによって伝達性への配慮を示す【伝達性配慮型前置き表現】<sup>4</sup>の 2 種類に分けられる。

また、使用場面から見ると、この類の表現は、主たる場面 1 と 3 の親しくない人に対する改善要求発話に用いられている。

II : 虚構の親族関係を表す呼称

例：哥（お兄さん）、这位姐姐（お姉さん）、大姐（お姉さん） など

<sup>3</sup> 例えば、“不好意思（すみません）”、“实在不好意思（大変申し訳ありませんが）”、“很抱歉（申し訳ありません）”、“打搅一下（ちょっとすみません）”“麻烦你一下（ちょっとすみません）”など。

<sup>4</sup> 例えば、“拜托（お願いですが）”、“跟你商量个事（ちょっとお話したいことがあるんですが）”など。

(11) 哥，咱能消停点睡觉不。我对声音特敏感，你聊天我睡不着。 (CNS14-場面2)

筆者訳：あのさ、ちょっと静かにして寝てもらえない。僕、音にすごく敏感だから、きみがおしゃべりすると眠れないの。

(12) 这位姐姐，请你注意一下，你已经影响到周围的人了，现在大家都在安静地看电影呢。 (CNS6-場面3)

筆者訳：あのう、気をつけてください。周りの人の迷惑ですよ。今、みんな静かに映画を見ているんです。

親族呼称とは、「生物学的関係である血縁関係や社会的関係である婚姻関係からなる親族に対する呼び方」(ト 2004:313)のことである。鈴木(1973:158)は「実際には血縁関係のない他人に対し、親族名称を使って呼びかけることを、人類学では親族名称の虚構的用法(fictive use)と言っている。このような習慣はどの言語に於ても程度の差こそあれ見られるもの」であると述べている。親族呼称名詞が発達している中国語では、他人を親族名称で呼ぶ習慣は特に発達している。

例えば、上記の例に示したように、親しい友達(男性)を“哥(お兄さん)”と呼んだり、映画館で会った自分より年上に見える見知らぬ若い女性を“姐姐(お姉さん)”と呼んだりすることがある。このように、中国語では、実際の親疎関係に関わらず、相手との距離を縮めたい時には、虚構の親族関係を表す呼称名詞を用いることができる。

また、鈴木(1973:159)が指摘しているように、「虚構的用法の一般原則は、話し手が自分自身を原点として、相手がもし親族だったら、自分の何に相当するかを考え、その関係にふさわしい親族名称を対称詞<sup>5</sup>または自称詞<sup>6</sup>に選ぶのである」。言い換えれば、通常、話者は自分自身を原点として、あるいは、自分自身の視点から見た相手の役割を親族名称で表すのである。また、日本語では、例えばテレビ局のリポーターが畑仕事をしている男性に向かって「お父さん」と呼んだりするように、いわゆる第三者の視点から(つまり、架空に設定した人物に話者自身が自己を同調させ、その人になりきった視点から)見た相手の役割を親族名称で表し呼びかけることがある。このような虚構的な用法は中国語では、あまり使われていない。テレビ局のリポーターが畑仕事をしている男性に向かって、中国語では、何で呼ぶかというか、通常は、話者自身の視点から相手との年齢差によって“大哥(お兄さん)”とか“大叔(おじさん)”と“大爷(おじさん)”と呼んだり、“你好/您好(こ

<sup>5</sup> 「対称詞とは、話しの相手に言及することばの総称である」(鈴木 1973:146)。

<sup>6</sup> 「自称詞とは、話し手が自分自身に言及することばのすべてを総括する概念である」(鈴木 1973:146)。

んにちは)”のような挨拶表現で呼びかけるだろう。

### Ⅲ：話者と聴者との社会関係を表す呼称

例：哥们(兄弟分)、兄弟(兄弟分)、朋友(友達)

(13) 哥们，小声点吧。都快把我给整失眠了。 (CNS17-場面 2)

筆者訳：あのさ、声を小さくしてよ。寝不足になりそう。

(14) 兄弟，你晚上说话能小点声吗？你每次聊天都影响我的休息。 (CNS16-場面 1)

筆者訳：あのう、夜おしゃべりする声を小さくしてもらえませんか。おしゃべりの声のせいで、よく休めないんです。

(15) 朋友，大家都在认真地看，请你小点声，不要打扰到别人。 (CNS15-場面 3)

筆者訳：すみません、みんな映画に集中しているので、声を小さくして、他の人の邪魔にならないようにしてください。

“哥们” “兄弟” “朋友”などは、本来は友人同士の親しみを込めた呼び方であるが、(14)と(15)に示したように、実際の友人関係を持っていない場合でも、相手との距離を縮めるために、あたかも友人同士であるかのように、虚構的用法として用いられることがある。例えば、(14)では、隣に住んでいる親しくない男性を“兄弟(兄弟分)”と呼んでいる。(15)では、映画館で会った見知らぬ人を“朋友(友達)”と呼んでいる。この虚構的用法は、改善要求発話における独特な用法ではなく、中国語の呼びかけ語の特徴の1つであり、様々な発話場面で用いられる。例えば、タクシーの運転手が初対面のお客さんに対して、“朋友，你去哪儿？(どちらへいらっしゃいますか)”を言うことがある。

### Ⅳ：聴者の社会属性を表す呼称

例：○○○(名前やニックネーム)、先生(大人の男性に対する尊称)、同学(学生さん)、  
骚年(少年)

(16) ○○○，请你说话小声点，影响到我的睡眠了。 (CNS4-場面 2)

筆者訳：○○さん、話し声を小さくしてください。よく眠れないの。

(17) 先生，你能文明说话吗，这么大声说话会影响他人看电影的。 (CNS16-場面 1)

筆者訳：すみません、話し声に気をつけてもらえますか。そんなに大きな声でしゃべると、他の人が映画を見るのに邪魔になりますよ。

(18) 同学，我是一个声音很敏感的人，听见声音总会睡不着觉，请你可不可以别通电话到那么晚。 (CNS6-場面 1)

筆者訳：あのう、私、音にとっても敏感なので、音が聞こえると眠れないんです。遅くまで電話をするのをやめていただけませんか。

(19) 骚年，让我睡会儿好不好？ (CNS18-場面 2)

筆者訳：きみ、(静かにして僕を)寝かせてくれよ。

改善要求発話の【切り出し部】において、(16)に示したように、親しい友達に対して、名前やニックネームを呼ぶことで相手の注意を喚起することがある。また、(17)に示したように、親しくない人に対して、“先生”(大人の男性に対する尊称、対義語は“女士”、大人の女性に対する尊称)のような、相手と親しい交際のない他人を敬して遠ざける気持ちの多い言葉が用いられる。(18)の“同学”は学生に対する呼称で、“李同学(李さん)”、“鈴木同学(鈴木くん)”のように、人名の後ろに付けることもできる。(19)の“骚年”は最近流行っている流行語で、「少年」という意味である。学生同士のからかいを込めた呼び方である。

V：挨拶表現など、人に呼びかけたり、注意を引こうとする注意喚起表現

例：您好/你好/Hi(こんにちは)、亲(ハニー)、嘿/嗨/哎(あの)

(20) 你好，大家都睡了，说话声音能小点吗？ (CNS10-場面 1)

筆者訳：こんばんは、みんなもう寝たので、話し声を少し小さくしてもらえませんか。

(21) 哎，别说话了。 (CNS18-場面 3)

筆者訳：あの、しゃべるのをやめてください。

(22) 亲，你能不能明天白天再聊，你的声音有点大，我没办法睡着。 (CNS8-場面 2)

筆者訳：ねえ、おしゃべりなら明日の昼間にしてもらえない？あなたの声がちょっと大きくて、眠れないの。

(20)に示したように、中国語では“您好/你好/Hi(こんにちは)”のような挨拶表現で発話を切り出して、改善要求を表出することがある。また、(21)に示したように、“嘿/嗨/哎(あの)”などの人に呼びかけたり、注意を引こうとする注意喚起表現で発話を切り出すことがある。(22)の“亲”は最近若者の間で流行っている流行語で、意味は“对所爱的人

的昵称，相当于亲爱的、宝贝儿<sup>7</sup>(好きな人に対する呼称、“亲爱的”“宝贝儿”に相当する)”である。最初はネットショッピングのサービス用語で、サービスセンターの人がお客さんに対して“亲(ハニー)”と呼びかける。今は一般化されていて、親しみを込めた呼び方として、日常会話でも使われている。

### 6.2.3 日中改善要求発話の【切り出し部】に見られる傾向

6.2.1 節と 6.2.2 節の分析から、改善要求発話の【切り出し部】において、日本語では、「すみません」「悪いけど」「ごめん」などの詫びや恐縮の意を表明しながら注意喚起をする前置き表現や、「あの」「あのさ」などの人に呼びかけたり、注意を引こうとする注意喚起表現が多用される。一方、中国語では、詫びや恐縮の意を表明しながら注意喚起をする前置き表現を用いることもあるが、話者と聴者との虚構の親族関係や社会関係を表す呼称、名前など聴者の社会属性を表す呼称、“您好/你好/Hi(こんにちは)”などの挨拶表現が多用される傾向が見られた。

【切り出し部】に用いる表現が言語によって異なる傾向が見られることは、他の研究にも指摘されている。

例えば、柏崎(1993)では、日本語母語話者、日本語学習者を対象に、大学職員に対する「依頼」「要求」の話しかけ行動を調査した結果、約9割の日本語母語話者が「すみませんが」「あの～」「失礼します」など、相手の負担に配慮した前置き表現を用いるのに対して、日本語学習者は、「あの～」「すみませんが」だけではなく、「こんにちは」「ちよっと」「～さん(名前・役職名)」など表現を多用することが報告されている。

また、水野(1999)、劉(2004)では、中国語の会話によく現れる親族呼称を使って挨拶したり、呼称による呼びかけ行動が、同一状況で呼称の直接使用は避けようとする意識が働く日本人の言語感覚から見ると過剰に感じられ、それが違和感をもたらす原因になると指摘している。例えば、「大きな食堂の向こうの端から大きな声で「先生！先生！」と呼ぶので「はい、何ですか？」と立ち止って待っていたら、近づいてきて「おはようございます！」と言われて気が抜けた。」という中国人学習者からの実例が挙げられている(水野1999:65)。

中国では、例えば、キャンパスで先生に会った場合、“老师好！(先生、こんにちは！)”、

<sup>7</sup> インターネット辞書『百度百科』より (2015年1月8日閲覧)  
<http://baike.baidu.com/link?url=1VPAnRXsgK08GVhSnIIavMEzeTyZZsbXMpk2a107p4sYUjLyaGTyHC3rtw6LTSDNY2eafE91Z2FKDoT29e4XX1weWCUCwi9wAJnK0WKJE9a>



“老师早上好！（先生、おはようございます！）”“赵老师！（趙先生！）”、“老师！（先生！）”などで挨拶するのが一般的であるが、“老师（先生）”を使わずに、直接“早上好！（おはようございます！）”とか、“下午好！（こんにちは！）”、“晚上好！（こんばんは！）”、“你好！（こんにちは！）”などで挨拶するのは、かなり違和感を感じる行為である。

“早上好！（おはようございます！）”、“下午好！（こんにちは！）”、“晚上好！（こんばんは！）”、“你好/您好！（こんにちは！）”などは、相手にフレンドリーさ（親近さ）を感じさせる表現でありながらも、多少距離感のある挨拶表現であるため、親しくない人や、初対面の人、見知らぬ人、またはホテルやレストランなどのサービス業でお客さんに対して用いる挨拶表現である。

#### 6.2.4 日中改善要求発話の【切り出し部】における配慮の示し方

【切り出し部】において、日本語では、恐縮や詫びの意を表明しながら注意喚起をする表現を多用するのに対して、中国語では親近感を示す呼称名詞や挨拶表現を多用するという現象に関して、従来、B&Lのポライトネス理論を援用し、解釈することが多かった。

滝浦(2008:46)は、「言語使用のなかでどのストラテジーが優勢であるかは、言語文化によって異なるものである。のちに見るように、総じて日本語は対人的な距離が大きく、ネガティブ・ポライトネスが優勢であると言える。対照的に、アメリカ（とりわけ西海岸）の英語や、現代の中国語は、対人的な距離が小さく、ポジティブ・ポライトネスが優勢である。」という見解を示している。

滝浦(2008)のこの見解は、本論文の研究対象である改善要求発話の【切り出し部】にも適用すると思われる。

前述したように、改善要求発話の【切り出し部】において、日本語話者は「すみません」「ごめん」「悪いけど」などの詫び・恐縮の意を表明しながら注意喚起をする表現を多用する。改善要求行為は相手が持つ「他者に邪魔されたくない」という行動の自由を脅かす行為であるため、改善要求を表出する前に、前置き表現として「すみません」「ごめん」「悪いけど」などの詫びの意（つまり、改善要求を表出することをすまないと思っている話者の心理）を表す表現を用いることは、人間関係を良好に維持するための一種の補償ストラテジーとして、聴者のネガティブ・フェイスへの配慮を示している。すなわち、ネガティブ・ポライトネス心理からの配慮である。

一方、「本来他人である人物を虚構的に親族に見なす点で、その分だけ相手との距離を

縮める効果を生む」と滝浦(2008:82)が指摘しているように、“哥(お兄さん)、这位姐姐((この)お姉さん)、大姐(お姉さん)”などの親族呼称や、本来親しくない、あるいは初対面の見知らぬ人である人物を虚構的に親友(または、友達)に見なす“哥们(兄弟分)、兄弟(兄弟分)、朋友(友達)”などの呼称は、相手との社会的距離を積極的に縮め、親密かつ好感を示す共感的な近接化であり、ポジティブ・ポライトネス心理からの配慮であると思われる。また、親しくない人に対して、“您好/你好/Hi(こんにちは)”などの挨拶表現を用いることは、相手にフレンドリーさ(親近さ)を感じさせることができ、聴者が持つ「他者に受け入れられたい・よく思われたい」というポジティブ・フェイスへの配慮が示されている。

(23) 实在不好意思，哥们！能不能小声点，我实在很抱歉打断你们聊天，但我因为你们这样而失眠很多天了…… (CNS14-場面1)

筆者訳：申し訳ありませんが、(親しみを込めた呼称)、声を少し小さくしてもらえませんか。おしゃべりのお邪魔をするのは、大変申し訳なく思いますが、もう何日間も眠れないんです。

(24) 大姐，很抱歉，你能小一点声音吗？我实在听不清。 (CNS1-場面3)

筆者訳：(親しみを込めた呼称)、申し訳ありませんが、声を少し小さくしてもらえませんか。(映画のセリフが)よく聞こえないんです。

(25) 您好，这位兄弟，大家都是来欣赏这部电影的，请照顾一下我的感受。谢谢您的配合。 (CNS19-場面3)

筆者訳：こんにちは、(親しみを込めた呼称)、みんな映画を見るためにここに来ているのです。気をつけてもらえませんか。ご協力に感謝します。

また、上記の例に示したように、親しくない人や見知らぬ人に対して、改善要求発話の【切り出し部】において、詫びや恐縮の意を表す前置き表現と、聴者との距離を縮める呼称が併用される事例も多く見られる。さらに、(25)のように、“你(あなた)”の敬称である“您(あなた様)”を用いた「敬して遠ざける」挨拶をしてから、“兄弟”という相手との距離を縮める(親しみを込めた)呼称を用いることがある。

奥水(1977)が指摘しているように、中国語の敬意は「相手をどのように呼ぶか、あるいは自分をどのように呼ぶかという呼称の問題に大きな比重が置かれる」のである。伝統的な中国社会において、対人行動において礼儀正しく振る舞おうとすれば、自己と他者を正しく位置づけて行動し表現することが一種の倫理的規範として求められる(彭2000)。改善

要求発話の【切り出し部】に用いる呼称は、単なる呼びかけの機能を果たすのだけではなく、自己と他者の位置づけを示すマーカーでもあり、対人関係を良好に維持するに欠かすことのできない重要な要素である。

## 6.3 【終了部】について

### 6.3.1 【終了部】に用いられる表現形式

- (26) 静かにしてもらえますか。すみません。 (JNS18-場面 1)
- (27) ごめん、ちょっともうこんな時間だし、おしゃべりなら小さい声でしてくれないかな～ごめんね。 (JNS2-場面 2)
- (28) 我睡眠质量比较差，对声音比较敏感，所以晚上的时候，你和朋友聊天可不可以小声点，希望你们不要聊太晚，非常不好意思！ (CNS3-場面 1)  
筆者訳：私、寝付きが悪くて、音にとっても敏感なんです。なので、夜お友達とおしゃべりする時、声を小さくしてもらえませんか。遅くまでおしゃべりしないで欲しいんです。本当にすみません。
- (29) 只有好好休息，明天学习才会有精神，所以以后聊天不要那么晚，好不？拜托啦！ (CNS3-場面 2)  
筆者訳：よく寝ないと、次の日勉強する時元気が出ないよ。だから、これからは遅くまでおしゃべりしないで。いい？お願いね。
- (30) 咱能小点声吗？谢谢。 (CNS12-場面 1)  
筆者訳：声を小さくしてもらえませんか。ありがとうございます。
- (31) 不好意思，我觉轻，你们可以说话小声点吗？哈哈，谢谢了啊。 (CNS13-場面 1)  
筆者訳：すみません、私、眠りが浅いので、おしゃべりする時、声を小さくしてもらえませんか。ありがとうございます。
- (32) 嘿，哥们，说话的时候能不能小点声，咱这楼隔音效果不太好，晚上我都睡不着觉。谢谢了哈！ (CNS11-場面 1)  
筆者訳：あのう、おしゃべりする時、声を小さくしてもらえませんか。この建物は防音効果があまりよくないので、夜、よく眠れないんです。ありがとうございます。

上記の例に示したように、改善要求発話の【終了部】において、日本語では、「すみま

せん」「ごめんね」などの詫びの意を伝える表現を用いる。一方、中国語では、“非常不好意思(本当にすみません)”のような詫びの意を伝える表現や、“拜托啦!(お願いね。)”のような依頼の意を強調する表現を用いること以外に、“谢谢(ありがとう)”“谢谢了哈(ありがとうね)”“谢谢了啊(ありがとうね)”などの感謝の意を伝える表現を多用する。特に、隣に住んでいる親しくない人が騒音を立てた場面において、19人の被験者の内、7人の発話に【終了部】があり、その中で、6人は“谢谢(ありがとう)”“谢谢了哈(ありがとうね)”“谢谢了啊(ありがとうね)”などの感謝の意を伝える表現を使用している<sup>8</sup>。

前文でも触れたように、聴者にある特定の行為を要求する改善要求行為は、聴者が持つ「他者に邪魔されたくない」という行動の自由(ネガティブ・フェイス)を脅かす度合いが高い。用件内容の改善要求を表出した後に、相手との人間関係を良好に保つための補償ストラテジーとして、「すみません」「谢谢」などの謝意(謝罪、感謝の意)を表す表現が用いられる。同一の状況で、日本語話者が謝罪の意を伝える表現を多用するのに対して、中国語話者が感謝の意を伝える表現を多用するのは、なぜであろうか。この現象の背後にはどのようなメカニズムがあるのだろうか。以下では、このような問題について検討する。

### 6.3.2 感謝と詫びの心理から見た「すみません」と“谢谢”

佐久間(1983:62)では、「『すみません』は、使い方さえ間違えなければ今や最も一般的な、軽い感謝の表現と言えよう」と指摘し、「同じ感謝の表現ではあっても、『喜び』の気持ちの表明に重きが置かれる場合には、『喜び』を基底に持つ『ありがとうございます』の代わりに、『すみません』を使うことができず、『許しを乞う気持ち』を基底に持つ『ごめんなさい』は、感謝の表現として用いることができないのである」と述べている。

言い換えれば、「ありがとう」と「すみません」はいずれも感謝表現として使えるが、「喜び」の気持ちの表明に重きが置かれる場合には、「ありがとう」が使われる。「恐縮の念」の表明に重きが置かれる場合には、「すみません」が使われる。

例えば、飲み会でビールを注がれたりした時の感謝の表現として、「恐縮」を基底に持つ「あ、すみません/あ、恐れ入ります」が使える一方、「喜び」を基底に持つ「ありがとうございます」も使える。ところが、「ご結婚おめでとう!」と言われたりした場合には、

<sup>8</sup> 改善要求の発話文において、中国人学習者が相手の協力に感謝する気持ちで、文末に「ありがとう」(= 謝意)を表出する傾向が強く見られることが、郭(2008a)にも報告されている。

「喜び」を基底に持つ「ありがとうございます」は使えるが、「恐縮」を基底に持つ「すみません」は使えないのである(佐久間 1983:62 から一部抜粋)。

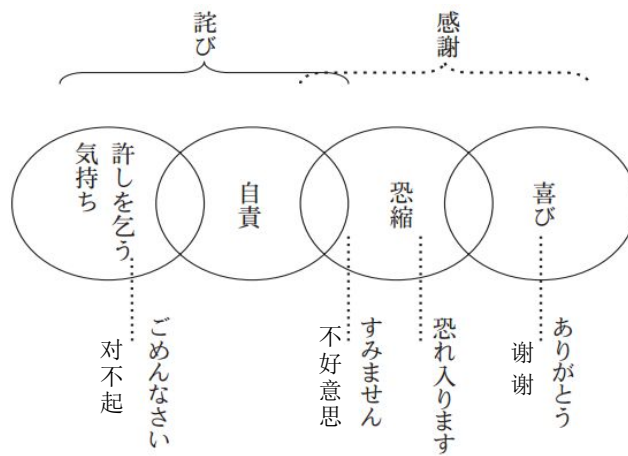


図 6-1 感謝と詫びの表現形式と話者の心理(佐久間 1983:63<sup>9</sup>)

日本語の「すみません」と同様に、中国語の“不好意思”も、「詫び」と「感謝」両方の用法を持っている。例えば、詫び表現として“让您久等了，真是不好意思。(お待たせして、本当にすみません。)”のように言うことができる。また、感謝表現として“让您特意跑一趟，真是不好意思。(わざわざお越しいただきまして、本当にすみません)”のように言うこともできる。感謝表現として使われるにせよ、詫び表現として使われるにせよ、話者が“不好意思(すみません)”と言う際に、相手(他人)に対する「恐縮」の意を持っているという点では共通している。

また、中国語には、「喜び」の心理を表す“谢谢”、「許しを乞う気持ち」や「自責」の心理を表す“对不起”という表現がある。

先に見たように、「すみません(不好意思)」と「ありがとう(谢谢)」は、ある特定の場面では両方とも使うことができる。しかし、その背後に反映されている話者の心理は異なる。「喜び」の気持ちの表明に重きが置かれる場合には、「ありがとう」と“谢谢”が用いられる。「恐縮の念」の表明に重きが置かれる場合には、「すみません」と“不好意思”が用いられる。

(33) a (ご迷惑をお掛けして)、すみません。

b? (ご迷惑をお掛けして)、ありがとうございます。

<sup>9</sup> 中国語の表現形式は筆者が付け加えたものである。

(34) a (改善行為を実現していただければ)、ありがたいです。

b? (改善行為を実現していただければ)、すみません。

(33)と(34)に示したように、「ご迷惑をお掛けして、すみません」は成り立つが、「ご迷惑をお掛けして、ありがとうございます」は不自然である。他方、「改善行為を実現していただければ、ありがたいです」は成り立つが、「改善行為を実現していただければ、すみません」は不自然である。

談話レベルにおける背景化という観点から見ると、改善要求発話の【終了部】に用いる「すみません(不好意思)」は、「ご迷惑をお掛けして」という命題が背景化されている。一方「ありがとう(谢谢)」は、「改善行為を実現していただければ」という条件節の命題が背景化されていると考えられる。つまり、改善要求発話の【終了部】で、話者が「改善行為をしてもらうことで、聴者に負担を掛けること」に注目した場合には、「すみません(不好意思)」などの謝罪の意を伝える表現が用いられる。一方、未来に発生する可能性のある「聴者が改善行為をすること」に注目した場合には、「ありがとう(谢谢)」などの感謝の意を伝える表現が用いられると思われる。

「改善行為が実現された」という未来に発生する出来事を先取りして、お礼を先に言うことは、次の例で証拠付けられる<sup>10</sup>。

(35) 您好，这位兄弟，大家都是来欣赏这部电影的，请照顾一下我的感受。谢谢您的配合。  
合。 (CNS19-場面3)

筆者訳：こんにちは、(親しみを込めた呼称)、みんな映画を見るためにここに  
来ているのです。気をつけてもらえませんか。ご協力に感謝します。

(35)は、映画館で隣の見知らぬ人が大声でおしゃべりしている場面での改善要求発話である。話者が改善要求を表出した後に、「谢谢您的配合(ご協力に感謝します)」という表現を用いて発話を終了させている。「您的配合(ご協力、つまり改善行為をすること)」は、

<sup>10</sup> 認識時から見て「事態」が時間軸上での指向している時点の関係について、論理的に「事態が認識時に先行する場合」「事態と認識時が部分的に重なる場合」「事態と認識時が一致する場合」「事態が認識時の後に起こる場合」という4つのケースが考えられると述べ、事態と認識の時間的關係によって、知覚動詞(見る、聞く、知る、思う、驚くなど)と共起できる場合と共起できない場合があると指摘している小野(2005)、発話時点、出来事時点とは異なる<設定時点>が常にあることを主張し、<ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動が引き続き関わり、効力を持っていること>を<パーフェクト>と呼ばば、<未来パーフェクト><現在パーフェクト><過去パーフェクト>が存在すると提唱している工藤(1995)、時制の観点から主節と従属節の時制の關係を分析した三原(1992)など、時間認知と表現形式との關係性を論じた研究は他にも散見される。

すでに発生した出来事ではなく、〈未来〉のある時点に発生する(可能性のある)出来事である。にもかかわらず、話者が改善要求行為を行う際に、その出来事を先取りして、自分の感情を想定し言語化している。

謝意の表明は、それ自体がポライトネスの一種として受け取られる。この謝意は〈未来〉の時点に発生する「聴者が改善行為をすること」に対するものであるため、「改善行為をするよう促す」という言外の意味を伝える。言い換えれば、「あなたの改善行為にすでにお礼を言ったので、必ず改善して下さるようお願いいたします」という含意が読み取れる。

〈未来〉に発生する出来事を先取りして先にお礼を言うという用法は、次の依頼場面の例にも見られる。

(36) 哪位朋友能教我英语, 初中的, 拜托了, 先跟你说声谢谢。(「百度知道」より<sup>11)</sup>)

筆者訳：どなたか私に英語を教えてくださいませんか。中学校のです。お願いします。先にお礼を申し上げておきます。

(36)は、中国の「百度知道」(日本の「Yahoo 知恵袋」に相当する情報サイト)から収集した例である。サイトに書き込みをする時点では、読者が目の前にいるわけでもなく、そもそも、誰がその情報を読むかも想像もできない。にもかかわらず、なぜ“谢谢”(ありがとう)という感謝の意を伝える表現が使われているのだろうか。

“先跟你说声谢谢”(先にお礼を申し上げておきます)の“先…”(～ておきます)という時間や順序を表す副詞に示されているように、ここでの感謝の意は、今もしくは過去の出来事に対するものではなく、話者が「誰かが返事を書いてくれた」という〈未来〉の時点に発生する出来事を先取りして、その時点での自分の感情を想定し言語化したものである。

また、筆者の経験では、飛行機内で話される中国語のアナウンスの最後に、“谢谢”という言葉をしばしば耳にする。日本語の場合、長いアナウンスの最後に「ありがとうございます」という言葉はたまに耳にするが、離陸前の短いアナウンスや乱気流に遭った際の緊急アナウンスの場合には、「ありがとうございます」が用いられていないようである。また、英語は中国語と同様に、アナウンスの最後に“Thank you!”という言葉が使われている。(37)と(38)は筆者の記憶により、そのアナウンスを再現した例である。

---

<sup>11</sup>[http://zhidao.baidu.com/link?url=t8vzKT0JtMhiMHPV1wU1uOJuWOH7LETDLWpuVI\\_jDca2LzQBwZw6WN\\_](http://zhidao.baidu.com/link?url=t8vzKT0JtMhiMHPV1wU1uOJuWOH7LETDLWpuVI_jDca2LzQBwZw6WN_)

LkUAPZ8E43FiUhZGu2HzvhuyCr-dP9Es7juPoc8VOL9ScODF2BTK(2014年12月17日閲覧)

- (37) a 女士们、先生们，飞机很快就要起飞了，请再次确认您的安全带是否系好。谢谢!  
 b 皆様、間もなく離陸致します。シート・ベルトをもう一度お確かめ下さい。  
 c Ladies and gentlemen. We will be taking off shortly. Please make sure that your seat belt is securely fastened. Thank you!
- (38) a 我们即将经过一段不稳定的气流，为了各位的安全，请留在座位上，将安全带系好。谢谢!  
 b ただいま気流の悪いところを通過中です。お座席にお戻りになり、シートベルトをおしめ下さい。  
 c We will be passing through turbulence. For your own safety, please remain seated and fasten your seat belt. Thank you!

アナウンスの最後の“谢谢!” “Thank you!” は、「ご清聴、ありがとうございます。」という意味があると思われるが、離陸前や、乱気流に遭った緊急状況の場合には、「シート・ベルトをもう一度お確かめ下さい」や「お座席にお戻りになり、シート・ベルトをおしめ下さい」などの指示を出した後に、“谢谢!” “Thank you!” を用いることは、「ご協力に感謝いたします」という意味が含まれていると考えられる。

興味深いことに、中国語と英語のアナウンスの最後に感謝の意を表す“谢谢!” “Thank you!” が使われているが、日本語では「ありがとうございます。」が使用されていない。この点に関して、筆者は次のように考えている。

依頼発話(改善要求発話も広義の依頼発話の一種である)の【終了部】に用いる“谢谢!” は、「<未来>に発生する出来事を先取りして、お礼を先に言う」という意味用法で使われているため、「依頼した行為を行うよう促す」という意味がある。そこで、なるべく相手の領域に踏み込まないようにする敬避的な配慮が優勢である日本語<sup>12</sup>では、指示や依頼、改善要求発話の【終了部】には「ありがとうございます」などの感謝の意を表す表現が合わないのではないかと思われる。

(39) 日本語： <聴者に負担を掛けること>⇒謝罪

(40) 中国語： <聴者が改善行為を実現すること>⇒感謝

<sup>12</sup> 「<聞き手の領域>に関わることがらについては、聞き手自身が断定・決定の権利を所有している」ため、「聞き手の権利を侵害した場合には、丁寧さに欠ける発話となる」。そのため、「丁寧体世界においては、丁寧さを維持するために、話し手は、<聞き手の領域>に踏み込まないように配慮している」(鈴木 1989, 1997)。



以上、改善要求発話の【終了部】において、日本語話者は「すみません」などの謝罪の意を伝える表現を用いるが、中国語話者は“谢谢”などの感謝の意を伝える表現を多用する。このような現象の背後には、両言語における話者心理の相違があることが明らかになった。日本語話者は「改善行為をしてもらうことで、聴者に負担を掛けること」に注目するため、「恐縮の念」を基底に持つ「すみません」や「許しを乞う気持ち」を基底に持つ「ごめんね」などの表現を用いる。一方、中国語話者は未来の出来事である「聴者が改善行為を実現すること」を先取りして、聴者の好意に注目するため、「喜びの気持ち」を基底に持つ“谢谢(ありがとう)” “谢谢了啊(ありがとうね)”などの表現を用いる。

### 6.3.3 事態把握の観点から見た「すみません」と“谢谢”

改善要求発話の【終了部】と同様に、バスの中で席を譲られた時や、落し物を拾ってもらった時、日本語話者は他者に迷惑や負担を掛けたのですまないと思う気持ちを表す「すみません」を多用するのに対して、中国語話者は他者の好意に対する感謝の気持ちを表す“谢谢”を多用する現象が見られる(方・高 2004)。

バスで席を譲ってもらった際に、日本語話者が「ありがとう」ではなく「すみません」を用いる原因について、坂本(1999:87)は「バスで席をゆずってもらったような時は、当然性の低いことをしてくれた、そのような配慮をさせたことに対して『すみません』が出る。『ありがとう』だけなら、席をゆずるのは当然だと思っていることを示すことになってしまう。(中略)、『ありがとう』と『すみません』は同じような状況で使われ、どちらも『感謝』とされるが、実際には相手と自分との立場、社会的役割から生まれる当然性の違いによって使い分けられている」と述べている。

土居(1975:27-28)でも同様の主張が見られる。「なぜ日本人が親切の行為に対し単純に感謝するのでは足りるとせず、相手の迷惑を想像して詫びねばならぬのかということである。それは詫びないと、相手が非礼と取りはしないか、その結果相手の好意を失いはしないかと恐れるからである。したがって相手の好意を失いたくないので、そして今後も末永く甘えさせて欲しいと思うので、日本人は「すまない」という言葉を頻発すると考えられるのである」。

また、小野(2014)では、感謝表現としての日本語「ありがとう」と「すみません」の使

い分けにおいては、「感謝の対象行為が当然性<sup>13</sup>の高い際に『ありがとう』、当然性の低い際に『すみません』が用いられる」という原則が働いていると指摘している。

しかし、この原則は、バスの中で席を譲られた時や落し物を拾ってもらった時に“不好意思(すみません)”ではなく、“谢谢(ありがとう)”を多用する中国語には、適用されないようである。

同一の状況において、なぜ日本語話者は「詫び表明」をする「すみません」を多用するのに、中国語話者は「感謝表明」をする“谢谢(ありがとう)”を多用するのだろうか。言い換えれば、同一の状況において、なぜ日本語話者は相手に対する「恐縮の念」の表明に重きを置くのに対して、中国語話者は「喜び」の気持ちの表明に重きを置くのだろうか。本節では、「言語化しようとする<事態>に対して、言語主体がどこに視座を据えて把握しようとするのか」という「事態把握の仕方」の観点からこの課題を検討する。

「席を譲る」あるいは「落し物を拾う」行為は、相手が自発的に行った行為であり、話者が聴者に頼んだ行為ではない。そのため、傍観者の視点から客観的にこの事態を語る時、「AがBに席を譲った」「AがBに落し物を拾った」と言うだろう。この「B」を当事者の話者に置き換えてみると、(41)(42)に示すように、中国語では、話者(一人称“我”で表示されている)は「B」と同様の扱いとなる。

(41)a A 给 B 让了座。(AがBに席を譲った。)

b A 给 我 让了座。(Aが私に席を譲った。)

(42)a A 给 B 捡了掉了的东西。(AがBに落し物を拾った。)

b A 给 我 捡了掉了的东西。(Aが私に落し物を拾った。)

人間は「鏡に映った他者の姿がその他者本人であると確認できるのと同じように、鏡に映った自己の姿は他ならぬ自己の客体化されたもの」(池上 2005a:16)と認識することができる。これと同様に、話者が出来事(事態)を語る際に、自己を客体化させ、傍観者の立場から、出来事(事態)を語るすることができる。言語主体(=認知主体)が傍観者の立場から、出来事(事態)を客観的に見ているため、自己(より厳密的に言えば、客体化された話者の分身)は特別な存在ではなく、他者として認識しうるものである。言い換えれば、出来事(事態)の当事者が他者であれ、自己であれ、言語主体(=認知主体)が同様の捉え方で出来事(事態)を語るのである。

<sup>13</sup> ここで言う「当然性」とは、感謝の対象となる行為を受益する権利を言う(小野 2014:36)。

そのため、“A 给 B 让了座/捡了掉了的东西(A が B に席を譲った/落とし物を拾った)”と同様に、傍観者の立場に立つ言語主体が、“A 给我让了座/捡了掉了的东西(A が私に席を譲った/落とし物を拾った)”と表現することができるのである。

“A 给我让了座/捡了掉了的东西(A が私に席を譲った/落とし物を拾った)”という出来事において、出来事の主導者は A である。そのため、傍観者の立場から事態を捉える際に、出来事の主導者である A(この A は「他者」のことを意味する)を主格の位置に置くのが一般的である。例として、(43)と(44)を参照されたい。

(43)a 谢谢你给我让座。

(あなたが私に) 席を譲ってくれて、ありがとうございます。

b? 不好意思让你给我让座。

(私があなたに) 席を譲ってもらって、すみません。

(44)a 谢谢你给我捡东西。

(あなたが私に) 落とし物を拾ってくれて、ありがとうございます。

b? 不好意思让你给我捡东西。

(私があなたに) 落とし物を拾ってもらって、すみません。

(43)と(44)に示したように、中国語では、他者が自発的、主導的に行った「席を譲る／落とし物を拾う」行為に対して、話者が感謝の意を伝えるのは自然であるが、謝罪の意を伝えるのはやや不自然である。

従って、傍観者の立場から事態を捉え言語化する傾向のある中国語では、相手が自発的に行った行為が自己に利益をもたらした場合、話者が感謝の意を伝えることが多い。

一方、日本語では、相手が自発的に「席を譲る」「落とし物を拾う」行為を行ったにもかかわらず、話者があたかも相手に頼んで、やってもらったかのように、出来事(事態)の主導者になっており、「(ご迷惑をおかけして)、すみません」と表現する。この点については、土居(1975:27-28)にも同様の主張が見られる。「なぜ日本人が親切の行為に対し単純に感謝するのでは足りいとせず、相手の迷惑を想像して詫びねばならぬのかということである。それは詫びないと、相手が非礼と取りはしないか、その結果相手の好意を失いはしないかと恐れるからである」。このように、他者が自発的、主導的に行った出来事に対して、話者があたかも自分が出来事の主導者であるかのように述べることは、話者が「自己-

中心的(ego-centered)」に、すなわち<主観的把握>に基づいて出来事を捉え、言語化することを示唆している。

「席を譲る」、「落とし物を拾う」行為と同様に、改善要求行為においても、日本語話者は「自己-中心的」に出来事(事態)を捉える傾向がある。改善行為をしてもらうことで聴者に負担を掛けるので、発話の【終了部】に、謝罪の気持ちを伝える表現を多用する。一方、中国語話者は、自己を客体化させて(客体化した自己を他者のように扱える)、傍観者の立場から出来事(事態)を捉える傾向があり、発話の【終了部】に、未来の時点に発生する「聴者が改善行為をすること」を先取りして、聴者に感謝の意を伝える表現を多用する。

(45) 日本語：(話者が聴者に負担をかける)⇒謝罪

他者に負担を掛けることに注目、話者が主格に位置づけられている

(46) 中国語：(聴者が改善行為を実現する)⇒感謝

聴者の好意に注目、聴者が主格に位置づけられている

(45)と(46)に示したように、改善要求発話の【終了部】において、日本語話者は「自己-中心的」に事態を捉える傾向があり、「改善行為をしてもらうことで、聴者に負担を掛けること」に注目し、話者自身を主軸に位置づけて言語化する傾向がある。一方、中国語話者は傍観者の視点から客観的に事態を捉える傾向があり、「聴者の好意(つまり、改善行為を実現すること)」に注目し、聴者を主軸に位置づけて言語化する傾向がある。

#### 6.4 本章のまとめ

本章では、筆者が行ったDCT調査により収集したデータを基にして、日中改善要求発話の【切り出し部】と【終了部】にどのような表現形式が使われているかを考察した上で、【切り出し部】と【終了部】における日中両言語の配慮の示し方と認知的な営みの相違について検討した。その結果、以下のことが明らかとなった。

##### 1) 【切り出し部】について

改善要求行為は、聴者が持つ「他者に邪魔されたくない」というネガティブ・フェイスを脅かす度合いの高い行為である。日本語話者は、改善要求を表出する前に、人間関係を良好に維持するための一種の補償ストラテジーとして、「すみません」「悪いけど」「ごめん」などの謝罪、恐縮の意を表明しながら注意喚起をする前置き表現を

用いる。

一方、中国語話者は“不好意思(すみません)”“很抱歉(申し訳ありません)”などの謝罪の意を伝える前置き表現以外に、親しくない人に対しても、“哥们/兄弟(兄弟分)”“朋友(友達)”“这位姐姐((この)お姉さん)”“大姐(お姉さん)”といった虚構の親族関係や社会関係を表す(親しみを込めた)呼称名詞を用いて、聴者との距離を積極的に縮め、親近感を示すことで、ポジティブ・ポライトネスを示すことが多い。また、“您好/你好/Hi(こんにちは)”などの挨拶表現も多用される。

## 2) 【終了部】について

改善要求発話の【終了部】において、日本語話者は「すみません」などの謝罪の意を伝える表現を用いる。一方、中国語話者は、“谢谢”などの感謝の意を伝える表現を多用する傾向がある。このような違いは、両言語における話者心理が異なることによるものである。日本語話者は「改善行為をしてもらうことで、聴者に負担を掛ける」ことに注目するため、「恐縮の念」を基底に持つ「すみません」や「許しを乞う気持ち」を基底に持つ「ごめんね」などの表現を用いる。一方、中国語話者は未来に発生する「聴者が改善行為を実現する」ことを先取りして、聴者の好意に注目するため、「喜びの気持ち」を基底に持つ“谢谢(ありがとう)”“谢谢了啊(ありがとうね)”などの表現を用いる。

以上のことから、「言語が異なると、それぞれの話者による<事態把握>の仕方に好みの差があるということは、言語のいろいろなレベル、様々な側面について認められることである」と池上(2011b:318)が指摘しているように、慣習的に使われているように見える様々な言語現象や配慮の示し方の背後には、話者の慣習化したものの見方、慣習化した事態把握の仕方が反映されている。つまり、各言語における配慮の示し方は恣意的なものではなく、話者の認知的な営みにおける傾向性によって動機付けられていると思われる。

謝意(感謝/詫びの意)を表す「すみません」と「ありがとう」の使い分けには様々な要因が関わっており、同一の発話状況でも、言語によってその使い分けが異なることがある。日中両言語では、佐久間(1983)の言う「感謝と詫びの表現形式と、それを支えている話者の心理との関係」は共通していると思われる。つまり、「喜び」の気持ちの表明に重きが置かれる場合には、「ありがとう」と“谢谢”が使われる。相手に対する「恐縮の念」の表明に重きが置かれる場合には、「すみません」と“不好意思”が使われる。「許しを乞

う気持ち」や「自責」の心理を表す場合には、「すみません/ごめんなさい」と“对不起”が使われる。同一の状況において、日本語話者が「すみません」を多用するのに対し、中国語話者が“谢谢(ありがとう)”を多用するのは、両言語における話者の心理が異なるためであると思われるが、話者の心理に影響を及ぼすのは、両言語における話者の慣習的な事態把握の仕方であると考えられる。

これまでの配慮表現やポライトネスに関する対照研究は、Leech(1983)の「ポライトネスの原理」やB&L(1987)の「ポライトネス理論」、山岡・牧原・小野(2010)の「配慮表現の原理」などを援用して分析を行うことが多かった。本章で試みた「言語のあり方は言語話者の認知的な営みにおける傾向性によって動機付けられているという前提のもとに、認知的アプローチから言語間の配慮の示し方の相違を検討する」方法は、これまでになかった観点から言葉の使われ方について考える点で斬新であり、今後の配慮表現やポライトネスに関する対照研究に、新たな方法論を示したと考える。

## 第7章 本論文のまとめと今後の展望

### 7.1 本論文のまとめ

本論文は、語用論と認知言語学を融合させた「認知コミュニケーション論」の観点から日中改善要求発話のパターンと表現形式について論じるものである。「人間の認知的な営みには固有の傾向性が存在するという前提のもとで、ある状況が言語化されようとする場合、どのような表現の仕方が可能な選択肢としてありうるのか、そして、それら可能な選択肢の間の違いは、人間のいかなる認知的な営みにおける傾向性によって動機づけられているのか」(辻 2003:VII)という認知言語学の基本的な関心に則り、本論文では、日本語話者と中国語話者がそれぞれどのような発話パターンおよび表現形式を用いて改善要求行為を行っているかを考察した上で、改善要求発話に用いられる表現形式がどのような仕組みによって成り立っているのかを認知的アプローチから検討した。その論点としては、

- 日本語話者と中国語話者の改善要求発話のパターンには、どのような特徴が見られるのか。
- 日本語と中国語のポライトネスおよび表現形式を丁寧化する方法の相違が、事態把握(言語化)の仕方とどのように関わっているのか。

という2つの課題を設定した。

序章である第1章では、伝統的な語用論研究における画期的な研究成果を挙げた「発話行為論」「協調の原理」「関連性理論」「ポライトネス理論」を概観した上で、認知言語学を基盤に据えた新しい語用論研究である「認知コミュニケーション論」を紹介した。「ことばの背後に存在する主体の認知能力の観点から、ことばの使用と解釈の諸相をダイナミックに研究していく(小泉 2001:194)」という認知的アプローチから、日中改善要求発話のパターンと表現形式を分析し、日本語と中国語のポライトネスおよび表現形式を丁寧化する方法の相違が、事態把握の仕方とどのように関わっているのかを明らかにすることが本論文の目的であることを述べた。

第2章「先行研究」では、改善要求行為に関する先行研究を「日本語母語話者を対象とした研究」、「日本語母語話者と日本語学習者との比較研究」、「日・英、日・韓、日・中(台)対照研究」に分けて整理し、その成果と問題点を検討した。これまでの研究では、社会言語学や談話研究の視点から、発話ストラテジーの研究が中心になっており、場面状況に応

じて(日本語、中国語、英語、韓国語)話者がそれぞれどのようなストラテジーと表現形式を多用しているかについて幅広く分析が行われ、改善要求行為の実態を明らかにした点は高く評価できるが、ストラテジーの使用傾向や連鎖パターンの背後にどのようなメカニズムがあるのかについては、ほとんど言及されてこなかった。また、学習者のストラテジーと表現形式の使用において、母語干渉の影響で、日本語母語話者と異なる傾向が見られることが指摘されているが、負の転移を防ぐための方策については触れられておらず、学習者の改善要求行為における語用論的転移の問題について、根本的な解決策が明らかにされているとは言いがたい。

第3章「理論的枠組み」では、まず、Langacker(1990a, 1991, 2008)によって提唱されている「ビリヤードボール・モデル」と、これまで認知文法で扱われてきた文レベルでの「因果連鎖」の分析方法を踏まえ、改善要求行為における談話レベルでの「因果連鎖」を提起し、改善要求発話の構成要素を分析する方法を示した。そして、「言語化する事態に対して、言語主体がどこに視座を据えて把握しようとするのか」という「事態把握の仕方」について、Langacker (1985, 1990a, 1990b, 1991, 2008)の「ステージ・モデル」、水谷(1985)の「立場志向型・事実志向型」、澤田(1993)の「内的描写・外的描写」、池上(2004, 2005a, 2005b, 2006, 2011a)の「主観的把握・客観的把握」、中村(2004)の「Iモード・Dモード」、木村(1996, 2014)の「当事者現場立脚型・傍観者俯瞰型」などの理論を踏まえて、事態把握には、<Ⅰ>認知主体である話者が言語化の対象となる事態・現場の中に視座を据え、経験者として事態を把握するタイプと、<Ⅱ>「認知主体である話者が言語化の対象となる事態・現場の外に視座を据え、傍観者の視点から事態を把握するタイプ、という2つの基本類型があることを述べた。

第4章「事象構造の観点から見た日中改善要求発話のパターン」では、第3章で提起した改善要求行為における談話レベルでの因果連鎖に基づき、「連鎖のどの部分を切り出して言語化するか」、「切り出した事象をどの順序で述べるか」、「連鎖に現れた事象以外に、どのようなものが言語化されるのか」を考察することによって、本論文の第一の目的である「日本語話者と中国語話者の改善要求発話のパターンには、どのような特徴が見られるのか」という課題を明らかにした。

具体的には、改善要求行為は、**事象Ⅰ：聴者が好ましくない状況を起こしたこと** → **事象Ⅱ：話者の利益が損なわれたこと** → **事象Ⅲ：話者が聴者に改善して欲しいと伝えること** → **事象Ⅳ：聴者が改善行為をすること**、という一連の因果関係のある事象連鎖(すなわち、



因果連鎖)とみなされる。因果連鎖の伸縮、切片化(因果連鎖の中から一部を切り出して、言語化すること)の仕方によって、改善要求行為の事象構造(すなわち、認知の世界での出来事)が多様化し、事象構造に基づいて言語化した改善要求発話には様々な発話の仕方が見られる。しかし、話したい内容をひとまとまりの発話にして継続的に盛り込む場合、日中両言語とも、目的達成に直接作用する事象Ⅲ(話者が聴者に改善して欲しいと伝えること)が言語化される、話者の発話意図が表現形式に明示化されている発話パターンが多用されるという特徴が見られる。そして、「切り出した事象をどの順序で述べるか」に関して、日本語話者は、事象Ⅰや事象Ⅱを述べてから、事象Ⅲを述べる傾向が強く、目的達成に直接作用する【主要行為部】(すなわち、言語行動の「核」)が発話の後半部に位置することが多い。それに対して、中国語話者は、事象Ⅲを先に述べてから、事象Ⅰや事象Ⅱを述べる傾向が強く、言語行動の「核」が発話の前半部に位置することが多いということが明らかになった。さらに、「連鎖に現れた事象以外に、どのようなものが言語化されるのか」を考察した結果、日本語話者は、基本的に連鎖に現れた事象ⅠとⅡを言語化し、聴者側から受けた被害や不満を述べることによって、改善行為を行うよう促すが、中国語話者は、連鎖に現れた事象以外に、一般常識や客観的な事情を説明することによって、個人対個人の対立を回避し、改善を行ってもらうパターンを多用することが分かった。

第5章「事態把握の観点から見た日中改善要求表現」では、改善要求発話の【主要行為部】に用いられる表現形式に着目し、日本語の「～てくれる?」「～てもらえる?」と中国語の“你能～吗?”“麻烦你能～吗?”を中心に、「事態把握」という認知的アプローチから改善要求表現の日中対照を行った。「日中間の配慮の示し方はどのように異なるか」、「肯定形・否定形によって改善要求表現の丁寧さが逆転する現象が事態把握の仕方とどのように関わっているのか」、「授受関係の明示と表現形式の丁寧さにはどのような関わりがあるのか」を考察することによって、本論文の第二の目的である「日中間のポライトネスおよび表現形式を丁寧化する方法の相違が、事態把握(言語化)の仕方とどのように関わっているのか」という課題を明らかにした。

分析の結果、疑問文の形で改善要求を表出する際に、日本語では、求心的な授受補助動詞「～てくれる」「～てもらおう」を用いて、事態(=聴者が改善行為をすること)と話者自身との関係を明示することが多く、<主観的把握>に基づいて事態を言語化する傾向がある。一方、中国語では、話者自身が事態(=聴者が改善行為をすること)に関与する場合であっても、「自己分裂」という認知操作を経て、自分の分身(つまり、客体化される“我”)

を事態の中に残したまま、自らはその事態から抜け出し、事態の外から、あたかも傍観者であるかのように、＜客観的把握＞に基づいて事態を言語化する傾向があることが明らかになった。事態把握の仕方の相違によって、改善要求表現における日中両言語の「配慮の示し方」、「疑問文における話者の判断の様相の示し方」、「授受関係を明示する要素「～てくれる」と“给我”の機能」が異なるため、肯定形・否定形、授受関係の明示・非明示によって改善要求表現の丁寧さが日中間で逆転するという現象が生じるのである。

第6章「日中改善要求発話の【切り出し部】と【終了部】の表現形式」では、日中改善要求発話の【切り出し部】と【終了部】にどのような表現形式が使われているかを考察した上で、【切り出し部】と【終了部】における日中両言語の配慮の示し方と認知的な営みの相違を検討した。

その結果、改善要求を表出する前に、日本語話者は、聴者の「他者に邪魔されたくない」というネガティブ・フェイスに配慮した、「すみません」「悪いけど」「ごめん」などの謝罪、恐縮の意を表明しながら注意喚起をする前置き表現を用いることが多い。一方、中国語話者は、“哥们/兄弟(兄弟分)”“朋友(友達)”“这位姐姐((この)お姉さん)”“大姐(お姉さん)”などの(虚構の)親族関係や社会関係を表す呼称名詞や“您好/你好/Hi(こんにちは)”などの挨拶表現を用いて、聴者との距離を積極的に縮め、ポジティブ・ポライトネスを示すことが多い。改善要求を表出した後、日本語話者は、「改善行為をしてもらうことで、聴者に負担を掛けること」に注目するため、「恐縮の念」を基底に持つ「すみません」や「許しを乞う気持ち」を基底に持つ「ごめんね」などの表現を用いる。一方、中国語話者は未来に発生する「聴者が改善行為を実現すること」を先取りして、聴者の好意に注目するため、「喜びの気持ち」を基底に持つ“谢谢(ありがとう)”“谢谢了啊(ありがとうね)”などの表現を用いる傾向があることが分かった。

以上、これまでの改善要求行為に関する先行研究とは異なり、「改善要求行為にはどのような戦略と表現形式が使われているのか」ということよりも、「改善要求行為に用いられる戦略と表現形式はどのような仕組みによって言語化されたのか」という点が、本論文の主なテーマである。言語は恣意的なものではなく、言語話者の認知的な営みにおける傾向性によって動機付けられている。慣習的に使われているように見える様々な言語現象や配慮の示し方の背後には、言語話者の慣習化したものの見方、慣習化した事態把握の仕方が反映されていると思われる。

これまでの発話行為(本論文の研究対象である改善要求だけでなく、依頼、断り、謝罪、

感謝、申し出などの行為)に関する日中対照研究は、「日本語と中国語はどのように異なるのか」という段階で止まることが多く、「日本語と中国語でなぜそのような相違が見られるのか」について、人間の知のメカニズムおよび人間のさまざまな認識の側面を考慮に入れて、言語と認知の関係を明らかにした研究は少ない。

前文でも触れたように、言語がなぜそのようになっているのかを解釈することは、言語の複雑で多様なメカニズムを示しているだけではなく、学習者の外国語習得にも役に立つものである。そのため、対照研究の観点から発話行為を研究する際に、本論文で試みたような、認知的アプローチから言語現象の背後にあるメカニズムを探り、両言語でそのような相違が生じる理由を述べる必要があると思われる。

## 7.2 日本語教育への示唆

改善要求行為は、相手に特定の行動をさせるという目的が達成されなければ問題解決にならないため、相手の「権利や自由を侵害されたくない」というネガティブ・フェイスを脅かす度合が高い。何気ない言葉の使い方や話の持ち掛け方により、人間関係に大きな影響を与える恐れがある。そのため、母語話者にとっても難しい行為であり、学習者にとっては極めて習得しにくい発話の類型であると言われている。上級レベルの学習者でも、改善要求を行う際に、適切な発話をできないことがある。

- (1) 私は毎日 11 時に寝る習慣なので、12 時にはまた目覚められて、困っています。この部屋は壁が薄くて、隣の話はよく聞こえますね。 (CLJ4-場面 1<sup>1)</sup>)
- (2) 明日まだ学校あるだろう、早く寝ないと、起きれないのよ。 (CLJ13-場面 2)
- (3) ちょっと静かにしていい。ありがとう。 (CLJ15-場面 2)

(1) (2) (3) は、筆者が行った DCT 調査(付録 I-3 を参照されたい)により収集した、来日して 6 ヶ月～1 年以内の中国人上級学習者(日本語学科出身、日本語能力試験 1 級合格者)の発話例である。文法的な誤り(「12 時にはまた目覚められて」→「12 時に起こされて」、  
「静かにしていい」→「静かにしてもらってもいいですか」)もあるが、語用論的にも不自然な発話である。

しかし、これらの発話を中国語に直訳すると、特に不自然さは感じられない。次の

- (1)' (2)' (3)' を参照されたい。

---

<sup>1</sup> 「CLJ」は“Chinese Learners of Japanese”の略であり、「中国人日本語学習者」を意味する。

- (1) ' 我习惯每天 11 点钟睡觉, 12 点又被吵醒, 我很恼火。你也知道这房子墙壁很薄, 经常能听到隔壁人说话。
- (2) ' 明天还要上课, 如果不早点睡的话, 明天就起不来了。
- (3) ' 稍微安静一点好吗。谢谢啦。

以上のような例から、上級レベルの学習者であっても、改善要求を行う際に、母語(中国語)の語用論的規範をそのまま日本語のコミュニケーションに持ち込む「語用論的転移」<sup>2</sup>が発生しうることが分かる。中国語の語用論的規範を日本語に生かすと不自然さが生じる「負の転移」<sup>3</sup>が起きるという事実は、改善要求行為における中国語と日本語の語用論的規範が異なることを示唆する。

そこで、母語干渉によるミスコミュニケーションを少しでも減らすために、学習者は改善要求行為における日中間の語用論的規範の違いを理解する必要があると思われる。この意味で、本論文の第 4 章で明らかにした「事象構造の観点から見た日中改善要求発話の特徴」や、「事象の述べられる順序から見た日中改善要求発話の特徴」、「理由提示表現から見た日中改善要求発話の特徴」、そして、第 5 章で明らかにした「改善要求表現における日中の配慮の示し方の相違」、「肯定形・否定形、授受関係の明示・非明示によって改善要求表現の丁寧さが日中間で逆転する現象のメカニズム」、第 6 章で明らかにした「改善要求発話の【切り出し部】と【終了部】における日中両言語の配慮の示し方の相違と認知レベルでの営みの相違」などは、日本語教育の現場で、特に中国人日本語学習者の改善要求行為に関する語用論的指導を行う際に、役に立つと考えられる。

以下、筆者が行った DCT 調査により収集した学習者の語用論的転移の実例を挙げながら、本論文で得た研究成果の日本語教育への応用可能性を示す。

### 7.2.1 配慮したつもりなのに、よい印象を与えない現象

配慮表現が必要とされる場面において、学習者が丁寧な言い方をしようとしたにもかかわらず、発話内効力<sup>4</sup>と言語形式のマッピングの失敗により、逆に失礼な発話行為になって

<sup>2</sup> 語用論的転移 (pragmatic transfer) は言語転移 (linguistic transfer) の 1 つであり、「学習者の目標言語で語用論的知識を理解、産出、学習する際に、目標言語以外の言語(第一言語、または既習言語)の語用論的知識が影響を与えること」(近藤・小森 2012:124)である。

<sup>3</sup> 干渉 (intervention) ともいわれ、「言語固有の使用法や語用論的慣習が学習者と母語話者が異なる場合に、学習者の既有知識が目的言語に影響を及ぼすことである」(清水 2009:177)。

<sup>4</sup> 「発話内効力」(illocutionary force) は Austin(1962)の「発話行為論」の用語である。「発話内的力」、「発話の力」とも呼ばれ、「発話の文脈において、命題がどのような用いられ方をしているかを決定する」(小泉 2001:82)ものである。

しまうことや、意図したものと異なる発話行為として聞き手に受け取られてしまうことがある。

(4) すみません、少し静かにしてよろしいでしょうか。 (CLJ19-場面1)

(5) すみません、少し静かにできますか。 (CLJ21-場面1)

(4)と(5)は、来日して3ヶ月の中国人中級学習者(非日本語学科出身、中国の日本語学校で約1年間日本語を勉強した人)からの、親しくない同級生が騒音を引き起こした場面での発話例である。DCT調査が終わった後に、フォローインタビューをしたところ、学習者が丁寧に言うつもりで、「少し静かにしてよろしいでしょうか」と「少し静かにできますか」と発話していたことが分かった。特に、(4)では、「いいですか」ではなく、「よろしいでしょうか」という表現が使われていることから、「丁寧な言い方で言おうとする」という学習者の心的態度が窺われる。

(6) 静かにしてもいいですか。

(6)' 少し静かにしてももらってもよろしいでしょうか。

しかし、(4)は、改善要求ではなく、(話者自身が)「静かにしてもいいですか」という意味と受け取られてしまう可能性がある。また、(6)'のように修正しても、「図書館や映画館で見知らぬ人に対して言う場面であれば問題ないが、隣に住んでいる人に言う場面では、やや直接的に感じられ、丁寧な言い方に感じられない」という指摘は、複数の日本語母語話者からも受けている。その原因は、「～てもらってもよろしいでしょうか」という文型の構造にあると思われる。「～てもらってもよろしいでしょうか」を用いた改善要求表現は、<許可求め>の形で相手に依頼要求を出しているが、「～てもらっても」は「話者が恩恵を受けることができる」ことを想定した言い方であり、「相手が依頼を断る可能性を視野に入れていない」というニュアンスがあるため、聴者が持つ「依頼を受諾するか拒否するか」という行動の自由を脅かす度合いが高い。

(5)に関しては、「文法的には間違いではないが、普段はそのようには言わない」という意見を日本語母語話者から得た。

上記の2つの誤用例から、一部の中国人日本語学習者の改善要求表現の習得において、以下の問題点が存在することが分かる。

1) 「～できますか」を用いた改善要求表現が丁寧な言い方であると誤解している。

中国語では、“你能稍微安静一点吗？(あなたは少し静かにできますか。)”に示すように、「能願動詞」“能(できる)”を用いた改善要求表現は丁寧さを伴う表現形式である。学習者は、母語の影響により、日本語の「少し静かにできますか。」が丁寧な改善要求表現であると誤解しがちである。

日本語では、「～てくれる」「～てもらう」などの求心的な授受補助動詞を用いて、問いかけの焦点を話者自身の話題(恩恵の有無)に当てることによって、行為要求の押し付けがましさを軽減しようとする聴者への配慮を示す。一方、中国語では、能願動詞(可能性、願望を表す助動詞)“能/可以(できる)”を用いて、「するかしないか」を問うのではなく、「できるかできないか(つまり、実現可能かどうか)」を問うことによって、行為要求の押し付けがましさを軽減しようとする聴者への配慮を示す。こうした改善要求表現における日中間の配慮の示し方の相違を、会話などの授業で、学習者に教える必要があると思われる。必要に応じて、「日中間でなぜこのような相違が生じるのか」を事態把握の観点から説明することも効果的であると思われる。

2) 授受補助動詞の使用を避ける。

中国語では、“安静(静かにする)”“出去(出て行く)”といった、物の授与・移動を想定しにくい行為を聴者に行って欲しいと伝える際に、通常、聴者との授受関係は捨象され、言語化されない(つまり、授受関係を明示する“给我”は用いられない)。苛立ちや怒りなどの否定的感情を聴者に伝えようとする際(つまり、特別な理由があり、通常と異なる場合)には、話者は意図的に“给我”を用いて、聴者との授受関係を明示して、「私のために～しろ/しなさい」と言明し、聴者に行為要求の押し付けがましさを感じさせる。

「授受補助動詞の不使用」という現象は、授受補助動詞の用法を十分に理解していないことに起因すると考えられるが、最も大きな要因は、「授受関係を明示すると、苛立ちや怒りなどの否定的感情を伝える場合にしか用いられない丁寧さを伴わない表現になる」という母語の干渉であると考えられる。よって、「授受関係の明示・非明示による表現形式の丁寧さが日中間で逆転する現象」、そして、「授受関係を明示する「～てくれる」と“给我”の機能が日中両言語で異なること」を教学の場に導入する必要があると思われる。

## 7.2.2 理由提示表現の過剰使用

- (7) 私は毎日 11 時に寝る習慣なので、12 時にはまた目覚められて、困っています。  
この部屋は壁が薄くて、隣の話はよく聞こえますね。(CLJ4-場面 1)
- (8) すみませんが、少し静かにしていただけませんか。明日仕事がありますので。  
(CLJ15-場面 1)
- (9) もう遅くなるので、隣の人も明日仕事などがあるから、ちょっと声を小さくしてもらいませんか。(CLJ2-場面 1)
- (10) すみませんが、寝る時音に敏感なので、静かにしていただければありがたいんですが。(CLJ13-場面 1)
- (11) 明日まだ学校あるだろう、早く寝ないと、起きれないのよ。(CLJ13-場面 2)
- (12) すみませんが、ちょっと静かにしてくれませんか、壁が薄いし、ごめんね。  
(CLJ8-場面 2)
- (13) ○○、明日バイトがあるので、今日は早く寝たい～私、ちょっと音に敏感だけど、話すボリュームを少し抑えてくれる？  
(CLJ14-場面 2)
- (14) ね、最近何かあったの？寝るのは遅いね…私ね、音に敏感だから、気づいちゃった。  
(CLJ11-場面 2)

上記の例のように、学習者の改善要求発話では、「私は毎日 11 時に寝る習慣なので」、「この部屋は壁が薄くて」、「明日まだ学校あるだろう」、「明日仕事がありますので」、「もう遅くなるので、隣の人も明日仕事などがあるから」、「寝る時音に敏感なので」、「壁が薄いし」、「明日バイトがあるので、今日は早く寝たい～私、ちょっと音に敏感だけど」、「私ね、音に敏感だから」といった、自分の意見を正当化する根拠となる理由提示表現を多用し、客観的な事情を示すことによって相手を説得し、改善を行ってもらい、いわゆる「説得型」のコミュニケーション・スタイルを用いる傾向がある。

同様の傾向は、第 4 章で考察した中国語母語話者の改善要求発話にも見られる(詳細は第 4 章の 4.5 節を参照されたい)。しかし、同一の場面で「基本的に自分の事情、つまり聴者側から受けた被害や不満を述べることによって、改善行為を行うよう促すこと」を多用する日本人の言語感覚からすると、客観的な事情を示すことによって自分の意見を正当化する根拠を提示することが、過剰なアピールに感じられるため、違和感が感じられる。

以上のことから、改善要求行為に関する語用論的指導を行う場合、学習者に日中両言語

のコミュニケーション・スタイルの相違を示した上で、「理由提示表現」を過度に使用しないよう指導する必要があると思われる。

### 7.3 今後の展望

池上 (2011b:318) が、「言語が異なると、それぞれの話者による〈事態把握〉の仕方に好みの差があるということは、言語のいろいろなレベル、様々な側面について認められることである」と指摘するように、改善要求発話の【切り出し部】【用件内容部】【終了部】の構成要素にも、日本語話者と中国語話者による〈事態把握〉の仕方の違いが見られた。

総じて言えば、日本語では、話者自身の感情を表出する言葉で注意喚起をしたり、恩恵の授与を示す求心的な授受補助動詞を用いるなど、発話主体が言語化する事態に入り込んで、話者の視点から「自己-中心的 (ego-centric)」に事態把握を行い、〈主観的把握〉に基づいて改善要求発話を組み立てる傾向がある。一方、中国語では、客観的な理由を述べることによって個人対個人の対立を回避したり、実現可能かどうかを尋ねる形で改善行為をするよう働きかけるなど、発話主体が言語化する事態の外に視座を据え、あたかも傍観者のように、〈客観的把握〉に基づいて改善要求発話を組み立てる傾向が見られた。

この結論を従来の一般論「総じて日本語は対人的な距離が大きく、ネガティブ・ポライトネスが優勢であると言える。対照的に、(中略)現代の中国語は、対人的な距離が小さく、ポジティブ・ポライトネスが優勢である」(滝浦 2008:46) と関連づけると、「〈主観的把握〉に基づいて事態を言語化する日本語では、ネガティブ・ポライトネスが優勢である。一方、〈客観的把握〉に基づいて事態を言語化する中国語では、ポジティブ・ポライトネスが優勢である」という興味深い現象が見られた。これは偶然の現象か、それとも、「ポライトネス」に関する問題は「事態把握」の類型と深く関わっていることを示唆しているのか。

この問題を究明するには、改善要求行為だけではなく、依頼行為、誘い行為、断り行為、謝罪行為、相談行為など、さまざまな言語行為を取り上げ、考察を行う必要があると思われる。今後、〈客観的把握〉が好まれる英語も視野に入れて、本論文で試みた「認知とポライトネスの接点」という方法論の有効性を検証してみたい。

また、本章で取り上げた日本語教育への示唆に関しては、学習者の反応を見ながら、さらに分かりやすく説明する必要があると思われる。今後、日本語教育の現場に身を置き、本論文で得た研究成果の日本語教育への応用可能性を実証していきたいと思う。



改善要求発話に見られる日中間の事態把握、時・空間認知に関する類型論的特性を明らかにするために、本論文ではDCTという言語行動意識調査を通してデータを収集した。第3章で触れたように、DCTにより得たデータは「話し手の頭の中にあるモデルとして、実際の相互作用の場で相手の反応に応じて変更や修正を加えられる前の、基本的にこういう出方をしたい、こう展開してしかるべき、と話し手が考えているような行動のイメージ」(熊谷 2000:97) を反映するものであり、談話的なやり取りは現れない。今後は、自然談話のデータを増やし、日中改善要求発話の談話展開パターンなどを検討したいと考えている。

## 付録 I 調査票

### 付録 I-1 日本語母語話者への調査票

#### 日本語コミュニケーションに関する調査

##### I 調査に協力して下さる方へ

本調査への回答や結果は学術的な目的以外に使用することは一切ございません。また皆様の個人情報を他者に見せることもございません。下記の情報は本調査において貴重なデータになりますので、ご記入お願い申し上げます。

- 1 学類（研究科）・年次：
- 2 学歴：大学院（博士）大学院（修士）大学 専門学校 その他\_\_\_\_\_
- 3 年齢：
- 4 性別：
- 5 出身地：
- 6 留学経験の有無（留学先・留学期間など）：
- 7 日本語教育経験の有無（期間・機関・受講学生の出身国や人数など）：
- 8 外国語力（A: Excellent、B: Good、C: Fair、D: Poor の4段階で自己評価）
  - ① 第1外国語（ ）  
読む（ ）書く（ ）話す（ ）聞く（ ）
  - ② 第2外国語（ ）  
読む（ ）書く（ ）話す（ ）聞く（ ）
  - ③ 第3外国語（ ）  
読む（ ）書く（ ）話す（ ）聞く（ ）

## II 調査内容

次の文章を読んで、その状況をイメージしてください。以下のような状況で、あなたは相手に対してどのように自分の気持ちを伝えますか。できるだけ自然に実際に話すように答えてください。

これはテストではないので、お気軽にお答えください。

### ＜場面1＞ 隣に住んでいる親しくない同級生が騒音状況を起こした場面

同じ大学に通っている同級生（日本人、同性、同じぐらいの年齢）が隣に住んでいます。最近、彼（彼女）はよく夜遅くまで友達とおしゃべりをしています。このような状況はもう一週間くらい続いていて、あなたはこの一週間あまりよく眠れませんでした。隣の人は会ったら挨拶するくらいで、それほど親しいわけではありません。今夜はもう12時を過ぎましたが、またおしゃべりの音が聞こえました。

1. このような場合、あなたは隣の人に不満を感じますか？

はい ①————②————③————④————⑤  
少し不満←————→非常に不満

いいえ

2. その時は、あなたはどうしますか？

①何も言わずに我慢する。

（理由：

②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す。

（具体的に：

③直接相手に言葉で言う。

④その他

（具体的に：

\*上の2.で「③直接相手に言葉で言う」と答えた方は、引き続き次の質問にお答えください。

3. 隣の人に対してどのように言いますか？できるだけ自然に実際に話すように書いてください。

---

---

---

---

4. 3番の発話があなたにとっては、心理的にどのぐらい言いにくいものですか？

①————②————③————④————⑤  
全然言いにくい←————→非常に言いにくい

5. 3番の発話でどれぐらい隣の人の面子を脅かしたかと思いませんか？

①————②————③————④————⑤  
全然脅かしていない←————→非常に脅かした

6. もし隣の人が同性ではなく異性の場合、1番～5番の質問に同じ答えを出しますか。

①はい ②いいえ（具体的に： )

**<場面2> 隣に住んでいる親しい友達が騒音状況を起こした場面**

同じ大学に通っている親しい友達（日本人、同性、同じぐらいの年齢）があなたの隣に住んでいます。最近、彼（彼女）はよく夜遅くまで友達とおしゃべりをしています。このような状況はもう一週間くらい続いていて、あなたはこの一週間、あまりよく眠れませんでした。今夜はもう12時を過ぎましたが、またおしゃべりの音が聞こえました。

1. このような場合、あなたは友達に不満を感じますか？

はい ①————②————③————④————⑤  
少し不満←————→非常に不満

いいえ

2. その時は、あなたはどのようにしますか？

①何も言わずに我慢する。

（理由：

②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す。

（具体的に：

③直接相手に言葉で言う。

④その他

（具体的に：

\*上の2.で「③直接相手に言葉で言う」と答えた方は、引き続き次の質問にお答えください。

3. 友達に対してどのように言いますか？できるだけ自然に実際に話すように書いてください。

---

---

---

---

4. 3番の発話があなたにとっては、心理的にどのぐらい言いにくいものですか？

①————②————③————④————⑤  
全然言いにくい←————→非常に言いにくい

5. 3番の発話でどれぐらい友達の面子を脅かしたかと思いませんか？

①————②————③————④————⑤  
全然脅かしていない←————→非常に脅かした

6. もし友達が同性ではなく異性の場合、1番～5番の質問に同じ答えを出しますか。

①はい ②いいえ（具体的に： )



### Ⅲ 本調査に対するコメント

今回の調査につきまして、どう思われたでしょうか。皆さんからのご意見やコメントが、これからの研究に大変役に立ちますので、ぜひご遠慮なく書いていただければ、とても嬉しく存じます。



筑波大学 人文社会科学部 国際日本研究専攻  
李 国玲

## 付録 I-2 中国語母語話者への調査票

### 有关汉语日常交流的问卷调查

#### I 被调查者基本信息

本次调查完全出于学术研究的目的，您所提供的任何信息和答案，只会用于统计分析，您的个人资料，将会得到严格地保密。

专业：\_\_\_\_\_ 年级：\_\_\_\_\_ 姓名（也可以是昵称）：\_\_\_\_\_

年龄：\_\_\_\_\_ 性别：\_\_\_\_\_ 籍贯：\_\_\_\_\_

第一外语：\_\_\_\_\_ 第二外语：\_\_\_\_\_

#### II 调查内容

阅读下面的短文，在脑海中想象一下具体的场景。在这种情况下，您会怎样向对方表述自己的感受呢？

这不是考试测试题，您只需要按照您的真实情况轻松作答即可。

<场景 1>住在你隔壁的同学(中国人、同性、年龄相仿)，最近总是和朋友聊天会聊的很晚。这样的状况已经持续一周了。这一周你都没怎么睡好。**你和隔壁的同学不是很熟**，平时见了面只是打个招呼。今天已经过凌晨 12 点了，他（她）又开始聊天了。

1. 这种情况下你会对你隔壁的同学感到不满吗？

会

①——②——③——④——⑤

稍微有点不满 ←————→ 非常不满

不会

2. 此时，你会怎么做？

① 什么也不说，继续忍着。

（理由：

② 虽然不直接去和他（她）说，但会采取一些措施。

（具体来说：

③ 直接去和他（她）说。

在这种状况下，你会和你的邻居说什么呢？请想象此时你的邻居就站在你的面前。

④ 其他

（具体来说：

\* 第 2 题选择了③的同学请填写以下项目。

3. 你有没有觉得刚才说的话会难以启齿?

①——②——③——④——⑤

完全没有难以启齿的感觉←————→非常难以启齿

4. 你觉得刚才说的话有没有伤害到对方的面子呢?

①——②——③——④——⑤

没怎么伤害到←————→很严重地伤害到了

<场景 2> 你的**好朋友**(中国人、同性、年龄相仿)住在你的隔壁。最近他(她)总是和朋友聊天会聊的很晚。这样的状况已经持续一周了,这一周你都没怎么睡好。今天已经过凌晨 12 点了,他(她)又开始聊天了。

1. 这种情况下你会对你的好朋友感到不满吗?

会

①——②——③——④——⑤

稍微有点不满←————→非常不满

不会

2. 此时,你会怎么做?

①什么也不说,继续忍着。

(理由:

②虽然不直接去和他(她)说,但会采取一些措施。

(具体来说:

③直接去和他(她)说。

在这种状况下,你会和你的朋友说什么呢?请想象此时你的朋友就站在你的面前。

④其他

(具体来说:

\* 第 2 题选择了③的同学请填写以下项目。

3. 你有没有觉得刚才说的话会难以启齿?

①——②——③——④——⑤

完全没有难以启齿的感觉←————→非常难以启齿

4. 你觉得刚才说的话有没有伤害到对方的面子呢?

①——②——③——④——⑤

没怎么伤害到←————→很严重地伤害到了



<场景 3> 你在电影院看电影，坐在你隔壁的两个不认识的年轻人（和你同性）一直在说话。而且时而声音很大，时而发出大笑。这部电影是你期待了很久的电影，而且还是很不容易才买到的票。

1. 这种情况下你会对你邻座的人感到不满吗？

会

①——②——③——④——⑤

稍微有点不满 ←————→ 非常不满

不会

2. 此时，你会怎么做？

① 什么也不说，继续忍着。

（理由：

② 虽然不直接去和他（她）说，但会采取一些措施。

（具体来说：

③ 直接去和他（她）说。

在这种状况下，你会和你邻座的人说些什么？

④ 其他

（具体来说：

\* 第 2 题选择了③的同学请继续填写以下项目。

3. 你有没有觉得刚才说的话会难以启齿？

①——②——③——④——⑤

完全没有难以启齿的感觉 ←————→ 非常难以启齿

4. 你觉得刚才说的话有没有伤害到对方的面子呢？

①——②——③——④——⑤

没怎么伤害到 ←————→ 很严重地伤害到了

### III 问卷读后感

非常感谢您在百忙之中，抽出宝贵的时间完成了此次问卷调查。如果您不介意，可以将您填写本次问卷过程中的感受写在下面的空栏里。

最后，再次感谢您对本次问卷调查的支持和配合。如果您对本次问卷调查有不明之处或是意见和建议等，可以通过以下方式与我取得联系。

联系方式：日本筑波大学 人文社会科学研究科 国际日本研究专攻  
李国玲

## 付録 I-3 中国人日本語学習者への調査票

### 日本語コミュニケーションに関する調査

#### I 調査に協力して下さる方へ

本調査への回答や結果は学術的な目的以外に使用することは一切ございません。また皆様の個人情報を他者に見せることもございません。下記の情報は本調査において貴重なデータになりますので、ご記入お願い申し上げます。

- 1 専門・年次：
- 2 学歴：大学院（博士）大学院（修士）大学 専門学校 その他\_\_\_\_\_
- 3 名前（あだ名でも構いません）：
- 4 年齢：
- 5 性別：
- 6 出身地（国名・地名）：
- 7 日本語レベル（次の6段階で自己評価）：  
初級前半 初級後半 中級前半 中級後半 上級前半 上級後半
- 8 日本語能力試験を受けた経験の有無：  
 有 \_\_\_\_\_級 試験を受けた期日： \_\_\_\_\_年 \_\_\_\_\_月  
(よかったら、次の段階から自分の点数を選んでください)  
旧能力試験の場合（満点400点）  
 0～50       50～100       100～150       150～200  
 200～250       250～300       300～350       350～400  
新能力試験の場合（満点180点）  
 0～25       25～50       50～75       75～100  
 100～125       125～150       150～180  
 無（もし他の試験を受けた場合、試験名と試験期日、級別または点数を下の空白に記入してください）

9 日本語学習歴

1) どんなどころで日本語を勉強しましたか（複数選択可）

中学校  高校  大学  日本語学校（塾）  その他\_\_\_\_\_

2) 日本語学習期間： 年 月～ 年 月

3) 毎日の平均時間数： \_\_\_\_\_時間

10 在日経験の有無

有 在日期間： 年 ケ月  無

11 日本語教育経験の有無（期間・機関・受講学生の出身国や人数など）：

12 外国語力（A: Excellent、B: Good、C: Fair、D: Poor の4段階で自己評価）

① 第1外国語（ ）

読む（ ） 書く（ ） 話す（ ） 聞く（ ）

② 第2外国語（ ）

読む（ ） 書く（ ） 話す（ ） 聞く（ ）

③ 第3外国語（ ）

読む（ ） 書く（ ） 話す（ ） 聞く（ ）







### Ⅲ 本調査に対するコメント

今回の調査につきまして、どう思われたでしょうか。皆さんからのご意見やコメントが、これからの研究に大変役に立ちますので、ぜひご遠慮なく書いていただければ、とても嬉しく存じます。



筑波大学 人文社会科学部 国際日本研究専攻  
李 国玲



## 付録Ⅱ 談話完成テスト資料

### 付録Ⅱ-1 日本語母語話者の談話完成テスト資料

#### <場面1> 親しくない同級生が騒音を立てた場面

【女性】

JNS1 ③直接相手に言葉で言う

いきなりすみません。最近越してきた者ですが、よる遅くお宅から聞こえる声が少し気になりまして。。。もう少し小さな声で話していただけませんか？

JNS2 ③直接相手に言葉で言う

すみません、ちょっと静かにしてもらってもいいですか。

JNS3 ①何も言わずに我慢する

理由：言いに行くのが面倒だから

JNS4 ③直接相手に言葉で言う

近所迷惑なんですけど。。。少し静かにしてもらえませんか。

JNS5 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す

具体的に：壁を叩く、不動産さんに連絡する。

JNS6 ③直接相手に言葉で言う

すみません、もう少し静かにしてもらいたいんですが…

JNS7 ①何も言わずに我慢する

理由：あまり知らない人なので言いづらいから。

JNS8 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す

具体的に：壁を叩く。手紙をポストに入れる。不動産さんにクレーム

JNS9 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す

具体的に：壁を叩く

JNS10 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す

具体的に：大家に言う

JNS11 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す

具体的に：壁を叩く

JNS12 ③直接相手に言葉で言う

実はそちらの話し声が壁伝えで聞こえていまして、そのせいで最近夜眠れないの

です。申し訳ないのですが、夜遅くまで話すのはひかえてもらっても良いですか。

JNS13 ③直接相手に言葉で言う

すみません、申し訳ないんですけど、声が結構響いて眠れないので…もう少しおさえめでお願いしてもいいですかね。

【男性】

JNS14 ③直接相手に言葉で言う

眠れなくて困ってるんで、もう少しトーンをおとして話してもらえると助かります。

JNS15 ③直接相手に言葉で言う

すみません。夜うるさくて、眠れないのですが…

JNS16 ③直接相手に言葉で言う

何時だと思ってるんですか、いい加減にしてください。

JNS17 ①何も言わずに我慢する

理由：まだ一週間なので

JNS18 ③直接相手に言葉で言う

静かにしてもらえますか。すみません。

JNS19 ③直接相手に言葉で言う

もう少し静かに話してもらえると助かるんですが、いいですか。

JNS20 ③直接相手に言葉で言う

すみません、夜うるさくて、眠れないんですが…

## <場面 2> 親しい友達が騒音を立てた場面

【女性】

JNS1 ③直接相手に言葉で言う

ちょっと悪いんだけど、夜もう少し静かにしてくれないかな？

JNS2 ③直接相手に言葉で言う

ごめん、ちょっともうこんな時間だし、おしゃべりなら小さい声でしてくれないかな～ごめんね。

JNS3 ③直接相手に言葉で言う

夜声すごい聞こえてくるから、声量おとしてもらっていい。

JNS4 ③直接相手に言葉で言う

うるさいから、静かにしてね。

JNS5 ③直接相手に言葉で言う

あのさー、夜少しうるさくて、眠れないんだよね。話してもいいんだけど、ちょっとだけ静かにしてくれない？

JNS6 ③直接相手に言葉で言う

いつも友達来ているんですか？笑い声きこえてましたよ？

JNS7 ①何も言わずに我慢する

理由：複数人に向かって言うのは怖いから

JNS8 ③直接相手に言葉で言う

最近ちょっと夜中うるさいんだけど。音聞こえてるんだよね。やめてくれない。

JNS9 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す

具体的に：管理人に苦情を言う。

JNS10 ③直接相手に言葉で言う

さすがにもう遅い時間だから、もう少し静かにしてもらってもいいかな。

JNS11 ③直接相手に言葉で言う

最近夜遅くない？何かあったん？

JNS12 ③直接相手に言葉で言う

あの、実は結構〇〇ちゃんの声が私の部屋まで聞こえてて、昼間は良いんだけど、夜遅いとちょっと迷惑だから、ひかえてもらっても良い？

JNS13 ①何も言わずに我慢する

理由：そういう子なんだなと思う。

#### 【男性】

JNS14 ③直接相手に言葉で言う

もうちょっと静かにしてよー寝れないってー！

JNS15 ③直接相手に言葉で言う

夜うるさいから、静かにして。

JNS16 ③直接相手に言葉で言う

悪いけど、うるさくて眠れないから、もう少し静かにしてくれない。

JNS17 ③直接相手に言葉で言う

最近何かあるの？わいわいしてるみたいだけど。

JNS18 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す

具体的に：窓を閉める

JNS19 ①何も言わずに我慢する

理由：トラブルを起こしたくないから

JNS20 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す

具体的に：窓を閉める

### <場面3> 映画館で見知らぬ人が騒音を立てた場面

#### 【女性】

JNS1 ③直接相手に言葉で言う

すみません、映画に集中できないので、外で話をしてもらえませんか。

JNS2 ③直接相手に言葉で言う

すみません、ちょっと静かに見てもらってもいいですか。

JNS3 ③直接相手に言葉で言う

うるさいので、しゃべるなら出てってもらえませんか。

JNS4 ①何も言わずに我慢する

理由：誰かに注意してくれるのを待つ。

JNS5 ③直接相手に言葉で言う

すみません、ちょっと静かにしてもらえませんか。

JNS6 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す

具体的に：じっと見る。目線で送る。

JNS7 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す

具体的に：声を出している人の方を見る。

JNS8 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す

具体的に：咳払いをする。にらむ。ためいきをつく。

JNS9 ③直接相手に言葉で言う

ちょっと静かにしてもらえますか？

JNS10 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す  
具体的に：咳払いをする。それでもおさまらなかつたら、「静かにしてもらえませんか」と言う。

JNS11 ③直接相手に言葉で言う  
うるさいんですけど。

JNS12 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す  
具体的に：咳払いをする。

JNS13 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す  
具体的に：うっとおしげな視線を送る。自分の連ねと故意に聞こえるくらいの声の大きさに「うるさいよね」と話す。

#### 【男性】

JNS14 ③直接相手に言葉で言う  
静かにしてもらえますか。すみません。

JNS15 ③直接相手に言葉で言う  
すみません、静かにしてもらえますか。

JNS16 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す  
具体的に：舌打ちをする。さりげなくどつく。椅子をたたく。

JNS17 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す  
具体的に：相手の方を見る。

JNS18 ③直接相手に言葉で言う  
映画に集中できないから、静かにしてほしい。

JNS19 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す  
具体的に：咳払いをする。

JNS20 ②直接相手に言わないが、何らかのサインを出す  
具体的に：席を移る or 店員に言う

## 付録Ⅱ-2 中国語母語話者の談話完成テスト資料

### <場面1> 親しくない同級生が騒音を立てた場面

#### 【女性】

- CNS1 ③直接去和他（她）说  
跟你商量个事，晚上能不能早点打电话或者声音小一点儿。
- CNS2 ③直接去和他（她）说  
同学，太晚睡觉对皮肤不好哦，下回别聊天太晚了，早些睡吧！
- CNS3 ③直接去和他（她）说  
我睡眠质量比较差，对声音比较敏感，所以晚上的时候，你和朋友聊天可不可以小声点，希望你们不要聊太晚，非常不好意思！
- CNS4 ③直接去和他（她）说  
麻烦你一下，我们现在都在睡觉呢。你能说小声点，或者去别的地方打吗？
- CNS5 ③直接去和他（她）说  
请你晚上别聊天那么晚好吗？我是一个对声音很敏感的人，晚上这样的话一点也休息不好。
- CNS6 ③直接去和他（她）说  
同学，我是一个声音很敏感的人，听见声音总会睡不着觉，请你可不可以别通电话到那么晚。
- CNS7 ③直接去和他（她）说  
亲，拜托你能小点声吗？影响他人休息了，都这么晚了。
- CNS8 ①什么也不说，继续忍着。  
理由：不想影响友好关系
- CNS9 ③直接去和他（她）说  
你好，已经是凌晨12点了，我们都休息了。能不能麻烦你们聊天声音小一点。谢谢。
- CNS10 ③直接去和他（她）说  
你好，大家都睡了，说话声音能小点吗？

#### 【男性】

- CNS11 ③直接去和他（她）说  
嘿，哥们，说话的时候能不能小点声，咱这楼隔音效果不太好，晚上我都睡不着觉。

谢谢了哈！

CNS12 ③直接去和他（她）说

咱能小点声吗？谢谢。

CNS13 ③直接去和他（她）说

不好意思，我觉轻，你们可以说话小声点吗？哈哈，谢谢了啊。

CNS14 ③直接去和他（她）说

实在不好意思，哥们！能不能小声点，我实在很抱歉打断你们聊天，但我因为你们这样而失眠很多天了.....

CNS15 ③直接去和他（她）说

同学，请你晚上打电话声音小点，每个人都需要休息。

CNS16 ③直接去和他（她）说

兄弟，你晚上说话能小点声吗？你每次聊天都影响我的休息。

CNS17 ③直接去和他（她）说

○○○同学你好，能否在晚上说话小声一点或者不说话，你说话影响了别人的正常休息，请你体谅一下，尽量不要在夜晚说话，谢谢。

CNS18 ③直接去和他（她）说

别说话了，吵得睡不着。

CNS19 ③直接去和他（她）说

你好，○○○，你的晚上聊天影响到了我的休息。请您晚上说话时注意照顾一下我的感受，谢谢。

CNS20 ③直接去和他（她）说

晚上聊得 high 啊！？把隔壁的人都能调动起来听你们的卧谈会。

## <場面 2> 親しい友達が騒音を立てた場面

### 【女性】

CNS1 ③直接去和他（她）说

我对声音太敏感，这一周没怎么睡好，请同情同情我，小点声音吧。

CNS2 ③直接去和他（她）说

时间不早了赶紧睡吧，明天还要学习呢！要不就没有精力了。

- CNS3 ③直接去和他（她）说  
只有好好休息，明天学习才会有精神，所以以后聊天不要那么晚，好不？拜托啦！
- CNS4 ③直接去和他（她）说  
○○○，请你说话小声点，影响到我的睡眠了。
- CNS5 ③直接去和他（她）说  
以后晚上早点睡觉，睡那么晚对身体也不好，而且还有可能影响其它人休息，休息不好，上课会不精神的。
- CNS6 ③直接去和他（她）说  
○○○，你以后和朋友聊天可以声音小点吗？我是一个对声音很敏感的人，所以这一周都没怎么睡好。我希望你可以注意点儿。
- CNS7 ③直接去和他（她）说  
嗨，最近你和○○○聊什么呀，那么晚了都不睡，拜托你们说话声音轻点，要么早点结束吧，大家都要休息的，我都一周没睡好觉了。
- CNS8 ③直接去和他（她）说  
亲，你能不能明天白天再聊，你的声音有点大，我没办法睡着。
- CNS9 ①什么也不说，继续忍着。  
理由：换位思考下。
- CNS10 ②虽然不直接去和他（她）说，但会采取一些措施。  
具体来说：请求其他同学告诉她让她声音小点

#### 【男性】

- CNS11 ③直接去和他（她）说  
朋友，晚上能早点休息吗？聊太迟对自己身体不好。
- CNS12 ③直接去和他（她）说  
你是不是每天晚上聊天聊得很晚啊，这样对你的睡眠影响不太好。还可能影响身体健康，以后别老这样。
- CNS13 ③直接去和他（她）说  
你以后夜晚聊天别聊那么晚了，尽量在凌晨 12 点之前结束。晚了会影响别人休息的，同时也使得你自己休息不好。
- CNS14 ③直接去和他（她）说



哥，咱能消停点睡觉不。我对声音特敏感，你聊天我睡不着。

CNS15 ③直接去和他（她）说

亲，晚上能不能别聊了，我都一周没睡好了，就算我求你了。

CNS16 ③直接去和他（她）说

打电话可以早一点。

CNS17 ③直接去和他（她）说

哥们，小声点吧。都快把我给整失眠了。

CNS18 ③直接去和他（她）说

骚年，让我睡会儿好不好？

CNS19 ①什么也不说，继续忍着。

理由：担心彼此为此事闹不和

CNS20 ②虽然不直接去和他（她）说，但会采取一些措施。

具体来说：戴上耳机，或者暗示他注意一下。

### <場面 3> 映画館で見知らぬ人が騒音を立てた場面

【女性】

CNS1 ③直接去和他（她）说

大姐，很抱歉，你能小一点声音吗？我实在听不清。

CNS2 ③直接去和他（她）说

打搅一下，能小声一点吗？

CNS3 ③直接去和他（她）说

你这样大说大笑的，太没有素质了吧！

CNS4 ③直接去和他（她）说

麻烦说话小声点，不是你一个人在看电影。

CNS5 ③直接去和他（她）说

这是公共场合，不是你家，大家都在认真看呢，小声点。（小声和她说）

CNS6 ③直接去和他（她）说

这位姐姐，请你注意一下，你已经影响到周围的人了，现在大家都在安静地看电影呢。

CNS7 ③直接去和他（她）说

Hi, 这位姐姐, 你的声音能低点么, 我都听不见了。

CNS8 ③直接去和他(她)说  
不好意思, 可以请你小一点声音吗?

CNS9 ③直接去和他(她)说  
能否安静一下, 看完电影再讨论。

CNS10 ③直接去和他(她)说  
拜托, 声音小点行吗?

#### 【男性】

CNS11 ②虽然不直接去和他(她)说, 但会采取一些措施。  
具体来说: 自言自语道: 这男的怎么这样, 一点公德心也没有。

CNS12 ③直接去和他(她)说  
兄弟帮个忙, 能小点声吗?

CNS13 ③直接去和他(她)说  
不好意思, 你小点声, 别人也看着呢。

CNS14 ③直接去和他(她)说  
嘿! 哥么, 小声点行么?

CNS15 ③直接去和他(她)说  
朋友, 大家都在认真地看, 请你小点声, 不要打扰到别人。

CNS16 ③直接去和他(她)说  
先生, 你能文明说话吗, 这么大声说话会影响他人看电影的。

CNS17 ②虽然不直接去和他(她)说, 但会采取一些措施。  
具体来说: 向他打个小声一点的手势, 或者用什么其他动作暗示一下

CNS18 ③直接去和他(她)说  
哎, 别说话了。

CNS19 ③直接去和他(她)说  
您好, 这位兄弟, 大家都是来欣赏这部电影的, 请照顾一下我的感受。谢谢您的配合。

CNS20 ②虽然不直接去和他(她)说, 但会采取一些措施。  
具体来说: 侧身, 注视他良久, 良久。如果没有改观, 多进行几次, 每次加长注视时间, 若不行, 则直接言语干活。

## 付録Ⅲ ロールプレイ資料

中国語母語話者の改善要求行為に関するロールプレイの一例

(大学の新生同士、二人とも男性、19歳、学生寮に住んでいる)

(敲门声)

A: 同学，睡了吗？

B: 啊，没呢，谁啊？

A: 可以进去吗？

B: 哦，进来吧。

A: 好吧。(推门进来) 哎，你好，那个，我是在你隔壁住的。同学，你是不这周经常聊天聊得很晚啊。

B: 哦。

A: 声音还挺大的。

B: 哦，哦，吵到你了？

A: 对对对，我这周都没睡好。你以后能不能小点声？

B: 哦，对不起，真是对不起。那个，那个

A: 呃

B: 那个，刚来这个学校，和同学联系得比较多。

A: 哦，那个，没事，以后多注意点。

B: 哦，注意注意，我注意。

A: 哦，好吧。

B: 影响你睡觉了，对不起，对不起。

A: 没事没事。

B: 哦，那还有事吗？

A: 没事，我先走了啊。

B: 哎，慢走。

## 参考文献

- 相原茂(監訳)(1991)『現代中国語文法総覧』(下)片山博美・守屋宏則・平井和之(訳) くろしお出版
- 相原まり子(2008)「依頼表現の日中対照研究—相手に応じた表現選択」『言語情報学』6, pp. 1-18 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻
- 浅羽亮一(監訳)(1998)『語用論入門—話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真理(訳) 研究社
- 東照二(2001)「ポライトネス・ストラテジーの日英比較—上司と部下の間での不満表明とその解決交渉」pp. 59-73 国立国語研究所国際シンポジウム 第4 専門部会
- 安達太郎(1999)『日本語研究叢書 11 日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 天野景子(2013)「日本語母語話者の騒音場面における改善要求—親疎関係に注目して—」『日本語・日本文化研究』23 巻, pp. 142-153, 大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻(編)
- 安藤好恵(2001)「中国語の不満表明ストラテジー」『奥羽大学文学部紀要』13, pp. 150-159
- アントニー・V・リーマン(1985)「『雪国』における川端の抒情性」長谷川泉・鶴田欣也(編)『「雪国」の分析研究』pp. 43-73 教育出版センター
- 池上嘉彦・河上誓作(訳)(1987)『語用論』紀伊國屋書店
- 池上嘉彦(2004)「言語における<主観性>と<客観性>の言語的指標(1)」山梨正明他(編)『認知言語学論考』No. 3, pp. 1-49 ひつじ書房
- 池上嘉彦(2005a)「言語における<主観性>と<客観性>の言語的指標(2)」山梨正明他(編)『認知言語学論考』No. 4, pp. 1-60 ひつじ書房
- 池上嘉彦(2005b)「日本語の中の‘Subjective Construal’」『日本認知言語学会論文集』第5 巻, pp. 547-557 日本認知言語学会
- 池上嘉彦(2006)「<主観的把握>とは何か—日本語話者における<好まれる言い回し>」『言語』35(5), pp. 20-27 大修館書店
- 池上嘉彦(2008)「言語の構造の比較対照から言語の話者の<好まれる言い回し>の比較対照へ」『日中言語研究と日本語教育』創刊号, pp. 5-11 好文出版
- 池上嘉彦(2011a)「日本語と主観性・主体性」澤田治美(編)『主観性と主体性 ひつじ意味論講座』第5 巻, pp. 49-67 ひつじ書房
- 池上嘉彦(2011b)「日本語話者における<好まれる言い回し>としての<主観的把握>」人工知

- 能学会誌 26(4), pp. 317-322 社団法人人工知能学会
- 李善姫 (2004) 「韓国人日本語学習者の『不満表明』について」『日本語教育』123号, pp. 27-36 日本語教育学会
- 李善姫(2006)「日韓の『不満表明』に関する一考察—日本人学生と韓国人学生の比較を通して—」『社会言語科学』第8巻第2号, pp. 53-64 社会言語科学会
- 伊藤博美(2010)「授受構文における受益と恩恵および丁寧さ—『てくれる』文と『てもらう』文を中心として—」『日本語学論集』第6号, pp. 151-132 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
- 井上優・黄麗華(1996)「日本語と中国語の真偽疑問文」『国語学』184集, pp. 106-93 日本語学会
- 上原聡(2001)「言語の主観性に関する認知類型論的一考察」『日本認知言語学論文集1』pp. 1-11 日本認知言語学会
- 内田聖二・宋南先・中達俊明・田中圭子(訳)(1999)『関連性理論』第2版 研究社
- 王志英(2005)『命令・依頼の表現—日本語・中国語の対照研究—』勉誠出版
- 大西智子(1988)「中国語の要求表現」『徳山大学論叢』30, pp. 171-198 徳山大学経済学会
- 大堀壽夫(2002)『認知言語学』東京大学出版会
- 大堀壽夫(2004)『認知コミュニケーション論』大修館書店
- 岡本真一郎(1984)「要求の言語表現の検討」『Bulletin of the Faculty of Humanities of Aichigakuin University』14, pp. 29-41 愛知学院大学文学部紀要
- 岡本真一郎(2007)『言葉のコミュニケーション—対人関係のレトリック』ナカニシヤ出版
- 荻野綾(2012)「肯定疑問文を用いた依頼表現と否定疑問文を用いた依頼表現の日英差異に対する一考察—ポライトネスの観点から」The JASEC bulletin 21(1), pp. 17-31 日本英語コミュニケーション学会
- 奥田靖雄(1986)「現実・可能・必然(上)」言語学研究会(編)『ことばの科学1』pp. 181-212 むぎ書房
- 奥津敬一郎・徐昌華(1982)「『てもらう』とそれに対応する中国語表現—“请”を中心に—」『日本語教育』46, pp. 92-104 日本語教育学会
- 奥津敬一郎(1983)「授受表現の対照研究—日・朝・中・英の比較」『日本語学』2(4), pp. 22-30 明治書院
- 小野正樹(2005)『日本語態度動詞文の情報構造』ひつじ研究叢書(言語編)第38巻 ひつじ

書房

- 小野正樹・朱ヒョンジュ・許允瑄・山下悠貴乃・赤羽優子・孫思琦・伊藤秀明・デヒピティヤス  
ランジディルーシャ・グルミラアリモヴァ(2013)「5言語の“丁寧”の意味・用法とWEB  
上のコロケーション分析：日本語・韓国語・中国語・シンハラ語・ドイツ語の分析」  
『筑波大学留学生センター日本語教育論集』28, pp. 1-21 筑波大学留学生センター
- 小野正樹(2014)「『ありがとう』と『すみません』に関する一考察」『日本語コミュニケーション  
研究論集』3, pp. 35-42 日本語コミュニケーション研究会
- 郭碧蘭(2007)「日本語の不満表明ストラテジーに影響を及ぼす要因—社会的・文化的観点  
から—」『明海日本語』第12号, pp. 51-59 明海大学日本語学会
- 郭碧蘭(2008a)「談話ベレルからみた『すみません』と『ありがとう』—日本語母語話者と  
台湾人学習者との比較を通して—」『明海日本語』第13号, pp. 13-24 明海大学日本語  
学会
- 郭碧蘭(2008b)『日本語における不満表明のスピーチアクトの研究—台湾人学習者と日本語  
母語話者の比較—』明海大学大学院応用言語学研究科応用言語学博士学位請求論文
- 郭碧蘭(2009)「改善要求談話にみられる日本語学習者の発話連鎖パターン」藤森弘子・花菌  
悟・楠本徹也・宮城徹・鈴木智美(編)『日本語教育学研究への展望—柏崎雅世教授退職記  
念論集』シリーズ言語学と言語教育 19, pp. 261-280 ひつじ書房
- 柏崎秀子(1993)「話しかけ行動の談話分析—依頼・要求表現の実際を中心に—」『日本語教  
育』79, pp. 53-63 日本語教育学会
- 木村英樹(1996)『中国語はじめの一步』筑摩書房
- 木村英樹(2012)『中国語文法の意味とカタチ—「虚」的意味の形態化と構造化に関する研  
究—』白帝社
- 木村英樹(2014)「こと・ところ・ことば—現実をことばにする「視点」」唐沢かおり・林徹(編)  
『人文知1 心と言葉の迷宮』, pp. 97-118 東京大学出版会
- 清塚邦彦(訳)(1998)『論理と会話』勁草書房
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひ  
つじ書房
- 久野暉(1978)『談話の文法』大修館書店
- 熊谷智子(1995)「依頼の仕方—国研岡崎調査のデータから—」『日本語学』14-11, pp. 22-32  
明治書院

- 熊谷智子(1998)「依頼の言語行動におけるストラテジーの展開構造」『国立国語研究所創立50周年記念 研究発表会資料集』pp. 111-116 国立国語研究所
- 熊谷智子(2000)「言語行動分析の観点 —『行動の仕方』を形づくる諸要素について—」『日本語科学』7, pp. 95-113 国立国語研究所
- 黒滝真理子(2013)「日英語の事態把握と間主観的モダリティ—Potentiality, 状況可能とEvidential Modalityの観点から—」山梨正明他(編)『認知言語学論考』No. 11, pp. 99-161 ひつじ書房
- 小泉保(2001)『入門語用論研究—理論と応用』研究社
- 呉岳樺(2008)「不満表明ストラテジーの比較研究—日台大学生のDCT調査結果をもとに—」『表現研究』87, pp. 40-50 表現学会
- 輿水優(1977)「中国語における敬語」『岩波講座日本語4 敬語』pp. 271-300 岩波書店
- 近藤安月子・小森和子(2012)『研究社 日本語教育事典』研究社
- 崔東花(2009)「不満表明とそれに対する応答—中国語母語話者と日本語話者を比較して—」村岡英裕(編)『多文化接触場面の言語行動と言語管理』第7号, pp. 43-63 人文社会科学研究所プロジェクト報告書(218) 千葉大学大学院人文社会科学研究所
- 坂本恵(1999)「『ありがとう』と『すみません』」『麒麟』08, pp. 90-87 神奈川大学
- 坂本百大(訳)(1978)『言語と行為』大修館書店
- 坂本百大・土屋俊(訳)(1986)『言語行為 言語哲学への試論』勁草書房
- 佐久間勝彦(1983)「感謝と詫び」水谷修(編)『講座日本語の表現3 話しことばの表現』筑摩書房
- 佐々木勲人(1994)「中国語の受益文」『言語文化論集』38, pp. 315-325 筑波大学現代語・現代文化学系
- 佐々木勲人(2013)「ヴォイス構文と主観性—話者の言語化をめぐる—」木村英樹教授還暦記念論叢刊行会(編)『木村英樹教授還暦記念中国語文法論叢』pp. 315-331 白帝社
- 澤田淳(2005)「授受構文における否定性・アスペクト性の『浸透現象』」『早稲田日本語研究』13, pp. 25-36 早稲田大学日本語学会
- 澤田淳(2014)「日本語の授与動詞構文の構文パターンの類型化—他言語との比較対照と合わせて—」『言語研究』145, pp. 27-60 日本言語学会
- 澤田治美(1993)『視点と主観性—日英語助動詞の分析—』ひつじ書房
- 渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33(1), pp. i-262

大阪大学

- 清水崇文(2009)『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論能力の使用・習得・教育』  
スリーエーネットワーク
- 徐珉廷(2013)『<事態把握>における日韓話者の認知スタンス—認知言語学の立場から見た補助動詞的な用法の「ていく/くる」と「ekata/ota」の主観性』ココ出版
- 鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波書店
- 鈴木睦(1989)「聞き手の私的領域と丁寧表現—日本語の丁寧さは如何にして成り立つか—」  
『日本語学』8(2), pp. 58-67 明治書院
- 鈴木睦(1997)「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則(編)『視点と言語  
行動』pp. 45-76 くろしお出版
- 砂川有里子(2005)「ご住所書いてもらってもいいですか」北原保雄・小林賢次・砂川有里子・  
鳥飼浩二・矢澤真人(編著)『続弾！問題な日本語—何が気になる？どうして気になる？』pp. 84-89 大修館書店
- 鷹野由紀子(2005)「現代中国語の要求表現—その使い分けに関する考察」『関西大学文学  
会紀要』26, pp. 155-182 関西大学
- 滝浦真人(2008)『ポライトネス入門』研究社
- 田中典子(監訳)(2011)『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』斉藤早智子・津  
留崎毅・鶴田庸子・日野寿憲・山下早代子(訳) 研究社
- 谷口一美(2004)「行為連鎖と構文Ⅰ」中村芳久(編)『認知文法論Ⅱ』(シリーズ認知言語学  
入門)第5巻, pp. 53-87 大修館書店
- 鄭賢熙(2005)「日韓両言語における『不満表明』に関する一考察:異文化による「もめごと」  
で行動および言語表現を中心として」『国際センター紀要1』, pp. 63-71 新潟大学国  
際センター
- 辻幸夫(2003)『認知言語学への招待』シリーズ認知言語学入門第1巻 大修館書店
- 辻幸夫(2013)『新編 認知言語学キーワード事典』研究社
- 土居健男(1975)『「甘え」の構造』弘文堂
- 寺村秀夫(1979)「ムードの形式と否定」『英語と日本語と 林栄一教授還暦記念論文集』く  
ろしお出版
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 藤堂明保・相原茂(1985)『新訂中国語概論』大修館書店



- 中野研一郎(2013)「言語における『主体化』と『客体化』の認知メカニズム—日本語の事態把握とその創発・拡張・変容に関わる認知言語類型論的研究—」山梨正明他(編)『認知言語学論考』No. 11, pp. 99-161 ひつじ書房
- 中村芳久(2004)「主観性の言語学:主観性と文法構造・構文」中村芳久(編)『認知文法論Ⅱ』(シリーズ認知言語学入門)第5巻, pp. 3-51 大修館書店
- 中村芳久(2006)「言語における主観性・客観性の認知メカニズム」『言語』35(5), pp. 74-82 大修館書店
- 仁田義雄(1987)「日本語疑問表現の諸相」『言語学の視界』小泉保教授還暦記念論文集, pp. 179-202 大学書林
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子(1996)「不満表明ストラテジーの使用傾向—日本語母語話者と日本語学習者の比較—」『日本語教育』88号, pp. 128-139 日本語教育学会
- 浜田麻里(1995)「依頼表現の対照研究—中国語における命令依頼の方略」『日本語学』10, pp. 69-75 明治書院
- 馬場俊臣・盧春蓮(1992)「日中依頼表現の比較対照」『北海道教育大学紀要』(第一部A, 人文科学編), pp. 57-66 北海道教育大学
- 朴承圓(2000)「『不満表明表現』使用に関する研究—日本語母語話者・韓国人日本語学習者・韓国語母語話者の比較—」『言語科学論集』第4号, pp. 51-62 東北大学文学部日本語学科
- 朴承圓(2001)「韓国人日本語学習者の言語行動の指向性に関する一考察:不満を例に」『言語科学論集』5, pp. 73-84 東北大学文学部日本語学科
- 平井睦美(1998)「不満表明に関する一考察:その表示規則に見られる文化の影響」『葛野』2, pp. 26-39 京都外国語大学日本語研究会
- 藤森弘子(1995)「日本語学習者にみられる『弁明』意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学習者の場合—」『日本語教育』87, pp. 79-90 日本語教育学会
- 藤森弘子(1997)「不満表明ストラテジーの日英比較—談話完成テスト法の調査結果をもとに—」『言語と文化の対話』pp. 243-257 英宝社
- 彭国躍(2000)『近代中国語の敬語システム—「陰陽」文化認知モデル』白帝社
- 方懋・高 鵬飛(2004)「中国人と日本人における言語表現の異なり」『新潟産業大学人文学部紀要』第16号, pp. 151-161 新潟産業大学東アジア経済文化研究所
- ト雁(2004)「呼称におけるポライトネス心理考察—親族呼称の虚構的用法に関する日中・

- 英語比較一』『淑徳大学社会学部紀要』38, pp. 313-328 淑徳大学
- ポリー・ザトラウスキー(1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』  
くろしお出版
- 牧原功(2008)「不満表明・改善要求における配慮行動」『群馬大学留学生センター論集』  
第7号, pp. 51-60 群馬大学留学生センター
- 松浦とも子(2003)「使役型『てもらう』構文の日中対照—中国語母語話者の授受表現にお  
ける母語の影響」『早稲田大学日本語教育研究』3, pp. 111-124 早稲田大学日本語教育  
研究科
- 水谷信子(1985)『日英比較 話しことばの文法』くろしお出版
- 水野マリ子(1999)「談話における呼称の機能」『神戸大学留学センター紀要』6, pp. 65-80.  
神戸大学
- 三原健一(1992)『時制解釈と統語現象』くろしお出版
- 三宅和子(1994)「『感謝』と『詫び』における発話者の視点—付加表現の使われ方:日英比  
較一」『日本語教育方法研究会誌』1(2), pp. 20-21 日本語教育方法研究会
- 宮本節子・都築雅子(2002)「疑問文形式による依頼表現の日英比較:否定形と肯定形野丁寧  
度の検証を中心として」『依頼表現のポライトネスに関する実証研究:日中英対照』  
平成11年度~平成13年度科学研究費補助金研究成果報告書
- 森光有人(2007)「主観的把握と客観的把握—なぜ日本語には擬声語・擬態語が多いのか」『相  
愛大学研究論集』23, pp. 19-45 相愛大学研究論集編集委員会
- 森雄一(1998)「『主体化』をめぐって」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論  
集』pp. 186-198 汲古書院
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹(2010)『コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門』  
明治書院
- 山田敏弘(2004)『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文  
法一』明治書院
- 山田友幸(監訳)(2006)『表現と意味』高橋要・野村恭史・三好潤一郎(訳) 誠信書房
- 山梨正明(1995)『認知文法論』ひつじ書房
- 山梨正明(2000)『認知言語原理』くろしお出版
- 山梨正明(2009)『認知構文論—文法のゲシュタルト性』大修館書店
- 山梨正明(監訳)(2011)『認知文法論序説』碓井智子・大谷直輝・木原恵美子・児玉一宏・

- 中野研一郎・深田智・安原和也(訳) 研究社
- 楊凱榮(1994)「受益表現について—“給”と『てあげる、てくれる』との比較を中心に—」  
『教養研究』1(1), pp. 124-103 九州国際大学
- 楊凱榮(2009)「中日受益表現と所有構造の対照研究」『日中言語研究と日本語教育』第2  
号, pp. 1-12 好文出版
- 吉田妙子(2014)「日本語に見られる「自己」と「時間」—一時制意識の背景—」『2014年度  
国際学術シンポジウム—台湾日本語教育におけるイノベーションの探求—論文集』  
pp. 49-63 東呉大学日本語文学系 台湾日語教育学会
- 李国棟(2005)「『雪国』の日英中対照研究—第一段落を中心に—」『広島大学大学院文  
学研究科論集』pp. 51-57 広島大学大学院文学研究科
- 劉柏林(2004)「中日社交呼称について」『言語と文化』11, pp. 35-50 愛知大学
- 林淑珠(1982)「日本語と中国語の命令・依頼表現の比較—丁寧度の観点から」『国語学研  
究』22, pp. 72-60 東北大学文学部国語学研究室
- Austin, J.L. (1962) *How to Do Things with Words*, Oxford University Press.
- Brown, P. & Levinson, S. (1987[1978]) *Politeness: Some Universals in Language Usage*.  
Cambridge University Press.
- Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1999) *The Grammar Book*. 2<sup>nd</sup> ed. Boston: Heinle & Heinle  
Publishers.
- Chen, R. (1993) 'Responding to compliments: A contrastive study of politeness strategies between  
American English and Chinese speakers', *Journal of Pragmatics*, 20(1), pp. 49-75 Elsevier B.V
- Croft, William and Cruse, D. Alan (2004) *Cognitive Linguistics*. New York: Cambridge University.
- Goffman, E. (1967) *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior*. New York: Pantheon Books.
- Grice, H.P. (1975) 'Logic and Conversation', *Syntax and Semantics*, pp. 41-58 Academic Press
- Grice, H.P. (1989) *Studies in the Way of words*, Harvard University Press.
- Gu, Y. (1990) 'Politeness phenomena in modern Chinese', *Journal of Pragmatics*, 14(2), pp. 237-257  
Elsevier B.V
- Ide, S. (1989) 'Formal forms and discernment: Two neglected aspects of universals of linguistics  
politeness', *Multilingua: Journal of Cross-Cultural and Interlanguage Communication*,  
8(2/3), pp. 223-248 Berlin: Mouton de Gruyter
- Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics*, Longman.

- Langacker, Ronald W (1985) 'Observations and Speculations on Subjectivity', In John Haiman, ed.: *Iconicity in Syntax*, pp.109-150, John Benjamins.
- Langacker, Ronald W (1990a) *Concept, image and symbol : The cognitive basis of grammar*. New York : Walter de Gruyter
- Langacker, Ronald W (1990b) 'Subjectification', *Cognitive linguistics I*, pp.5-38 Kluwer Academic Publishers
- Langacker, Ronald W (1987,1991) *Foundations of Cognitive Grammar* vol. I , II .Stanford University Press
- Langacker, Ronald W (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction* Oxford U.P
- Mao, L. (1994) 'Beyond politeness theory: 'Face' revisited and reviewed', *Journal of Pragmatics*, 21(5), pp.451-486 Elsevier B.V
- Matsumoto, Y. (1988) 'Reexamination of the universality of face: Politeness phenomena in Japanese', *Journal of Pragmatics*, 12(4), pp.403-426 Elsevier B.V
- Matsumoto, Y. (1989) 'Politeness and conversational universals: Observations from Japanese' *Multilingua: Journal of Cross-Cultural and Interlanguage Communication*, 8(2/3), pp.207-221 Berlin : Mouton de Gruyter
- Olshtain, E. & Weinbach, L. (1987) 'Complaints: A study of speech act behavior among native and nonnative speakers of Hebrew'. In J. Verschueren & M. Bertucelli-Papi (Eds), *The pragmatic perspective: Selected papers from the 1985 International Pragmatics Conference*, pp.195-208 Amsterdam: Benjamins.
- Searle, J.R. (1969) *Speech acts: an essay in the philosophy of language*, Cambridge University Press
- Searle, J.R. (1975) 'A taxonomy of illocutionary acts', in K. Gunderson (ed.), *Language, Mind, and Knowledge, Minnesota Studies in the Philosophy of Science, Vol. VII*, University of Minnesota Press.
- Searle, J.R. (1976) 'The Classification of illocutionary acts', *Language in society* 5, pp.1-24 Cambridge University Press
- Searle, J.R. (1979) *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech act*, Cambridge University Press.
- Sperber, D. and D. Wilson (1986) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell.
- Sperber, D. and D. Wilson (1995) *Relevance: Communication and Cognition*, Second Edition,

Blackwell

Swan, M. (2005) *Practical English Usage*, 3<sup>rd</sup> ed. New York: Oxford University Press

Thomas, J. (1995) *Meaning in interaction: An introduction to pragmatics*. London: Longman.

方经民 (1987) <汉语“左”“右”方位参照中的主视和客视—兼与游顺钊先生讨论>《语言教学与研究》1987年第3期, pp. 52-60

方经民 (1993) <论方位参照中的构成要素>《中国語学》240号, pp. 84-88

吕叔湘 (1999) 《现代汉语八百词》增订本 商务印书馆

杨凯荣 (2013) <日语否定疑问句的功能及其汉语的对应表现>《语言研究集刊》第11辑, pp. 1-21

### 参考辞典

『クラウン中日辞典』松岡栄志主幹、樋口靖・白井啓介・代田智明編修 三省堂, 2001

『研究社新和英大辞典』第5版 渡邊敏郎・Edmund R. Skrzypczak・Paul Snowden(編) 研究社, 2003

『広辞苑』第5版(電子版) 新村出(編) 岩波書店, 1998

『故事ことわざ・慣用句辞典』第2版 三省堂編修所(編) 三省堂, 2010

『新明解国語辞典』第5版(電子版) 金田一京助・柴田武・倉持保男・山田忠雄・酒井憲二・山田明雄(編) 三省堂, 1997

『百度百科』インターネット辞書 <http://baike.baidu.com/>

『日汉大辞典』第1版(電子版) 日本讲谈社(編) 上海译文出版社, 2002

### 例文出典

川端康成(2003[1952])『雪国』(岩波文庫)岩波書店

Edward, Seidensticker, trans. (1957) *Snow Country*. By Yasunari Kawabata. Tokyo: Charles E. Tuttle.

## 既刊論文および学会発表との関連

### 第1章、第2章、第3章

新規執筆

### 第4章

李国玲(2013a)「日中「不満表明行為」に関する対照研究—「行動の仕方」を形づくる諸要

素について」東京外国語大学国際日本研究センター主催夏季公開セミナー 2013「言語・

文学・歴史—国際日本研究の試み」 口頭発表 2013年8月1日東京外国語大学にて

李国玲(2014a)「日中「不満表明行為」に関する対照研究—「行動の仕方」を形づくる諸要

素について—」『日本語・日本学研究』第4号, pp. 13 東京外国語大学国際日本研究セ

ンター

李国玲(2014b)「改善要求行為の構成要素について—日本語母語話者と中国人日本語学習者

を比較して—」『日本語コミュニケーション研究論集』第3号, pp. 91-100 日本語コミ

ュニケーション研究会

李国玲(2015)「改善要求発話の構成要素に関する日中対照—認知言語学的アプローチから

—」『国際日本研究』7, pp. 79-96 筑波大学人文社会科学研究科国際日本研究専攻紀要

### 第5章

李国玲(2013b)「改善要求表現の日中対照研究—要求行為を丁寧化する仕方と視点の置き方

を中心に—」日本語/日本語教育研究会 第5回大会予稿集, pp. 32-39.

李国玲(2014c)「改善要求表現の日中対照研究—認知言語学的観点から—」筑波大学・北京

大学学術交流協定締結記念「日中言語文化フォーラム —ひと・くに・ことば—」 口

頭発表 2014年3月23日北京大学にて

李国玲(2014d)「疑問形式による改善要求表現の日中対照—話者と事態との関わり方から

—」『日本語/日本語教育研究』5, pp. 135-144 ココ出版

李国玲(2014e)「日中改善要求表現に見られる事態認識の様式」日本言語学会 第148回大

会予稿集, pp. 58-63

## 第6章

李国玲(2012)「日中の「不満表明」に関する一考察—日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較を通して—」第2回北京師範大学・筑波大学「中日言語文化の交流と共有」シンポジウム予稿集, pp. 21-24.

## 第7章

李国玲(2013c)「不満表明行為の言語形式について—日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較を通して—」第3回日本語コミュニケーション研究会 口頭発表 2013年2月1日創価大学にて

李国玲(2014f)「中国人日本語学習者の『改善要求』における語用論的転移」『2014年度国際学術シンポジウム—台湾日本語教育におけるイノベーションの探求—論文集』pp. 201-211 東呉大学日本語文学系&台湾日語教育学会

(なお、すべての既刊論文および学会発表に加筆・修正を施している)

## 謝辞

本論文は、多くの方々のご指導とご支援により、完成したものです。この場を借りて、感謝の気持ちを表したいと思います。

私は、中国国家留学基金委員会の“国家建設高水平大学公派研究生項目”の奨学金を得て、2012年の秋に筑波大学大学院人文社会科学国際日本研究専攻に入学しました。以来、指導教員の小野正樹先生は、公私にわたり、たいへんお世話になりました。研究が順調に進まない時には、いつも心強い激励のお言葉をいただき、研究者としての成長を温かく見守っていただきました。生活面にもご配慮いただいたおかげで、安心して研究に取り組むことができました。先生に、心より深く感謝と御礼を申し上げたい。

論文の副査をお引き受けくださった一二三朋子先生、佐々木勲人先生、ブッシュネル・ケード先生には、一年生の頃からお世話になりました。先生方の授業に参加させていただいたおかげで、多くの知識を得ることができました。博士論文の執筆にあたっては、先生方からたくさんの貴重なご意見やご助言、励ましのお言葉をいただきました。この場を借りて、今までのご指導、ご恩に対して、改めて厚く御礼を申し上げます。

また、日ごろからお世話になっている国際日本研究専攻の専攻長である佐藤貢悦先生、論文審査委員会の潘亮先生、日本語教育領域の先生方、国際日本研究専攻事務室の職員の皆様、小野ゼミの皆様、院生室の皆様、データ収集にご協力いただいた皆様、ネイティブチェックをしてくださった清地ゆき子さん、上田裕さん、君村千尋さんにも厚く御礼申し上げます。皆様からの心温まるご支援とご協力をいただいたおかげで、本論文を無事完成させることができました。

最後にいつも温かく見守ってくれた家族に、尽くせない感謝の意を込めて、本論文を捧げたい。

李 国玲

(2015年9月 筑波大学キャンパスにて)